
憐神

siko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隣神

【Nコード】

N3383A

【作者名】

s i k o

【あらすじ】

当初の予定ではラブコメだったけど、現在は漂うように続く大長編学園超能力バトル伝奇友情ラブコメ青春小説みたいな感じです。そんな持てる全ての要素をつぎ込んだ話ですが、読んで、僅かでも楽しんでいただけたら嬉しいです。

序

お前は自由に生きればいいさ。

正直私はお前に私と同じ道は歩かせたくない。

もう私達みたいな人間は必要無い時代になったてことかな……。

そうだな……兄さんの家へ。

ある程度大人になるまでは兄さんの家に置いてもらうと良い。

このまま狭い世界の生きていける時代では無いんだ。

普通に生きるにはそれだけの知識と経験が要るだろ？

そうやって普通に生きていくのが君にとっても一番幸せだろう。

普通っていうことほど良い物は無いんだよ。

そして、私たちは本来戦う者ではない。解りあえる者だ。だから解らない事は何も無い。

……………。

ただ最後に一つだけ言っておくことがある。

私達は力を持っている。

その力は私の代までは使うべき時だけ使うべきものだった。

しかしこの稼業も私でお終いにしようと思う。

だからそれを伝えてしまった君はそれをいつ使おうが君の自由だ。好きなときに好きなように行動すれば良い。どう生きようが君にとってこの世は自由だ。

しかし覚えているべき事は人はあくまで肉と言う事だ。

それが皮をかぶって歩いているにすぎん。

だからちよつとした事で壊れてしまうんだよ。

だから強制はしないが君は相手の自分を傷つけようとする心構えより1段階だけ深く相手を傷つけるくらいにしておいた方が好ましいかな。

あまり殺してしまうと言うのは気分の良い物では無いからな。

なに、お前の才能は正直私以上だ。それくらいの調節くらいは出来るだろ・・・？

……は君に強制できる立場でも無い。

ただ、あくまで私の気持ちとしては君にはその力を、君自身が正しいと思うことに使って欲しい。

私にはそれが出来なかった。だからこそ憧れた。

しかしすでに私達にその使い方を強制するものは居ない。

だから、だから……。

心の底からそれを君自身の正義を通して使用して欲しいと願う。それだけだよ。

………にやっってはならないことなんだよ。だから、私は、これが君の枷になろうとも今ここで敢えてそれを行おうと思う。

「君は、人を殺してはいけない。」

……けば、きっと大丈夫だ。だから、生きて。

生きて。

——生きて、欲しい。

序（後書き）

えーっと、加筆修正しました。今日は2007年一月二十八日かな？

大きな変更はありませんが文字列を読みやすいようにしました。最初と次にアップする部分にだけコレを書くのでよろしくお願いします。

迷惑かけてすみません。

初めての方へ。

この小説は純粹に楽しめるような話を囲うと思って書いた話です。なので、読んで少しでも暇つぶしにでもなれば幸いです。

そして少しでも楽しんでいただけたならば、そんなに嬉しいことはありません。

それでは、どうぞ。

きっかけ

序

ふう、今日も空は晴れてるな。平和だぜ。
そうやって今日もこの俺、最上^{もがみれいじ}零児は、放課後の学校をポクポク
と歩いているのであった。

今日はこの菊城高校の一学期の始業式の日だったのだ。
ちなみに俺は今日2年……になった。

父さんが死んで俺がこっちに來てからもう今年で9年にもなる。
今は親父の兄さん、つまりは伯父さんの家で世話になっている。
親父は今際^{いまわ}の際に言った通り普通ほど良い物は無いと思う。

それに俺は今このこの生活を愛しいと思う。
授業は退屈だけど毎日が楽しい学校。
美しい世界。

朝には鳥の歌に迎えられ朝日が昇り、昼間には青い空の下に広がる人々の営み。
風に吹かれる花たちやざわめく木々の枝葉を見ているだけでもとても嬉しい気分になれる。

夕方には屋上から燃えるような夕日が見れるし。
あ……でも夜の星だけは集落に居たときの方が良く見えたかもな。

そして……今日も桜が咲き誇り、そして散っていく。

なんて、綺麗なんだろう。

そして何よりたくさんの人が生きているこの世界。

電車に乗ったときに窓から見えた家の窓の中で人が生活しているのが見えたとき、それが当たり前のことなのにとっても驚いてしまった。

それは自分が知らないところで知らない人が生きている不思議。その明かりの一つ一つに、人の生活が、一人ひとりの人生の物語が存在している。

ずっと狭い世界に居たからだろうか。そんなことにとっても感動してしまう。

特に夜に高台から見える沢山の家の灯なんかとても良い。

それは沢山の人の生活が抽象化され一枚の絵になったものだ。

人を感じる……そんな当たり前のことがとても嬉しい。

だから俺は、その普通を壊してしまうかもしれない「力」なんてもの、普段はそうそう使うわけが無いのである。

ああ、父さん。

俺は、今この時代、この場所に居られて、この時間を生きる事ができて、とても幸せです。

そうして和みつつポクポク歩いていると何か声が聞えてきた。

「…てく……い」

「…いじ……えか。な？」

はてな？

この放課後の学校で何やってんのかな。

そう思い声の方へ歩いて行く。

と、それはトイレの裏と言う微妙な場所で話している男女の姿だった。

男子の方はこう俺ヤンキーどうYOSゴイツショって感じの金髪ピアスの男。

女の子はこう雰囲気がなんとも可愛らしい感じの女の子だった。
やや茶色い髪の毛をこう、アレだよ……なんて言うんだったっけ？
だからアレだってば、帰ってきたウルト○マンに出てきた怪獣にもいた……。

そう、ツインテール、ツインテールだよ。一般的にはそう言わないかも知れどそうとしか言いようの無い見事な、ツインテール。それにしたのが目を引く可愛い子だった。

ただどうも、雰囲気が少し普通じゃない。

こう女の子が顔を紅くして引いていて、男が言い寄ってる感じ。

はっはーん。これはアレだな？ 告白って奴じゃね？

そう言えばあの娘可愛い感じでモテそうだし。

はあ。良いねー青春だねー春真っ盛りってか？

若いって良いね。この青春野郎め。

うん、場所はトイレの前って微妙だけどヤンキー君よ。
ぜひと頑張れよ。同じ男として成功を祈っているぜ。

と邪魔しないようにその場を去ろうとした所でハッキリと声が聞
えてきた。

「いい加減にしてください!!!」

「な……？ 良いだろ？ つつうかさ、俺誰だと思ってるんだよ。あ
んまし舐めてるとさーマジでキレルよ？」

「イヤです」

「じゃあねえなあ。大人しくしてくれないんなら。それじゃあどっ
か連れ込んで取り合えず写すかな……」

……………。

……………。

って全然告白じゃないじゃないか!!!

それにさっきからなんか物騒な単語聞えてんな。

キレルって……やっぱりキレル十七才なんだろうか。

あれ？

もしかしていまさら17才はキレるのか思ってるのって古いで
すか？ ロートルですか？

ああそうですかそうですか。ごめんなさい。

「いい加減にしてください。人呼びますよ!？」

「バーカ、この時間のこんな場所に誰もいねえって。だから大人しく俺の言う通りにすりゃ良いんだって。わかる？」

あらあら、そう言ったアホな事を考えているうちにも事態は進展していくのだった。

まいったな、俺が居ますが。

ってそろそろアホな突っ込み入れてる場合じゃねえな。

さすがにこれは見逃せんذار。

こう俺の在り方としては。

と言うわけでつと……

「ちょっとゴメン。なにしてんの？」

そう声をかけた。

ハッとして俺に気づいた女子のほうは明らかに嬉しそうな顔をしている。

そう思うと俺の行動はプラスなんだろうけど……。

けどけど……俺に気づいたヤンキーはこう心底鬱陶しそうな顔をしている。

うむむ、という事はトータルで歓迎ムード五十パーか。ってなんのこっちゃい。

「あのね、最上君。実はこの人が私に話したいことがあるからって呼び出されて、それで来たんだけど、そしたらいきなり……」

「うるせえっ!!! 黙れ! あんまし余計なこと話すとマジぶっ殺す

ぞ！！」

むむむ……ヌツ殺すですか。穏やかじゃあねえな。

と、男は女の子から目を離して俺のほうに向き直った。

こう、チンピラ特有の気だるそうな仕草をしながら。

「あのさ、お前誰かしらねえけどさ、俺達は今お取り込み中なわけ。わかゆ？ 判ったらさっさとどっかうせてくれん？ マジウザイから。つつうかオマエだって俺のことくらい知ってるだろ？」

むむう、俺コイツのことは知らんのだが……。

視線を女の子の方に向けるとこう視線で行かないでって訴えかけてくる。

ふう、さすがにこれで無視したらやっぱマズいよなあ。

ここは俺が何とかするしか無いか。

「おい！ シカトすんな！ 何とか言えよテメエ！」

と言うわけで取り合えず喧しく怒鳴りたてている相手を観察する。まず目が行くのは取り合えず背が高い。ガタイがデカイ。ふう、こんなゴツイ奴正攻法だと疲れるから……。

「舐めやがって…オマエいい加減にしねえとマジでコロ……」

「あ？ あ、ああ。悪い。邪魔したな。すぐ行くからさ」

「す……ってならさっさと失せろよ。マジでさ」

「ああ。悪いな。だけどその前に……」

狙い澄ませて取り合えず金的蹴り！！！！

「ふごうっ！！？」

やった、入った！！

なら次は前のめりになった相手の頭部はちょうど拳の位置。
と言うわけでカウンターの形になるようにアッパーカットで止め
をせっ！

「へぼしッ！！！」

よっしゃ、ジャアストヒート！！！！

そうして金髪ヤンキーは奇声と共に地面に倒れ伏した。

敵艦沈黙。

正義は勝つのだッ！

いや、まあ今の俺ちよつと、いや、めっちゃ卑怯だけどさ……。

ふう。でもコイツが悪いんだし、流石にちよつとやりすぎな気も
するけど5分もすりゃあ起きるだろ。

と、

「あ、あの……？」

女の子が声をかけてきた。

「ありがとう……」

「お、おう。気にすんなって。俺通りかかったただけだから」

「あのさ、あの、最上君……だよな？」

「あれ、なんで俺知ってるの？」

「うん。だって私達今年から同じクラスだよ？」

はてな？ あー、でもそう言われれば、この娘今日の教室で見た
かもしれない。

「あ、ああ、ごめん。そう言えばそうだったよね。俺ってさ、人の
顔覚えるのが少し苦手でさ」

いやこれホントの話。

「それで君の名前なんて言うの？」

「私？ 私は片山^{かたやま}光^{ひかり}。よろしく」

「ああ、悪い。さすがに覚えた」

「ふふ、別に良いよ。それよりホントにありがとうね」

「ああ、それはいいさ、ホント偶然通りかかったただけなんだから。
んだけどさ、コイツ」

そうやって地面に転がってる金髪ヤンキーを軽く蹴る。

「なに言ってたの？」

「それが、あの、そのね……」

「なに、言いにくいことなの？ なら良いけど」

「え……いや、そう言うわけじゃ……」

むむむむむう、なにか事情があるのだろうか？

でもそうなら、いくら俺が助けたからってこの娘の個人的な問題
にまで立ち入る権利があるわけじゃねえしな。

「う……そうだね、助けてもらったんだし最上君になら……」

「あーなんか考えてるみたいだけど別に話にくいことなら良いから。じゃあもうこんな事無いように気をつけて帰れよ。また明日な
ー」

「あつ、ちよつ……ふう、もう」

そうして俺はこの場を去ったのだった。最上零児はクールに去る
ぜ！

まあ正直言うと、この足元に転がっている奴が起きたときの事を
考えたくなかったただけなのだな。

クール&クレバーの最上零児はそうして去っていくのだ。

ふふふふふ、ああ、今日も平和だぜ。

と、後ろから聞こえる片山さんの声。

「最上君ー、また明日ねーっ！」

「おーふ。またなー」

ふう、少し動いて喉も乾いたしなにか飲み物でも買うかな……？

きっかけ（後書き）

今日（2007年一月二十八日）加筆修正中ー！
思ったより大幅に手を加えたー疲れたー。
でも読みやすくなってたーいいなー。がんばるー！
じゃねー！

逆襲とベタな女教師

1

そろそろ夕暮れ時になる。

この時の為に家に帰らないで俺はまだ残って時間をつぶしていたのだ。

春とはいえこの時間になるとかなり冷える。と、言うわけで……。校内で買った暖かい缶コーヒーを片手に、こっそり持ち出して複製した屋上への鍵を使って屋上へ出た。

普段は鍵がかかっていて出れないこの場所だが、学校自体が高台にあるために実は隠れた最高の夕日観賞スポットなのだ。

うふふふー、実はまだ誰にも教えていないのだよ。

―――そうして待ちに待ったその時を迎える。

すると幕を下ろすように夕陽が落ちて行く。

これが、終日を表す証明。まるでもう今日のお芝居は終わりだとも言ってしまうように落ちていく夕日。

そうしてその最高に美しい一瞬が来る。

稜線へ消えて行く夕陽に美しく照らし出される自分の住んでいるこの街。

世界の果てで見れるであろう圧倒的な自然の絶景も良いけど、俺は人を近くに感じさせてくれるこの風景が最も好きだ。

夕日に照らされたビルの隙間。大きく伸びる影と、その影でも動き続ける人々の営み。

そして、遠くに見える夕日を受けて黄金色に輝く海。

人間も、生活も、すべて自然の一部。そんな営みを魅せてくれるこの最高に美しい一瞬が何よりも愛おしい。

そうして夕映えに照らされていた街は影の底に沈み、残るは薄明の時間になった。

薄明とは夕陽が沈んだ後の約三十分間、完全に暗くなるまでの時間。

そうして家の灯りがひとつ、またひとつと点いていき真っ暗になる頃には、一面星の海のような人のぬくもりが光っている。

空にはまだ一番星が光り始めたくらいだが、足元に広がるこの無数の光は集落にいた頃には感じられなかったものだ。

俺は、今この時、平和な、人を感じられるこの場所にいられることを。

心の底から幸せだと思う。

2

ブルルッ！

気づけば寒さに身体が震えている。

うろう、冷えてきたな、寒いや。

カイロ代わりに持ってきた缶コーヒーはすでにカラになったし、そろそろホントに冷えて風邪引きそうなのでたので帰ろうと思う。

そうして一階まで降りてさあ帰ろうと校門に行った時に異様な光景が目に入った。

なにか人だかりと言うか人が沢山居る……ってえええっ!?

十人以上はいようかと言うガラの悪そうな男たち。(少数女含む)その先頭に立っているのは昼間に俺がのした金髪ピアスのヤンキーだったのだ。

そして奴はヤンキーならではのカッコつけた気だるそうな体制で叫んだ。

「おせえよテメエ。なにやってやがったんだ。まさか俺にアレだけやっておいてタダで帰れると思ってんじゃねーだろーなあッ!!!」

む、まさか……というかやはりと言うか彼は怒ってらっしやるらしい。

これはマズイ。ヒジョーにマズイ。

しかし原因はなんだろうか……やはりいきなり金的蹴りは拙かったのだろうか?

いや、マズイか。常識的に考えて。ってか不意打ちだったもんね。我ながらちよっとだけ反省。

しかしながらこのままでは多分5分後にはポカポカ殴られて、砂にされた拳句、(注、フクロにするの意)身包みと持ち金剥がれて酔拳IIのジャッキー・チェンよろしく晒し者にされてしまうよう

な気がする。

それは避けたい。ってかイヤだ。
でも相手十人以上いそうだしなあ……。いやだなあ。
そんな俺の思惑も知らずに勝手に話し続けるヤンキー。

「大体テメエみたいのは気に食わねえんだよ。女の前とかでやたら良いカッコしよとする奴ってのはさあ。だーから、ここら辺で一度俺らが教育してあげようって訳。わかる？」

うむむむむう。言っている事は判らなくは無いが教育はされたくない。

つうかさー、なんでアイツ十人以上人呼んでんだよ。卑怯じゃなか。

俺は一人なのにさあ。

仕方ないか。そうだなここは……。

「ってテメエ……！！！」

故事に習って三十六計逃ぐるにしかず！！

取り合えず無言でUターンしてダッシュだぜ。そこに言葉は要らない。

足には自信あるのだ。

でも当然彼らは追ってくる。

しかし一箇所に固まってやがったせいか距離は縮まらない。

ヘッ、馬鹿なヤツラだぜ。ホント馬鹿。網張っておけば簡単に捕まったのに固まってるから遅いのだ。

ああ、なんて馬鹿なんだろう。おう、馬鹿を見てたらなんか無性に馬鹿にしくなったぞ俺！

ああ、バカにしくてしたくてしょうがない衝動がああ！

そして気づけば……。

「やーい、追いつけねえだろ。ばーかばーか、オマエの母ちゃん母親ー！」

「ッ！！ テメエぶっ殺す！！」

本当に挑発してしまっていた。

って、うわ。後ろを見ると今の一言で余計にヒートアップした一団が追いかけてくる。

なんてことをしちまつたんだ俺！

ええい、とにかく逃げよう。

そうして、しばらく余計な事をせずにひたすら逃げる事に専念する。

ふう、しつこいなあ、結構走ったぞ？ もう離れたかな……って！

気がついたら俺はさっきの金髪ピアスをのした場所（便所の裏）にいた。

そしてここは……行き止まり。

ってこのままじゃ見つかったちゃうじゃないか俺の馬鹿ばかバカー！！

そして後方からだんだん近づいてくる声。

「おい、今、こっちの方来たよな？」

「ああ確かに俺見たぜ。　こっちの方入っていくの」

「舐めやがって、アイツマジ許せねえんだけど……!!」

ひいひいっ!

ヤバい、ヤバ過ぎるぞこの状況は……。

——と、当然のように俺の目に入るトイレの窓。

ココは、これしか無い。

取り合えず友達に貰った貰い物のゴツい指輪を指に嵌めて、照準、便所の窓。

よし、狙いを済ましてハイパー……殴るぜ!!

パライイイインツ!!

よっしゃ、良い音して割れたあっ! 少し手が切れたけどかすり傷だし大丈夫だ。後は割れた所から中に手を伸ばして中から鍵を開けて……

「今の音……コツチだっ!!」

って自分で音出して居場所教えてどーすんだよー俺のバカ!!

「見つけたぜ、こっちに居るぜっ!」

ってひいひいっ、ヤッパ見つかった!

っと、よしっ。そうしている内に鍵は開いた。後はっと……窓を開けて、窓枠に手を着いて中に飛び込む!

あ、今手えついた時にザクッて音と共に手の平に痛みが……ってそんなのに構ってる暇無い!

後は中から鍵を閉めて……

「デメエッ、逃がすかよ!!」

ってひいひいっ、追ってくるよう。

取り合えず……今は逃げるぜッ!!

3

そうして校舎の中に逃げこんだのであった。

さすがに窓の外は暗く廊下も電気が消えている。

だけど何故か多くの教室には電気がついたままだった。

とりあえず……2階まで逃げて今年から世話になる事になった2年B組の教室に逃げこんだ。

ここまで逃げりゃあ暫くは大丈夫だろ。

そして一息つく。と、見ると手のひらがざっくりと切れて血が出ていた。

むむう、ガラス割ったときはかすり傷だったんだけど。なんか中に入るときに窓枠に手をついたのが悪かったみたいだな、割ったガラスの尖がった部分に手をついちゃった訳か。

「ふう、まあ、ガラス割りゃあ怪我ぐらいはするモンだよな。」

「ってガラス割ったですってえ!?!」

はてな? 今人の声がしたような……。

そして振り返ると無人のはずの教室に人の影が……。

「ってうわあああ！ 出たああっ！ 先生が」

「ってんもう。出たって失礼ね」

「……っつうか冷静な話なにやってるんですか、山園綾子先生？」

そう。そこに居たのは俺の今年の担任になった山園綾子先生やまぞのあやこだった。

真っ黒なロングヘアが大人の魅力を演出してくれていると言うか、まあぶっちゃけ好み、と言うか俺の趣味は置いておいても、一般的に見ても色っぽい美人さんだと思う。

たしか俺らの年の奴らが高校入学の年に新任で教師になったとか言う話だったのでまだかなり若いはず。

しかし実際その若さに見合わぬしっかりとした授業と、誰とでも分け隔てなく接するその性格と、そして更になによりその容姿で生徒からの人気も高い先生なのだ。

なんでも父親が有名なピアニストと言う話も聞いたことがあるが、良くは知らん。

って言うか冷静な話こんな所でなにやってるんだろ？

「そうだよ、センサーこんな時間にこんな場所で何やってんですか？」

「なになって……今度の実力テスト作ってるのよ」

「はあ、わざわざ暖房の無い教室ですか？」

「そうよ。まだ少し職員室慣れなくてね……」

「はははは、良いじゃないですか。先生が若い証拠ですって」

「んもう……。それより実力テスト近いわよ。ちゃんと勉強してる？」

実力テスト、はてな、去年そんなしたっけ……。

「ってそんな物あったんですか？ 今初めて聞いた気が……」

「ふう。しょうがない人ね。ちゃんと報告はしてるわよ。ホームルーム中も寝て無いでちゃんと話は聞いてなさいよ最上君？」

そこで、ふと違和感。あ、そうか先生が俺の名前を呼んだからか。当然ながら高校の制服に名札なんかは無い。と、言う事は……。

「ってアレ？ 俺の名前知ってたんスか？」

「って……当たり前じゃない。今度私のクラスでしょ」

と、そう言えばそうだった。今日は始業式の日でクラス発表もあったから少しだけ顔合わせみたいなのがあったんだった。わーい。片山さんといい今年は美人が多いやー。

「それに結構あなた有名人なのよ？ 私も気になってたんだから」「は？ 俺がですか？」

今明かされる驚きの新事実。地味で通している俺は実是有名人だった！

「ってんなアホな。冗談ですよね？」

「なんでよ。別に冗談じゃないわよ」

「へ、それじゃあ俺本当に有名なんですか？ そりゃあマタどうして？」

「ふうん。本人って結構気づかないものなのね。それよりも最上君……」

そう言って先生は俺のほうを少しキツイ視線で見る。
ううう、美人なだけに妙に迫力あるよう。

「は、はひ、なんでしょか……?」

知らず言葉が入れ歯の取れ老人のようになってしまった。これが
プレッシャー!

「さっきガラス割ったって……言っただわよねえ?」

まずっ、ひとり言を聞かれてたのかっ!

「あ、ああ、いやーどうだったかなーボクちよつと覚えて無いかも
な」

「言っただわよねッ!!」

「は、ハイッ!! 言っただでありますっ!!」

自然と敬礼姿勢をとる。

「それはどういう……ってその右手どうしたのよッ!!」

は、右手?

……っではおおうっ! なんかすげえ出血じゃあねえかよ。

別に太い血管は傷つけて無いと思っただけど話すのに夢中でほっ
いたのがいけなかったらしい。

それに走って血行も良くなってたしな。

なんかダバダバ血が出ちゃってちよつとしたヤバイ人になってる。

「……ッ。話聞いている場合じゃないわ。急いで保健室行くわよ!!」

ん……保健室ってことは教室から出る……って！

「いや、あの、そのー、今部屋から外に出るのそのちょっとまず……」

「何がよ！ 言い訳は後で聞くから今は急いで……」

と、廊下から聞こえてくる声。

「オイてめーら。一階には居なかったから多分2階より上だぜ？
部屋一つつつ風潰しに見ていきやあ多分見つかるって」

「そうだな。あいつナメやがってマジ許せねえんだけど。本気でコロす！」

ってこのタイミングですか、最悪うーっ！！

「先生！ 事情は後で話すんで、どっか教室内で隠れる場所無いですか！？ 出来ればダンボールとか……」

「って、どうしたのよ急に。良く判らないけど……人が隠れられそうな場所って、今私が使っている教壇の中くらいしか……」

そう言っって先生はテストを作ったりしている教壇から椅子を引いて立ちあがる。今だ……ッ！！！！

「お邪魔しまっスッ！！」

「って、えええっ！ ちょっと、最上クン！？」

そうして教壇の中へ飛び込んで身体を丸め息を潜める。
取り合えず今は話している場合じゃない。

静かに静かに、うーん……。

どうだろうか、微妙に見つかりやすいかもしれん。

俺は中で小さくしゃがんでる訳なんだけど……しかしながら先生は立ってるわけだからなんか不自然だもんなあ。

教壇あるのに不自然に椅子が引いてあって先生が何も無いところで立っているのは何か違和感を与えてしまうかも……。でもまあ仕方ないか……。などと思っていたその時！

なんと先生が椅子を引き寄せて、中に俺が居るにもかかわらずいつものように教壇に座ってきた。

……ってなんかこの位置関係は色々とマズイだろう、っとうわああああ！

と、見えはしないがすぐ上から聞こえてくる声。

「いいから……何があったかは知らないけど、最上クンが噂通りの人ならそう悪いことはしないって信じてるから。何があったかは知らないけど、こうしていた方が……隠れられるでしょ？」

うわ、うわ、うわわわわ、その好意は嬉しいんですが、なんか色々ダメなことしている気がするよ俺。

だって先生のスカート微妙に短いし、なんか位置的にもコレはマズイって。

ううう……だって、だってだよ？

俺が少しでも右を向いてしまったら、なんだか全校男子の憧れのすっげえいいモンが見えてしまうかもしれん。

しかし、先生は俺を助けようとしてエロい……もとい、窮屈でしんどい姿勢で居てくれるわけだからその信頼を裏切るわけにはいかん。

でも、しかしながらその絶対領域への憧れはあまりにも強いっ!!
ああ……男に生まれてくることがコレほど辛い事だとは。

父よ、あなたは強かった。この場合は息子だろうか？

だって少しでも右を向いてしまえば足の奥にその純白（俺の希望）
の三角地帯が見えてしまうかもしれん。

三角地帯にパンティエとルビを振るのは絶望的にまで頭が悪い気
もするけど、それほどにその地への憧れは強い。

ああ、このまま約束の地へ……。

しかし、いや、しかしダメだそんな事は！

ダメな事は解かっている。なのになんなのだこの有引力は！

コレが噂の魔の三角地帯なのだろうか？

ああもう、マリアナ海溝万歳ッ！！

そうやって人生とは何かの葛藤に苦しみつつ、男としては良い感
じに壊れてきたときに、その望まれざる客はやってきた。

ガラガラと言う戸の開く音が聞こえる。

奴らが入ってきたか……。

「オイ、居たか？」

「いいや……チッ、センコーしかいねえよ」

「ちょっとあなた達？ 入る時はノック位したらどうなの？」

「うるせえよ。別にお前に説教されに来たんじゃねえんだよ。それ
よりも山園。今こっちの方にヤツこなかったか？」

「ヤツって……誰？」

「ああ、なんつーか……ちょっとスカした感じのムカツク馬鹿」

むむう、俺ってばスカした感じのムカツク馬鹿なのか？ 納得いかんぜよ。

そんなこと言ったらお前らなんかただの馬鹿だろうに。

「ん……そんな人は来て無いわよ？」

「チツ、ハズレかよ。オイ、行くぞ！」

「なんだ、違ったのか？」

「ああ。上の方はどうだ？」

そうして聞こえるガラガラと戸の動く音。

出て行った、のか……？

「ふう。もう良いわよ？ 最上君」

「あ、ああ……。ありがとうございます」

「ふう、まあ生徒を守るのは教師の務めだから良いのよ」

うわあ、少し感激。流石に人気ある先生には理由があるよね。うん。

「ねえ、それよりもあの山城君に狙われるなんて何かあったの？」

「はあ、そう言えばアイツも自分のこと知ってるだろとか言ってたんですけど……そうですか。アイツ山城って言うんですか。それであのバカ一体何物なんですか？」

と言うと山園先生は少し困ったようにうつむいた。

む、なにか聞いちゃいけないことを聞いたのかな俺？

「その、なにか悪い事言いましたかおれ？」

「いや、ちょっとね、山城君を知らないのかって。ならなんて説明

したら言いのかなあってね。うーん……」

「へ？ 何か言っちゃいけないことでもあるんですか？ でもアイツこの生徒ですよ？」

「うん。まあそれはそうなんだけどね。でもまさか山城君を知らないとはね……説明しにくいと言うかなんと言うか……」

どうもさっきから少し挙動不審だな。

「何が説明しにくいんですか？」

「いや、その、ね。私もあんまり生徒の悪口は言いたく無いんだけど、まあ、最上君なら良い、かな……？」

と、一呼吸おいて俺のほうに向き直る先生。

「そうね、説明するわね。山城真一君はうちで一番手を焼いてる問題児よ。確か今年で三年生だったかしら……？ でも普通の不良の連中と違ってなんか少し危ない人達との繋がりもあるみたいで、なかなかみんな怖がって近寄らないようにしてるのよ。うちの街って海の方に行くと耳ヶ崎の方にこう……なんか危なげな所あるでしょ？」

耳ヶ崎って言うと、港の方か。

「ああ、まああの辺は……港近いですしね」

「で、彼はそこにある暴走連合白虎っていう暴走族の、トップって言いか、ヘッドとか言う存在なんだって」

「うわあ、なんとも頭悪そうな名前。でもなんでそんなチンピラ退学に出来ないんですか？」

「いや、だから言にくいんだけどね。とにかく証拠が無いらし、暴れると何するかわからないし、大変なんだって。この暴走族の話

もあくまで噂で本来教師なら生徒の悪い噂なんて話す物じゃないんだけどね……でもほとんど全校生徒が知っていることだし、知らない最上君が何か危ない事に巻き込まれても困るしね、話すことにしたわ」

「はあ、そうですか。それはどうもありがとうございます」

まあ問題があるとするともう限りなく手遅れっばいと言うことだが。

まあいいか。

そして双方無言。

なんか気まずい。

だからだろうか、ついついさっきのあの体勢を思い出してしまった。

って思い返すと目茶目茶恥ずかしいやんっ!!

ついつい顔も赤くなる。で、その俺の顔を見て先生も紅くなる。

「あ……もしかして……み、見た？」

「みい？　なにをででですかよう。みみ見てないですよ？」

って何で俺どもってますかー？　しかも疑問形だしメツチャ嘘っ

ばいじゃんッ!!

「ホントに？」

「ホントです」

「本当のホントに……？」

「だーッ!!! だからホントに見てないんですって！　確かに何度か危なかったけど……でも我ながら凄いなと思う鉄の精神力で乗りき

ったんですっ!!」

ってハッ！ 何か余計な事まで口走った気がするよ俺!!

「プッ、うふふふふ……どうやら本当に見ていないようね。でも何
度か危なかったんだ？」

は、恥ずかしい……。

なのに一方の先生はすでもう普段の雰囲気になってこちらを笑
顔で見ている。

さすがは大人の女性と言った所か。

そして俺のきょどりっプリ、これが若さか……。

でもまあ……実際先生には恩も出来ちゃったしここは正直に言う
べきだろう。

「は、はい。まあ実際何度か危なくはあったです。 そりゃあ先生
は魅力的ですから……。でも本当に見てはいないですからね？ 俺
はそんな恩知らずな事……」

「うふふふ。わかってるわ。本当に噂通りの人なのね。最上君っ
て……」

「は、そう言えばさっきも言ってたけど俺の話なんて聞く事あるん
ですか？」

「それはもう、よく噂は聞くわよ？」

「はあ、それはどんなんですか？ 今の話の流れから言うと滅茶苦
茶スケベだとかそんな感じ」

「うふふふ、違うわよ。どんなかってそれはね……」

ポチャン！

「あれ、今何か、ぼちゃんって音が……？」

「って話している場合じゃないわ最上君ッ！！ その右手は！？」

「右手？ ……ってうおうっ！！」

そう言えば右手をザックシやってたんだ。

傷が深かったからか俺の血小板が足りないからか手は真赤になり、地面には小さな血の海が出来てそこにさらに一滴の血が滴り落ちた音だったのだ。

さすがにコレはヤバい量だよなあ、あ、なんかふわふわしてきたよ……。

「ッ、訳聞いてる暇は無いわ。急いで保健室行くわよっ！」

「あ、でも外には山城のヤツが……」

「いいから、その時は何とかするから、来なさい！」

そうして貧血でフラフラして来た俺は先生に肩を貸してもらって部屋を出る

最初こそ先生の身体の柔らかさや、ほのかに匂う良い匂いにクラクラしていた俺だが、どくどくと流れ続けて血が止まらないせいか、段々と別の意味でクラクラしてきた。

そうして保健室の前に到着。

「んっ……鍵が開かない？ ちょっと待って。鍵持ってくるから！」
「あ……」

そうして去って行く先生の服の右側は真赤になってた。

ああ、あれ俺の血か。そうだよな、ああ、しっかり働けよ俺の頭。とりあえず、謝らなくちゃな……。

そうしてただいま治療中。

「包帯は……コレね。あ、まずは消毒ね。しみるわよ？」

甲斐甲斐しく治療してくれる先生を見ながら、俺の血によって汚れてしまった先生の服を見ると、罪悪感が押し寄せてくる。

血のだいぶ足りない胡乱うろんな頭で取りあえず、謝ろうということだけは考え付けた。

「あの、先生……？」

「なによ、今忙しいんだけど……あ、アルコール、と……オキシドールで良いわね」

「その、服汚して……すみません」

「なっ……なに言ってるのよッ!!」

「あ、でも、だって……俺の血が、服汚しちゃって……」

「いいから、まったくそんな怪我しておいて……」

「あ、もしかして怒ってますか……」

「怒ってるわ。そんなくだらない事気にしている暇が合ったらさっさと傷見せなさいッ！」

ううう……なんか血い足りなくなってきたて頭ボーっとしてるけど怖いよう。

「……。手の傷は結構深いわね。取り合えず消毒からね」

ジ……。

オキシドールがかかって泡立つ傷口。正直、結構痛い。けどソレより貧血で頭がボーっとしちゃって……

「ああ……もうこんな怪我して馬鹿!! こんなに血が出るのに呑気に話している場合じゃないじゃないのよっ!」

「ああ……すみません」

「謝るんじゃないの!! 最上君の怪我でしょ!? はい。消毒はこんなものね」

「ああ……すみ……ません。」

「って謝らないって言ったでしょう? 人の話聞してるの? ふう、よし。包帯も巻いたわよ」

「はい……聞いてます……すみ……ませ」

ああ、どんどん貧血に、血が足りな……。

「まったく、なんでこんな怪我したのよホントに!」

「なんでって……それは、あれ、なんだか……」

「って最上君? 大丈夫なの!？」

急にギョツとした表情でこちらを向く先生が霞んだ視界に映った。ああ、なんだか、意識が、保ちににくい。眠いようなぼんやりした、そんな不思議な感覚。

「あ、あー。大丈夫ですよ? なんかふわふわしてて……少し眠って良いですか? あー、俺は置いてってもらってかまわないんで……」

「ってそれ貧血じゃないの! そんな状態で置いて行けるわけないでしょ! 大体責任の一端は私にもあるんだから……」

「は、なにか言いました……?」

「なっ、何でも無いわよ!　そ、それじゃあ家の人に連絡するから家の番号教えてくれる?」

「あー、すみません俺一人暮し……」

「へ、そうなの?」

「は……い……。あ、ホントもう良いですから……置いてってください。なんか体動かないけど……このソファで少し休めば……多分……」

多分、勝手に回復してくれるはず。

おれの、身体と「力」が……。

「良いわけ無いでしょ!!　肩貸せば歩ける?」

「はあ、多分それくらいは……」

「じゃあ少し待ってて」

そう言って先生は廊下へ行った。なにか電話をかけているらしい。

あーダメだ俺。しっかり働けよ俺の脳味噌。

腐ってんのか……?　あんまり調子悪いと生ごみに出して取りかえるぞホント。

う、ううう、なんか気持ち悪い上になに考えてるのかも良く判らない。

あ、そうか、帰らなきゃ。帰らなきゃいけないんだ。とにかく歩かないと先生に迷惑かかったちゃう。

動けよ俺の体。ああダメだな。

まず立ち上がって、立って、って巧く立てない、うわわわ。

あーあ、ソファから落ちて倒れちゃったよ。床に倒れてる。俺、汚ねえなあ。

動かなきゃだめなんだよ……。ああ……。血がたりねえのかな？

立ち上がれないで床で寝てるなんて、無様にも程がある。こんな所は人には見せられんな。

あ、先生が帰ってきた。

「って、何、どうして床に倒れてっ！ 大丈夫最上君！」

うわあ、凄い声。よっぽどビックリしたんだなあ。

「はー……すみません。迷惑はかけませんから、すぐに立って帰る
ので……」

「馬鹿！ そんな状態で何言ってるのよ。これ以上心配かけないで
！」

「すみません……すぐに起きますから」

「もういい！ もう良いから、ねえ、肩貸すから立ち上がれる？」

「はい、だいじょうぶですよー……？」

「じゃあっ、肩かして……いくわよっ！？」

「はあ、何処に……あれ、俺何やって……？」

「いいから！！今は余計な事考えないで良いから……行くわよ？」

「あ、はい……」

そして、肩を貸してもらって何とか立ち上がって歩く事ができた。

そのまま校門の外にまで出る。

辺りは夜か。なんかもう真っ暗だ。その中に一つの光がある。

アレは……車、タクシー……か？

そうして車の所まで来た。ドアは自動で開く。

「あーお客さん。どうしたんですか？」

「いや、ちょっと生徒が怪我しちゃって……」

「へー、お姉さんずいぶん若くて美人なのに先生なんだ。いや俺はてっきり大学生さんくらいかと……」

「すみません。早く休ませてあげたいんで出してもらえませんか？」

「あ、ああ、ごめんなさいね。それでどちらまで？」

「少し待ってください。ね、最上君？」

あれ、俺を呼ぶ声あり……？

「はい」

「最上君の家って何処？」

ああ……俺の家か。

父さんが死んでからはもうずっと帰って無いなあ。あの集落へは……。あの場所へはどうやっていったのかな……？

「俺が居たのは、山里の中の……あの場所は確か……？」

「最上君……？」

「俺の……昔の家……人は、ただの人間はもう誰も居ない……俺達だけの……」

「な、何の話なのそれは？」

「俺達は……外れているから……外れているものに勝つには俺達だけが……？」

あれ、俺何話してるんだ……？

確かコレは普通の人には話しちゃいけない……。

「何言ってるの？ 最上君。それは一体なんの……」

「お客さん!! ちょっと。急いでるんでしょ？」

遮られる話。ああ、今遮られなければ、俺は何を話していたんだろう。

胡乱な頭では、もうまともに思考する事はできなかった。

「あ・・・はい。あのね、最上君。今の話は後でちょっと問い詰めるけど取り合えず貴方は今何処に住んでるの？」

「あ・・・俺の今の家？ あれ、それは駅前の大通りの・・・」
「大通りの？」

と、急に押し寄せる意識の途切れる感覚。

血が、出てったからか、綱渡りのような感覚で途切れ行く意識を繋ぎ止める。

もう、思考は働かない。

「その・・・ううう、すみません。ああ、フラフラして・・・」

「大丈夫？ ごめんなさい。もういいわ。すみません。私の家までなんで・・・取り合えず塩山商店街のバス停まで良いですか？」

「はい、わかりました」

幕間1 山園綾子SIDE

そうして塩山の商店街のバス停で下ろしてもらった私たちは、そのまま最上君に肩を貸しながら私の部屋までなんとか彼を連れて

きた。

彼はまだ意識はあるが、なんかさっきから朦朧としているらしく偶に言動が変だ。

特にさっきタクシーの中で聞いたあの一言は気になるのだけど…。

取り合えず意識の薄い彼を自分用のベットに寝かせておく。

ふう、さすがにもう高校生だ。その体格は男を感じさせてどうしでも少し気恥ずかしい。

しかし教師として生徒にそんな気持ちを抱くなんて訳にも行かないし、そう自制する事で、取り合えず肩を貸しながらもここまで来れた。

で、私が生理のときなんかによく飲む増血剤と水を用意する。

「これ…：薬だけど、飲める？」

「あ、ああ…：はい」

コレではダメだ。さっきから彼は何を言ってもこうとしか言わない。

聞えているのかはすつごく疑問だ。と言うか多分聞えていないんだろう。

仕方ないから取り合えず水の準備をして彼の枕もとに行く。

そうして彼の顔を上げて口をやや開かせ薬を入れる。

そして顎を下にさげて口を開かせ水を流し込み薬を飲ませる。

少し口の淵から水が零れながらも、彼のその白い喉が動き何とか薬と水が嚥下された事がわかる。

う、こう、妙に色っぽいわね、何て言うか、最上君の挙動と言うか、その、身体の反応は。

ま、まあ、これで一眠りすれば、ただの貧血ならば治るだろう。

次は彼の手を取り傷を見る。まったく何処でこんな酷い怪我をしたんだろう？

原因を聞きたかったけどそれどころでは無かったのだ。

ふう、この包帯はすでに血で真赤だし、これは換える……と。

って、それにしても包帯が真っ赤になるほどに血が出たらそれは貧血にもなるわよね。

まったく私も彼と話すのに夢中で気づかないなんて、教師失格よね……。

そうして消毒液で血を洗い流す。

あれ……？

酷い傷痕はあるし血が出たあるもあるけど、傷自体はかなり小さくなっている。さっきは確かに深い傷があったのに。

しかしそんな疑問を抱いても仕方ないので軽く消毒して包帯を巻き終わりとする。

あとは、着替えね……。

そう、着替えないと、しんどいわよね。着替え、着替え……。

「最上君……？」

ダメだ。声をかけても反応しない。彼はすでに寝ている……と言
うか意識を失っているらしい。

しかし学生服のままじゃ寝心地も悪いだろう。仕方ない。

上着だけでも脱がしておこう。

そうして服を脱がして行く。

僅かに辛そうに歪んだ顔と汗ばんだ肌。そして大きく動く胸を感じながら、一つずつボタンを外していく。

うう……彼はこれでも生徒で、これと言った特徴は無いが、わりとその整った顔の無抵抗の男の子の身体をいじっているとなんか変な気分になってくる。

なんと言うかその……世話をしているのに何か悪い事をしている気分になってしまうのだ。

でもそれも、最上君が妙に色っぽいからいけないんだけど……。
って、ダメだな私。何考えてるんだろ。

良く考えれば今日の私の彼に会ってからの行動は全部変だ。

特に自分の部屋に彼を運び込むなんて何考えてるんだろうか？

今思えば普通は病院か彼の自宅だと思う。

何で彼の自宅がダメだからって私の家に運び込んでしまったんだろう？

バレればなんとなくマズイ気もする。

それにこの部屋に男性を入れるのは良く考えれば初めてじゃないかな？

確かに彼の噂は前々から聞いていたし、彼自身にも興味を持っていたけど、にしても何を浮かれているんだろうか……私は？

そうして彼の上着を脱がし、濡れタオルで軽く汗を拭いて終わり
布団をかけて終わり。

ふう、これで一段落、ね。

これでやっと一息つける。

そうして今日1日を振り返る

あ、何をやっているんだろうか、私は。

もともと最上君には少し興味があつたし、会って、色々と話したいと思っていた彼と話せたからって、いくらなんでも今日の行動は浮かれ過ぎだろう。

特に、教卓の中に最上君が隠れているのに、すぐその隣に座るなんて……。

知らず、頬が熱くなつて行くのを感じる。彼は私を変な女だろうと思っただろうか。

そんなことを考えてしまう。

なんだろう。彼は、今年から私が担任を持つ事になっただけの、ただの一生徒なのに。

ああ……でも。なんか彼の顔見ていると変な気分になってきた。だって、いつもの当たり前の部屋が彼のいるおかげでそこだけ非常日常。

そこだけ異空間。

ついついその寝顔を見入ってしまう。

軽く汗を浮かべてやや苦しそうなその寝顔は……とても不思議な顔だ。

いや。別に変な顔とかそう言うわけでは無い。

むしろ凄い美男子というのでは無いしこれと言った特徴も無いが、

それでも標準よりかなり上を行っている整った顔だと思う。

そして何か不思議な……よく判らないけど魅力があるとも思う。
彼が寝ている、その姿全てが、なんだか指向性のある引力を持っている気がする。

なにか、不思議な、良い匂いにする気もするし。

気づけば、彼の近くの空気を吸ってウツトリしていた。

って、何やってるのよ私！

意識の朦朧とした生徒連れ込んで服脱がして寝顔見て匂い嗅いで
喜んでる……って。

これじゃあタダの変態じゃない！

あーダメね。ダメダメ。

余計な事考えるからいけないのよ。

さっさとシャワー浴びて寝ちゃいましょう。そうね。

それが良いわ。

最上君は……寝てるわね。シャワー浴びてこよ。

逆襲とベタな女教師（後書き）

よしよしよしよしよおおおっしッ！！！！

みんなの言いたい事はわかるさ。

あまりにも露骨じゃないかと言う事だろう・・・？

それはそうさ。俺は露骨にスケベな人だしな。

これからも露骨に好きなものに入れていくさ！！！！

あとにより。

こんな所にまで目を通していただいて本当にありがとうございます。

大幅な加筆修正したよーつかれたよーがんばるよー。

ごめんねー！

はー、でも読みやすくなったら嬉しいな。

あるべきカタチ（前書き）

この話にはやや下品だったりバイオレンスな描写が含まれています。そういうのがダメな人は残念ですがココで引き返してもらおうより仕方ありません。

しかしまあそれほどキツイ描写は出てこないので出来る限り読んでもらいたいです。

とぼすと話はわからなくなってしまうので。

大変申し訳ありません。

あるべきカタチ

1

タスケテ

ヤメテ

ダレカタスケテヨ……ダレカ

ココカラダシテヨ……

何かが聞える。その声で目が醒める。
そうして今の自分の状態を把握する。

現在時刻午前三時。

思考は冴え渡り、身体の間々、世界中に自由にならないものは無い
というばかりの綺麗クリアな感覚。

暗闇でもなんの障害も無く見える俺の眼が見たものは……。

取り合えず自分はなんかいつもとは違った小綺麗な部屋にいる。

そしてその中のふわふわのベッドで寝ているようだ。

ふん、何か良い匂いのするベッドだな。雌の匂いがする。

部屋を見渡すとソファーには毛布を着た美女が一人寝ている。

どくりと言う音がして、一瞬視界が歪んだ気がした。

ふん、この女が俺の寝ているベッドの本来の主だな。

ああ、この女の、「俺」に対する警戒心ゼロの姿は実にいい。
コイツはいい女だ。

自然と自分の性器に血液が集まって行く。
犯すか。

今この部屋の中に俺より強いものは居ない。

いや、生物としての強さと言うならば、少なくともこの街には俺よりも強い者は居ない。どうしようが俺の自由だ。
そうして女を劣情を持った舐める様な目で視姦する。

長めの黒のストレートがいい。俺の好みをよくわかっている。
胸も大きい。なかなかの上玉だ。

そうして女の近くまでいき毛布を剥ぐ。女は起きない。

女はシャツのような物を着てはいるが下半身は下着だけだ。
ふん。誘っているのか？ よほど犯られたいとみえるな。
まあいい。存分に楽しませてもらおうか。

そうして、女のシャツに手をかける。

あ。

なにか？ 俺、は、この女に世話になったらしい。なんだ、そう
なのか。

ならば今はさっき聞こえた俺を起こした声の出元をつきとめるの
が先だろう。女は後で構わない。

しかし病気の女を犯して自分に風邪なんかがうつるのは気分が悪い。
い。

取り合えず女をソファーじゃなくて、俺の寝ていたベットへと移

す事にする。

女を抱き上げて自分が寝ていたベッドまで運ぶ。

女は柔らかく持っているだけで自分の劣情に火がついていくのがわかる。

ああ、決めた。やはり犯そう。ここで獣のように。激しく。壊れるまで。

今は力が開放されているせいかこの女の感情が流れ込んでくる。

ふん。この女は俺に良い感情を抱いているようだな。

くくく、その緩やかな感情は心地いい。壊すのは惜しいが、だからこそ壊すのも良いかもしれん。そのカタルシスはきつと何事にも替えられない快感を俺にくれるだろう。

そうして取り合えずベットに女を置いてシャツのボタンを全て外す。

さあ、頂くか。

「君自身が正しいと思うことに……」

チツ、なんだ今の声は？

急に萎える性器を感じながら、女から手を離す。

興がそがれた。やめだやめ。つまらん。やめた。詰まらん事はない。

だがしかし、このままではこの女も風邪を引くだろう。布団くら

いはかけておいてやる。

そうして今度は自分の上着を探す。と、壁際にハンガーで吊っている。

それに腕を通し、声の方向をたどる。

ふん、声の方角は耳ヶ崎の方だな。

この部屋は何階だ？ ふ……三階か。

ふん、この位なら構わん。

取り合えずベランダへ行き地面まで飛び降りる。

そのまま着地し……と、なんだ。ここは塩山の商店街か？

耳ヶ崎まで、走れば三分とかからんな。今の俺の足なら。

2

無人の夜の街を駆けて耳ヶ崎へ来る。

途中見えたのは赤信号の光と街灯の光だけだ。

夜の集合住宅にも人の気配はなく、巨大な蟻の巣のようなその姿は廃墟のように、生の気配のないこの世界を演出している。

ふん、舞台としては悪くは無いな。

そのまま、走る。

そうしてその声の発信源へ行く途中に、俺は「ヤツ」に出会う。

「イヒヒヒヒヒ。うひゃ、うひゃ、うひゃひゃひゃヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ。オイお前」

なんだか耳障りな笑い声をする。

声の方を見れば、異様な格好をした男が独り、この世界に立って

いる。

赤い頭のその男は、初対面ながら、まるで十年來の友人のような気安さで俺に近寄って、話しかけてきた。

「オイ、どうするんだよお前。せっかくの面白い状況状況？　ウヒ、お前も見えて楽しめよ」

「ふん。そこのお前。この声の根源の方向はこの路地の裏か？」

「オイ何故だ、何故行く？　そうか、お前も混ざりたいのか。ああそれも良いじゃないか、なら俺も行くかな。イヒヒヒヒヒ。うじえへへ、一緒に仲良く犯し、食らい、殺そうぜ？」

「いや、今回は、俺は問題を解決させてもらう」

「なんでだ？　お前も能力者だろ？　一緒に研究所脱走組同士仲良くしようぜ？」

「ふん。貴様の言っていることはよくわからんな。それも悪く無いがどうやら「俺」自身が今のこの街を気に入っているようなのでな、この声を聞き続けるのは不快だ。解決すれば静かになるのならば、俺は解決する」

「オイ貴様！！　どう言う了見だ？　能力者は自身の欲望に忠実に動くはずだぞ。性欲でも食欲でも良い。だから、ここで犯して殺すんだよ。それとも、まさか貴様も能力だけ獲得した出来損ないなのか？　ならば彼らは国の犬になると聞いたからここで殺さなければな」

「お前が何を言っているのかは全く解からんが、俺は自分の欲望に忠実さ。だから今もやりたい事をやろうとしているだけだ」

「ク、く？　ククヒヤヒヤヒヤ。うひえへやひやひやひや。それは面白いな。問題の解決がお前の欲望か。ウヒヒ、それが本当ならなんて面白い！　でも一応調べさせてもらうぜ、その能力の強さと、種類もな、ケケけくああ」

ゆらりと、男の影が揺れた。

見ると男は狂ったような笑顔のままゆっくりと右手を俺のほうへ突き出している。

そして、奴はそのまま「力」を解放した

ム……。

これは、意識に、進入しようとしている……？

これは、ヤツも俺と同種か。

しかし、奴の力はこの程度か。何か劣化している力を感じるな。
この程度の力ならな、出て行ってもらおうか……ふんっ！

そして、俺が奴の力を遮断した瞬間に、奴は弾かれた様に震えて、
笑顔のまま俺のほうを見た。

「イヒ、いひ？ 貴様は……一体？ 俺の精神干渉能力は研究所最強のはず。なのに俺の精神介入をはじいただと？ 貴様はなにもの？」

「だから研究所って何のことだよ。下らん話に付き合ってあまり遅くなると声の元へ間に合わんから行くぞ俺は？」

「ま、まさか……貴様が「原典」なのか？」

「何を言っているお前。よくわからんがまあ良い。とりあえず声の中心の場所はあるこのバーの中か？」

「ああ……まあ止めたいならすきにしろ。それに例えお前を止めたくても俺にはお前を止めれんさ。ブグヒイヒヒッ。多分似たようなものでもお前と俺にはガンダムとジム位の性能差はあるからな。いひひひひひ、いい例えじゃないかようひひひ。せっかく俺がヤツラの精神にお邪魔して操ってこの状況をセットしたんだが」

「そうか。悪いな。潰さしてもらうぜ。まあお前は運が悪かったのさ」

「ケ？ まあいい。ウヒヒヒヒヒ。しかしお前もなかなか面白いヤ

ツだな」

「う、そうか？ 言われた事無いぞ？」

「まあそうかもな。俺には面白かったが。じゃあな」

「ああ」

そうして、赤い頭のその男は、そのまま夜の闇へと消えていった。

幕間 1

小汚いバーの一室。

カウンターに座ってひたすら酒を飲み続ける金髪の男がいる。

この男こそ、この耳ヶ崎一帯を仕切る暴走族のリーダーである山城真一その人であった。

どれだけの酒を飲んだのだろうか。カウンターの上には空になった酒瓶が大量に転がっている。

大量の酒瓶。そう、普通の人間ならば泥酔して死に至りかねないほどの大量の酒瓶が。

自制心があれば、まともな人間なら、例え人生捨てた不良でもこんな自殺行為はしないはずである。

しかし、山城真一は、焦点の合っていない目のまま酒を煽り続けている。

そこに、もう一人の焦点の合っていない目をした男が入ってくる。そして、山城の酒瓶を取り上げて話しかけた。

「おい、昼間攫っておいたヤツの撮影すんぞ」

「ああああ、ううううう、馬鹿デメエ、何勝手に俺の酒取ってんだ。」

殺すぞ。もっと飲ませろよ……?」

「ばか、山城お前、もう金も酒もねえだろ、だから稼ぐんだろ?」

「ああああ、そうだったな。金持ちのオッサンはどうしてる」

「ああ、なんか家から器具持ってくるとかはしゃいでたぜ。真性の変態だぜあの親父」

「ヒヒヒ、そりゃあ酷いな。本当なら高校の片山光ちゃんも混ぜて撮りたかったんだけどな、お前も追っかけてただろ? アイツに邪魔されてさ。うふひひひひ、明日にはブツ殺す」

「いや、明日にはぶっ殺してるんだぜ俺たちが。ああ……それにしても片山光ちゃん可愛いよな。多分うちの高校では一番。お前が逃がさなけりゃ今ごろ親父の前に俺が味見してたのによー」

「馬鹿! うるせえよ、俺が先のはずじゃなかさ。それに今日の姉弟も上玉じゃなかさ。つつうか姉が良い。さすがに俺美形でも男はどうでも良いもん」

「そうか ? 俺あの弟も可愛いと思う。なんか目覚めそうだモン」

「うほっ、お前変態だったの? うわ、キモッ! 寄るな変態。でもさー、大体さ、穴あいて無いじゃん」

「バカッ、後ろにあいてるだろ?」

「ひひひ、そうだな。アレは確かにいいかも。じゃあ親父より先に俺たちで楽しもうぜ。奥に閉じ込めてあんだろ?」

「おう、鍵は……っと開いた」

3

取り合えずバーの前についた。

そしてドアを開けて中に入る。が、誰も居ない、か……? ?

しかし奥の方の部屋から声が聞えてくる。

「お前らッ!! 何のつもりだ! もしも姉ちゃんに手を出したら絶対許さないからな!」

まず、若い男、というか少年の声の一つ。この声は、さっき聞こえた声の一つだ。

「んー、勇ましいでちゅねー」

「ひいひいひいひいひい、ボクも自分の心配した方がいいでちゅよー? コイツがまるでマイ〇ルみたいな発言してたからねー」

そうして、「俺」は聞いたことの無い野卑な声が二人分。

「うるさいうるさい。姉ちゃんに何かあったらお前ら殺してやる」

「ひいひい、でもそうだね。二人同時にやっちゃうか」

「そうだな、取り合えず……俺ズボン脱がすー」

「じゃあ俺スカートー」

「や、やめて。もう……やめてください。もう、私はいいから……弟にだけは手を出さないで」

ここで、もう一人分、今度は少女の物と思われる綺麗な声が聞こえた。

この声も、さっき聞こえた声だ。

「ッ!! 何言ってるんだよ姉ちゃん!!」

「んー健気な姉弟愛ですねー。でもお兄さんたち両方いただいちゃうつもりなんだなー」

「ん、むーんむーん……いただきまーす」

やはり俺の眠りを妨げた声の出処はココか。どうやら間違い無いようだな。

ならば、お邪魔するか。声を止めるために。

取り合えず、このドア鍵かかってるし……蹴破るか、フンッ!!!

バキィッ!!!!

「「「なッ!!!!」」」

よっしゃ軽いぜッ!!

中には二人のチンピラと、一人の少女、一人の少年が居て、全員が新しい登場人物である俺のほうを見ていた。

「おいおい、面白そうな事してんな。俺も混ぜろよ」

俺がそう言うと、二人のチンピラは俺の顔を見てパクパクと死にそうな金魚のように口をあけている。

何だコイツ等は？ 俺の顔を知っているのか？

「きつ、貴様は、昼間のっ!」

「馬鹿野郎ッ!!!! テメエなんか混ぜるわけねえだろ!!!? よくもこの山城を舐めてくれたな。ブツ殺すッ!!!」

そう言っ二人の野卑な男がナイフを抜いた。

何だコイツ等。この「俺」に刃向おうと言うのか。馬鹿な奴らだ。死にたいと思えないな。全く。

しかし、妙な空気を感ずる。

普通の町の喧嘩ならこういう時のナイフは脅し道具だが、今のこの二人組からは何故か殺気が感じられる。

と言うか少し目が逝っちゃってる。自分の意志では無いようなそんな感じ。

さっきの変な奴の言ってた精神にお邪魔してうんたらかんたらとか言うのと関係があるのか？

しかし、いくら強力に操られようと、コイツ等自身にテクニクが伴ってないので特に恐れは感じないし、どうでもいいことなのだが。

まあ相手がナイフ使うならこちらでも使うか。

ふふふふ、俺も刃物は好きだぜ。

研ぎ澄まれた感覚から服の中にナイフが入っているのが解かる。そうしてポケットをあさると……ってこれは違う、生徒手帳だ。取り合えず手帳を投げ捨てて探す……あった。

と言うわけで手持ちの折りたたみナイフを開く。

む……？ 右腕には何故か包帯が巻いてあるな。

まあいいか。こんな雑魚共は別に利き腕じゃなくても大丈夫だろう。

そうして左手で構えたときに山城と名乗った方じゃない方……茶髪の野卑なチンピラが切りかかってきた。

遅い、その上にナイフの使い方が間違っている。

避けれると言えばそれはもう百回でも避けれるが……

軌道を読みその間の周りの状況把握さらには敵のその後の行動を

ロードするために戦いのためだけに能力を集中して開放する。

瞬間、脳に入ってくる圧倒的な量の情報、空間を全て把握できるだけの情報と、それを行動に移せるだけの肉体行使状態へと移す。

敵情報読み込み。

弱い……。これなら当たってもろくにダメージは無いな。

と言うわけでタイムロスをなくすため役に立たない右手でガードする。

結果、学生服を少し刃が通って軽く右腕が斬れたが……。別に構わん。

そのままナイフを握った左手で腹を殴りつける。

その最強のポイントは……。見えたッ！！！！

その瞬間、殴った感覚と共に、バキボキッ、と言う敵の肋骨を折る妙な音がした。

「グボアッ！！！！！」

敵は奇声を発しながら、口から血を吹き出して三メートル以上吹っ飛び壁に当たって止まった。

多分アバラの二、三本は……。む、^{ロード}読込完了。三本は持っていた。

「ッ……て、てててメエナニモンだッ！！！！？」

「別に。どうした？ オマエ、山城とかいったか？ 俺を殺すんじゃないかったのか？」

「うッうるせえっ、今殺してやるよッ！！！」

「そうか。こいよ」

山城とか名乗った下品な男の得物は……ステイレットナイフか。突く事に特化したナイフだ。

使い方も、流石にさっきの雑魚とは違うな。

「フンッ」

と、山城が突いてきた。

読込^{ロード}はすでに完了している。軌道も突くタイミングも前からわかっている。

そして、その中からの最強の反撃の結果も。

相手の右手から繰り出される突きをこちらの左手のナイフで受け流し、体勢が崩れた敵の首を掻っ切る。これが最強だ。

取り合えずナイフを逆手に持ち直しロード。

この行動は、今の最上零児の身体能力で可能か？ 勿論可能。今の能力を開放した俺ならばこの程度の敵など百度殺しても余りある。

という訳で相手の切先を睨む。まさに、今、突きを繰り出そうとしている瞬間。

しかし、その動きは今の能力を解放している俺にとっては、あまりにも遅い。

……まだまだ甘い突きだな山城。お前はこれで終わりだ。

「俺」の方と貴様は知り合いでも、俺自身は知らないが……まあいいか。

お前はここで死ね。

と言うわけで山城を殺すためにヤツのナイフを受け流そうとした、その瞬間。

「殺し……気分の…殺しては……いけない」

また、頭の中で声がした。

ギ、なんだ今の声は……？

あ。それは、この行為は俺がしてはいけない事ではなかったか？

クロス。いや、ダメだ。

あ、でも、そんな躊躇してる暇は……。

「ズッ……！！！」

気づけば、俺の肩に山城のナイフが刺さっていた。

何が起こったんだ。今？ 情報処理終了。

そうか。

声に止められて動かなかった隙に山城のナイフが俺の肩を貫通したのか？

「ヒヒヒヒヒ……雑魚め、死ねッ！！」

そうして山城のナイフが肩から抜かれ俺の心臓の辺りへ軌道向け直す。

身体は……動かない？

まずい、奴のナイフは、真っ直ぐに俺の心臓を狙っている。
そして、俺の身体は動かない。

ならば、俺は、ココで、死ぬのか？

こんな雑魚に、こんな馬鹿に、殺されるのか？
そんな馬鹿な……ふざけるな……フザケルナ！

「ふざけるなあッ！！」

「ヒギッ！！？」

突然動く身体と、あたりに響き渡る、骨の折れる音。

あれ、何が起きた？

あ、そうか。

身体が動いて山城にローキックを叩きこめたのか。
そして、奴の足の骨は砕けたわけか。

みると、山城は折れた足を引きずりながら引き下がり、脅えた顔でこちらを見上げていた。

だが、躊躇などしない。そのまま奴の方へ踏み出す。

「ひ、ヒッ、て……テメエ、化け物！？」

「ふふふ、さあな。さて、どうしてくれようか」

「こ、ここ殺すのか！？」

「ふ……貴様なんか殺してもナイフの錆にしかならんな。だが、取り合えず左足もだっ。フンッ！！」

そして、また部屋に鈍い音が響く。

「ヒヤガアッ……ッ！？」

「黙っておけよ、お前……と、黙ったか」

ふ、どうやら山城は失神したらしい。おかげで静かになったな。

と、雑魚どもが持っていたナイフが目に入る。

ふん、なまくらだが無いよりマシな戦利品ではあるな。いただいたおこう。

二本のナイフをポケットへ仕舞って置く。

そうして捕らわれてた男女、会話から推察するに姉弟を見る。ふん。やけに美形な姉弟だな。

が、二人とも震えて抱き合ったまま恐怖の表情でこちらを見ているだけだ。

む……二人とも脅えて声も出ないか。

まあ今の光景を見れば当然かもしれん。

さて、どうしたものか……。

俺の睡眠を邪魔してまで起こしたのは許せない。だが、声さえ止めば俺には文句は無い。

それに俺の能力の基本は強い感情を読み取ると言う事だから、つまり二人はそれだけ辛かったてことでもあるな。

「俺」はどうしたい？

とりあえず震えている二人に近づく。

「な……何するつもりなんだようッ!! 姉ちゃんには手を出すなよッ! う、っていうか……お願い、姉ちゃんだけは……」

「すみません。弟だけは、お願いですから……」

ふう。この状況でも相手を思いやるか。美しきかな、か？

俺は自身の欲望には忠実だけど別に人間の欲望は性欲だけじゃ無いさ。

ならば、俺はどうすればいい？

と、その時！

「もしもしー？ 山城くーん？ オジさん道具持ってきたよーん？」

変なおじさんが空気をぶった切って入ってきた。

そう、まさに変なおじさん。身体的特徴を言うのは控えようと思うが、こいつは間違いなく相当な変態だ。

そして両手には最強の変態を証明するように……その流石の俺でも口にするのが憚られるような、これでもかってくらいにエロい道具持ったの登場だった。

うん、これは酷い。

事実姉弟は二人とも顔が真赤だ。

「あらまー綺麗どころが三人も集まって……これ全部いただいて良いの？ おじさんうれぴー」

三人って、俺も入ってるのか……つつうかやっぱり見た目通り両刀使いなんだ。

流石の俺でも……コレに犯られたら……死ぬかもしれない。

一応だが、能力で予測し、シミュレートする。

その結果、目を背けたくなるような最悪の未来がシミュレートされた。

無理だ。これに犯られたら生き延びる未来は無い。

この未来は、実現させちゃいけない。

「うーん。そうだねー、じゃあまず……君に決めたッ！」

って俺え？ マジでかよ？

「んー、君名前なんて言うの？おじさんが愛してあげるからねー？」
「……」

どうしたものか。そうだな。

「……」

「へぼしッ！！！」

ドサッ

取り合えず無言で殴って潰す。見なかったことにしよう。うん。

そうして変なおじさんが気絶したのを確認してから姉弟を見る。
さっきより更にビクビク脅えてる。まあ当然か。

つつうかなに言おうとしてたんだっけ……変な親父のせいでタイ
ミング逃したな。

ああ、そうだ、思い出した。

「ああ……あー、おまえら？」

「「はっはいいっ？」」

「なんだ、なんかこうさ、世の中はこう言う風に危ない奴いるから
な、アレだよ。さっさと気をつけて帰れよ？」

「「え……？」」

二人ともポカンとしている。

あ……アレか？俺があいつらの同類と思ってたのか？

夜中にこんな所いるし、俺も混ぜろとか言ったし。

しかし、それは根本から違う。そうだよ。

「つつうかさー、お前らが煩いから、俺呼ぶから寝れなかったんだよ。じゃあな」

そう言ってこの部屋を出る。血まみれの男や、変なおじさんがいっぱい転がってる部屋には長くは居たく無いし。

「「あ……ああありがとうございます！！」」

後ろから聞こえる感謝の言葉を流して外へ出る。
ちっ、ガラじゃあねえなあ。

そうして家路を急ぐ。

空はもう薄く明るくなり始めてる。

あれ、俺の家は駅前なのになんで商店街の方に来てるんだろか？
あれ……あ、そうか。

今日俺はこのマンションに居たんだ。
そうしてベランダからベランダへと飛び移り、三階の部屋のベランダまで飛び乗り、部屋の中へ入る。

中には相変わらず美女が寝ている。

さっきは欲情したがもう疲れてそんな余力も無い。

寝よう、っ……ッ！

そうか、山城に刺されたんだったな。

クソッ、今更になって貫かれた……肩が、痛てえな。

まあいい、寝れば回復するさ。

そうだ、もう、寝よう。

おやすみ。

あるべきカタチ（後書き）

どうも。今までこの欄では名乗ってませんでしたので名乗ります。

作者のS i k oというものです。

今回は結構キワドイ描写もあるしなにより少し主人公の人格がアレなんで不安があります。

でも取り合えず読んでくださってありがとうございます。

これからも偶にはこんなノリにはなると思いますが、なにか思う事があればなんでも言って下さればうれしいです。

これからもどうかよろしくお願いします。

にぎやかな朝

1

暗闇の中に居た意識が、徐々に白い世界へと引き上げられる。
一瞬の眩しさの後に、霞んだ視界は徐々にピントを合わせていく。

朝……なの、か？ 目が、うまく働かない。
何でか、背中が痛い。

う、なんだ、この体勢は。

俺は、俺はなんで壁にもたれかかって座っている体勢で寝てるんだろ？

それに何故かカッターシャツを着ている。普段は裸で寝てるんだがな。

って言うか、それ以前に、ここは……何処だ？
俺んちはもっと散らかってるぞ？ って言うかこんなに広く無いし。

「う、ううん……」

はて？ 今何か声が聞えたような気が……。
具体的にはやけに色っぽい「う、ううん……」という声だ。

そうして声の主を探すと……。

可愛らしい形のベットがあつて、その上で部屋に入ってくる朝日の中上半身だけ起こして眠そうに伸びをしながらも、片手で目をこすっている山園先生がいた。

朝だからか、それとも別の理由か、血が一箇所に固まっていくのを感じる。

なんだかヤバイ。何がやばいのかはよくわからんが、その仕草はダメだ。

こう、何て言うかいつも年上で凜とした感じのある先生だけに、そのやや猫をも思わせるような可愛らしい仕草は反則だ。

これが、男がギャップに弱いということなのか！

「あれ……最上君だあ？ うふふ、おはよう……」

今動悸が早くなってる……ついでに血圧も上がった気がする。

何か行動しなくてはと思うのに、心臓が早鐘を打っているように慌てていて動けなくて、言葉も出ない。

「えへへ。もう、起きなきゃね……」

「ブッ……ッ！！」

そうして布団からゴソゴソと出てきた先生の姿は……反則だった。上半身は何かシャツのような物を羽織っているだけで、ボタンはほとんどとめていない。

そして下は、まあなんと言うの？ アレだよアレ。

ショーツと言うかパンティーと言うのかパンティラと言うかパンティエというか……それを穿いているだけ。

しかも、ピンクの下着ですか、先生……。

その扇情的な姿とは裏腹にまったく邪気の無い子供のような笑顔。なんか……色々もうこの世の終わりの的に俺の心にぐっと来た姿だった。

ああ、俺はこの光景を見ただけでも男として生まれてきた甲斐はある。

そう、まさに例えるのならば、君の瞳は百万ボルト！

と、アホな事を考えてると何故か先生はコッチに来て俺の目線と同じ高さになるようにしゃがみ込んだ。

……ってええええ？

ダメだよ、ダメだダメだ。

その体勢は色々とヤバイって。特に胸とか胸とか胸とか。

あと少しで……見えそう……ごくり。

とその時、先生が何か話し出した。

「うふふふふ、今日はいいい夢見れてるのね」

はてな？ よく解からないんだが、どうやら先生は寝ぼけて夢を見ている気分でいるらしい。

ならば、俺は生徒として、先生をちゃんと目覚めさせるのが義務だろう。

勿論さ、本音を言えば今の姿をもっと眺めていたいしあわよくば先っちょを……いやいやとにかく色々名残惜しいがこのまま見つづけるのは何か男として悪いような気がする。

こういうことはちゃんと同意の上でやら無いとね。ほら、本当の紳士ならさ。

と、言うわけで注意することにした。

「あのー、もしかして先生寝ぼけてませんか？」

「ううん、何言ってるのよ？ 夢なんだから寝てるに決まってるじゃない」

はてな、夢なんだから寝てるって……、こりゃあ本格的に寝ぼけてるわけか。

と、そのとき突然先生は俺の頬に手を添えてきた！

「つて、へ？ あの、先生……？」

しゃがんでいる裸Yシャツの美人女教師に前のめりで頬を撫でられる。

この状態でドギマギしない男子生徒が居るだろうか？ いや、居ない。反語の反語。

だから俺もドギマギした。だってしょうがないじゃんかさ。俺にはまだ経験値が足りないんだから！

しかし、そんな俺に構わず俺の頬を撫で回し続ける先生。俺、動けず。

そして……。

「んもう。夢の中くらい少しは私の言う事きいてくれないじゃない。もう、えいっ……キスしちゃう！」

ってなんですとーッ！！

とその時、何か口がとんでもなく柔らかいものにふさがれた。

「ん、んんうん……」

目の前にはどアップになった目を閉じた先生の顔。

ああ、近くで見ても可愛いなあ。ちくしょう。

特にその朝だからか何故だか知らないが上気してほんのりと紅くなった顔がとても愛らしい。

そうしてついついキスに応える。

ディープでは無いが触れるだけのバードキスとも少し違う不思議なキス。

顔に触れる相手の鼻からの呼吸がくすぐったく、だが心地良い。

ああ、いつ振りだこんなの？

そうして時間もわからない位たっぷりとキスをしたあと。

「えへへ、ついにキスしちゃった……」

とだけ言って、先生は顔を離す。潤んだ瞳で俺の顔を見つめられて、実感がわいてきた。

奪われちゃったんだ、俺。

「それじゃあおやすみなさい」

そう言って立ち上がって離れて行く先生。

どうやらベットに入って寝るつもりらしい。いや先生、もう朝なんだけどさ。

と、その時に。

ゴンッ!

「いたいッ!」

床においてあった目覚し時計で足を打った。

うん。先生はああ見えて結構ドジらしい。これが、萌という物か。

「あれ……痛い……おかしいわね……って!!!」

そう言っただけで今更になって慌ててこちらに振りかえる。

そして在り得ない物を見るように俺を見る。

いや、今更そんな目で俺を見られても……。

「あは、あはは……おはよう……ございます」

うん、なんとか言えたな。この異常な状況でも取りあえず挨拶って偉じゃんかさ俺。

「もしかして……夢じゃなかった……とか?」

「あ、あはははは……」

乾いた笑いしか出ない。ええいつ、俺にどうしろっちゅーねん。

「そんな……そんな……え……うそ……どうしよう……」

うんうん、どうやら先生はかなりのショックを受けているらしい。かなり狼狽している様子が見て取れる。

いや、まあそりゃあ好きでも無い男と意識が朦朧としている間にキスしちゃってたらショックだろうなあ。

むむむ、そう考えると、キスしたのは先生からだし俺のほうは不

可抗力だったけど何か罪悪感が……。
とりあえずあやまっとくかなー。

「あーその、すみませ……」

「ごめんなさい！ 本当にごめんなさい！！ その……謝って許される事だとは思ってないけど……ホントに寝ぼけちゃって。あ……その……私……無理やり……ホントにごめんなさい！」

「は、いや……なんで先生が謝るんですか？」

「なんで……ってそんなの当たり前じゃないの。だって無抵抗の生徒に無理やりキスしちゃったんだから……。あの、その……本当にごめんなさい」

「いや……そんな謝られても。俺のほうも全然そんなの気にしてないんで……」

「え……？ でもそんな……私無理矢理だったんだよ。なのに、本当に……」

「ええ、本当に気にして無いですって」

「ホントのホントに……？」

「だからホントのホントですよ」

「でもホントにいいの？」

「だーっ！！ だからしつこいですね先生！ 俺は本当に良いって言ってるんですし、なにより俺自体が嬉しかった……もとい得した……いや違うあわわわあっ、とにかく本当に先生は余計な事は気にしないで良いんですって！！！」

あああああ、またなんかテンパって言わないで良いこと言った気がするよう。

と、先生は、下を向いて震えている。

って、先生……？

「プッ……ふふふふ。うん。よくわかったわ？ 君が気にしてい

ないって事は」

ああ、笑ってたのね。

むむう、笑われるのはやや納得いかないが先生が安心してくれたなら、まあそれはそれで良いか。

と、先生はその猫目で、少しいたずらを思いついたような顔で俺のほうに来る。

む、嫌な予感。

「ふーん。それにしても最上君って私にキスされて嬉しかったんだ」

く、そこを突きますか。

「う……まあそれはそうですよ。まあ男なんてそんなモンじゃないんですか？」

「ふふふ、でもキスしてもあんまり動揺しないって……そんなに慣れてるのね。ああ、先生は悲しいわ。最上君はそうやって次々と女の人を毒牙に掻けているのね」

って、なんて事を言うんだこの人！

「うわあ、先生がなに言ってるかボクよくわからないんですけどお、一つ提案があります」

「うん、なに？」

「いや、先生のその格好は勿論僕は嬉しいですしなかなか魅力的なんです……その、もう少し厚着した方が健康的かなーと思うんですが……」

「へ……それって何のこ……ってキャアッ！！」

うむうむ、やっと気づいてくれたか。一安心できるが……ちよつとだけ残念。

いや、裸にシャツって破壊力あったなー。

あ、勿論下は穿いていたんだけどさ。

などと考えているうちに先生はベットのの上に乗って布団で身体を包んだ。

そしてこちらをジト目で睨んでくる。

「も……もしかして……見た？」

そういつて頬を紅らめる先生はなんだか凄く幼く見える。

「見たって……何をですか……？」

何のことを言っているのかは解るのについつい言い返してしまう。

「いや……その……それは」

「いや、えっと、ゴホン！　なんと言うかその下着姿は堪能、もとい見ましたけど、その肝心な所は残念ながら、じゃなくてそのなんというか見えてない、でもないえーっと、見てないですよ？」

「ほんとに……？」

「ええ、大丈夫だと思います」

「ふう、それなら良いわ」

そう言っ先生は表情を変えて、いつもの余裕のある大人の女といった風情で言った。

それにしてもコロコロと良く表情の変る人だ。

「それより最上君。着替えたいから少し出て行ってくれない？」

「へえい。じゃあ俺は洗面所の方に行っておきま……ってイタッ！」

そう、その立ち上がった瞬間に身体に鋭く走る痛み。

「ってどうかしたの最上く……って何よその血……ッ！！！」

「血……ほへ？ 何処にそんな物が？」

「何じゃないわよ？ って言うか寝ぼけていたにしても私もなんで今まで気づいてないのよッ！？ その肩どうしたのよッ！」

「肩……って……ッ！！なんじゃコリャーッ！！！！？」

b y 松田優作

ってえ、ちッ血いいいいい？

カッターシャツの肩の部分がまっかつか。

「あ……カッターシャツの肩の部分ってシヤレになってますよね？」

「って馬鹿な事言ってる場合じゃないわよッ！！ さっさとその傷見せなさいよーッ！」

そう言っ先生そのまま慌てて俺の方まで走ってきて前のめりになって俺の服を脱がそうとする。

ってうわっ！

「……って何やってるんですかーっ！？ それにその服で前のめりになっちゃダメーッ！ ってうわ先っぽ見えた見えたピンクピンクー……ッ！！ 理想通りのピンクの突起があー……ッ！！」

何か、口に出してはいけない事を叫んだ気がする。

だがしかし、ああ……このまま死んでも悔いは無い。

我事において後悔をせず。

さらにいえばもう人生いたるところ山河あり。ちなみにジュース会社サンガリアの名前は、ここから来ている。

人生いたる所サンガリア。らしい。なんのこっちゃ。

ああ……もう人生いたる所トイレあり。だからどこでタチシヨンしても問題は無いさ。

つまり、こここそが約束の地の桃源郷！

現実逃避終了。

「ってドサクサにまぎれて何みてるのよ最上君ッ！！！！？」

「何ってソレはナニんの事を……って俺何もみて無い俺無実無実無実……でも嬉しいなあ、でも違う違うだから俺無実っ！」

「ああもう意味わから無いわよ。あ……あった毛布！」

そう言って先生は慌てて体を毛布で包んだ。

そうしてまた双方無言。

ええい、膠着したら厄介だ。

「あのですね……」

「……………なによ？」

あ……やっぱ怒ってるかなーそりゃあ怒るよなあ。

「僕が朝まで気づかなかったんだから多分傷はたいした事無いんです。だから取り合えず先生は落ち着いて着替えてください。ボクはあっち行ってるんで……」

「……………わかったわよ」

ふう。やっと落ち着いたかな？

俺はこの行動でよかったのか？　まあ、いいか。

うん、ぴんく……。

2

「って何言ってるのよこれがたいしたこと無い傷ですってッ!？
ふざけないでよ、肩の背中側まで貫通してるじゃないのよ。ホント
に怒るわよ!？」

「う……言葉も無いであります……ズッ!!」

うん、今の事態はというと、シャツの肩の部分をはだけて、先生
に傷口を見せて、先生は烈火のごとく怒りながらそこに消毒液をぶ
っかけるって言う、そんな状態。

ああ、痛いよう。うううう……。消毒液がしみるよう。

「ううう、沁みるよう、い、だっ」

「って、大丈夫？　ごめんね」

「あ……いや……大丈夫です。それに沁みるのはしょうがないです
よ」

「そ……そうよね？　それじゃあもう一回行くわよ？」

「へい……ってギッ……しみーしみー」

「痛かった？」

「いや……まあ痛く無いっていやあ嘘になりますけど、コレばっ
かりは如何しようもねえですよ」

「そ……そうよね？　ふう。でも一体どこでこんな怪我したのよ？
昨日の夜はこんな怪我してなかったじゃない」

そう言えば、それが問題だ。何処で怪我したんだろう。

「いや……つつうかなんでこんな怪我したんだろ？ おっかしいな
ー、俺なんとなく先生にこの部屋に連れ込まれた記憶まではなんと
なくあるけど、その後の事はまったく覚えて無いですよ？ だけど
こんな怪我負うようなことはして無いと思うんだけどなー。それに
俺ずっと寝てたんでしょ？」

「う……うーん。寝てたはず。あ、でも、そう言えば……少しおか
しいのよ。実はね、昨日は最上君は私のベッドで寝かせて、私はソ
ファアで寝てただけだね、それが朝になったら何故か私がベッ
トで寝てて最上君は壁の所に凭れかかって寝てたって訳。どう言うこ
とだろ？」

む、つまり、それは寝床が逆転したって言う事か。って事は……。

「そ……そうかッ!!! 謎は全て解けた!!!」

「え、ホントに？」

「はい。間違いありません。じっちゃんの名にかけて」

でも実は集落の中ではじいさんだけ才能無くて結局八百屋とか色
々やってたんだけど。まあ、余計な事は言わないで良いのだ。

「で、どう言う事が説明してくれる？」

「はい。まず最初に先生はソファアで寝てた。そして夜中、寒い
で先生はトイレが近くなりトイレに立った。しかし帰ってくるとき
にスッカリしているので、ソファアで寝てたことはすっかり忘れて
いる。そうしてベットに寝ようとして、ベッドを見ると、見知らぬ
不審な男、つまり俺が寝ている。それで動転して錯乱した先生は台

所に行き包丁を持ってきて俺にグッサリ。痛みのにた打ち回る俺にバックドロップをかけつて、ベッドを開放すると、今度は自分がベツトに潜ってお休みモード。一方刺されるは技かけられるのは可愛そうな俺はしばらく気を失う。そうして目覚めたときに傷を庇うようにして壁にもたれかかり力尽きたのであった。さらに血痕が何処に言ったかと言うと、先生がまたトイレに立ったときに証拠隠滅のために拭き取ったか、或いはそのときに世界から何らかの力が働いて消えたかまたはそのとき歴史が動いたのか、或いはとにかくエントロピーが初めて減少して消えたんです」

ふう、長いセリフだが言い切ったぜ。と、言うわけで……。

「つまり、犯人は……アナタです先生！」

「……………」

あ、微妙な表情。

「どうですか…………？」

「……………」

さらに微妙な表情。

「あ……もしかしてつまらなかったですか？」

「うん、すごく」

ガーン！

「ああ、そうね。最上君のイメージだと私はそんなにトイレに言っ
てばっかりな人なんだ。ふーん。よくわかったわ」

「ってツツこむトコそこなんですか？ いや、さすが女性といった

ところか。っていうか、それよりも今のは冗談ですから……許してくれって言うのは……やっぱりダメ？」

「うん……まあ可愛い教え子の頼みだから今回だけは許してあげるけど。そうね、もしかたこんなつまらない冗談言ったら……」

「言ったら……？」

「留年」

ひいひいひいひいっ！！

「ってそれ職権乱用じゃ無いですかーッ!？」

「ふふふふ。いいのよ。職権なんて乱用するためにあるのよ……」

「て嘘言わないでくださいよー。ああ、俺の中の山園先生のイメージが……」

「ふふふ、冗談よ冗談。ホントは気にして無いから大丈夫よ」

「へ、ホントですか？」

「うふふ、ホントよ」

と、言うわけで、最上零児は救われた！

「はあ、良かったあ。あ……それよりも先生。時間いいんですか？」

「ん、ああ、本当ね。もうこんな時間。残念ね。あ……それと最上君？」

「はい」

「今日は学校やすんで良いから。だからちゃんと今日中に病院行きなさいよ？」

「だからちゃんと今日中に病院行きなさいよ？」

そう言っておくべき事を言った。のだけど……。

「あー、まあ善処します」

最上君からはこんな煮え切らない返事しか帰ってこなかった。

「あれ？ どうしたの？ そのダメな政治家みたいないい加減な返事は？」

「う……。いや、アレですよアレ。とにかく病院には行かないでも大丈夫ですよ」

って、何を言っているんだろうかこの子は？ こんな怪我なら病院に行くのが当然なのに。

「何言ってるのよ？ そんな怪我しててすごく痛いでしょ？ 取り合えず今日は病院に行きなさいよ？」

「いや……。まあ、多分大丈夫だし。最悪でも膿むくらいですから別に良いじゃないですか？」

「って、良い訳無いでしょ？ とにかく今日は病院に行くこと。わかったわね？」

「う……。まあ行けたら行きます」

「行けたらじゃなくて、絶対行くの！ わかった？」

「は、はい」

もう、やっと返事したわね。でもなんであんなに病院行きたがらないのかしら。

何か理由が……？

「ふう、それよりも先生」

「ん……？」

「その……色々ありましたね」

色々、か。

「そうね。最上君が血だらけの手で教室に入って来たり」

「俺は先生の家結局泊まっちゃったし」

「朝も……う……」

ううう、恥ずかしいよう。

思い出しちゃった。今朝はその最上君に色々見られちゃっただけじゃなくて。

その……キスもしちゃったんだし……。

あ、そう言えば……。

「ねえ、最上君？」

「はい？」

「私とキスするの……イヤじゃなかったんだよね？」

「ブツ……。ええ。全然そんな事無いですよ。むしろ嬉し……いやそのはい。大丈夫ですよ？」

ふふふ、本当に素直な、良い子ね。本当に好ましく、感じられる……。

こんな最上君だからこそ。

「うふふ、ありがとうね。でもね？ 私もね、少し、うれし……」

ピピピピピッ！！！！

んもう。良い所で。何の音よ。

見ると最上君が慌ててポケットを漁っているの、どうやら音の元は最上君の携帯らしい。

あ、そうだ。携帯持つてるんならあとで番号教えてもらおう。

そんなことを考えているうちに、最上君が申し訳なさそうにこちらに頭を下げながら通話のボタンを押した。

そしたら。

「なにやってるのよ零児ーッ！！ 私朝早くから零児の部屋に居るのに全然零児居ないんだもん。一体どこほつつきあるってるのよー！？」

と言う声が受話器ごしなのに大音量で聞えてきた。

うん。凄い声だね……。

でもそれより気になるのは……女の人の声だよね？

朝から部屋に行って、本人がいなくて怒るなんて……彼女かな？

そうだよね……最上君なんかよくわかんないけどなんとなく良いもんね。だから彼女くらい居て当たり前だよ。ふう。

って、あれ？ 私なんで沈んでるんだろ。

別にこの子は生徒でしか無いんだから……そんな気になるほうがおかしいのに。

「つてうるせえよ。声でかいんだよ。それにいつもちゃんと名乗れ

って言ってるんだろ？」

突然怒鳴る最上君。って、うわぁ、最上君って彼女に対して随分酷い言葉使いなんだね。少し意外。

「何言ってるのよ零児！ 着信見ればわかるでしょ？ まったくいつもながら冷たいわよッ！」

ああ……彼女さんもそんな感じの人なんだ。なるほどね。納得。そうだ、少し聞いてみよ。

「ねえ最上君？ その人彼女なんでしょ？ でもすごい……なんて言うか碎けてるって言うか……？」

「「へ？」」

「何言ってるんですか？ 俺に彼女なんて居ないですよ？」

「え……？ じゃあその人は……」

「ねえ零児零児零児ーッ！！ 今女の声したよねしたよね？ いいやしたねっ！ 何、零児？ 私を放って置いて別の女のところに居るわけ？ ねえなんとか言いなさいよ零児！ いい加減にしないと怒るよっ！」

「だーっ、うるさいなっ。なんとか言えっつとしゃべってたらしやべれないだろーがばかー！ いいかげんに……」

「うるさいうるさい黙りなさい零児！ 私に意見しようなんて百年早いわよ。それより今の女誰なのよ？ ちよっと換わりなさいよ！？」

「バツ……んな事出来るわけねえだろ。今忙しそうだし……」

「うるさい換わって白黒つけてやるわ。とにかくその女を出しなさいよー！！」

そこまで話して申し訳そうに頭を下げて私の方を見る。

「って……すみませんね先生。少し長くなりそうなんで先に学校行ってもらえ……」

なによ、それ。つまりは私を放って置いてその女と話し続けるって事よね。

うん、それは、なんだか凄く気に食わない。

「良いわ。別に時間なんてどうでもいいから代わるわ。だから電話貸しなさい」

「って……へ？ それはどういうこ……」

「良いから……早く貸しなさいッ!!」

「ひ……ひいいいっ……どうぞ……!!」

そこまで言うのと最上君は脅えたような表情で私に電話を渡して少し距離を置いた。

ふふふ、変な最上君、うふふふ、何に脅えてるんだろう、うふふふふふふふ!

「ふう、代わりました」

「あ……アナタねーッ! 零児を誑かした女は……?」

ブチッ

「そう言うアナタは一体誰なのよ? 一体最上君のなんなんですか? 彼は彼女なんか居ないって言ってるじゃないですか。なのになんでアナタは零児零児って、名前で呼ぶなんて慣れ慣れしすぎるんじゃないですかっ!?!」

「わ……私は零児の姉です！ だから零児のことなんと言おうが私の勝手なのっ！ それよりアナタは一体どこの馬の骨なのよ！？」

「私は別に馬の骨じゃありませんっ！ 私は最上君の通っている高校のクラスの担任の教師です！」

「フンッ……女教師なんて。ババアが吠えるわね？」

ば、ババアですって！

「わ……私はまだ23です！ ババアじゃありません！！」

「23……クッ、でも私まだハタチだもん。それになんで零児がアナタといっしょに居るのよ？」

「それは……少し事情があつて。それで最上君は私の部屋に泊めました」

「つてなんですってーッ？ この変態女教師！！ 零児をどうするつもりよ？ この色情魔ッ！！」

「し、色情魔だなんて、そんな変な事してません！ ただ……同じ部屋で寝ただけです！！」

「おんなじ部屋で寝たですってー！！？ ふ……フンッ！ 別に羨ましくも無いもん。私だって零児が中学卒業するまでは一緒の家に居たんだもん！」

「そ、そんな事言ったら……わ、私だって最上君の……最上君の上半身の服を脱がしたりしましたっ！」

「つて……やっぱり変態なんじゃないアナタ！ う……うううう、羨ましくなんて無いもん。私だって零児と一緒に風呂に入ったことがあるもんねッ！！？」

お……お風呂……。一緒にお風呂……。お風呂。

ま、まさかそこまでなんて、う、ううう……。

と……そこで最上君がなにか真っ赤な顔でわめいている。

「ばか！　なに言ってるんだ姉さんッ！　一緒に風呂ってそれぞれだけ大昔の話だよッ！」

む……昔の話、そうか……ならっ、ならば恐れることはない。

「ふ……聞いたわよ。昔の話って最上君が言ってるわ。そんな大昔の話じゃあ別に良いわよ。私なんて……私なんて今朝最上君とキスしたんだからねーッ！！！！」

「な……な……なななんですって——ッ！！」

「うわっ、なに言っちゃてますかセンセーっ！！」

うわわ、今のは流石に鼓膜破けそうになった。

「さ……最悪！この淫行教師ッ！　きっと嫌がる零児を無理やり拘束して唇を奪ったんでしょー！！？」

「ってそんなわけ無いでしょ？　それに最上君もイヤじゃないって言ってくれたし……」

「零児はやさしいからそういうこと言っちゃうのよ。う、うう、そんな……。零児の初めては亡くなった零児のお父さんに代わって私がもらうって決めてたのにい」

「いや姉さん、そこに最悪親父は関係ねえだろ？」

初めて……？

「ってなに？　アレは最上君のファーストキスだったの？」

「ってうわあああっーそんなことどうでも良いじゃんかあ！？」

「つつかだれかなんとかしてええええーっ！っ！」

にぎやかな朝（後書き）

ああ、どうもS i k oです。

今回はベタにどたばたですね。

話はもう出来てるんですが・・・書くのに時間がかかるわけです。

一度真面目にタイピングソフトでもやった方が良いのかもしれない。

では、今回も読んでくださってありがとうございます。

でわ。

V S 剣姫（前書き）

えへへ、ややバイオレンス注意です。

あとS i k oお兄さんから読むときのポイントです。

各段落始めのただの数字は主人公視点。

幕間とついたらほぼ同時刻の他のキャラクター視点で物語りは進行します。

今まで説明なしですみませんでした。

では、今回も読んでくださると嬉しいです。

V S 剣姫

1

ふう、ひどい目にあったぜ。

姉さんの方には取り合えず今日は夜には帰っているからということ
で納得させたが……。

まったく鏡子姉さんにも困ったもんだぜ。

と、先生はそろそろ行く時間かな？

「それじゃあもう出るわよ？」

そう言った先生はもう行く準備が出来ていた。

「あ、随分早いんですね。やっぱ先生は早くに学校行くモンなんです
か？」

「うふふ、勿論それもあるだけどね。実は私剣道部の顧問なのよ。
それでね、部の朝錬があってね」

「へえ、そうだったんですか。って言うかうちって剣道部あったん
ですか、初耳なんですけど」

「それがね、去年出来たんだけどね。どうしてもやりたいてって子が
居てね、でも顧問になる人が誰も居なくてね。でも熱意のある子だ
ったから、新任の年だったんだけど私が顧問になったって訳。その
子が今の部長なんだけどね」

「へー、まだ出来たばかりなんですネ」

「ええ。だからまだ部員が少なくてね。最上君も暇だったら入ってね」

「うへえ、入りたいのは山々なんですけど俺は帰宅部って決めてるんですよ。じっちゃんに部活は帰宅に限るって言われてましてね」

嘘だ。大体集落に学校無かったからじいさんは学校行ってなかったし、八百屋だし。

「ふうん。それじゃあしょうがないわね」

うわっ、渾身のギャグだったのに、流されちゃったよ。

「それじゃあそろそろ時間ね。行きましょ？」

「ああ、そのことなんですけど……」

そうだ、これ言っという方が良いよなあ。

「バラバラに出ましようよ。俺どうせ学校行かないんだし」

「え、なんで？ 病院行くにしても、あの外科でしょ？ 途中までは同じ道じゃない」

「いや、そうなんすけどね。俺は全然構わないしむしろ先生と一緒に行ければ嬉しいですよ？ でも先生は先生なわけだし俺が先生と一緒に同じ部屋から出るのもしも誰かに見られたりしたら少し先生まずいんじゃないかと思うんですけど……」

「う、まあそれはそうなんだけど……でもっ！」

「まあ、そう言う訳で俺は先に出ようと思うんですけど先生は五分後にでも出てもらえれば……」

「わ、わかったわよ」

よし、解かってもらえたし、行くか。

「もう、ホントに変に気が利くのに妙に鈍感なんだから……」

ん？

「ほへ？ 何か言いましたか？」

「な……何でもないわよっ！ 早く行きなさいよ」

「う、わかりました。じゃ」

う……俺なんかマズイこと言ったのかなあ？

まあいいや、先生には世話になったし、ここで迷惑かける訳にも
いかんだろ。

こういう時は気を使いすぎるって事は無いだろうしな。

そう言うわけですぐに部屋を後にすることにする。

そう言うわけで部屋を出ようとしたんだが

「あ……………」

先生の声が聞こえたような気がした。

「あれ、先生。今何か言いましたか？」

「あ……ううん。なんでも無い。ちゃんと病院行くのよ」

「へーい。お世話になりましたー」

「あと………」

「は？」

「何があったか知らないけど、もうケンカしちゃだめよ？」

そ、それは、また絡まれたらどうなるか解からんしなあ。

「うう、善処します」

「善処じゃ無くてしないのよ!! わかった?」

「は、はい。それじゃありがとうございます」

そうして俺はこれ以上言質を取られないうちに先生のマンションの部屋から出た。

そして一階まで降りて表へ出る。

朝日は目に痛いほどに眩しく、さわやかな風が吹いていて心地よい。空気も暖かく本当に気持ちの良い一日だ。

今日も良い天気でよかった。

さて、また一日が始まった訳だ。

2

そうして路地裏に行く。

病院へ行くのは面倒だし、そんな必要俺には無い。ここで終わらせる。

そうして自分の内面へ潜り能力を開放する。

身体の状態をチェックしてその情報を脳へ送る。

異常チェック。異常個所をマッピングし、対処方法を考える。
スキャン終了。傷は貫通しているが、この程度の大きさなら治療

への問題は無い。

そうして能力を装填する。自分の殻を外しそこに能力を送る。

解析終了。自己治癒能力を理解しろ。

感情を読み取り、操作できる俺だ。

ならば実態のある肉体、ましてや自分の肉体ならばコントロール出来ないはずはあるまい。

そうして自己の細胞を操作して、その力を治癒へ向かわせる。

……ズツ……ッ！！！！

能力停止

ふう、流石に疲れた。力を使うと流石にな。

一瞬酷い痛みが頭に走ったが、でもまあこれで一日もすれば傷は塞がるだろ。ふう。

そうして壁に凭れかかって休んで疲れを取っていると路地の入り口に変な男が立ってこちらを凝視しているのが見えた。

その男は何かが変だ。

まず容姿。

サングラスをしている赤い髪の毛の、若い男。

さらにこの季節ならまだ少し肌寒いだろうに、上半身はタンクトップ一枚の姿。

腕には幾何学模様のような妙な刺青。この通りに格好もすでに変わがそんなのは大した問題では無い。

何か、頭の辺りにピリピリとした妙な感触が走る。

まるでその男が近くに来れば来るほど、何かが頭に入れられていく感じ。これは……？

と、その男はこちらに歩いてきて、俺の近くまで来ると気安く笑いながら話しかけてきた。

「うひ、ひひひひひ、昨日は大活躍だったじゃねえか。いや正確には今朝か？ お前に敬意を示してあの二人には手を出さないでやっただぜ」

む、俺はこんな奴は知らないんだが。

「お前、誰だよ。俺はお前なんて知らないぞ？」

「くび。何言ってるんだよ冷てえなア。お前昨日会った能力者だろ。それとも能力開放している間は別人格になるってタイプなのか？」

「ッ！！なぜそれをお前が。……そうか、貴様も能力者か」

「ああ、俺は常に能力が開きっぱなしな上に、研究所の中では最高クラスの能力だったんだぜ？ まあ、流石に「原典」のお前の能力の純度とは比べ様も無いがな」

「原典……？ まあいい。それでお前は昨日俺に会ったと？」

「ああ、昨日のお前の能力は凄かったぜ？ 存在するだけでその空気を侵食する様な能力の純度は……ひひひひひ。見てるだけでイ

きそうだったぜ。で、出るっ！ てな」

「ふう、なんか色々大変だと思ったんだけどまた「俺」が目覚めたのか。そう言えばちょうど満月も近いし血が少なかったし、そう言うこともあるだろ」

「それで聞きたい。お前は今は能力が閉じているようだがさっき一瞬だけ使っただろ。それを元に俺はお前を辿ったんだ。能力者は能力者を感じることが出来るからな。それにしても、機能のことを覚えていないって言は、お前はやはり能力を使うときは別人格になるのか？」

「いや、そんなことは無い。確かに使ったときはやや自分の欲望に引きずられるが。一応普段は俺はただの人さ。ただ一つ……普段は閉じている物を開くだけだからな。能力を使うことは今の俺の人格のまま別可能さ」

「ほうー、じゃあ昨日のお前はなんなんだよ」

「ああ。昨日、ね。意識は無かったんだが、大体起こった事は解かる。俺の意識が落ちていた時、つまり睡眠時や気絶時なんかの意識が無い時に、強く俺の能力に反応すると俺の常識や記憶とは離れた部分にある人格が勝手に目覚めてしまうことがあるんだ」

「へえー、成程。つまりは二重人格でどっちでも能力が使えるって訳ね、すげえのな。ウヒョヒョー」

二重人格……か。

「まあ簡単に言ってしまうえばそうなんだが、でもその人格も、あくまで普段の俺の記憶とか常識が切り離されただけの存在。確かに人格とは記憶の積み重ねではあるからな、その人格も別人格と言えば別人格だが、しかし元を辿ればヤツも俺さ」

「なるほど。それで……お前の能力のタイプは？」

「それは言えない。お前が言わないのに俺だけ手の内を明かすのはフェアじゃないだろ？」

ふ、馬鹿め。流れて話すとも思ったのか。

「ぐひ……それもそうだな。それほど馬鹿では無いって事だな。確かに、俺も言えない。ひひひヒヒウ。でも普段はお前は能力を閉じているんだよな？」

「ああ。俺は出来るだけ一般人相手にはこの力を使いたく無いからな」

「ふうん？ それでか……。この町に居たのに今までお前に気づかなかったわけだ」

「ああ、まあ、普段の俺は唯の人間だからな」

「ほおー、俺なんかは能力が常に開放しているからな。まあ能力を閉じれないと言った方が正しいかも知れんけどさ、でもそのおかげで常にやりたいことが出来るぜ」

「ほう」

「まあ、早い話が貴様はコントロール可能なようだな」

「ああ、そうだそして普段は能力を閉じている」

「へえー、そうなんか。それならアドバイスがあるぜ。出来るだけ能力は使わないほうが良い。俺達の犠牲で能力だけ獲得できるようになった技術を得た研究所は、そこから能力だけ獲得した出来そこないどもを作って、俺みみたいな実験体を始末して回っているらしい。当然お前も能力の使用時に自己の欲望に引きずられる面を僅かだが残しているのだから狩られる対象になるぞ」

「研究所……って、一体何のことだよ？」

「チクシヨウ、チクシヨウチクシヨウ！ 何で俺が刈られなきゃなんねえんだよ。なんもワリー事してねーってのによう！」

ダメだコイツ。人の話全然聞いてない。コイツ、ジャンキー……か？

「チクショーツ！ 狩られるなんて我慢なんねえ！ まあ確かにさ、俺は今まで何人も殺し犯してきたさ。だって気持ち良いんだからな。当然俺を捕まえようとしてきた警察のヤツラもな。だから人間社会全体から見たら俺は邪魔者だろうよ。しかしだ。しかしだよ。これは動物としてあるべきカタチなんだよ。食いたい時に食い、犯したいときに犯し、殺したいときに殺す。そして俺は獣だ。それをする資格がある。なのに何故それを止める権利がヤツラにある？」

「さあな、俺にはお前の事情なんてわからんさ。ただな、」

「ただ……なんだ？ 貴様も俺を邪魔するのか？ 俺を殺すのか？ ひひひひひ。そうだって言うなら俺だって抵抗するぞ。確かに純度は貴様の方が上だがそれだけで勝負が決まるわけでも無いからな」

「いや、今はそんな気分じゃない。ただ疑問なのは、何故俺に俺達を狙う物が居るのを教えたんだ？ お前は自分の欲望のままにだけ動くんだろ？ ならば俺に俺たちを狙う者が居る事を教える必要は無かったはずだ。なのに何故教えた？」

「ふ、フヒヒひひひひ、それか。そんなことか。それはな、昨日のお前に触発されただけさ。能力者だろうと人間の欲望は性欲だけじゃ無いんだろ。名台詞だなあ、感動しちまったようひゃひゃひゃひゃ！」

「は？ 昨日の俺？ だから俺は覚えていないんだが」

「ふひふふ、そうか」

まあ、いいか。

「それじゃあ俺は行くぞ？」

「お……待てよ。二つ言っておく事がある」

「なんだよ、手短に頼むぜ」

「一つ目は、俺達を追っているのは精神干渉できるタイプじゃないらしい。ただ単純に能力で肉体強化されているだけらしいぜ？ ただし俺が侵入しようにも精神へのプロテクトは掛かっているらしい

から俺の攻撃はまったく受け付けないだろうな。何しろ能力者には能力に対する免疫があるからな。俺じゃあ歯が立たん。一番会いたく無いタイプだぜ」

「そうか。で、あと一つは？」

「ひひひ。おう、それなんだけどな。昨日のお前との会話で能力者の、そして俺の欲望は性欲だけじゃない事はわかった。でもな、勿論性欲もあるんだよ。と言う訳で……」

「というわけで……？」

「愛し合おうぜ？」

「は？」

「セックスするんだよ。二人とも能力を開放してさ、愛し合いながらお互いの快感を増幅して伝え合うんだよ。ひ、ひひひ、最高だと思わないか……？」

ウゲッ、一瞬リアルに想像しちまったよ。なんてオゾマシイ。

「お……思わない。い、イヤだ！」

「そうかー？ んーそれは残念だなーくび」

大体俺はゲイじゃない。

「それじゃあ……俺は行くぞ、じゃ、じゃあな」

「オイ待てよ！……ってチツ、もうみあたらねえ。逃げ足の速いやツだぜ」

まったくあの子は気が利かないんだから。別に最悪他人と一緒に居るところ見つかったても適当に誤魔化しときゃ良いのよ。

そんな些細な問題よりも、朝に誰かと一緒に家を出るって……なんか懂れるじゃない？

私はそう言うのしてみたかったのに……。

まったく最上君はもう少し女心を勉強するべきよね。うんうん。

と、職員室を出てからそんな事ばかり考えていたら気がついたらもう闘技場の前に居た。

闘技場とは体育館に隣接されている畳張りになっている剣道部と空手部専用の闘技スペースだ。

空手部が一昨年廃部になってからは剣道部と、後は体育の授業で偶に使われるくらいなのだが、かなり広い。

そうして中を覗くと剣道部の朝練の最中だった。

ちょうど五人……か。本当にもう少しは欲しい所だ。

それに強いのが主将一人と言うのも困る。

私も学生時代に少しだけ剣道をやっていたのでわかるんだけど、このレベルの低さは酷い。

そのかわり主将の武田由里香さん^{たけだゆりか}だけはとても強い。なんていうかよく人間離れた動きをしている。きつとかなりの段持ちなんだろう。

おそらく彼女なら試合になっても勝ち抜きならば大体の相手に五人抜きできると思う。

でもそれじゃあ部の為にならないし、一人だけ勝つてもしょうがないので大会になどは出ていないのだけでも。

「こてめえええんッ！！！」

「一本!!」

と、ちょうど試合形式で練習していたところらしい。

勿論、武田さんの完勝だ。相手は手も足も出ていない。

「ふう、もうちょっと手応えが無いと練習にもならないではないか。情けないぞ」

「そ、そんなこと言われても、武田さん強すぎ……」

あ、部長の武田さんの叱咤が聞こえる。相変わらず良く通る綺麗な声よね。

この剣道部男女合同なのだが武田さん以外はみな男なのだ。しかし武田さんも今では珍しいポニーテールにしている美人なのだが少し性格と話し方が独特、と言うか男っぽい。何て言うか、質実剛健だ。

どうも古風な家で男の子が欲しかったらしいのだが生まれたのは武田さんだけだった。だからどうしても男っぽく育てられて……みたいな話をどこかで聞いた事がある。

でも美人だから部の開設当時は武田さん目当てで結構男の部員が入ったのだ。でもまあ、部員の男の子達が弱いのは武田さん目当てであるような人たちばかりだからなのだから。

まあ武田さん本人はその事に気づいて無いようだが。えてしてそんな物かもしれない。

「まあそう怒ることも無いでしょう?」

「あ、先生」

「たしかにみんなちよつと情けなさ過ぎよ。もうちよつと頑張りなさい。でも武田さんは確かに強すぎね。みんなが勝てないのはしょうがないわよ」

「しかし先生、彼らはあまりに腑抜け過ぎる！ 先生、もう少し手応えのありそうな人は居ないんですか？」

「う、手応えのありそうな人ねえ。そんな人は……」

って、なんでそこで最上君の顔が浮かぶのよー私は！

しかもなんか一割増しくらい良い男になって爽やかに微笑んでる所が。

「先生、誰か心当たりあるんですか？ ならば是非我が剣道部に！」

「あ、いや、そのね。彼はだめなのよ彼は！」

「彼……やはり誰か心当たりがあるんですね？」

うわあ、私墓穴った？

「い、いやね、あの子は帰宅部だって言ってたし……」

「何故ですか先生？ 帰宅部ならさらに都合良いじゃ無いですか。それに帰宅部のような暇人なら長く拘束できるし……」

拘束……剣道部として拘束。長く一緒に……。

「長く拘束……そうね、そうよね。何とかして誘って見るわ」

「そうです。その意気です先生！」

とその時誰かが闘技場に入ってきた。

「ゆりちゃん。もうすぐ予鈴なる時間だよ……って先生？」

「あら、片山さん？」

そこに居たのは今年から私のクラスになる片山光さんだった。
ああ。そう言えば普段から武田さんとは仲良さそうにしているわねこの二人。

「ふむ、すまないな光。すぐに行く準備をする」

「ううん、そんなに急いでは無いけど……。山園先生って剣道部の顧問だったんですか？」

「ええ、そうよ。それじゃあ私は行くから二人とも遅刻しないように気をつけるのよ」

「はい、先生」

「わかりました」

ふう、私もホームルームに遅れないように行かなきゃね。

3

そうして俺はやることも無いので町をうろつく。

あーくそー、暇だなー。先生にまあ言った手前学校に行くわけにもいかねーしなー。

誰か遊び相手とかいねーかなー。

でも勿論さっきの赤毛野郎と愛し合うのはイヤだけど。

「あれ……。零児じゃん。珍しい、サボりなんて」

む……。非常に失礼な聞き覚えのある声がしたような。

「って、おう、隆貴じゃん。失礼な。俺はサボりじゃねえよ」

「じゃあなんなんだよ。まあいいや。俺はサボりだし」

「またかよ」

こいつは松山隆貴。まつやまたかき

確か今年も俺と同じクラスになったヤツだがまあコイツは小学校の頃からの腐れ縁だしな。

長身の金髪で先生に目をつけられる格好こそしている絵に書いたようなチャラ男だが、少なくとも友人関係としては根っからの善人だ。

しかし生活態度は最悪だ。サボってばっかだし今もタバコ啜えているし。

「しかし、そうか。隆貴。お前今日もサボったのか」

「馬鹿じゃないの零児？ 出席は必要数だけすれば良いんだよ」

「あつ、でもお前が女と一緒に居ないなんて珍しいな。ええとお前の彼女……美香ちゃんだっけ？」

「馬鹿、それいつの話だよ。今の俺の彼女はキュートアンドラブリーな恭子ちゃんなの」

って、また彼女変ったのか。と言うか、コイツの場合はセフレと言っくんじやないだろうか。

「はあ……相変わらず早いんだな。だって美香ちゃんとデキタのは二ヶ月前だろ？」

「ふふふ……零児。恋愛はその瞬間さえ真剣だったら良いんだよ」

「はあ、相変わらず女の敵なんだな。よくホテル代持つよなお前」

「は？ アホじゃないの零児。女子高生なんて物はね、公園の繁みかトイレでいいんだよ」

こ、コイツは……。

「ふ、ふふふ。大丈夫だ。俺は何も聞いていない。何も聞いて無いから安心しろ」

「何がだよ。まあ何でも良いんだけどさ、お前金持ってる？」

「持ってはいるが……貸さんぞ？」

「いや、今回はそう言うことじゃないんだが」

そう言っつてヤツは自分の財布を出して中身を見る。

どうも顔色からいうとあまり入って無いようだ。

「よし！ 零児、ゲーセン行こうぜ！」

「っってお前何財布覗いてから言ってるんだよバカー貸さないぞ？

奢らないからな。っておい待てよ奢らないって言ってるだろうがオイ待てよちよつと馬鹿お前待てアホくあwse d r f t g y ふじこー
……」

ちゃーららーららーららーズンドコズンドコちゃーららー

「なあ隆貴？」

「なんだい零児きゅん？」

「なんで俺は昼間っから男二人で太鼓叩いてるんだ？」

しかも暴れン某將軍。

「いや、楽しいじゃんか太鼓の鉄人ああズンドコズンドコてえーい」
「いや……楽しいっちゃ楽しいけど。お前普段からこんなことやってんの？」

このダメ人間が。

「ふふふ……よくないよくないよくないああよう零児さんやあつ！！」

「は？」

「人生楽しめないと損するぜええッ！！！」

お前は楽しみすぎだっつーの。それにこれは……。

「俺の金だけだな」

「あ、ああああああ、そうだパンチ力。パンチ力はかろうぜあの「終わりの一步」のマシーンでさあ」

ふう。

「まあ、こう言う日もあっていいか。わかったよ。わかった。パンチ力は負けねえぞ？」

「おお、強気じゃないか最上君。ちなみにお前の金でな」

「わかってるって。まあそれくらいのは良いや。貸し一つな？」

はあ、まあ、少なくとも当初の目的通り暇は潰せてるしな。

「起立、礼」

そうしているうちに四時間目が終わった。

ふう、昨日最上君に助けられたお礼を特に出来なかったから今日こそしようと思ったのに……。

何故か彼は今日は休んでいた。

さらにそう言った校内の事情には詳しくなかったのだけど、山城君についての良く無い噂を昨日のことを相談したユリちゃん……つまり武田さんから聞いたので少し心配だ。

例えば最上君が山城君から復讐される可能性があるとか……。

あ、そう言えば四時間目はちょうど現国だったおかげで、今担任の山園先生が前に居る。

担任だし連絡とか受けて何か欠席の原因を知っているかも……。

と言う訳で先生が行っちゃう前に聞いて見ることにしよう。

「すみません先生」

「あら、片山さん？」

「はい。あの、最上君って今日なんで休みなんですか？」

「あら……彼に何か用なの？」

「はい。その……少しだけなんですけど用があつて」

「ふう、その用って言うの、人が居ない所に場所変えれば話してくれる？」

「え、それってどう言う……？」

「私は彼の欠席の原因は知っているわ」

「ほ、本当ですか？」

「ええ、でもそれに関係もあるかもしれないからアナタの彼への用

って言うのも話してくれる？」

「わ……わかりました」

と、突然先生は教科書とかの荷物を纏めて立ち上がった。

「それじゃ少し待っててね。鍵持ってくるから」

「へ……かぎ？」

鍵って、一体何処に……。

がちゅん……ギキイーンツ

そうして扉の開いた先は……町並みを一望でき海も見える素晴らしい景色だった。

「わぁ……凄く良い景色ですね。先生」

「そうでしょ？ 普段は閉められているけど先生なんだしね。良いでしょ？ これくらい」

「えへへ、そうですね」

そう。そこはこの学校の屋上だった。

たしか数年前に飛び降り自殺した子が居るって言う話でそれから閉めきられているらしい。

でも、なんでもそれから夜になると人の影が見えるとか……良くある七不思議と言うヤツだ。

ちなみにうちの学校にも四不思議くらいしか無いのに七不思議と言われている。

まあどこの学校にもあるよね。そういうのって。

「それで、最上君はなんで休んだんですか？」

「その前に、片山さんは、最上君に何か用なの？」

「あの、それは昨日少し……」

「昨日？」

そうして説明する。

「はい、始業式のあとに山城君に呼び出されて、それで私その、彼がそう言う人って知らなかったから行ったらなんかその……」

「その……？」

「え……っと裸になれとかその撮影だとか訳のわからない事言っていてそれで断ってた所に、最上君が通りかかって何事も無いように山城君を殴り倒して助けてくれたんです」

「へえ、あの山城君をね。強かったのね。彼」

「はい、卑怯ではあったんですけどスッゴイ強かったですよ。一瞬でやつつけちゃいましたから」

そう、体格差もあるのに、私もビックリした。

「へえ、少し意外ね。でもそこで山城君とかかわってたのね。だからあのあとあんな怪我して追われてたのね……」

って怪我……？

「先生！ 最上君が山城君になんかされてたんですか？」

「いや、怪我は逃げる途中にしたみたいだけど追われてたのは確か
ね」

「そんな、私のせい……」

「でも大丈夫よ彼なら。まったく片山さんのせいだなんて思わないから大丈夫。ほら、噂から言っても彼ってそう言うの気にしなさそうでしょ？」

勿論、それはそうだけど……。

「でも先生。彼怪我してたんでしょ」

「うん、でも今朝には治っていたから大した事無いわよ」

ん、今朝……？

「先生、今朝最上君に会ったんですか？」

「あ……う、うん、そのね、今朝ね……。あ……会ったわよ。それで怪我見せてもらったなら治ってたのよ。ホントよ？」

ん？ 何か先生は挙動不審だ……。なんでだろう？

「先生、何か隠してませんか？」

「な、ななににも隠して無いわよ？ それよりそれより。なんか今朝は今朝で肩に大怪我してたんだけどそれでも学校に来そうな勢いだったから止めたのよ」

「大怪我って……ッ！！！！ どんなですか……？」

「うん、なんか肩に穴が空いてたんだけど」

「穴？ なんか良く判らないけどそれって凄い怪我じゃないですか！ それで最上君は大丈夫なんですか！？」

「うん。そりゃあ大丈夫。ピンピンしてて今日も学校来ようとしてたくらいだったから私が急いで止めたのよ」

「ふう、それなら良いんですけど」

でも肩に穴って言う状態は……どう言うことなんだろう？

良く判らない。

と……その時。

先生はフェンスの方へ歩いて行った。

そしてしばらく黙ったまま立っていたのだが急に振りかえってこちらを見る。

自然とぶつかる視線。

海からの風に先生の長い髪がなびいている。

はあ、やっぱり先生は綺麗だなあ。やはり同じ女としても羨ましくもある。

もちろん私だって自分の容姿にある程度の自信は持っているし周りもそう言ってはくれている。

でも、それは必ずしも言って欲しい人からの言葉じゃない。

それに先生の魅力と言うのはいかにも大人の女って感じがする。その少し落ち着いた雰囲気……まだ子供である自分はやっぱりそういう物に憧れてしまう。

と

「ねえ片山さん？」

先生が話し掛けてきた。何故か少し寂しそうな顔をして。

「はい？」

「やっぱり片山さんはさ……最上君の事好きなの……？」

……って……？　今、何を？

「はい？」

「だってそんなに気にしてるじゃない。それとも嫌いなのか？」

「いや、そんなことは……」

「じゃあ好きなんですよ？」

「いや、その……」

こんなことを聞くなんて、突然どうしたんだろう。

いや、しかし、そもそも私は彼のことをどう思っているんだろう……？

視線がこちらを見る先生の真剣な眼差しと交錯する。

そうだね。なんとなく先生になら素自分の正直な気持ちを直に話してもよさそうな気がする……。

「私は……よく……わからないです。やっぱり昨日みたいなことになった時になんにも求めずに助けてくれたりしたし……でもその前から噂を聞いたり、その自然な態度を見るたびに、彼のことを他の人より……その……少しだけ意識をしているとは自分でも思います」

「ふうん、そうなんだ」

先生は相変わらず少し寂しそうだ。

そうして少しの間の後、先生は話し出した。

「あのね……片山さん」

「はい」

「実はね、私もね……」

キンコーンカーンコーン

先生の掠れかけた小さな言葉が海からの風とチャイムでかき消される。

「……もう予鈴鳴ったわね」

「え……あ……は、はい」

「それじゃあ遅刻しないように戻るのよ。うふふ、昼ご飯たべ損ねちゃったね……」

そう言うとき先生はわたしに出るように促した。

鍵を閉める先生を見ながら思う。

先生は結局私に何を言いたかったんだろうか……？

でも取り合えずお昼ご飯については三時間目の後に食べていたって事だけは秘密なんです。

4

「ふう、ああ、遊んだな零児？」

「ああ、俺の金だけだな……」

「良く無いなあ零児君。そんな細かいこと気にしてたら人生楽しめ無いぞ？」

む、細かい……。

「細かいこと……お前の中では1日でゲーセンに七千円使うのが細

かいことなんだ？」

「う……いや、お前暇そうだったじゃん。これは俺の慈善活動さ」

「ははははは、正しくは俺がお前にたかられたんだよ。しかもその冗談つまらないな、もし本気で言ってたら……俺キレちゃうよ？」

「………………。お、お前さあ偶にメッサ怖い顔するよな。あ、あ、あ、あまあ悪かったって……」

「ふう。まあ、良いだけどさ。貸しふたつな？」

「う……善処する」

「ああ、じゃあな。明日は学校こいよ？」

「あ、すまん。俺青春十八持ってるんだけど一枚残っててその期限が明日だから旅行してくる」

「はあ。また一人旅かよ。でも出席足りてるのか？」

「ああ、大丈夫だって。じゃあな」

「おう。またな」

ふう、隆貴の馬鹿はいっちまったか。また暇になっちゃったな。

さて、そろそろ夕方か……。

あ、そうだ、学校の屋上行って夕陽でも見るか。

今日は綺麗な夕暮れになりそうだし。そうだな。そうしよう。

幕間3 山園綾子SIDE

さてと、実力テストも大体出来てきたしそろそろ剣道部の様子でも見てこようかな。

普段はテスト一週間前から部活はないんだけど実力テストは成績

には入らないからテスト前の部活禁止もないんだよね。
と言うわけで職員室を出て闘技場に向かう。

そうして闘技場前に着いたのだが中から練習の掛け声は聞こえない。

あら？　もしかしてみんな来ないから休みになっちゃったのかしら？

まあやる気があるのが武田さんだけだから誰も来なければ流石に彼女も帰るだろう。

と思ったら何か中から話し声が聞こえる。

これは……武田さんと……片山さん？

「でも良いのユリちゃん？　私部外者なのにお茶なんかご馳走になつて」

「いいんだ光。気にすることはない。むしろ他の腑抜けに飲ませるよりは光に飲ませたほうがまだマシというものだ。大体うちの部員がいたらくさと言ったらもう……。そうだ。光も剣道部に入ったらどうだ？　運動神経も悪くは無いし、うちの部の男子たちよりは強いと思うのだが」

「え……えーっ？　そんなことないよ。私なんて全然。でも、そんなにひどいんだ」

「ああ、それはもう。来ても試合をニヤニヤして眺めているだけだ。たまに練習相手にさせても弱すぎて練習相手にすらならない。それに最初はまだある程度人数がいたのだがみな練習相手にすると泣き言を言っただけで辞めてったりして話にならん。まったくあの者達には本

当に剣道をやろうという心とがあるのだろうか？」

「う……。それについては、まあ、ユリちゃん美人だから。なんかそのことについてはみんなユリちゃん目当てだったんじゃない？」

私はそんな噂どこかで聞いたよ？」

「まさかそんな……。私みたいな男っぽい女なんかを見たがる男など居ないだろうに。私は光のように可愛らしくはないのだし……」

「そ、そんなことないよ。ユリちゃんは可愛いよ！」

「む……。そんなことはないと思う。あ、そんなことよりも先生が骨がある人を紹介してくれるとか言っていたから楽しみにしているんだ」

「あ、そうなんだ。それで他に誰も居ないのに闘技場で待ってるんだ」

「うん。先生が早く来てくれるといいのだが」

あらら。武田さんは私を待ってたんだ。

それじゃあ入らないわけにはいかないわね。

「ごめんなさい。待った？」

「「先生!？」」

「うふふふ、話が外にも聞こえてたわよ」

「そうですか……。あ、それでその骨のある生徒って？」

「あ、ごめんなさいね。彼は今日欠席なのよ」

と片山さんが不思議そうに聞いてきた。

「先生、その骨のありそうな人って誰ですか？」

「ふふ、片山さんが今日も話してくれたじゃない。彼よ」

「今日休んでて私が話したって言う……最上君ですか？」

「ええ、彼強かったんでしょ？」

と、武田さんが首をかしげている……。

「最上という……光から聞いたけど昨日あの山城から光を助けてくれたという……」

「ええ、その最上零児君よ」

「最上零児……そういえば聞いた事のある名前だったな。なんでも自分の正しいと思ったことは曲げない頑固者……みたいなことで校内では有名な人と言う話だったと思うが」

「違うわよゆりちゃん。それじゃあただの自己中心的な人じゃない。最上君が有名なのはその正しいと思うことが自分のためじゃなくて常に他人のたれを向いているって所でしょ？ で、なぜか人が何か困ってたり何か問題があったときには率先してそれを自分で解決しようとするんだって。で、その相手が誰であろうとあまり気にしないって所から知る人ぞ知るって感じで有名になってるのよ」

「ふうん。随分と奇特な男なんだな。確かにそういう男は最近見ないな……」

うんうん、そうよね。

「うふふ、彼、今年は私のクラスなのよね。彼なら少しは武田さんの相手もしてくれそうでしょ？ それにうちの部員よりは手ごたえがありそうじゃない」

「はい。それはそうですけど……」

と、なぜか武田さんは少し考え込む仕草をした。

「ん……どうしたの？ ゆりちゃん」

不審に思ったらしい片山さんが聞いている。

「いや、そういった男なら断られることはないような気もするけど……そのあからさまな善人の性格につけ込んだ善意に甘えるのは少しなんと言うか……」

「ふうん？ 武田さんて真面目なのね。でもいいのよ。そうすれば……」

そうすれば……どうだというのだろう。

もっと……彼と一緒に居られる……か……。

生徒の事情にまでかこつけて……嫌な女ね。私って。

そうしてしばらく三人で話しているとふと武田さんが窓の外を見てつぶやいた。

「あ……もう夕方になってるんだ。きれいな夕日………」

そう言う武田さんの目は本当に嬉しそうだった。そうね、彼女にも見せてあげたいわね。

「ねえ武田さん？」

「はい……？」

「夕日とか見るのとか好きなの？」

「あ、はい。実は昔から綺麗な景色とかは好きなんです。だから実は風景写真とかを撮るのも好きなんです」

「へえ、そんな趣味あったんだ」

と、何故か嬉しそうに片山さんが話す。

「えへへ、先生？ 実はユリちゃんキレイなものが大好きなんですけど、それだけじゃなくて可愛い物も大好きだから実はぬいぐるみとかもとっても好きなんですよ？」

「……ッ、光ッ!？」

と、なぜかとても武田さんは顔を赤くして慌てている。

「ん……？ どうかしたの？」

「いや……だって先生……私変じゃないですか」

「……え？ 何が？」

「だって……全然女の子っぽくないのにそういうものが好きって……」

ああ、そんなことを気にしてるのね。

「んー。確かに意外って言われれば意外だけど別に変じゃないと思うわよ。武田さんだって可愛いわよ？」

「そ、そそそんなことないですッ!!」

んー。どう武田さんは自分に少し自信がないみたいね。あんなに美人なのに……。

あ、そういえばそんなこと話そうとしてたんじゃないわね。

「それより武田さん、夕日とか見るの好きなんでしょ？」

「あ、はい、勿論です」

「ならとってもよく見える場所あるんだけど……見に行かない？」

「よく見える場所……?」

「ええ。すごいわよ?」

と……片山さんはいち早く気づいたらしい。

「あ、先生。もしかして昼間のアそこですか?」

「うふふ、そうよ。じゃあ鍵持って来るから待っててね?」

「へえ、屋上ですか。それは知らなかったですね」

そうして屋上へ行くために一度体育館に隣接されている闘技場から校舎に戻り階段を上る。

「ええ、鍵ないとは入れないからね」

「あ、ゆりちゃん、もうすぐ着くよ」

「そうか。確かに階段は結構上らなきゃいけなかったけど……ふふ、楽しみだな」

と……ついたわね。

「ふう、ここの扉ね、今鍵を開けるから……って、あれ?」

「どうしたんですか?」

「おかしいわね。鍵が開いてる……?」

「それは変ですね? 誰か予備の鍵で出たとか?」

「ん……? でもここの鍵は1つしかないわよ?」

と

「先生？取り合えずいつてみましょう」

そういつて片山さんはドアを開けた。

そこには、

紅い夕日に照らされた燃えるような街を見下ろすようにして立つ
見慣れたシェルエツトが1つ。

あれは……最上君？

5

ふう、やっぱり来て正解だったなあ。何回見てもこの景色はいい。

「ああ、やっぱり何度見ても綺麗だよなあ……」

と、思わずため息が漏れる。

すると……。

「ええ、そうね」

と相槌があった。

.....。

ってえええっ!?

急いで振り返る。

と、そこにいたのは……。

「今日は学校休みなさいって言ったわよねえ? 最上君?」

「てゲエッ!! 先生!？」

「ゲエって言うのは随分な挨拶ね」

ひいひいひいっ!!! 今一番会いたくない人に……!

「それより何やってるのよ最上君!! 傷は? 病院行ったの?」

「いや、それは……」

「まさか行ってないとは言わないわよね?」

「あははは、いやその……」

病院行かずにゲーセン行ってきましたなんて言えないよう。

「もういいわ、傷口見ればわかるから見せなさい!!!」

「ってひいい、先生何服脱がそうとしてるんですか?」

「そうですよ先生。いきなり最上君の服脱がそうとするなんて……」

はれ? また一つ声が増えた……って?

「片山さん、と……道着美女?」

そこにいたのは我がクラスの片山さんと……剣道着を着た知らない美女だった。

その道着美女はやや切れ長なツリ目が印象的な色白な綺麗な娘だった。

そしてポニーテールにしてある髪が目についた。ああ、いいよねポニーテールって。

最近あまり見ないから少し残念だけど、あのうなじの辺りとか俺好き。

ってそんなことを考えている場合じゃない!!

「ッて先生！ 脱がさないで、病院行ったから大丈夫ですって!!」
「本当？」

う……嘘をつくのは心苦しいが傷はもうほとんど塞がっているの
でまあいいか。

「ええ、もう大事無いですよ」

「ふう、もう最上君はいつも心配かけるから……」

「あはは、すみません」

「ん……まあ大事無かったんならもういいわよ」

はあ、ひと段落かな……？

と……そこで先生の目が鋭くなりこちらをジト目で見てきた。
嫌な予感。

こういう時は……戦線離脱！

ああ、我々は勇敢に戦ったさ。しかし逃げることも戦略の一つ。ってわけで……。

「そ、それじゃあボクかえろっかなー」

「待ちなさいっ！」

「ひい！」

なんか嫌な予感ビンゴっぽい。

「最上君、1つ聞きたいんだけど」

「は、はひ、なんでしょうか？」

「最上君はどうやってここに入ったのかなあ……？」

ギクッ！

「いやあ、実は鍵があい……」

「鍵が開いてるはずはないわよねえ。私が昼間入ったときに閉めてから私が鍵を管理してたし」

ギクギクッ！！

「そういえば、少し前にこの鍵が盗まれたことがあったのよね。しかも次の日に鍵は目立つ所に落ちていたのよ。ねえ、最上君。一日ってコピーを作るには十分な時間だと思わない？」

ギクギククッ！！！！

「は、いやあ、ボクわからないなー」

「じゃあどうやって最上君は入ったのかなあ？」

「そ、それは……」

「うふふ、可愛い最上君だし先生も鬼じゃないから条件次第じゃあ先生このまま帰ってもいいわよ？」

「な、何が望みですか……？」

「ふふふ、剣道部に入り……」

「それは断ります」

「なさ……って、何でなの？」

「そ……それは」

長時間の闘争心や戦闘は俺の能力が開いて欲望に引きずられやすくなるから……なんて言えないよなあやっぱり。

「いや、少し事情がありました」

「そう、残念ね。でも話だけでも聞いてくれない？ 彼女……」

そう言っ先生は剣道着ポニー美女のほうを向く。

「武田さんの話もし聞いて欲しいの」

へえ、武田さんって言うんだ。

「初めまして。武田由里香だ」

「あ、どうも初めまして。最上零児です」

「最上零児……話は光から聞いている。昨日は光を助けてくれてありがとう。礼を言う」

と、片山さんも出てきた。

「あ……その最上君？ 私も昨日ろくにお礼いえなかったけど……
ありがとうね。それになんか山城君に怪我させられたって……」

「あ、いや気にすんなって。これは俺がガラスの切れ端持って手え
切っただけだからさ」

「そうなの……？ でもありがとうねホントに。今度なんかお礼す
るから……」

「いや、別にそんなことを求めてた訳じゃねえしさ。良いって事よ」

「いや、最上零児、確かに純粋な善意だったのかもしれないけどこ
ちらもそのままじゃ気がすまない。取り合えず闘技場のほうに来て
本格的に話をしないか？ お茶菓子と暖かいお茶くらいなら出すぞ」

む、お茶菓子か。甘い物好きなんだよな俺。

それにそろそろ冷えてきて暖かいお茶は今の俺にとっては値千金
だし。

「ん……それは魅力的な提案だな。でもいいの？ 俺そんなこと言
われたら遠慮しないよ？」

「うん、そのために提案したんだ。こんな物では礼にもならないが
君にはぜひ来てくつろいでもらいたい」

「そうか。じゃあお邪魔しようかな」

6

そうして闘技場に來たら座布団を出される。

着いたとたん武田さんはどこかへ行ったので先生と片山さんと適
当に話しておく。

そうしてしばらく待っていたらお盆に急須やら湯飲みやら色々載せた武田さんが現れた。

「粗茶だけど……」

「おっ、うまそうじゃん。あ、その大福もしかしてお茶菓子？　ラッキー、俺大福好きなんだよね。大体の甘い物は好きだけど」

「ふふふ、変な男なんだな。甘い物が好きとは」

「いや、変か？　まあいいじゃん。男と女は違うところはあるけど個人の趣味趣向は自由であるべきだぜ？」

「ふふ、そうだな」

と、先生と片山さんは何かメモしている。

「ふうん、最上君は甘い物が好きなのね」

「最上君は甘党……っ」と

……………。

二人とも何メモしてるんだか……。

まあ、とにかくお茶とお菓子をいただく。

ぱくっ、ムシヤムシヤッと、それでいてゴックン。

「ふうーとけるー、うわー幸せーなんだかいのかなこんなVIP待遇してもらって。なんだか気分はとってもセレブ」

「ふふふ、お茶菓子とお茶の御代わりはまだまだあるぞ？　しかしそんなに大福をおいしそうに食べる人は始めてみたな」

「いや、そうか？ 美味そうに食うって美味しいモン食ったら普通はこうなるだろう？ それにしても和菓子に緑茶って合うよなー」
「ふふ、そうだな。君とは趣味が合いそうだ」
「そうか。あ、それよりさ、なんで俺を剣道部に入れたいんだ？」
「それは実は」

ここで、武田由里香による剣道部の事情の説明ターン！

「なるほど、そういう訳でか。部員が弱すぎてかくかくしかじかと……」

「かくかくしか……どういう意味だ？」

「いや、気にすんな。しかしそうかー。ふうん。それは確かに気の毒ではある。でもどうして俺に？」

「いや、昨日一撃で山城を倒したと聞いてな。それだけ強さと運動神経があるのなら剣道もある程度は出来るだろう？」

「いや、剣道は技だろ。経験がそのまま強さになるんじゃないのか？」

「いや、しかしセンスはやはり重要だと思う」

「ふーんそうか、で、ルールってさ、用は面と胴と小手にあたらないきゃいいんだろ？」

「う……まあ大雑把に言えばそうではある」

「へー、俺よくわかんないけど一試合やってみようかな」

「ホントか？」

「うん、ワリと楽しそうだし。あ、ただし1つだけ条件がある」
「なんだ？」

「俺防具なしでやりたい。怪我とかも心配ないし、それにそのほうが動きやすそうだ、何より防具つけるのもメンドイ……ってあれ？」

なぜか武田さんは急にうつむいてプルプルと震えだした。

「あのー武田さん？」

はてな？ 何かあったのか？ あ……おしっこ我慢してるのかな？
それにしてもまた突然だな。

「どうしましたー」

「……クッ」

おかしい、無言でプルプルしてて。ここは1つ聞いてみるか。

「どうしたん？ トイレか？ なら我慢は身体に悪いとおも……」

ブチ

「あれ、今ブチッて……？」

「それは私に対する侮辱と受け取っていいのだな最上零児ッ！！！」

ドッカーン！

「ひいっ！ って今のアンタからした音だったのか？ 健康にわる
そうだなあオイ！」

「それは私の攻撃なんか当たりはしないという自信か？」

「いやそんなこ……」

「それとも私の攻撃などあたっても怪我もしないくらいにヘナチヨ
コということか？」

「いや誰もそんなこと言って……」

「いいだろう。そのままですべて全身に剣道の恐ろしさを刻んでやる。さ
あ受け取れ」

というと竹刀を俺のほうに投げて自分でも構える。

いかん、この娘の剣道の腕を疑うように聞き取れかねない発言は地雷だったか！

「ただし、もし私に勝てなかったときはそのまま部員だからなッ！
！！

「ってうわー、最初の印象と違って無茶苦茶だアンターッ！！！」

そうして相手の第一撃。

相手も防具はしていない。

クッ、速いッ！

取り合えず相手の腕力は未知数なためバックステップでよける。

さらにせまりくる攻撃。見切って逆方向にジャンプ。

それで追い詰められた俺に向かって来る攻撃を地面に転がりながら反対側へ逃げる。

「クッ、逃げるに徹するか卑怯者！」

「バカッ、作戦だっつーの」

とは言ったもののそろそろ逃げてもらえんな。

という訳で次に来る面への攻撃を受けることにする。

速さ、見た感じの体重のかけてる雰囲気から行っても面胴などのコンビネーションではない。

だから渾身の力を持って受ける。

バンッ！！

お、重い……。

オカシイ、異常だ、この細腕からはどう計算してもこの重さは出ない。

重さに対抗するため能力の栓を微かに開き最適な力の使い方をロードして対抗する。

その瞬間……！

流れ込む意識。

なんだこれは？ 意識に反応する物体あり……凄く近い……誰かが能力を使っている？

しかし俺に進入しようとする物はない……。

そういえば……思い出す赤毛の言葉……。

「……………」

そこから能力だけ獲得した出来そこないどもを作り、俺みたいな実験体を始末して回っているらしい。

……………。

ただ単純に肉体強化されているだけらしいぜ？

……………」

ま……まさか彼女が？

そ、そんな馬鹿なッ！

そのとき俺の奥底から声が響いてきた。

「殺せよ。まだばれてはいないようだがそのうちにばれる。下手するとこの試合中に殺されるぜ。竹刀とはいえあの腕力なら人の一人くらい殺せるだろ。俺らも殺されるぜ？」

う……うるさあああいつ！！ 黙れ！

だまれ！

黙れ黙れ黙れ黙れええッ！！

とにかくさらに能力をつぎ込み竹刀を撥ね退ける。

「……………ッ！」

敵の息を呑む声が聞こえる。うるさい。余計な物を聞いている暇はない。

迫り来る攻撃、これは……？

相手を見ろ、筋肉の動きから次の動きを予測しろ。

読込終了

小手面のコンビネーション。

チイッ！ つまり小手を受けてたら面に入れられる。

能力で計算し導き出した最適な力の配分筋肉の行使を行っても間に合わない。

なんて速さだ。

いや……速さだけならおそらくまだ互角。

俺は基本は精神干渉型だが、ある「方法」を使うことで肉体も強化されるタイプと同格まで強化することが出来る。

しかし相手のほうが先手を取っている以上同じ速さでは間に合わない。

よって最適な軌道を読み込むも相手も長年の剣道の訓練からかほぼ同じだけ隙がない。

しかし、敵は剣道のセオリーどおりにしか動けないという弱点もある。

右手を離し……よしッ！

「な……柄で受けるだど!?!」

柄で敵の攻撃を受けそのまま無事面まで受ける。
が、相手はさらに攻撃を仕掛けてくる。

これは……読み込み終了、しまった胴はフェイントで面狙いか？
間に合わない……ならば……。

そのまま身体を捻り、そのままの動きでまわし蹴りを出し、敵の攻撃を避けつつ竹刀の付け根のほうを蹴る。

軌道がずれて避けられる。

そし、敵の隙が……出来た……ッ!!

この隙に竹刀を胴狙いで打ち込む、が敵も間に合う。

しかしそれはすでに計算済み。

その体勢が崩れた所が狙いだ。

相手は剣道家、今の体勢からどこかを撃ってもおそらく守られる。さらに言えば敵の握りは半端無い。竹刀では重さが足りない。

だから出来た敵の隙にそのまま一回転し重さを載せた回し蹴りを相手の竹刀めがけて入れる。

バシイッ

「な……ッ……!!」

そうして竹刀は彼女の手を離れ吹き飛んでいった。

これで、竹刀が地面に付くまでに敵に打ち込めば勝負はつ……ズッ!!

頭の中で……声が……。

「コロセよ。コロセ。今なら何の問題もなく殺せる。確かに叩いて殺すのは難しい。しかし竹刀は棒状だ。だから突けば簡単には折れない。喉でもいい。いや、違うか……目だ。そこを突けば簡単に竹刀は脳まで達し死に至る」

嫌だ、ダメだ、殺してハア……だまあえるの

「コロセよ、コロセ」

嫌だ。

「コロスニハ目だ。そう……予測によればその最強の結果は……」

そうして確かに脳に浮かぶ風景。

俺の竹刀が彼女の頭部を貫通し血と脳漿を撒き散らしながら死んでいく。

残った目も色を失い口からも血が吹き出す。

地面に倒れた彼女は片目がつぶれ血の海は次第に広がっていく。

そんな風景。

「う、ううううわああああああああああっ！！！！！」
「……………！」

「「最上君？」」

い……今の風景は……幻覚か……？

「う……オエエ……ごめ……うっぷ……は……吐くう……気持ち悪い……」

「ちょっと……大丈夫なの？」

「しっかりして！ 最上君！」

「……………」

いや、ちょっとこれ我慢できないかも。
あ、でも、ここで吐いちゃまずいよな。

そ、それよりもっ！

取り合えず武田さんを見る。

彼女は呆然とはしているがちゃんと生きている。

大丈夫だ。大丈夫。

でもホントに幻覚でよかった。

うん、俺は人を殺してなんかいない。よし。

「ねえ、本当に大丈夫……？」

「しっかり……ッ！」

二人が背中をさすってくれるが……無理っぽい。

「うぼう……あが……は……吐いてくる……」

「うん、一人で行ける？」

「あああああ。ダイジョブう……」

「じゃあ行ってきた……」

「ヴい」

うへえ、しまらねえなあ。カッコわりい。

とにかく、トイレヘダッシュだ……。

V S 剣姫（後書き）

はい、今回は長いです。

ひたすら長いです。そのくせ盛り上がりません。

なんていうか毎回山場的なものを一つは入れようと思っているのですが今回はなかなかストーリー的に盛り上がりなくて一章分が非常に長くなってしまいました。

そのため更新遅くなってすみません。

しかし毎回ドタバタやっているだけでは話は進まないのですこんな回もあるんです。

どうかご了承ください。

さらにこういうツツコミもあるかもしれませんね。

ラブが少ない。こんなの恋愛じゃないと。

むしろラブコメって書いてあったのに・・・看板に偽りアリじゃないか。

もっともです。

ああ、もっとラブを書こうぜ俺・・・。

あと、感想もらったの初めてだったので大変嬉しかったです。

読みにくい所があるという意見もとても参考になりました。

ありがとうございます。

次からはもう少し推敲に時間をかけて注意します。

これから忙しくなるのですが、出来るだけ更新も頑張りますんで読んでもらえると嬉しいです。

それでは長々とした蛇足の、こんな部分まで呼んでもらってありがとうございます。

ではまた。

女怪獣三体＋α 南海の死闘（前書き）

今回はややグロい表現あります。

でも最初にしか出てこない上に軽いので出来れば読んでもらいたいです。

女怪獣三体＋α 南海の死闘

1

ぐぼああ……ふう……。

もうずっとトイレで吐いているが吐き気はおさまらない。
さっきの目に浮かんだ光景が脳に焼き付いてはなれない。

確かに網膜に映し出され焼きついたその光景が。

人は肉に過ぎないのに、それが皮を着ているに過ぎないのに……。

なぜこんなに心があって、でも殺すと壊れる。ああ、それは、なんて。

壊れた物は帰ってこない死体骸骨火葬場へ入る遺骸戻ったときは
ただの骸骨喉仏などの仏を取り出しあとは頭蓋骨を割り蓋をするあ
あごばめ。

それは違う違う今回は。

彼女の美しい顔。

その顔面の目から入った竹刀は眼球をつぶし心である脳をも破壊
していく命を破壊しながら棒は後頭部を貫通し脳漿と血が撒き散
らされて、ぐぼうべ。

血が、広がって、広がって、まさかあれが俺の欲望……？

そうして吐き続ける。

何度も、何度も、あ、もう出る未消化物もない。

これは……胃液、か？

出血し血が混じっている。うばあ。

痛い、喉が。

喉……切れてる？

さらに限界を超えた肉体行使をしたからか、全身の筋肉が悲鳴を上げている。

これは俺の能力の欠点でもある。

俺の住んでた集落の中にも二種類の能力者がいた。

細かくは人それぞれだが大きく分けると肉体強化型と精神干渉型だ。
だ。

俺の家は代々精神干渉型の宗家だったから俺も当然精神干渉型だ。
肉体強化型は能力の行使することによってその間は純粹に肉体が強化される。

よって長時間人間離れた動きも出来るらしい。

しかし俺のような精神干渉型は本来身体能力は常人と同じままだ。

だから戦闘のときは相手の精神に侵入して相手を壊す、または操るか、あるいは相手がどう動くかを読みとると教わった。

つまり敵の行動の情報を^{ロード}読み込しそれに対する最適の方法を検索する戦闘方法がとるのだ。

しかし稀に強力な能力を持つ物は自分にも能力を侵入させることができる。

本来能力者には皆、能力に対する抵抗力がある。能力に対してのプロテクトがかかっているのだ。

それは自身の能力にも例外ではない。よって自分の能力の影響を自分が受けることは無い。

しかし強力な能力を持つ物はあえて自身のプロテクトを突破し自分の精神に自らの能力を侵入させることができる。

今回俺が使ってしまったのはこの方法で自分の精神に自分で干渉することによって、自分の脳のリミッターを解除し自分の肉体の能力を限界以上まで行使する方法だ。

よって肉体自体は強化されていないので長時間の行使は禁止だ。肉体の限界を超えているのだから最悪の場合肉体の強度がが持たずに空中分解するらしい。

親父の話によると曾爺さんはそれが原因で身体が崩れて死んだと言っ話だ。

いやあ、その死に方はホラーだね。ああイヤダいやだ。

と……。

別のこと考えたのが良かったのかやっとな吐き気が収まった。それにしてもさっきの幻覚はなんだったんだ？

あんなの初めてだぜ。

あんな嫌な、目から竹刀が入って……。

ってオエッ！　うわあああっ！！！！

また思い出したら吐き気が出てきた！
って言うか思い出したらダメだろ俺の馬鹿野郎ッ！！！！

そうして出る物もなくただただ唾液と胃液と血の混ざった液体を
吐き続ける。

痛い痛い痛いいた……早く収まれッ！！

止まれ、止まれ、止まれ止まれ止まれ止まれ止まれええッ！！！！
ならば、俺が……。

能力開放

幕間 1

武田由里香 S I D E

殺されると思った。

こちらの竹刀が飛ばされ無呆然として無防備になっていたあの瞬間。

初めて死の恐怖を感じた。あれが本物の殺気。

今の最上零児との戦闘を思い返し背筋に震えが走る。

しかし、戦いに夢中で私も能力を知らないうちに使ってしまった。

今の私攻撃は、本来は当たっただけで骨折はするという打撃だ。さらには防具もしていない。

当たっていたら大変なことになっただろう。

しかし私も迂闊だったが、あの一撃が並の人間に受け止められるわけではない。

しかし彼はそれを受け止めた。だけでは無く私の竹刀を吹き飛ばした。

さらにあの戦闘の途中から感じていたあの感覚。あの匂い。

夢中で戦っていたから確かではないがあの感覚は……。

となると考えられるのは……彼も能力者？

しかしそうなると辻褄が合わないことが出てくる。

研究者の話によると、欲望に正直になってしまう初期に精製された能力者。

その本来の能力者たちは皆能力を開放していない時点でもきわめて自己中心的らしい。

しかし彼の性格はその正反対な物だ。

さらに本来能力者は能力を開放すると欲望に忠実になり特に殺戮を好む面を持つ。

だから彼がもしも能力者ならあそこで間違いなく私は殺されていたしかし彼は私を殺さなかった。

さらに情報によると今この町にいる能力者はハッカータイプの若い赤毛の男だけらしい。

ならば、彼は、いったい……？

「ねえ、大丈夫ユリちゃん？」

あ、この声は……ひかり……か。

「あ、ああ。すまない。大丈夫だ」

「そう、良かった。でもユリちゃんこんなに強かったんだね。いつも一瞬で勝負がついてるところしか見たこと無いからわからなかったけどすごい動きしてたよ？」

「そ、そうかな？」

「うん、もうなんていうか速すぎてよくわからなかったもん」

「あ、まあ……」

拙い、本気を出しすぎて変に思われて無いだろうか。

「あと最上君凄かったね。ユリちゃんのあの動きについて来て最終的には勝っちゃうんだもん。最上君ってあんなに強かったんだあ」

「ああ。確かに彼は、強い」

そう、彼は強い。

最初のほう、彼は確かに能力を使ってなかった。にもかかわらず私の攻撃をよけ続けた。

私も伊達に何年も剣道をやってきたわけではない。並の人間なら一撃で倒せる自信もある。

しかしその私の攻撃をよけ続けた彼は間違いなくもとの運動神経もよく、さらにずば抜けた格闘センスを持っている。

特にあの瞬間の判断力。

剣道のセオリー通りにしか動けない自分では思いつかない動きだ。
ああ、勿論怖かったのだけど、こんなに全力で戦えて、そしてこんなに楽しかった試合は初めてだ。

もう一度……今度は気をつけて力を使わないようにするからまた彼と試合がしたい。

強くそう思う。

そうだ。こうなったら彼には何とかして剣道部に入ってもらわねば……。

と、そんなことを考えていたら最上零児が帰ってきた。

「うつぶ、ふう、すまん。迷惑かけたな……」

「最上君!」

「ちょっと、大丈夫なの?」

ふう。確かに顔色は悪いが、あれ、調子が悪いって、もしかしてチャンスか?

「ああ、実は昼飯食ったのが遅くてちょうど満腹だったんだって。それでいきなり動いたもんだからちょっと気持ち悪くなったただけだ
って」

またそんな下手な嘘を。

見るといい。明らかに先生も光も納得していない顔をしているではないか。

まあそんなことはどうでもいいのだが。

取り合えずもう一回勝負して何とか勝ってさっきの約束通り彼には剣道部に入ってもらわねば。

とりあえず……。

「最上零児！」

「ひいつ、あ、あんたか。って、おえ……」

そうして、突然私の顔を見ると何かを思い出したようにえずく最上零児。

「む、人の顔を見てオエツと来るとは随分いい度胸だな。そんなに私の顔は醜いか？」

「いや、そんなことは無い……ちよつと」

「ふん、まあいい。いや、良くはないが後で追及さしてもらう。取り合えずもう一試合だ。早いところ私が勝って君には剣道部員になつてもらおうからな？」

「って、あの賭けってまだ続いてたのか……つつか俺それいいって言っていないのに」

「ええい、男ならごちゃごちゃ言うんじゃない！ さあ竹刀を取れ！」

「ちよつと、マジ今日は堪忍してくれ。死んでしまう」

「泣き言を聴く耳は無い。さあ、行くぞっ！」

「いやあああつ！ ちよつと、マジ今日はもう。誰か……助けて」

と、光が間に入ってきた。

「ちよつとユリちゃん？ 最上君も調子悪そうなんだし、そんな状態でやったってフェアじゃないでしょ？」

「う、それはそうだが……。しかし」

「もう。あんまり聞き分けないと本当に怒るよ？」

「ぐ……。わかった。最上零児、今日の所は見逃してやる！」

「そ、そうか？ ああ、ありがとう片山さん。き、キミは命の恩人

だああっ！」

「へっ？ いや、いや、そそそんなことないよ？ 私こそ最上君にはほんとに感謝してるんだからね」

む、光の顔が赤いな。

「いや、本当にありがとう。君が居なければ俺は今日殺されていたかもしれない」

殺すって、誰がだ？

まったく、この男……私を一体なんだと。

「む……。失礼な物言いをするのだな。それより最上零児。明日は暇か？」

「うう、暇と言えば暇だけど、なぜにそげなこと聞かんね？」

「その言葉遣いの意味はわからないがまあいい。そうか。暇か。ならば明日も来てくれ。そうして明日こそは私が勝つからさっさと剣道部員になれ」

「はてな？ ……ってなんじゃそりゃーっ！ 来るわけねーだろこのアホ！ 俺はね、入らないの。勝ったんだし」

「そんなにつれない事を言うな。いいじゃないか」

そう言っつて最上零児にしか聞こえないように話するため彼に擦り寄りそのの耳元に口を寄せる。

「次からは生身で戦うから……」
「へ？」

と何か最上零児は意外そうな顔をしてこちらを見た。

「ッて何やってるのよユリちゃんッ!! そんなに接近しちゃダメーッ!!」

「ええ、先生命令よ! 今すぐ離れなさい!!」

む、何を勘違いして……って。

成程、う、よく見たら私、結構すごい格好だな。

最上零児の肩をつかんで顔を引き寄せて耳元に口を寄せていると言うのは……。

その、なんだ。少し恥ずかしい格好ではある。

そうして最上零児のほうを見ると……彼も顔を赤くして無言で私のほうを見ている。

なんだ、存外ウブなのだな。と、私も人のことは言えないらしい。

その以外に整った顔の潤んだ瞳を見ると……なんだか変な気分になる。

顔が火照っているのが判る。自分の鼓動音がうるさい。

なんだ? この感覚は……初めて、こんな。

「だから離れてよユリちゃん! ッてなに見詰め合ってるのよー!」

「先生の言うことが聞けないの武田さん!? 離れなさいって言うてるでしょう」

ハッ! いけない。ちゃんと二人に釈明しなくては……。

「いやそのコレはだな、ベベベべつに二人の邪魔をしようとかそういうのではないんだじょッ?」

いかん。噛んだ。

「だじょつって、めちゃくちゃでもって怪しいじゃないのよ。うわーん！ ユリちゃんが裏切ったよー！」

「そんな……まさか武田さんまで」

「いや、だから違うと言っているではないか。零児も何とか言ったらどうだ」

「は？ 今なんて？」

となぜか最上零児は意外そうな顔をした。

ブチッ！

「「零児ですってーッ！？」」

む……。

「ねえ、今なんて言ったのユリちゃん！？」

「ねえ、今なんて言ったの、武田さん！？」

「いや、零児も何とか言ったらどうだと……」

「「だから零児ですってーッ！？」」

はてな？ 何か間違えたか……？

「ああ。あれ、もしかして君は零児と言う名前じゃないのか？ なら「もがみれ・いじ」とか「もが・みれいじ」とかそんな……」

「いや、零児で合ってる。って言うかそんな名前いやだ」
「うん。そうだろう？ 何か変だったか？」

「だからなんで名前呼び捨てなのよ！？ 私だって……」
「そうよ。それにどうして武田さんは突然呼び捨てに……。せめて最上と呼べばいいじゃないのよ!？」

むう。良くわからないがそれは気に入らない。

「いや、私がそう呼ぶと決めた。ダメか零児？」
「いや、別に……」

「え、最上君いいとか言っちゃうの？ そんな……」
「裏切るのね。最上君……」

「うわー、もうなんなんだよコレ？ つつうか何？ 何この空気？
いやだ俺もうおうち帰るー！」

「待ってよ最上君！」
「待ちなさい最上君！」
「まて！ 零児！」

「だからなんでユリちゃん呼び捨てなのよー！」
「そうよ。取り消しなさい。わたしなんか立場的に名前で呼びにく
んだからね!？」

「うわあああっ！ つうかい加減にしろよ！ 俺の呼び方なんか
どうだっていいじゃないかよーッ!？」

「「「良くない!！」」」

「つてなんでだあッ!! つぴきゃー! ! ! ! ! ツ!!
いい
加減にしろーぽぺらペー! ! ! ! !」

「ツッパッ!

「あ……最上君が壊れた……」

ふ、ふふふふふ。楽しいな。初めてだ、こんな気持ち。

2

うがーふざけんばひゅー俺は帰るんじやアホー

「え……わる……」

今日は速く帰らないとマジで鏡子姉さんに殺されるかも知れねえ
じゃねえかようだからかえるの帰るの！。

「つと……だい……」

ああ帰るぜ外もう暗いじゃねえかよう。……らりほーらりほーらりほー。

ん……何か聞こえるな……。

「ねえ、悪かったから、ごめん」

と、ケンカは収まったのか。

「ふう、もう落ち着いたか？ 三人とも」

「ッてそれは最上君の話よ！ いい加減に落ち着いた？ まったくもう」

う、怒られちゃった。

「あ、ああ、流石に悪かった。ちょっとはっちゃけ過ぎたかな？」
「ああ、流石に引いたぞ」

グサツ。武田さんの精神攻撃。零児はガラスのハートに108のダメージを受けた。
零児は力つきた。

「じゃなくてっ、悪かったな。でもおまいら三人も悪いんだからな？」

「おまいら？ まあいい。確かに少し大人気なかった」
「うん。ちよっとね。ゴメンね最上君？」

「ふう。確かに教師ともあろう私が……とりみだしたわ。ごめんなさい」

よし。三人とも反省してくれたな。

「ってもう外真っ暗じゃねえか。帰ろうぜ」

「そうね。あ、最上君？ 途中まで一緒に帰りましょ？」

「あ……わたしも、いいかな？」

「光が行くなら私もだ」

「よし、じゃあみんなて帰ろうぜ」

3

と、言うわけで下校タイム！
そうして皆で闘技場の鍵を閉めて外に出る。

日はすでに沈みあたりはすでに真っ暗になっている。空気が冷たい。

春とは言え流石に流石に少し冷えるな。

そうして校門の所に来たときに謎の人影が見えた。
あれは……よくは見えないが二人の男女か？

同年代くらいと思われる女の子とそれより少し小さい男の子。
見た感じの年齢からいくと……姉弟か？

にして二人ともやけに美形だな。

「あつ、姉ちゃん。あの人じゃない？」

「ん、そう……かな」

ん？ 何か話しているな。

と、突然その二人はこちらに向かって走ってきた。

「はあ、はあ。やっぱこの人だよ姉ちゃん」

「そ、そうね。その、昨日は本当にありがとうございました」

はてな？ 誰に言ってるんだろう。俺こんな二人は知らないし。
そういうわけで後ろを振り返る。

当然誰もいなく校舎が聳え立っているだけだ。

「あれ、もしかして俺？」

「もしかしくなくても零児だ。視線を追えばわかるだろう？」

う、相変わらず武田さんは突っ込み厳しい。

「え、でも俺こんな人たち知らんよ？」

「「へ？」」

「いや、俺と会った事あるのあんたら？」

「え、なにいつてるんだよ？」

「そんな、昨日は……」

はてな？ 昨日はなんだ？

「もーがーみーくーん？ 昨日は何してたのかなー？」

「はっ、先生。だから覚えていないんですって！」

「じゃあこの人たちはなんなのよ！」

「いや、取り合えず落ち着いて……それ本当に俺なの？ つつうか
その俺っぽい人は何してたの？」

「え、その私……実は、昨日」

「いや、姉ちゃんの口からは言いにくいだろ？ 俺が話すよ。実は
昨日の昼間俺と姉ちゃんが町を歩いてたらいきなり背の高い金髪の
ヤンキーがいちゃもんつけてきて、それでそいつの仲間たちに路地

裏に連れ込まれたあと変なバーの一室に監禁されてたんだ。そのときの奴は……なんか酔っ払ってたのか薬でもやってたのか変な感じだった。で、そのまま夜中になってそいつらがはいってきて二人とも襲われそうになったんだ」

「へ？ 二人共って……弟君。君のほうもか？」

「う、そ、そうなんだよ。で、もうどうしようもないってなった時にいきなり貴方がドアを蹴破って入ってきたんですよ」

「へ？ そうなの？」

「そうなんです！ それで相手は二人いて二人ともナイフ持ってたのに、貴方は肩を刺されながらも一瞬でやつつけちゃったんですよ！ ヒーローみたいに強かったですよ！」

と……先生が突然会話に入ってきた。

「ッ……！ ねえキミ？ その刺されてた肩って左肩じゃなかった？」

「え、ええ。確かそうだったと思います」

「やっぱり。最上君。キミの左肩の傷はそのときのなんじゃない？」

「へ……うーん、そうかもしれないですけど、覚えてないので判らないですね」

と、弟君が不審そうに話してきた。

「本当に覚えていないんですか。あ、でも本当に感謝してるんですよ。あと、コレ忘れ物です」

そういつて弟君がポケットから出したものを受け取る。

「ん、コレは、生徒手帳？ 2年B組 もがみ、れいじ。本当だ、俺のだ」

「あ、やっぱりそうでしょ？」

「うーむ。まあそれじゃあ俺なんだろうな。まあ夜中だし寝ぼけたのかな」

と、取り合えずごまかす。

となると昨日意識が無い間は「俺」がそんなことしてたのか。

周りは納得してなさそうだったが特別に追求する動きもなさそうな感じだ。

と……。

「あ、あの……」

突然今度は姉のほうが生を掛けてきた。

「はい？」

「あの、コレなんですけど……」

そういつて姉はその綺麗な顔を真っ赤に染めて、持っていた袋から綺麗なリボンのついた箱を取り出した。

「あの、良かったら食べてください。本当にお礼にもならないものですけど」

「あ、それ今日姉ちゃんが焼いたクッキーです」

む、中身はクッキーか。甘い物好きの俺としては嬉しいが……。

「ううむ。でもホントに俺がもらっちゃっていいの？」

「はい。最上さんに食べてもらおうと思って焼いたので……」

うう、その言葉は正直来る物がある。

と言うかこの顔でこんな風にこんな事頼まれたら断れる奴はいないだろフツ―？

「あ、ああ。大切に食べさせてもらうよ。ありがとう」

「いやそんなありがとうだなんて……受け取ってもらえて嬉しいですっ」

「へへっ、よかったな姉ちゃん」

と、その弟君の声でお姉さんのほうは更に顔を赤くしてうつむいてしまった。

うんうん、こういう反応って可愛いよねえ。

ジーッ。

う……………。

なぜかおもむろに背中に突き刺さる視線×3。

振り向きたくない……が振り向かないわけにはいかないだろうな。

そうして振り向くとジト目の美女三人。

ええい、もうなんだつーのさ！

「あのー、なんでしょうかー？」

「そうやって理由なしに人を助けられるのは素晴らしい事だっと思うけど……最上君ってそうやって助けたあとの女の子の気持ちには

疎いよね」

「そうね、あー私も馬鹿な女だなー」

「そうやってあちこちで女性を喰い物にしているんだろう。鬼畜だったのだな零児は。新月の夜は背中に注意した方がいいぞ。刺されかねないからな」

「おいおい、三人そろって何言ってるか訳わかんねえぞ。特に最後の一人。誤解を招きそうなことを言うのはやめなさいっていうかやめて」

つつうかさ、このノリ疲れるって。

「あ、あの」

ほへ、ああ、お姉さんのほうか。

「それで、お礼がコレだけって言うのも、その……」

「あ、そんなん気にしないでいいって。コレだけでも十分嬉しいから」

そういつてクッキーの入った箱を持ち上げる

と言うか覚えていない時のことだから本来報酬があるって言うだけで分不相応なんだがな。

「いえっ、それだけではあんまりなんで……出来れば明日にでも私たちの家に招待したいんですけど」

「はあ、それはよろ……」

「ダメだ！」

「ダメです！」

「ダメよ！」

「こんで……って何でチミたち返事してるんだよ！」

「忘れたのか零児？ 明日は一緒に仲良く剣道の練習をする約束してただろ？」

「いや、してない。パーフェクトにしてないぞそんなモン？」

「いや、したんだ。零児は馬鹿だから忘れただけだ」

「嘘付けー！」

と……なにか片山さんがぶつぶつ言っている。

「そんな……家が上がって……お礼で出されて飲んだお酒が回って……寝室に運んだとたん最上君の野性が目覚めて……」

はてな？ 何を言っているんだろう。

「そんな！ いきなりそんなに自宅にあっがって親公認でその……なんて、いくらなんでも早いと思うよ最上君！！」

「いや片山さん、何妄想しているのか知らんがその推測は激しく間違っているぞ！」

「そうよダメよ。ただでさえ実力テスト近いのに……そんな不純異性交遊なんて先生絶対に許さないんだからねーッ！！」

「いや、先生も前提から間違ってますから」

なんだこのポケ軍団は。

って言うかツツコミ疲れた。

とその時。

ピッピッピッ！

響き渡るアラーム音。

む、この何の変哲も無い着信音は……俺のだ。
と言うわけが出る。

ピッ！

「うぎゃああああああああっ！零児早く……早く帰ってきてくれええっ！ お前の姉ちゃんに……このままでは鏡子さんに殺されてしまう……プグオワッ！！」

なんじゃこの電話？

「この声は……隆貴か。おい、一応義理で言っておいてやる。大丈夫か？」

と携帯が落ちた音がする。どうやら姉さんにかわったようだ。

「ふふふふ、隆貴の命は預かったわよ。無事に帰して欲しかったら早く家に帰って着なさい。そうねー、タイムリミットは10秒後ねー」

いや、それ無理だから。

「それじゃあお姉ちゃん待ってるからねー」

「ぴ……ぴぎゃあああああああッ!!」

ピッ。

取り合えず、隆貴の犠牲はありがたく受け取っておくか。

そう、我々は勇敢に戦ったさ。

取り合えず携帯に向けて……合掌。

さて、そろそろ十秒経ったな。隆貴が死んでるころだな。

我々のまあ大して愛してはいなかったが一応友人だった松山隆貴は死んだ。何故だ？

馬鹿だからさ。

うん。馬鹿じゃあしょうがないね。

と、今まで騒いでた面子のほうを振り返る。

皆呆然としている。あ、音漏れてたのか。

ちよっと恥ずかしい。

でもこれは……丁度いいチャンスだな。

「と言うわけで皆さん。私は親友を見殺しに出来ないので帰ります。では、あでいおーっす!」

と言うわけでタッタカター!

さり気なく、情に厚く見せかけて最上零児はクールに去るので

あつた！

「逃げたな」

「逃げたわね」

「うん、逃げたね」

あれ？ バレてる？

女怪獣三体＋α 南海の死闘（後書き）

どうもS i k oです。

今回は出来るだけ早く更新することを心がけました。

何しろ前回は時間がかかってしまったので。

しかし流石に疲れました。

次はもう少し時間が欲しいです。

何か感想希望苦情批判あれば言ってもらいたいです。

凄く嬉しいのです。

では忙しいですが次も頑張りますので今後ともよろしくお願いします。

ではまた。

夜の喧騒（前書き）

今回も汚かったりなんだかももう大人向け表現多数。

注意。

夜の喧騒

1

そうしてたっぷり時間をかけて家に帰る。

だってさ、怖い事はできるだけ後にするもんだろ。ふつー。

はあ、さっきあんな電話があつたのが気になる。つつうかさー、何で俺の家に姉さんだけじゃなくて隆貴もいるわけ？
まあ大体想像つくのだけれど。

そうして自分のアパートの二階の部屋に行きドアを開ける。

「ただいまー」

「遅いんじゃないこのボケー！」

と、なぜかコブシが飛んできた。

おつかしいなあ……。何で自分の部屋に入った瞬間にコブシがとん……って！

ガッシ、ポカ！

「ぎゃふん！」

そうして、俺は何の反応も出来ずに見事に殴られるのであった。
マル。

って殴られた……？ 痛った。

そうして突然殴られたわけだからその反動で廊下まで飛ばされる。ハッ、何事！？ ……とアパートの廊下で倒れながら考える。

と、その犯人が出てきた。

「オイオイ零児君よう？ ギャフンとはまた古いやられ声だなあ？」

「ってオイ隆貴かよ。いきなり殴るなんて何考えてるんだよ！」

「うるせー！ お前が遅いからって機嫌が悪くなった鏡子さんにずっとプロレス技の練習代にさせられてたんだぞ！ ソノ痛みに比べれば俺のパンチなんてうんこみたいなモンだわ！！」

う、まあそんなことだとは思ってたぜ。

「ふう、姉さん相変わらずだな。まあそれは生贄ご苦労さん。って言うかもう姉さんいい年なんだし。いい加減酔っ払ったときに人にプロレス技かけるのやめなよ」

と、ねえさんは……ふう、もう顔も真っ赤だし服は乱れてるし、かなり飲んだみたいだな。

と……姉さんは酒を呑みながら面白くなさそうに言う。

「いいじゃないよう？ お姉ちゃん空手家なんだし最近忙しくて道場いけないから体鈍っちゃって」

いや、空手にプロレス技関係ないし。

「そんなことよりい、早くお姉ちゃんの相手をしなさいよう。まっ

たく零児ったら偶にしかうちに来ないんだもん」

「ははは……それは、ゴメン」

「もうう。お姉ちゃんは悲しいわよう……けろっぴ」

けろっぴ？

「姉さん。もしかして、すごく酔ってる？」

「ううん、酔ってなんか……けろっぴ……いないわよう」

「じゃあそのケロッピって言う妙なしゃっくりはなんなんだよ？」

「こ……こ……れ……けろっぴ……は……あれよ。蛙よ……かえるのケロッピ……よ」

はてな？ 何がなにやら。ケロケ○ケロッピのことか？ 俺アレ

割と好き。かわいいじゃん。

最近はある見ない訳だが。と言うか今の若い人知らないかも知れん。たーばー並みのレアさかも。

と、見るとすでにビールの空き缶やらチューハイの空き缶やら……げっ、ジンの空き瓶まである。

いったいどれだけ飲んだんだ姉さんは。

あーあ、それに床には裂きイカやらチーカマやらとにかくよくわからんつまみ類が散らかってて。

まったく、片付けるの俺なのに。

ここでぐでんぐでんになってるのは最上鏡子。

一応立場的には俺の姉さんだが、この町にいる最上家の本当の娘

なので、立場的には、イトコ……と言うことになっているのか？

でも俺がこの町に着てからは俺の姉さんと言うことで面倒を見てもらって……いや、俺が面倒を見ていた。

俺が高校に入ってからはその家を出て今いるアパートで一人暮らしをはじめたわけなんだが。

こうしてたまに襲撃してくるのである。まあ嬉しくないと言えば嘘になるが……。

姉さんもなあ、見た目は悪くない……と言うか良いのに、こんなことしていないでちゃんとすればモテるだろうになあ。

でも、俺の少年時代は姉さんのこの性格に救われてきたのも事実。姉さんのおかげで俺はこの町の最上家に来てから、一応大きく道を踏み外すことなく歩んで来れたんだから。

と、隆貴が歩いてきた。

「まあいいじゃねえか零児。俺の痛みはさっきの一発で俺の気は済んだし、取り合えず飲もうぜ？」

そういつて隆貴はウイスキーを瓶からラッパ飲みしている。アホか？

「あのなあ隆貴。俺らまだ未成年……」

「いいいいじゃねえかいいいじゃねえか。つて言うか飲まないとやってられねえよ。大体だな、俺が恭子ちゃんとデートしてた所にいきなり鏡子さんが来て俺の襟首掴んで拉致されちゃったんだし。はあ、恭子ちゃん怒ってるかなー、まあいいや、あんな女。なんかさ、前エッチした時に感じたんだけどオッパイでかいけど偽者っぽかったもん」

「あれ？ お前まえ美香ちゃんと付き合ってたときもそんなこと言

つてたよなあ？」

「ああ、美香も偽者っぽかったな。ああ、俺の理想のオッパイは何処に……」

「知るかよ、このオッパイ星人め」

つつうかなんでコイツといると女の話になるんだろうな。

と、隆貴が思い出したように話し出した。

「あ……そういえば前付き合ってた美香って今付き合ってる恭子の妹らしいぜ。でもホントは妹じゃないってうわさも。でも二人とも苗字は加藤だったな。加藤姉妹だなうひゃひゃひゃひゃひゃ！」
「そんな情報要らんわ。ふう。言っちゃ何だがあの女の何処がいい？ お前には悪いが俺にはお前の女の趣味わからん」

「俺も」

「お前もかよ！」

「うい。俺わかったんだよ。オッパイって大きさじゃないよな」

「はあ、俺は大きさどうでもいいや……」

「なに？ おっぱいの大きさがどうでもイイだ！？ それは男として生きてる値打ちが無いぞ？」

「いや、お前が今どうでもいいって……」

「大きさはどうでもいい……しかし大きさも重要なんだよ……けび……」

はてな？ 何言ってるのか良くわからん。コレだから酔っ払いとは、見ると奴の足もとにはウイスキーの瓶が空になって落ちている。

これ……さっきまで結構入ってた奴だよな……。

「お前さ、呑みすぎ。体壊すぞ？」

「うぴ？　なにが……おっぱいが？」

はあ、もう泥酔か。まあこんだけ飲めばなあ。

「もうオッパイオッパイうるさいなあ。だから酔っ払いは……」

「うるせいなあ零児。大体お前がおっぱいのよさをわかってないから。いいか？　よくきけ。おっぱいとはなあ……」

「おっぱいとは……？」

「愛だっ！」

はあ。なんのこっちゃ。

と、一人で飲んでいた姉さんがこっちに来了。

ふう。この人は弱いのに好きだからなあ。

大体最上家の遺伝子は代々アルコールに弱いのだ。

まあ、姉さんは最上家以外の血も入っているから少しは大丈夫なんだけど。

「もう隆貴い。零児に変なこと吹き込まないでよう。零児は隆貴みtainなエロエロさんとは違うんだからあ」

「まあ鏡子さんは自分はおっぱい小さいか……」

ゴキン！

ん……今の音……ってなんだ。姉さんが空き瓶で隆貴を殴った音か。

って、瓶？

「ぴぎゃあー！ 痛いよう殺されるう」

「煩いわねえ。瓶で頭殴ったくらいじゃあ死なないわよアンタは」

いや死ぬだろ。

「ホントのこと言っただけな……ってひいいいッ！ もう言いま
せんごめんなさいごめんなさいッ！！」

「ふう、余計なこと言わなきゃいいのよう。……って。それより聞
いて……けろっぴ……よう隆貴。零児がね……零児がね……汚され
ちゃったよう。なんか女教師に逆レイプされたんだって」
「……って何言っちゃってますかー姉さーん？」

って朝のあの電話のことかよ。にしても逆レイプで。
ただキスされただけだっつーの。

「そうか、零児にもついに春が来たか……お兄さんは嬉しいぞ！」
「いや、俺こんなに馬鹿で出来の悪い兄を持った覚えは無いから」
「なにぼー？ いふか……。けび。にしても零児。女教師とは……
お前が熟女好きだったとはな。しかしお前がいくらマニアックでも
友達でいてやるから安心しろ」

「バツ……お前っ！」

と、間に入ってくる姉さん。

「それが聞いてよう隆貴。その女教師まだ……けろっぴ……23歳
だって言うのよう」

「女教師で……二十三歳……ま……まさか……！」

ギク。そういえば一応コイツは俺と同じクラスだし。

「お、おおお前が襲った相手って……山園先生なのか!?! けぴ」
「って襲ったってなんじゃそりゃー! 逆レイプより酷くなってる
じゃねえかよ! 俺はただ先生にキスされただけ……」

ってハッ! マズツた!

「って山園先生とキスだとー! き……貴様ー! お……お……
俺の女にー!」

「は? お前先生と付き合ってたの?」

「そんなわけねーだろ馬鹿野郎! でも俺の幸せ家族計画によると
一年後には俺の愛人になっていたはずなのに!」

「はあ。愛人って……恋人ですらねえのかよ。つつうかお前が言う
と冗談に聞こえん」

「フハハハハー当たり前だ。本気で言っているからな! それに
してもくっそー羨ましい奴め! 女の敵めえ!」

「お前が言うな。って言うかお前に言われるというのは何かとても
理不尽な物を感じるぞ?」

「くそう。お前に先生を取られるとは……」

「いやね、だからさ、別にそういうわけじゃ……」

と姉さんが抱きついてきた。

「うるさいわよ零児! けろっぴ。言い訳は聞かないわ。とにかく
さっさとお姉ちゃんのお酒を呑みなさい!」

「いや、だから俺まだ未成年……」

「キーツ! 女教師のキスは受けてお姉ちゃんのお酒は呑めないとい
うの! そんなの許さないわよーこのムツツリ変態!」

「ムツツリって……だから俺未成年だし、大体俺酒のめない……」

「いいから呑みなさい!」

そういうと姉さんは自分のもっているジンのビンをラッパ飲みして俺に顔を近づけて来た。

こ、この展開はっ……まさかっ！

「やっ……やめて姉さん、つつうかヤバイって。お、襲われる、奪われるう！ 助けて隆貴！」

「ふうむ。近親相姦のキスシーンか。えーっと、ビデオビデオ。け
び」

「びびがらばねべちゃばさげばびださび（いいからおねえちゃん
のさけをのみなさい）」

「いや姉さん。口に酒入ったまんま喋るなって」

とりあえず逃げようとするも姉さんにがっちりホールドされてて逃げられない。

と口に姉さんの口が触れて何かが流しこめれていく。

「ん……んんん……ッ……！！！！」

く……ジンはきついって……俺酒弱いのに……。

しかし止まるわけもなく無理やり押し込まれた酒は食道を通り胃に流し込まれていく。

あ……熱い。それにさらに……意識が……はふうん。

ボタン。

何かが倒れる音がした。

あ……俺の体か。

「あー零児が倒れたーおきなさーい零児。けろっぴ」

いや……無理言うなよ。

「起きないと襲っちゃうぞー。わーい！」
「や……やめ……」

そこで俺の意識は途絶えた。

そうして意識が途絶える前に最後に俺の目に映ったものは俺の服に手を伸ばそうとする姉さんと、嬉しそうに何故か持っているビデオカメラを回している隆貴の姿だった。

2

らっせらーらっせらー悪いごはイネがー！

いかしてええええひいいいん……。

もっと……もっと……いい……いいわ！

まっつりーだまっつりだーぴっぴっぴー。

あ……すごっ……私もうダメ……。

そう、そう、そうよそうよーーイク……イク……イクわ！

こんな快感初めて……赤毛さん……もつと……壊して……壊すくらいに……！

「だあああああつ！！　うるせええ！！」

そうして目が覚める。頭の中で声がする。これは……強い感情。快感、か？

感情の発信源は遠い。なのに俺の意識に引っかかるとは、相当強い快感だな。

コレだけ強い快感となると、セックスかドラッグ。あるいは……。とにかくそうして身体にかけられていた毛布をはがし起きる。

暗い室内。能力は開かれている俺に見えない物はない。

床は散らかっていて俺以外に「知らない」美女と「知らない」長身の長髪金髪男が雑魚寝している。

はあ、何があったんだ？

まあいい。いい女だから犯してもいいが、どうも俺はこの女に対してそんな気にならない。

もしかすると、と言うか恐らく「俺」が大事に思っている人なのだろう。

俺は俺の欲望にだけ従う。だから俺は「俺」の悲しむことはしな

い。

らっせらーらっせらー逝きたい奴はイかしてやるぜーらっせらー。

赤毛さん……わたし……わたしも……ああっ……いい……。

こんなの……あはぁん……。

相変わらず頭の中では強烈な感情が聞こえる………というか「解」
かる。

ふう、寝るにしろなんにしろ煩いな。コレが黙らないことには寝
るに寝れんだろう。

とにかく発信源に行こう。これは……耳ヶ崎の方か。

しかし体が重い。何か毒が入っているような、これは……アルコ
ールか？

とにかく体のアルコール分解作用を理解し……開放。

そうして自分の脳にも不調を伝えないようにコントロールする。

調整終了。

ふう、取り合えずしんどいのは直った。

とにかく窓を開ける。二階か。問題なし。

そうして窓から飛び降り着地する。耳ヶ埼までなら今の俺の脚な
ら二分って所だな。

夜の道を走る。うん、調子はまあまあ。

そうして耳ヶ埤に到着。

感情の発信源は……この店か。

その店は良くわからないがバーのようになっている所で、店は地下へと続く階段の先にあるらしい。

そうして階段を降り店に入る。

そうして入った店の中は……まさに酒池肉林だった。

薄暗い照明に照らし出された汚い店のか、誰もが正気を失った目をして快楽に身を浸している。

あるものは人目も気にせず交尾にふけりあるものは強そうな酒の瓶を一气飲みして。

しかしその中でも異様なのが店の奥。人が群がっている。

俺にはプロテクトがかかっているから影響は無いがそこから強い快楽信号が出ている。

それを受けた人間共は皆よがり、ある女ははは白目を向いて倒れて失神し、ある男は泡を吹き痙攣しながらもその快楽にすぎり、さらにある女はただだらしなく唾液を垂らし失禁しながらもその快楽の信号を発信している「電波塔」の足にしがみついている。

そうしてその電波塔役割を果たしているのは……若い赤毛の男だった。

あれ。コイツは確か……。

「らっせらーらっせらー逝きたい奴はイかして……って。グヒ。や

つと来たか。くぴひひ」

「お前は、昨日合ったか。にしても俺が来ることが解かっていたのか」

「当たり前だぜ。それだけ強い能力を撒き散らしながら近づいてく
りゃあ赤子でも判るぜ。今は能力全開って所か……相変わらず凄え
純度だなあ。見てるだけでイきそう……ウッ！」

「そうか。それはいいが、何をしている？」

「いやなに、ここにいる奴らが気持ちよくなりたいてって考えて酒呑
んでたからな……俺が快感を出すのを手伝ってやったらこの有様だ
ぜ。くぴひひひひ。どうした？」

「いやなに。コイツらはこの後どうなるんだ？」

「知らねえよそんなこと。まあ脳のリミッターは軽く超えた快樂容
量を送り込んでやったから、回線が焼ききれて廃人くらいにはなる
かもな。くひひ。どうした？ また止めるのか？」

「いんや。こいつらがどうなるうが俺の知ったこっちゃ無いさ。好
きにしろ。大体コイツらは好きでやってるんだ。流されるのも何す
るのも自己責任だ。大体快樂などの物をとったときの罪はその人間
の罪はその快樂により齎される身体および精神の損傷以上であって
はいけないんだぜ？」

「うへへ？ そうか？ 意味わからん。じゃあ何しにきたんだ？」

「いや、貴様のせいで煩くて寝れなかった。それで「俺」の意識が
落ちてたから俺が出てきたわけさ」

「そうか……煩かったか。じゃあ、俺でも殺して止めるのか……？」

「ふ、別に寝たかった訳でもなし。別に構わんさ。貴様をここで殺
すのも面倒だしな」

「うひよひよー、そうか。しかしお前が俺と同じことをすればもっ
と楽しいことが出来るのに」

「面倒だ」

「ふひひひ。つまらねえ」

と……奴の足元にいた女が奴の足元に縋り付きながらねだって来た。

「ねえ、赤毛のおにいさぁん……もつとお……もつとイかせてえ……」

「ふひひいいひ……ほうら……！」

「はぁぁぁぁん！」

そうするとその女は涎を垂らし失禁しながら失神して倒れた。あ……白目剥いてらぁ。

「あーあ、今のは強烈だったぜ？ こいつはもう普通には生きられんかもな……つつうか多分もう廃人かもしれないな」

「くぴぴ……俺は無理やりやってるわけじゃないぜ？ 頼まれたからやってやっただけなんだし……あーなんていい子なんでしょうボクちゃん……くひ……くひははははっ！」

と、赤毛野郎も狂ったように笑い出した。

「とういかさ、お前もいい加減狂ってるよな」

「ぐふふふ……ありがぁとよう、嬉しい、嬉しいなぁお前に褒められてっ！」

「にしても……この部屋、臭いな。アルコールやら小便やら精液やら体液やら……色々混ざって最悪だな」

「くぴぴ？ そうか？ いいじゃあねえかよう兄弟！ 気にすんな」

「そうか。まあ俺は嫌だ。どっか行くわ」

「おう、もう行くのか。じゃあな！」

と、その時……ドアが何者かに蹴破られた。
俺と赤毛野郎だけがそちらを見る。と……。

そこにいたのは髪の毛をポニーテールにしたややツリ目気味の美女だった。

肩には……なんだアレ。木刀い入れのような布の袋を引っ掛けて。

こいつは、能力者……か。

と、その女と目が合った。

その瞬間、脳にフラッシュバックする風景。

竹刀が彼女の頭部を貫通し血と脳漿を撒き散らしながら死んでいく。

残った目も色を失い口からも血が吹き出す。

地面に倒れた彼女は片目がつぶれ血の海は次第に広がっていく。

そんな風景。

俺は……コイツを……知っている？

でも今の風景によると死んだはず。何故生きている？

しかし生きているならもう一度してやろうか。今のは最高に気持ちよさそうだぜ。

と、女のほうも俺を見て固まっている。

そうして俺に詰め寄ってきた。

「最上零児！ こんな所で何をしている？」

「は……誰だよお前？ 俺に用か？」

「何を言っている！ 私は武田由里香だ。昼間一緒に……」

「しらねえけど何様だよ。あんた」

「記憶が無い……いや人格が入れ替わっている……のか？　しかしこの感覚。やはり零児も能力者か。でも昼間の動きからすると肉体強化型……か？　私にはわからないが。にしてもこの惨状……零児。まさかお前の仕業か？」

「ちげえよ。コイツがやったんだよ」

そう言って赤毛の男を指差す。

「そうか……お前はちがうか。で、この男が情報のハッカータイプの若い赤毛か」

「ハッカータイプ？　何それ？　何言ってるんだ？　アンタ」

「それにしても零児！　貴様はコレを見ていて止めなかったのか？」

「はあ？　何故俺がそんなことをしなくちゃなんのだ。アホかお前」

「何故って、この女性は……この人も……この人も……みな、廃人に……壊れてしまっているではないか！」

「俺には関係ない。うるさい黙れ」

「なッ！　人を助けるのが……お前の、信条ではっ！」

「知らないなあ！」

「くっ、どうしてなのだ！　零児！」

ああ、煩い女だぜ。

こいつの言葉は一々心に刺さる。それは能力とか云々の問題ではなく心に来る。

その時頭の中でかすかに蘇る古い言葉。

「ただ、あくまで私の気持ちとしては君にはその力を、君自身が正

しいと思うことに使って欲しい」

うるさい。

「私にはそれが出来なかった。だからこそ懂れた」

うるさい……………。

黙れ……黙れ……父さん？ 違う違う煩い煩い黙れえッ！

「心の底からそれを君自身の正義を通して使用して欲しいと願う……」

うるさいうるさいうるさい煩い五月蠅いウルサイ！！
違うんだ黙れよオイホント容赦しないぞクソやめとけこれ以上は
それがお前のためだ！

本当に……

あまりにうるさすぎると

殺してしま いそ うになる

幕間 1

武田由里香SIDE

場所は少し時間をさかのぼった耳ヶ埼。

私こと武田由里香は夜のこの治安の悪い道を歩いている。

肩には木刀と真剣を一本ずつ入れた袋をかけて。

さつきこの辺りから確かに能力の匂いがした。

政治家でもある父様の命令でよくわからない研究所でこんな能力を持たされてから一年。

それから父様の命令で欲望のままに動く特性を残している能力者を狩っている。

最初は嫌だった。でも……沢山の事件を見て、沢山の理不尽な悲しみや奪われた命を見ていた。

欲望のままに生き、動物のように生きる彼らは、それだけで悪だ。

だから、それによって引き起こされる悲しみを少しでも減らせるなら、私に出来ることをするだけ。

だから今も私は自己中心で人に害を与える能力者を狩っている。

本来能力者は能力者を感じることが出来るらしい。

さらにハッカータイプは、人の心を読んだり書き換えたり出来るらしい。

ちなみにハッカータイプとは研究所で名づけられた、人の心に進入するタイプの能力者の総称だ。

しかし純粋な肉体強化型の私にはそんなことは出来ないし能力者を感じたりする力も無くはないが弱い。

しかし能力が使われたとき聞こえたり見えたり感じたりといったはっきりとした感覚はもてない物の、匂いとしては判る。

能力が使われるとその能力が匂いとして空気に乗るのだ。

基準としては弱いが、使えなくは無い。

そして今夜はかなり強い匂いが出ていた。少し甘い感じの。

それはまるで理性を溶かすような快樂の甘い蜜。

私は能力者だから耐性があつて大丈夫だが、普通の人間なら恐らく近ければ一発で快樂の虜になってしまうであろうような、そんな強い力。

その匂いはどんどん近くなる……ここか。

そうしてたどり着いたのは地下にある小汚いバーだった。

間違いない。ココだ。

という訳でドアを蹴破る。

中は……酷い状態だった。この人たちはもう治せないかもしれない。

許せない。多分やったのはこの町にいたといわれているハッカータイプだろう。

と、その時意外な人物と目が合った。アレは……零児!?

そんな馬鹿な、なんで彼がココに……まさか彼が?

今出ている命令は赤毛のハッカータイプの捕獲または駆除だけど、もしコレが彼の仕業なら零児と入っても放っておけない。

だから問い詰めることにする。

「零児! こんな所で何をしている?」

「は……誰だよお前？ 俺に用か？」

あれ、私を知らない？ 人違い……じゃない、な。

「何を言っている。私は武田由里香だ。昼間一緒に……」

「しらねえけど何様だよ。あんた」

この言葉遣い……零児じゃない？

「記憶が無い、いや人格が入れ替わっている……のか？ しかしこの感覚。やはり零児も能力者か。でも昼間の動きからすると肉体強化型……か？ 私にはわからないが。にしてもこの惨状……零児。まさかお前の仕業か？」

「ちげえよ。コイツがやったんだよ」

「そうか……お前はちがうか……で、この男が情報のハッカータイプの若い赤毛か」

零児がやったのではないと知って、少しだけ安心する。

「ハッカータイプ？ 何それ？ 何言ってるんだ？ アンタ」

む……ハッカータイプという言葉知らない能力者はいるのだろうか？

研究所にいたものは皆自分が何をされるかはわかっているらしいから知っているはずなのだが。

その時足元の人が目に入る……コレは酷い。

そうしてコレを止めない零児に対して怒りがわいてきた。

「それにしても零児！ 貴様はコレを見ていて止めなかったのか？」

「はあ？ 何故俺がそんなことをしなくちゃならんのだ。アホかお前」

なっ……なにを、だって。

「この女性は……この人も……この人も……みな、廃人に、壊れてしまっているではないか！」

「俺には関係ない。うるさい黙れ」

「なッ！ 人を助けるのが……お前の、信条では」

「知らないなあ！」

「く……どうしてなのだ！ 零児！」

昼間あったとき、馬鹿な奴だとは思ったけど、実は先生と光が好きになってしまったって言うのもわからないでもなかった。

でも、今の零児は……。

わかっている。初期に精製された能力者は欲望に忠実で、殺戮を好み、人間の敵だ。

でも、頭ではわかってはいても……いや、本当には頭ですらわかっていなかったのかもしれない。

零児は違うって思ってた。私と同じで能力だけ獲得しているか、能力者というのが勘違いだとか。

とにかく先生や光も悲しむだろうし零児と戦うなんてことはなんとしても避けたかった。

だから……だから、零児の口からだけはこんな言葉だけは聞きたくなかったのに……。

と、その時、突然頭に流れ込む感情。

同時に凍る空気。

「殺してしま いそ う」

その空間をも侵食する感情は……殺意。

空気は毒をもち身体を突き刺していく感覚に襲われ身体は自由を失い呼吸もままならない。

その感情の瘴気はただ一人の人間から発せられている

殺気の主は、零児だ。

享楽に明け暮れていた人たちさえ静まりその主を凝視する。

空気全体が殺意で埋め尽くされていて誰も身じろぎ一つ取ることすらかなわない。

物音一つしなくなった空間の中、誰もが凍っている。

動けば殺される。そんな絶対的強者を前にしたときに感じる本能としての恐怖。

言葉が出ない。

その時何となくわかった。私はココで殺されるんだって。

そうしてその静寂の中、零児は立ち上がり、ポケットから折りたたみのナイフを取り出して開いた。

私は動けない。ああ、もうダメかも。

足が動かなくて逃げることにすら出来ない。あはは、能力者から人を守ろうって意気込んで……いいザマだな。

零児がこの惨状の主だったら零児すら倒そうって思い上がって

たのに、実際彼は違ったけど、でも、私はココで殺される。だいたい彼を倒せるなんて思っていたこと自体が間違いなんだから。

ふう、大体こんなことが長続きするとは思ってなかった。

人を守るために能力者を殺したこともある。その能力者を作ったのが誰かを考えないようにして。

だからココで能力者の彼に殺されるのは正しい結末。まさに因果応報。

そうして零児がナイフを振りかぶる。その切っ先に視線が行く。

あ、明日はそういえば光と一緒に遊びに行く約束してたのに……約束果たせないな。

私が死んだら……光は悲しむかな。

ゴメン。光。

心残りがあるとすれば……そんな何気ない日常のことだった。

でも身体は動かない。視線だけがかろうじて動いてそのナイフの切っ先を追っている。

そうして

ナイフは

振り下ろされた。

夜の喧騒（後書き）

はいどうも。S i k oです。

皆さんお久しぶりです。と言うかホントすみませんでしたーッ！

いやね、いつも心に引っかかってはいたんだけど涙が出るほど忙しくてね。

それでようやく暇になっても、日本語って難しいですね。

筋はあっても言葉にするのって難しい。この未熟者めー！

という訳で取り合えず更新しました。

が、今回は短いですね。と言うか大体書いた文の前半部分です。

という訳ですぐに後半も更新できると思います。

これからどうぞよろしくお願いします。

夜の静寂

1

ああ、そうだよ。いつもそうだよ。

俺は、自由なのに、俺が何かすると頭の中で声が響くんだよ。正しく正しくって、うるせえよ。

それだけじゃなくこの女まで……いい加減にしろってんだよ。

だから、殺す。

殺すんだ。俺は。

ナイフを振り上げる。女は動かない。ただ視線がナイフを見ているだけだ。

そうして……振り下ろす。

「あまり殺してしまうと言うのは気分の良い物では無いからな」

クソ、また聞こえた。

そうして右手がギリギリで止まる。まただ。またこの声だ。

いい加減にしろって言うんだよ。俺はコイツを殺すって決めたんだから殺させろよ。

でも……手は動かない。

というか、動かす気にならないのだ。

だからこの女の目の前までナイフを振り下ろした状態で止まっている。

女もなぜか動かない。じっと切っ先を見ている。

力を入れるも心がすでに殺す気じゃなくなっている。なんなんだあの言葉は。

そのまま静止した時間が流れる。何分経ったんだろうな。

ふう、ま、結局は……。

「ああ。やめたやめた。興がそがれた。つまらん」

ナイフを引く事になる。

「へ、れい……じ？」

「ん、なんだよ？」

「君は、わたし……を……殺すんじゃない？」

「ああ、やめた。それ。つまんない」

「へ……どうして？ 能力者は欲望に忠実で……殺戮を好んで……。だから……零児は……私を殺すはず」

「はあ？ うるせえなあ。俺の欲望……っつう心が殺したくないって思ったんだから殺さないんだって。もうそんなことどうでもいいじゃんかよ。俺は好きにやってるんだから」

「そう、か……」

「それよりもこの赤毛野郎追ってるんだろ？ ならさっさと捕まえねえとヤバイんじゃないの？」

「あ、そう……だな」

と、赤毛野郎は俺を見て呆然としながら話した。

「オイお前、そこまでやってなんで殺さない？ それでも能力者かよ。その上俺まで売るって……。いび、い、今なら許してやる。だから一緒にコイツを狩ろうぜ？」

「うるさい奴だな。さっさと黙らないとこの女がお前を狩る前に俺が殺すよ？」

「く……クソッ！ どいつもコイツも俺を馬鹿にしやがって……俺が一番巧く能力のを使えるってのによ。あの黒コート野郎も俺を認めない。原典って奴らはみんなムカつくつ、クソ！」

はて？ 黒コート？ 何のことだコイツが言ってるのは。まあいか。

武田は……まだボーっとしてやがる。このノロマが。

「おい！ 武田とかいったか？ さっさとこのヤカマシイ赤毛野郎を捕まえるなり殺すなりして黙らせてくれ」

「あ……ああ。えーっと赤毛男。研究所に戻る気はないだろうが一応聞いておく。戻るんならここで実力行使には出ないでやる。さあどうする？」

「アアン？ テメエ馬鹿かよ？ 戻るわけねえだろ？ このグズボケ！ 一遍死んでこいやこの腐れ女？ 犯すぞコラ！」

うわあ、ひでえ言葉使い。

「そうか。ならば取り合えず殺しはしないが腕がなくなる覚悟くらいはしてもらおうかッ!!」

そうしていつの間にか手に持っていた木刀で殴りかかった。
それを赤毛男は……。

「チエエイッ！！」

腰に刺してあった特殊警棒を抜き受け止める。

居合いの容量で伸ばしながら抜いた警棒は、奴に当たる直前の木刀をガチッと言う音をたてて受け止めた。

あーあ、木刀に警棒って……二人とも物騒なもん持っちゃって。まあナイフを持ってる俺が言えた口じゃないが。

「フンッ！」

「ヘタァッ！！」

ガキバキッ！

火花が散るように激しくぶつかり合う警棒と木刀。

二人ともなかなかいい勝負になっている。

しかしいくら赤毛の奴が精神干渉型で相手の軌道が計算できるとは言ってもやはり圧倒的にスピードが武田に負けている。

どうも赤毛の奴は俺のように自分の能力のリミッターを外して戦うことは出来ないらしい。

と、いうことは自分の能力で自分のプロテクトを突破することは出来ないって事か。

ならば勝負は見えてる。こうしている間にも形勢はどんどん赤毛野郎が追い込まれている。

やはりセメントの場合には肉体強化型に分があるか。

あーあ、こりゃあ長くはもたねえな。

と、その時……。

「これでどうだぁッオエ!! くっ、くく狂えいっ!」

赤毛男が右手を武田のほうに突き出して叫ぶ。

む、何かをした。コレは……能力?

赤毛野郎が能力で武田の脳に侵入しようとしたらしい。が……。

「フッ! 効かん! そこッ!!」

武田の右袈裟懸け斬り。

振り下ろされる木刀が奴の腕に当たり、ボキッと言う音を立てる。

「ヒ……ヒグウッ!」

赤毛男は左腕でガード。しかし勢いは強くどうやら骨折したらしい。

そうだ。能力者は皆能力に対しての抵抗がある。だからそれを突破するには強い力が要る。

どうやら奴は武田のプロテクトを突破できなかったらしい。わかりそうなモンなのに。馬鹿な奴だ。そうして……。

「コレで……決まりだぁッ!」

武田の渾身の一撃。

しかし。

「ホタァッ!」

赤毛男は警棒を武田に向かって投げつける。

「なッ！ 武器を捨てるだっ！」

そう叫びながらも飛んで来る警棒を野球選手のように器用に叩き落す武田。

しかし、その時に一瞬隙が出来た。

「馬鹿めえッ！ その武器を叩き落すだけの隙があれば十分だ。チエイツッ！！」

そうして赤毛男が何らかの能力を発動。む、こ、コレはっ！？

「オイ武田！ 後ろだ！」

「何んだとッ！ こ、コレはあっ！」

なんと店中にいた人間ほぼ全員が武田に襲い掛かってきている。

「じゃあその隙にボクは帰るから、バイバイキーン！」

「な……ま、待てッツう！」

しかし追いかける暇も無く操られている人間の攻撃を木刀で受ける武田。

武田は追おうにも周りの人間が邪魔をしているので追えないのだ。その隙に、遠くへと逃げていってしまう赤毛。

「くっ、クソッ、逃げられたかつ」

そう言いながらも邪魔をしている人間どもの攻撃を受け流す武田。

その時、ふと気づいたのだが、武田の動きにさっきまで程のキレが無い。

どうやら武田は相手が一般人だからか肉体強化はしていないようだ。

「しかし零児！ コレはいったいどういう事なんだ！」

「わからねえのかよ。アイツがこの店の客全員の精神に侵入してお前を襲うように仕向けたんだよ」

「くっ、そんな！」

悔しそうに唇を噛みながら戦う武田。使えばいいのに能力を使わないもんだから徐々に不利になって行ってる。

「おい、さっさと能力使えよ」

「いや、私はみんなを守るために来たんだっ、傷つけるためじゃ…
…クッ！」

「はーあ。そうですか。じゃあ勝手にしろ」

「ああ、勝手にするさ、チィ！」

「ウグリアアアアアッ！！」

迫り来る前後左右からの矢のような攻撃を能力を使わずに純粋な技術と身体能力で防いでいる。すげえなコイツ。

しかしコレじゃあ一発でも誰かの攻撃が当たって体勢が崩れたら終わりだな。まあ全て終わり、総崩れになることは目に見えている。

と、そんなことを思っていたその時。遠くにいる奴が武田に向かって酒の瓶を投げつけるのが見えた。

アレが当たったら………終わりだな。俺には関係ないが。

教えても打ち落とす余裕は……無いか。

そのまま武田のほうへと飛んでいく瓶をスローになった視界と研ぎ澄まされた思考で見やる。

チィッ！ 氣にくわねえ！ 俺が殺さなかったのに誰かに殺されるなんて。

なら如何すれば良いか、簡単だ、助ければ良い。

ああ、きつと理由はそれだけ、ここで俺が助けようとする理由はそれだけだ。

そうして瓶を観察する。

放物線を描いて飛んでいく瓶は衝突まであと一秒。

投げられる前なら精神に進入してでも止められたが投げられた物は無理だ。衝突まであと0・8秒。

武器は無いか。出来れば飛び道具。

衝突まであと0・6秒。

ポケットにナイフが三本。一本は自作。一本は山城から取り上げたステイレット。あと一本は子分から取り上げた安そうなゴミナイフ。

衝突まで0・4秒。

獲物を一番重い安物ナイフに決定。刃を開く……必要は無いからそのまま狙いを定める衝突ポイント計算完了。

衝突まで0.2秒。

最適な力配分瓶が割れるだけの力を乗せて投げる……間に合えええッ！！

衝突まであと0.1秒。

パリンッ！

間に合ったッ！！

「なっ！」

割れた瓶の方を見る武田……てっ、なんて迂闊なッ！
その隙に襲い掛かる凶器攻撃。チィッ！ 面倒な。

ポケットからスティレットを取り出し刃を開きその凶器を持った
手に投げつける。

ザクッ！

「ギイイイッ！」

「へ？」

またそちらを見る武田。隙ができる。襲い掛かる凶器攻撃。ああ
もう見ちゃおれん！

そうして自分のナイフを抜き刃を開きダッシュ。今、武田に攻撃

を仕掛けているのは四人。

一人目。武田の後ろから襲い掛かる椅子攻撃を右手のナイフで受け止め左手でボディブロー。

二人目。ナイフを握った手でナイフを使わないパンチを顔面にあて沈める。

左に二人。パンチの反動をつけて一回転し、そのまま回し蹴りで倒す。

「へ、零児が、なんで？」

「馬鹿野郎！ だからよそ見るんじゃねえ！ 死にてえのかよ！」

「あ、ごめ……」

「ゴメンじゃねえ！ さっきからキョロキョロ余所見ばかりしやがって。見てられないから手伝っただけだ。他意はねえからな！」

「あ、ああ、ありがとう……」

「っ、まあ、アレだ。とにかく俺が背中を預けるんだからその分くらいは働けよ！ いいな！」

「へ、背中を、私にか？」

「ああ。とにかくまずは退路……は作れなさそうだから全員片付けるぞ！ いいか！」

「う、うん。やってみる」

「ッしゃあっ！ ばっちこいやーッ！！」

そうして、俺は、気合を入れた雄たけびを上げて、狂ったように暴れる人波へと飛び込んでいくのだった。

幕間

「ふう。まさか本当に全員大怪我もさせずにこちらは大怪我はせず

に気絶させることが出来るとはな……」

「んー？　そうか？　コレくらい軽いだろ」

そういう零児は確かに余裕っぽい。私は普段から鍛えているのに結構疲れているのに。

だっておかしいじゃないか。さっきまでの零児の戦いっぷりと言ったらそれはもう鬼神の如き強さだった。

まあ彼は能力を開放しているからだろうけど、でも力加減は普通の人の感じだったな。

「本当に人間か？　零児」

「……おう。まあ多分な」

「そうか……まあいい。それより聞きたい事があるんだが」

「ああ、聞いてもいいいぜ。だが、取り合えず……ここ出ようぜ？　臭い」

「ん、そうだな確かに。何かは良くわからないが、確かに悪臭が」

「ああ。小便やら精液やら血やらアルコールやらの匂いがカオスとなってもう最悪」

「うっ………」

「どうした、何か変か？」

「いや、何でもない。いこうか」

本当はなんでも無くないのだが。というか、私だって年頃の女なんだからその目の前で精液だ小便だという言葉を言って欲しくない。

まあいいか。確かにここは何か臭い。さっさと出よう。

しかしあの赤毛の男を逃がしたのは痛かったが、ここを抜けられただけでもよしとするか。

「おーいなにやってる。俺に話があるんだろう？」

「あ、ああ。すまない。すぐ行く」

そうして表へ出る。ふう、空気がおいし……くは無いな。

何しろここは治安の悪い耳ヶ崎だ。なんていうか硫黄臭いし生ごみ臭いし、なんでこういう所ってこんなに臭いんだろう。

わかる人にはわかると思うけどなんかこう独特の臭さ。しかも日替わりで臭さが違ったりするのだ。

と、零児が話しかけてきた。

「おい、話聞いてやるけど何処にする？ どっか良い場所あるか？」

「あ……そういえばここは耳ヶ崎か。うん。良い場所あるぞ？ ちよつと来てくれ」

「ん、わかった」

・

そうして、その場所へと、私たちだけの場所へとやってくる。

ザアアアッ……と言う波の音だけが支配する砂浜へと。

「へえ、この町の海に砂浜なんてあったんだ」

「ああ、良い場所だろ。なかなか知られていないレアな場所なんだ。私の……私の秘密の場所なんだ」

ちなみに、この場所はまだ光にしか教えたことは無い。

空には満天の星空。月が出ているが別に晴れていて朧月にはなっていないので星もよく見える。

光源は、星と月しか存在しない世界。

海は黒く、星と月だけを映すためのスクリーンとなっている。静かに砂浜に打ち寄せる波の音。

波は今、引いているのだろうか、それとも満ちているのだろうか。それは私には解からない。

でも、そんな私たちの思惑にも何のかかわりも無く、ただただ月へ引かれた波が、規則正しく、寄せたり引いたりしている。そんな最高の舞台。

その最高の舞台を二人だけの観客で独り占めできるのだ。二人なのに独り占めとはコレはいかに。

「へえ。綺麗な場所じゃん。よっころしよっと」

そう言って砂浜に座りこむ零児。

「よっころしよって、おやじ臭いではないか」

「うるせーいいだろ別に」

「うん。まあ良いんだけどな」

そういつて零児の隣に座る。

「ふう、で聞きたいことって何さ」

「ああ、気になっていたことは沢山あるんだけど、まず最初に」

そうして一番重要なことを聞く。

「零児は、零児なのか？」

「は？」

「いや、すまない。言い方が悪かった。私が言いたかったのは、その、つまりだ。今の君は昼間の最上零児とは別人格……なのかな本当に。なんだか確かに口調や性格は違うんだけど、何処と無く同じ雰囲気……」

「ふう、それに気づいたか。鋭いな」

「って、てことは、やはり零児は零児なのか……？　じゃあなんで私のこと知らないフリなんて」

「いや、俺は本当に君を知らない」

「へ、だけどお前は零児なんだろう？」

「ああ、俺は彼と同じ人格さ。でも君のことは知らない。君に会うのはさっきで初めてだ」

「？」

よく解からない。

と、彼は私のその顔を見てクスリと笑って、話し始めた。

「よく解からないって顔だな。良いよ、説明してやるさ。所謂俺、つまり今お前と話している、この「俺」はだ。君らの知っている最上零児の意識が落ちているときに強く能力に反応すると出てくる人格なんだ。それは、別に寝ている時だけでなくて、最上零児自身の意識不明の危機や、或いは月が満月に近くなると出てこれる時もあるんだけれどな。まあ、簡単に言うと俺は、最上零児の記憶が抜け落ちた、ある時に、作られた人格なんだ。だがな、ただ別に別人って訳じゃあない。普段の最上零児の換わりに出てきても脳の中で行動原理として使われている所は同じさ。ただ違うところはその記憶と一般常識が抜けて、本当に最上零児のやりたい事をやるというだけさ」

「むう、記憶の無い、零児と言うわけか。でも、それが零児と同じ人格とっていいのか？」

「ああ。人格が記憶の積み重ねと定義するのならば確かに俺と彼は別人だが、ただ働いている場所は同じさ。根源的に見れば同一人物だろ？」

「あ、ああ。そうだな。なんとなくだが、わかった気はする。で、まだ聞きたい事があるんだが……」

「なんだ？」

「零児は能力者で零児自身も言うようにやりたいようにやるんだろ。じゃあ、なんで私を殺さなかった？」

能力者は、殺戮を好む傾向があるのに、と言うその言葉は、なんとなく飲み込んでおく。

「それは、わかんね」

「は？」

思わず呆気にとられる。

だが、そんな私に構わずに零児は話し続ける。

「いや、わかんねえんだよ俺も。殺す気はあったんだけどな。わかつただろ？」

「ああ、凄い殺気で一步も動けなかった」

「ハハハ、情けねえなあ。まあいいや。それは俺がわかったら教えてやるよ。で、他には？」

「ああ。一番聞きたいのはなんで私を助けた？ 零児は能力者なのに」

「別に……。ただ何となく見てられなかったただけだ」

「そうか。と、言う事は特に他意は無いんだな？」

「ああ」

「そうしたいから、そうしたって事？」

「おう、そうなるな」

「そうか。零児は、いいヤツなんだな……」

「は？　なんでそうなる？」

だって、当たり前じゃないか、記憶も何にも無く、そこにあった最上零児の純粹な心は、私を助けたいと思ってくれた。そんな善人なかなか居る物ではない。

でも、その、言葉は教えないで置く。なんとなく悔しいし。

それに、意識しないで動ける、そのままの零児で居て欲しいからだから。

「まあいいじゃないか。褒め言葉だ。受け取っておいてくれ」

そう、誤魔化した。

「う、ああ。まあいいが」

納得いかなそうにしながらも、そう答える零児。

うん、こんなもんかな。零児に聞きたいこと……あ、そう言えば。

「あと聞きたいのは、零児は普段は能力は……」

「あ？　知らねえよそんなこと。でも、俺はいつも全開だが、脳の状態から行くとお前の知っている普段の最上零児は閉じているみたいだぜ」

「ふう、そうか。あと聞きたいことは……」

「なんだ……まだあるのか。随分沢山俺に聞きたい事があるんだな？」

少しドキツとする。

「だ、ダメかつ？」

「いんや、別に構わんよ」

なんだいいのか。

「ああ、それじゃあ遠慮なく聞くけど、零児は研究所から逃げてきたのか？ それとも私みたいに国に能力を使った仕事をさせられているとか……？」

「またそれかよ。何だよ研究所って。俺そんなところ行ったことないよ？」

「な？ そんな訳無いだろう？ 研究所へ行かなければ能力者にはならないはず」

そう、全ての能力者はその力を研究所で与えられるはずだ。

「は？ よく言っている意味がわからないが……俺は生まれたときから能力者だぜ？」

「なっ！ そんな馬鹿なッ！ だって、そんなこと……」

父様は言っていなかった！

「ん、ああ。そう言えばあの赤毛の野郎は前会った時俺のこと「原典」とか言ってたな」

「げん……てん？」

なんだろう、原典って。凄くその話はいやな気がする。ものすごく知りたくない事実が隠れているような……。

「まあいいじゃねえか。俺が何者かなんてさ」
「う、うん」

どうしてもよくはないがこれ以上この話はなぜか聞きたくない。でも……。

今は知らなくても、きっと近いうちに、その真実を知る日が来る様な、そんな気がする。

何となくなのだけれど。

と……。

「綺麗だな」

零児が突然口を開いた。

その言葉に、少しドキリとする。

「へ？」

「綺麗だよ、この景色は、さ」

「あ、ああ。景色か」

「俺さ、いつも思うんだ。いや、多分俺だけじゃない。俺じゃない最上零児も必ずいつも感じているはずのことがあるんだ」

「それは、何を……？」

「世界ってさ、綺麗だったこと。俺はさ、いつも思ってるんだ。この美しい世界に生きていられて、それを自分が感じられる存在であるということはとても幸せなことなんだって。」

「そ、そうなのか？」

「ああ、俺は今、この時代、この美しい時代のこの場所に生きているってことを心の底から幸せだと思っている」

「そう……か。随分とロマンチストなのだな零児は」

「う、そうか？」

「ああ、でも悪くないと思うぞ。私は」

「ん、そうか。ありがとな」

そうしてまた二人で並んで海を見る。

「ふふっ」

知らず笑いが漏れる。

「ん、どうかしたか？」

「いや、大した事ではないんだがな。この状態を先生や光に知られたら凄く羨ましがられるかなーって思っただけ。もしかすると恨まれるかもしれない」

「ひかり、せんせい？ 誰それ？」

「ああ、君は知らないか……まあいいじゃないか。それより綺麗な景色が、目の前には美しい世界が広がってるんだ。零児流に考えるんなら見なければ勿体無いぞ？」

「あ、ああ。そうだな」

「ふふふっ」

そうして、また視線を零児から海へと戻す。

ザアアアッ……と言う、潮騒だけが響く……そんな静かな夜。

二人でただ海を見続ける。

空には宇宙の歴史を一面に敷き詰めた星々と、その中に確かに質量を持って存在している少し欠けた白く輝く月。

そして、その全てを映して、美しく揺れ続ける黒い鏡。

潮は引いているのだろうか。それとも満ちているのか。

私にはどちらかはわからない。

ただ、光り続ける星を写して、水面は夜光虫のように何処までも美しく動き続ける。

人は隣に一人だけしかいない。だからこそとても強く人を感じる。すべての物は無窮の彼方へ流れていく。そんな時間の中。

だけど私はこの星と月とだけが支配していた二人だけの時間をいつまでも覚えていられる。
そんな気がした。

夜の静寂（後書き）

はあー、どうも、S i k oです。

あーなんだかもーこれどっから見てもラブコメじゃないよね？

ホント恋愛の欄おいてるけど恋愛薄っ！

何コレホント恋愛？ いや一応恋愛ネタも考えたんですが。今回は入れなかった。

さらにラブコメって書きながらギャグもないし。うーんどうでしょう。

まいったなーどうすつかーなー。マジで。

最終手段としては何の脈絡も無くうんことか書いて小学生の笑いを誘うとか・・・。

流石にダメかなそれ・・・。

って言うかこの話に小学生の読者いないですよね多分。

まあそれより何より・・・本当にこんな所まで読んで下さってありがとうございます。

次話こそラブコメにします・・・多分。

平凡、故に至福

1

「ふああ、ねむ。ん、もう朝か」

そうして窓から差し込む光で目が冷める。

あーあ。床がなんかもう、すっごい散らかってるな。なんか。

あ、そうか。昨日はここで姉さんと隆貴が酒呑んでたんだったな。

二人は、つと。

姉さんはお客用の布団を出して眠っている。それは良い。

隆貴は、なぜか俺のベッドで寝てる。あまり良くない。

そして、俺は……床で寝てる。何か凄く不条理な物を感じるのは何故だろう。

取り合えずムカついたので隆貴から起こすことにする。

「おい、起きろ、隆貴」

「がーぐーがー」

「起きろって言ってるだろ！」

「ぐーがーぐー」

ハア、やっぱ起きないか。ならば一発鉄拳制裁……いや待てよ。こういう時は、そうだな。こういう手もあるな、よし！

「がーぐーガグッ！」

そうして隆貴の鼻と口をつまむ。フッフッフ、流石にコレでは寝てはいられまい。

「……………」

三十秒経過。うーん。まだかな？

「……………」

一分経過。むう、なかなか我慢強いな。

「……………」

二分経過。おかしい。まだ起きないのはいくらなんでも。そうして隆貴の顔を覗き込むと……ゲッ！

隆貴の顔が紫色になってる。コレはヤバイ。流石にヤバイ。凄くヤバイ。

と、言うわけで急いで手を離すが。

「……………」

なぜか呼吸は戻らない。ヤバイぞコレは。流石に俺もこんな悪ふざけで人殺しにはなりたくない。

えーっとこういうときはどうすればいいんだっけ？

……………人工呼吸？

ってうわーそれだけは嫌だというかマジでそれはダメだって。

俺はアレだよ。猫と女以外とはキスしないってポリシーがあるんだからさ。それは守らなくちゃな。うん。

いやまあ猫好きの名にかけてその線は譲れないって感じー。んー。

「……………」

うわーそんなこと考えてる場合じゃねえー隆貴の顔が紫通り越して土気色になってるうー？

つつうかなんで俺がこの馬鹿のせいで悩まなきゃいけないんだよう！ ムカついてきた！

「つていい加減にしろや、大体お前が俺のベット使ってるのがいかんのじゃこのポケエーツー！！」

そうして隆貴の腹に全体重をかけた肘鉄を落とす。

「ぶごうっ……………ぐーごーぐーがー」

あ、戻った。やってみるもんだな。つつうかそれでも寝続けるコイツは。大物だな。ある意味尊敬だわ。

ふー。今回は流石の俺もチツとばかり焦ったぜ。つつうかさー、俺がなんでこの馬鹿のせいで悩まなくちゃなんねー訳？

アホくさ。朝飯作ろ。

2

トントンお料理楽しいなーっと。

そうして野菜を刻んでサラダを作る。と、今日は姉さんもいる

から二人分かな。

あとはトーストと、目玉焼きとインスタントのスープ。こんなも
んだろう。実際一人暮らしにしてはマメな方だと思う。

と、ヌボーっと寝ぼけた顔をしながらも、姉さんが起きてきた。

「んーいい匂い。ああーやっぱり零児は一家に一台ね」

「って姉さん匂いにつられて起きてきたと思ったらそれかよ。しか
も一台言って、俺は物扱いですか？」

「ふふっ、良い子だから拗ねない拗ねない」

「フン、別に拗ねてなんかいないさ」

「うふふ、あーもう零児は相変わらずねー。あ……あれ、う、なん
か頭痛い」

「あーまあ昨日アレだけ飲みゃあなあ、はい水」

「あ、ありがと。んくっんくっんくっ、ぷはーおいしい。ふう。で
もホントは男は黙ってなんとかビールしたい」

「ふるいのなそれ。でも体壊すからやめとき。それに朝から迎え酒
など俺が許さん」

「ふふ、堅いのね。にしても相変わらず気が利くわね。ありがとう
ね。零児」

そうして俺の顔を見つめてニツコリと微笑む姉さん。

うう、この人ってお礼を言うときに必ずちゃんと目を見ていうん
だよなあ。

とっても良いことで、そこは姉さんの美点だとは思うけど……シ
ヤイシヤイな日本人代表の俺としては少し照れるのであった。

「う、ま、まあ水くらいなんでもないさ」

「あれれーもしかして照れてるう？」

「う、うううるさいなあ。もうメシ出来てるから。今日も一限から
大学あるんだろ。先食っというて」

「ん、わかった。零児は？」

「俺は隆貴の馬鹿起こしてそのあと食べる前に調理具片づけとかあるし。遠慮しないで先食っというてー」

「んー了解ー」

そうやって幸せそうにトーストをパクつく姉さんを後ろに見ながら隆貴を起こしに行く。

ここからが大変だぜ。

何しろさつきアレだけの打撃を与えても、そのまま寝続けたヤツだ。一筋縄ではいかないだろう。

そうして俺の寝室へ。

「ぐーぐーごー」

ううむ、相変わらず敵ながら天晴れな眠りっぷり。

「おきろー隆貴ー。ヘイツ！」

ドガッ！

と、ベットから蹴落としてみる。流石にコレで……。

「ぐーすーぴーすー」

ええいつ、まだ起きんか。ならばコレでどうだ。
足を高く上げてー勢いをつけてー

「顔・面・踵・落・と・しーっ、ホタァッ！」

ゴキッ！

「へブシッ！ な、なんだあ！？」

フッフッフ、アンディ・河豚もビックリのナイスな踵落としが決まったぜ。今日も俺はパーフェクトうー！

「な、何事ーッ！ い、今星が見えたぜ！ すげえジョースター見えた！」

「フッフッフ、今お前のうんこという秘孔を突いた。一步でも動けば……ボン、だ」

「な、嘘つきがれ。そんなツボあるか！ つつうか朝っぱらから脳天踵落としったあどういう見だあ零児さんよう！」

「うむ、了見か。邪魔だ。出て行けと言いにきた」

「は？」

「だから邪魔だ。お前はまたサボるんだろうが俺は学校があるんだ。だから鍵も閉めねばならん。だからでてけ」

「ぐ……そこまで酷い言葉だとかえって清々しすぎて言い返せんっ！」

「ああ、そうだろう。まあ、御託はいいからとにかくさっさとどっか行け」

「う、ああ。今回は俺の負けだ。つつうか顔洗うから洗面所借りるぞ」

「ああ」

そうして今度はキッチンへ。独り暮らしの朝は忙しい。

ゴシゴシゴッシゴッシー。

そうして先に調理道具を洗う。ああ、やっぱり油污れにはジョイ

ジョイ君だよなー。オレンジピールのジョイジョイ君やー。

などと考えて洗っていたらあっという間に終わってしまった。まあ調理道具だけでもんな。

そうして食卓に戻ると、俺のトーストがなくなってた。

「あれ……姉さん。俺のトーストは？」

「んー、そう言えば隆貴が「負けっぱなしは性に合わん。やーい悔しいだろー零児のバーカ」って言いながらモシヤモシヤ食べてたわよ」

「あ、あんの野郎ー！ 殺す。今決めた殺す。で、今奴は何処にいる？」

「そのあと「ダメだ！ やっぱ零児メツチャ怖い」って言いながら家の外へと逃げてったよ」

「チッ、逃げやがったか。クソ！ 俺の朝飯が……」

「うふふ、トースト食べたかった？」

「ああ、目玉焼きとサラダだけだ……ううう、寂しいよう」

「ふふ、そおーんなことだろうと思って……じゃーん。お姉ちゃんがパン焼いといてあげましたー！」

「お……おとおおー！ ありがとうっ！ 姉さん！ 食っていいのか？」

「勿論！」

「あああありがとうっ！」

そういつて姉さんの手からトーストをひったくって食べる。

ムシヤムシヤガリガリ……んーやや焦げてはいるがうんまい。

「うふふ、おいし？」

「うんっ！」

「……感謝してる？」

「モチです！」

「じゃあキスして」

「それはダメ」

「むー……ケチ」

「ははははは、そういう問題じゃないって。あ、姉さん。もうこんな時間。大学一限からだけど一度家に帰って荷物取ってこなきゃいけないんだろ？ そろそろ出なきゃいけないんじゃない？」

「ん、そうね。じゃあ先行くわ」

「ああ、行ってらっしゃい」

さってとー、俺もノンビリしてられないぞ？ って言うか今から片付けてて間に合うのだろうか……。

幕間

片山光SIDE

あと2分で朝のホームルームが始まる。のに最上君はまだ来ない。でもまだ一応始まってないからみんな席に着いてはいない。と、先生が近づいて聞いてきた。

「ねえ片山さん？ 最上君見なかった？」

ん、やっぱり先生も気になってるのかな。そうだね。昨日は元気そうだったもんね。

「はい、見てないです」

「そう、ありがとう。もうすぐホームルーム始まるからあなたは席に着いとくのよ」

「はい」

そうして席へとつく、と……。

キンコンカーンコン

鳴り響くチャイム。ん、時間だね。

「きりーっ！」

日直の声が響く。その時！
ガラガララッ！

「フーッ！ ギリギリセーフ……ぜい……ぜい」

最上君が教室に滑り込んできた。タイミングはちょうど起立と礼の
間。

そうして全員が一遍に立った状態で最上君の方を見る。

「あれ、もしかして……」

「ええ、セーフじゃないわね。最上君」

「ゲエツ、先生！」

「だから人を見てゲッて言わないの。それにあと三十秒早く来なさい」

「ううう、すみませんでしたあ」

「はあ、今日は見逃してあげるけど明日から気をつけるのよ？」

「あ、はい」

「それじゃあ日直。号令！」

むう、いつもは公平な先生だけど、やっぱり少し最上君に甘いよね。

そういえば、今日は最上君に聞きたいことあったんだ。授業終わったら聞こう。

そうして一時間目終了。最上君は、寝ている。邪魔したら悪いよね。次にしよう。

そうして二時間目終了。最上君はまだ寝てる。ううう、いいのかなあんなに寝てて。

さらに三時間目終了。最上君は……あれ、いない。トイレかな？ふう、結局昼まで捕まらなかった。という訳で昼休みに伝えよう。

キンコンカンコン。と、言うわけで昼になったのです。

最上君は……居るね。でも、なんか声かけづらいな。そうして悩んでいると。

「光！一緒に昼ごはんを食べよう！」

わざわざ他のクラスからやってきたユリちゃんに声をかけられた。

「あ、う、うん。いいよ」

「む、何か用でもあるのか？なら遠慮しないでいいんだぞ？」

「ううん、別に……」

「ふむ。む？そういうことか」

はてな？何か納得している。と、突然。

「ああ、零児ではないか」

最上君に声をかけだした。

「ん。ああ、武田さんか」

「いや、ついでだ。一緒に昼ごはんを食べないか？ 勿論光も一緒に」

そういつてユリちゃんは私に向かってウインクした。ううう、もしかしてバレてた？

「ああ、喜んで。でも俺邪魔しちゃっていいのか？」

「勿論だ。むしろ私も零児に話がある。光も構わないだろう？」

「あ……うん。良かったら一緒に食べよう？」

「うーん。わかった。でも俺メシ持っていないから購買に行って買ってくるわ。何処で食う？」

「うん。私が闘技場の鍵を持ってくるからあそこで食べよう」

「わかった。じゃあ飯買ったら闘技場な。了解」

「なあ光？ コレでいいんだろ？」

「うう、わかつちやった？」

「うん。バレバレだ。光は考えている事が顔に出るからな。あ、それじゃあ私は鍵取ってくる。先に行っておいてくれ」

そういつてユリちゃんは何行ってしまった。

じゃあ私も、とその時クラス委員の山田さんが声をかけてきた。

「ねえ、片山さんってさ、最上君狙いの？」

「へ？ いや、そそそんなことないよ？」

「なら良いんだけどね。私は片山さんを想って言うんだけど、彼はやめておいたほうがいいわよ？」

「え？ なんで？」

「いや、確かに彼は顔も悪くはないし性格もいいと思うわ。評判もいい……って言うか有名だし。でも。彼さ、松山君とよくつるんで

るし。まあ松山君は女癖が悪い以外は山城君とかと違っていい人だからいいけど、そういう問題じゃなくてなんとなく彼……怖くない？ その、何て言うか、雰囲気とか？ 別に悪いことしてるわけじゃないんだけど。なんか纏ってる空気が怖いって言うか……不吉な物を感じるって言うか」

「ん、それは……」

なんとなく解からなくも無い。人を近づけない様なオーラが出てるのだ。

「ほら、片山さんはせっかく可愛いんだし人気もあるんだしさ……もっとカッコいい人だって片山さんのこと好きって言ってる人いるんだよ？ 何も最上君じゃなくても……」

「う、うん。ありがとね。でも私は……あつ、と、とにかく私はご飯食べてくるからっ！」

「ふう。わかったわ。じゃあね」

「うん」

3

ふう、今日の収穫はアンパンとカレーパンと焼きそばパンか。

「ソーセイジパンが残り一個だったのに前のヤツにとられてゲットできなかったのが痛いな。ちくしょう」

などと愚痴っていると。ついた。闘技場はここだったな。鍵は、もう開いてるツと。

と……中から会話が聞こえる

「だから山田さんに最上君は怖い雰囲気があるからやめといた方がいいって……」

「うーん。でもそこが魅力だと思うんだけど」

何か話してる。つつうか何の話だろ？ まあいつか。

「お邪魔しまーす」

「はーい」

と、中には片山さんと武田さんと……何故か先生がいた。

「ふう、なにやってるんスカ？ 先生」

「え、私は剣道部顧問よ。別にいたっていいでしょ？」

「いや、別に良いんですけど、何でかなーって」

と、武田さんが話に入ってきた。

「まあそんな事はどうでもいいじゃないか零児。食事は大勢で食べたほうがおいしいぞ？」

「ん、まあそうだな」

そうしてみんなでご飯を食べる。みんなは弁当だ。ううう、いいなあ。

やっぱりちよつと惣菜パンは味気ないよあ。

と、片山さんがこつちを見ている。

「ん、片山さん。何か用？」

「え、あ、ああいやあのね。その、最上君あれから山城君になんか

されてない？」

「ああ、そんなことね。うん。全然平気。って言うか昨日山城見なかったな」

と、先生が急いでお茶を飲み込んで、胸をトントンしてから話した。

「んっ、んくっ、んんっ……はあ。ああ、山城君ね。彼は今入院中よ」

「は、入院？　またなんですか？」

「なんかね、大怪我したんだって。何故かは知らないけど両足骨折らしいわよ。原因は本人も覚えていないんだって」

「はー、そりゃあまた難儀な。なんつーか気の毒と言うか馬鹿と言うか自業自得と言うか」

と、武田さんはかなり腹を立てて言った。

「フン。光を襲うような不届き者だ。骨折ぐらいでは何温い。取り合えず不能くらいにはなって置けばよかったものを」

「いや、ユリちゃん。流石にそれは……」

ふうむ。山城は入院か。なんでだろな。

「まあ片山さん。そう言う訳だから俺は大丈夫さ」

「うん、本当によかった……」

む、アンパンが食い終わってしまった。次は、焼きそばパンかな。

「そういえば零児……」

と、今度は武田さんか。

「ぬあい、ふあけださん」

「行儀が悪い。ちゃんと飲み込んでから話せ」

むう、そうだな。

そうして急いでお茶で流し込んですっきりしてから話す。

「なに、武田さん」

「零児。今日は剣道部は……」

「行かない」

「そうか」

あれ？ やけにあっさり引き下がるな。てっきりしつこく食い下がると思ったんだが……。

「ところで零児。博打は好きか？」

「は？」

「賭け事は好きかと聞いている」

「んー、まあ嫌いではないかな。でも、どうしていきなり」

と、突然慌てる先生。

「ちよちよちよつ、ちよつと武田さん？ 私は一応先生だから。その目の前で……賭け事の相談って言うのはちよつと」

「大丈夫です。零児がらみで先生にも有利になる話です」

「ええ、許可するわ。どんどんやつちやいなさい。少なくとも学校の中だったら先生公認するわ」

いいんかいな。

「という訳で零児。今からコイン……は無いのでこの十円玉を投げる。どちらか表を当てるだけだ。ちなみに表は平等院鳳凰堂が描かれているほうだ。どうだ。簡単だろ？」

「は……なんでまた突然コイントスなんぞ？」

「いいからやるぞ。それ！」

ピン！ パシッ！

「さあどっちだ！」

「んーじゃあ裏」

パツ。

「……………」

「裏だな」

静寂。

「もう一回だ」

「は？」

ピン！ パシッ！

「さあどっちだ……？」

「んーじゃあ今度は表」

パツ。

「……………」

「表だな」

と、武田さんは十円玉をがま口の財布にしまった。

「さて……」

「おい、今のはなんだったんだよ？」

「さて次は……このトランプを使う」

「シカトかよ。つつうかなんでトランプなんか持ってる？」

「細かい事だ。さあ今からこのカードをよくシャッフルして二枚を抜き出す。零児から見て右か左か。どちらの数字が大きいかを当ててもらう。どうだ？ シンプルだろ？」

「いやさ、だからそれに何の意味が？」

「男なら気にするな。さあ右か左か！」

「じゃあ右」

そうしてめくられるトランプ。右はハートの7、左はダイヤの4。

「……………」

「右だな」

そうしてまたトランプを切って左右に一枚ずつ置く。

「なあ、さっきから俺たちなにやってるわけ？」

「気にするな。さあどっちだ！」

「じゃあ今度は左」

そうしてめくられるトランプ。今度は右はスペードの1。左はクラブのキング。

「……………」

「左だな」

「スピードのエースは……あの時に出てればロイヤルストレートフラッシュなのに」

「は？ 何か言った？」

「いや、何でもない」

と、今度はトランプもしまってしまう。

そして、そのままの姿勢でズズツとお茶を飲む。

「あのさ、だから今のは何だったのさ？」

「……………」

相変わらず無視する武田さん。と、今度は紙と鉛筆を取り出した。そうして何かを書いている。あれは……アミダクジ？

「さあ出来た。零児、右か左かどっちだ？」

「はあ、なんかツツコミ疲れた。右でいいわ」

「そうかそうか右か。ならば……じーこんじーこんじーこん」

じーこん？

「なにそのジーコンって掛け声？」

と、突然武田さんは手を止めてやや赤い顔でこちらを上目遣いで見る。う、ちょっと可愛いかも。

「いいじゃないか。行くぞ」

そういつて少し拗ねたように今度は無言でアミダクジを続ける。その結果、俺が引いたのは○と×の×の方だった。

「×だな」

「ああ、×だ」

「そういう訳で……君は今日放課後、私の練習に付き合うということが決定したわけだ」

「……??? はああああー！っ！!? どうやったらそういうことになる? そう言う訳ってどう言う訳だよ?」

「は? だって零児は今のアミダで私に負けたじゃないか。賭け事に負けたら相手の言うことを聞くのは常識だぞ?」

「いやいや。○が勝ちだったのかよ。つつうか勝ち負けで言うんならすでに俺は四連勝しているぞ?」

「フッ、過ぎた勝利にしがみ付くとは。惨めだ、小さい男だな零児!」

「いや、なんでさ?」

「もうコレは決定したことだぞ? 男なら潔く引き受ける」

「イヤだって。なんでそんな……やらねえよ」

「怖いのか?」

「は?」

「そうだろうなあ。いくら昨日まぐれで勝ったとはいえ女に負けたとなっては示しがつかん。特に主人公としては」

「はてな? 話が見えないんだが……」

「そうか負けるのが怖かったのか。そんな情けない男だったとはな。いや、私の見立て違いか。まあ所詮は意気地なしだ。かえってママのおっぱいでも抱いて枕でも濡らして寝てればいいさ」

「ムッカー! なんか知らんがムカつく……いいよ。やってやろうじゃねえか。そっちこそヒイヒイ言わせてやるぜ!」

と、黙って見ていた二人がここで口を挟んだ。

「最上君、ヒイヒイ言わすって……今の言葉なんか響きがエッチだ

った」

「そうね。教師としてコレは監視が必要ね」

なんのこっちゃ。

「フツ、チョロいな」

「おいそこポニーテール！　今なんて言った」

「何も言っていない。ちなみに私をポニーテールと呼ぶな」

4

そうして放課後

「小手めえんっ！」

「甘いッ……そこっ！」

バシィッ！

「一本！」

結果としては……一応俺の連勝である。のだが。

「クッ、もう一回だ。行くぞッ！」

「ゲェ！　まだやるのかよ」

「当たり前だ……隙あり……胴ッ！」

「させんッ！」

武田のスタミナが底なしなためにいつまでたっても終わらん。ち

なみにジャッジは先生だ。

ちなみに俺は勿論能力を使っていないが武田も使っていない。つまり純粋な技の勝負になっているわけなんだが……。

実際俺が勝っているとは言ってもそんなに実力差があるわけではない。恐ろしいまでの接戦である。実際いつ負けても不思議ではない。まあ運がいいだけだろう。

と言うか俺は防具をつけていないので身が軽い。ここに原因があるのかも知れん。

まあ、剣道具って以上に臭いから使いたくないんだよ。

「くっ……また逃げたか……面ッ！」

「はまったぁ！ 貰い！」

バシィ！

「一本！」

ふう、勝てた。

「ねえ二人とも、そろそろ休憩にしようよ」

「ゼイ、ゼイ……そうだぜ？ 休憩にしようや」

「むう、まあ、光がそう言うのなら」

そうして一応練習は俺の全勝で終わることが出来た。

「はぁ……やるではないか零児。まさか一本も取れないとは思わなかったぞ。剣道の経験は無いんだろう？」

「ああ」

「でもそれにしては強いよね。最上君て」

といいながら片山さんがタオルを渡してくれる。ああ、俺には今君が天使に見える。

「そうね。なんか動きにまとまりがあるっていうか……」

と先生が飲み物を渡してくれる。ああ、俺には先生が神様に見える。

「そうだな。零児は何か格闘技をやった事があるのか？」

「む、なんでそう思う？」

「いやな……動きに無駄が無い。見たこと無い動きだが動きに統一性があった」

ふう、流石に武田は剣道家だな。見破られたか。

まあ、隠すことでも無いし良いだろう。

「ああ、まあ実は昔少しな」

「ふうん。何をした？」

「まあ知らないと思う。すっげえマイナーって言うか名前もついていないようなヤツだから」

「そうか」

コレは嘘ではない。まあなんていうか……里と言うか、最上の家に代々伝わっていた一種のアレだよ。勿論話せないが。

なんて言うか、剣術と言うか、忍術と言うか、暗殺術と言うか。まあ総合的な身体の使い方……体術って感じかな。

それを親父が死ぬまでの間に俺はみっちり仕込まれたからな。今日はコレを剣道に応用してみたんだが意外と使えた。

だが今日勝てたのはその体術が強かったんじゃない。俺は剣道を知っているが相手がコチラを知らない。そんな所だろうな。

と、そろそろ陽が傾いてきている。もうこんな時間か。
長く伸びた影がの隙間から、長い橙の光が差し込んでくる。

「先生。今、きっと外が綺麗ですよ。屋上行きませんか？」

と、武田が提案してきた。うん、偶にはいいこと言うな。

「うん、そうね。最上君。片山さんも行く？」

「はい」

「モチです」

そうして御一行は片づけをして、屋上へと向かうのであった。

ふん、確かに剣道部ならおおっぴらにいけるな。

・

そうしてすると落ちていく夕陽を見る。ああ、いつ見てもいい綺麗だよなあ。

橙の光に照らされた街は美しく、皆言葉も無く唯々その景色を見続ける。

と……。

「ふふ……」

武田が笑っている。

「どうした？」

「いや、零児はこういう景色を見るのが大好きなんだろう？　だって世界は美しいって、そしてそれを感じられる事は素晴らしいことだって、いつも思っているんだから」

「なッ、なんでそれをつ！」

「ふふふ、気にするな。細かい事だ。ほら。この時間は一瞬なんだ。「最上零児」流に言うのならば見ないのは勿体無いぞ？」

「あ……ああ……」

そう、この美しさを心に焼き付けるんだ。

そうして暮れなずむ遠い空を見る。

紅橙の、目に痛いほどの斜陽に包まれる世界。

燃えるような空。高く濫立するビルから、長く伸びる影。

そして、その中に確かに感じる人のぬくもり。人の息吹。その存在感。

この時間は一瞬。しかしその美しさは永遠を内包している。

そして周りには大切に思える人たちがいる。

この上の無い日常。平凡で大きな変化など無い。

だけど、だからこそ、どんなものよりも輝かしく叫びだしたいほどに幸せな時間。

だから、だからだろうか……。

こんな時間、こんな日々がいつまでも続けばいいのに……そんなありえないことを思ってしまった。

そうして、陽は沈んでいく。

平凡、故に至福（後書き）

どうもー、S i k oです。

さて・・・時代は大人です。私の好きなチョコレートはビターなヤツなんです。

そして夜中にコレを書きながら猛烈にビターなチョコが食べたくなつた私はコンビニに行きました。

で・・・何故か帰ってきたら買ったのは肉まんとかアラなのマーチでした。

経過は覚えていません。

やっぱり色々ダメ人間なのかもしれません。私は。

そういえばコアラのマーチのマーチってきつと行進曲って意味のマーチですよ。三月じゃなくて。

ならば何故マーチなんでしょうか？

むしろコアラのラプソディーやコアラのソナタ。

あるいはコアラのワルツやコアラのノクターン。

あるいはポーランドっぽくコアラのマズルカやコアラのポロネーズ。

練習曲でコアラのエチュードなんていうのも素敵だと思いませんか？

ああ、チョコとコアラのハーモニー。それを人はコアラのシンフォニーと呼ぶ・・・みたいな・・・。

ああ・・・何書いてんだろ私は。頭がボーっとして・・・。

とにかくまあ・・・眠いです。徹夜です。

この文を読んくれた皆さん。ありがとうございます。

心からの感謝をささげます・・・。今後ともどうかよろしく願います。

ではまた。

幕間

幕間

暗い、どこかの廃ビルの中にある一室。二人の男が話している。時間は夜だろうか。照明は窓から入ってくる月明かりだけ。それに埃っぽい部屋が照らされている。

窓の外にはネオンや車の明かりが見える。繁華街の中にある廃ビルだった。

「うへへへへー……そういうわけでこの街に送り込まれたのは女の能力者だぜ。なかなかいい女だったな。アイツは俺がもらう」

そう言っているのは赤い髪の毛にサングラス。タンクトップにさらに腕には刺青をしている異様な格好の若い男。

「ふむ……そうか。タイプと強さは？」

そうして相槌をうつのはその部屋の暗い闇に溶け込むような全身黒づくめの長身な壮年の男。暗くなっており顔は良く見えない。

大きな黒いコートを着ているせいで体型は良くはわからない。が、身長は二メートル近くあるのでどうしてもやや細身に見える。

「ああ、肉体強化型だ。俺のハッキングを防いだからかなり強力な能力者だ。でもまだ精神面で甘いところがあるぜ。俺とはちよっと相性が悪いけどアンタなら大丈夫だろ。まず負けない」

返事をする赤毛の男。

「そうか……お前の能力を防いだか。しかし所詮は肉体強化型。強化されたとはいえ人体は人体だ。肉が皮を被って歩いているに過ぎん。所詮鋼鉄の刃や銃弾には勝てん。恐れるべき存在ではない」

「ヘッヘッヘー、流石は「原典」様だねえ。言うことの重みが違うぜえ。クヒ、クヒ、ウヒひゃヒハハハ！」

僅かに不愉快そうな男。笑い声が気に入らないのだろうか……。

「ウベヒヒヒ……フヒィ……。あ、そういえば報告し忘れてたけどこの街にはもう一人若い男の能力者がいるぜ？」

「ほう、それは興味深いな。そいつも国の狗の能力だけ獲得した出来損ないか？」

「いや、欲望に引きずられるタイプの純粋な能力者だ。ただおかしな所がある」

「なんだ？」

「そいつがその肉体強化型の女を殺そうとした事があったんだがギリギリで踏みとどまりやがった。まったく意味がわからねえ」

「む……そんなことが……？」

「ああ、そう言えば奴は研究所の存在を知らなかったな。もしかしたらアンタと同じ「原典」かもしれねえ」

「タイプは……？」

「超強力なハッカータイプだ。俺の能力が一度侵入してながらもそれを追い出しやがった」

「ふん、そうか」

「なあ……原典はもしかして殺戮を好まないとか欲望に逆らう力が強いとか……そんな特徴でもあるのか？」

「いや、そんな物は無い。むしろ研究所で精製された能力者よりさらに強く殺戮を好む傾向を持つ筈だ」

「へえ。じゃあなんであいつは殺さなかった？ あいつ自身の精神力が強かったとか？」

「いや、原典の業はそんな物で払拭できるほどは甘くは無い。おそらく……暗示か……あるいはさらに強力な洗脳に近い物で脳のどこかにロックがかかっているのだろう。しかしそのロックを解除してしまえばあるいは……ふむ」

「へえ、気に食わねえなあ。それ。殺戮をしない純粹な能力者なんて……クヒッ」

「ふむ、まだ敵になると決まったわけではないが敵になった場合はおそらくお前では太刀打ちできないだろう。コレは本腰を入れて準備をしておかなくてはな。敵にならないようにロックを解除するのも手だが……」

「ケッ、俺じゃあ太刀打ちできないって……ホザきやがれよ。ってオイ！ なにアンタ能力開放してんだよ！」

「ふむ……いや、気にするな。ちよつとした娯楽の時間だ……」
「は？」

カツ……カツ……カツ……カツ。

下からだんだん近くなる足音。

そうして階段を上ってきてドアを開けたのは……スーツを着たキヤリアウーマン風の若い女だった。

「おいおい、どっから来たんだこの女？」

「なに、窓から下を見たときにこの女が歩いているのが見えたからな、呼んできただけだ」

「はあ？ ここ6階だぜ？ アンタの能力ってそんなに範囲広かつ

たのかよ？」

「……………」

「あーもうシカトですかー？」

「邪魔をするな」

「へーい」

カツ……カツ……カツ……カツ。

そうして空ろな目をしたまま黒ずくめの男の目の前で立ち止まる女。

そうして男はつぶやいた。

「戻れ」

ガクン。

「へ、あ、わ、私は、あれ……ココは？ アナタ誰？」

「ふむ。私は君を看取る者だ」

「へ？」

「絞まれ」

「あ……あぐうう……！」

そうして突然女は自分で自分の頭を掴むと……反対側に向けて回そうとし始める。

メキメキメキと音を立てて強く自分の手でありえない方向に動かそうとするために骨の軋む音が聞こえる。

「あ……いや……なんで……私……私の……手が……」

「あーあ、ケヒヒヒッ！ 相変わらずえげつねえ能力じゃあねえか！ 流石は原典！俺も誰かに誰かを殺させることは出来るけど相

手の生存本能までは曲げられねえよヒヒッ！」
「……………」

男は答えない。ただ無言で能力をこめていく。

「い…………いやあ…………お願い…………やめて…………やめて…………ゆる…し…
…」

「安心するがいい」

「な…………なに…………が…………？」

「今の君は美しい」

「へ？」

バキベキベキッ！

そうして女の顔は180度回転し絶命した。

「あーあ、やっちゃった。うわっ、ひでえ死に顔。相変わらず悪趣味だなアンタ」

「ふむ。褒め言葉として受け取っておこう。死体の処理は任せた」

「は？ 俺が？」

「なんだ。嫌なのか？」

「チッ…………やりますよ。やりゃー良いんだろう？ マッタク…………」

「ふむ」

そうして死体を処理をする赤毛の男に思い出したように黒い男は話しかけた。

「そういえば、その原典とおぼわしき少年。名前はなんていった…
…？」

「ああ、ヤツならその女的能力者に最上零児って呼ばれてたぜ？」

「もがみ…………れいじ…………だと？ まさか…………最上の宗家の…………か…

…。あの時の……まさかココで会おうとは」

そうしてその男は口の中で名前を反芻する。

「なんだ、知り合いか？」

「ああ、ヤツはおそらく私を覚えていないだろうが私は良く覚えて
いる。ふふふ……まさかあの時の最上の子供がとはな……フ……フ
フ」

「フーン。まあ何でもいいけど」

そうして赤毛男は死体の後片付けを続ける。

窓の外はネオンが光り、社会無関心だ。他人が誰か一人いなくな
ったつても動き続ける。

「なに、それならば此方から会いに行ってやるか」

「はへ？」

「その最上零児は今は何をしているんだ？」

「あーん？ 高校生っぽかったぜ？」

「そうか、一度会いに行ってみるか。昔馴染みの息子のよしみとし
て……な」

「なあ？ それって学校にか？」

「ああ」

「俺も行っている？」

「ふむ、来たいのなら好きにするが良い」

「えーマジ？ やったね！ いやさー最近街の女共の目も死んで
るし楽しいことなかったし……何やっても詰まんなかったんだよべ
ヒヒヒッ！ 久しぶりの刺激だ！ あージョシコーセー……んー
いーヒ・ビ・キ！」

「いつ行くか決まり次第連絡をする」

「あのさー、まさかとは思うけどただ本当に挨拶行くだけじゃねえよなー！」

「何を言っている。挨拶に行くんだ。その最上零児が本当にあの時の子供なら簡単にはロックは外せないだろうから……。ふむ、しかしどんな態度だろうとお前の勝手だがな。どのみちお前には最上零児のロックは外せん」

「へーい。解りましたセンサー！　ボクちゃん学校行くの五年ぶりなんで良く覚えてないんですけどー！　おやつは五百円までいいんですかー、あとバナナはおやつに入るんですかー！」

「ふむ、意味はわからないが好きにするが良い」

「ウヒヒハハハッ！　んージャアネー持ってクー！　ウヒヒヒヒへへへへッ！」

「……………」

もう深夜を回っている。しかし外ではネオンは光り続け、人の波も途絶えることは無い。

「えー…………つとバナナは……ねえや。買ってくるか。じゃあ俺帰るからさー、日にち決まったら教えてくれ！」

「ふむ、前日にはしておいてやる」

「あははへへーありがたいねー！」

そうして若い赤毛の男は出て行った。

一人残った男は何事も無いように外を見続ける。

「フ……フフフフ……。能力者としての矛盾を父親に抱えられさせて……苦しいだろう。今私が解放してやろう……最上零児」

幕間（後書き）

どうも、S i k oでふ。

さて、今回は話中の段落がありません。

でも勿論手抜きしたわけじゃないんですよ？　今回は時間が時間だけに他のキャラクターはみんなグッスリお休み中なんです。

一応少し前まではたけだーゆりかーだけはだけは見まわってたんですがあまり能力感知が巧くない上、場所がずれてたので今夜はあきらめて帰って寝たところなんですよ。

だから今回はまあ、ここで纏めるしかなかったと……。

そう言えば「幕間」皆さん。コレちゃんと読めますか？

間違っても「まくま」とか読んではいけません。

これは「まくあい」です。と言ったちょっとした注意なんかしてみたりしてー！

・・・まあいいや。

さて、話は全然変わりますが……。

先日恋愛の欄にアップさせていただいた短編小説「水」なんです
が、改めて自分で読み直してみると言うか山無し意味無し落ち
無しの上げえ作品になっております。

しかし一応アレは初めて書いた短編なんです。私のパソコンの中のネタ帳にはそりゃああいう感じの尻切れトンボみたいなのがゴロゴロしてゐるんです。

それで、まあ放っておいても自分の言った事はすぐ忘れる自身のあるS i k oなのでそのうちウサギの糞のごとくポロポロ短編も出すとは思いますが、もしも今回のアレを読んで他のも読んでみた言うというウルトラマニアックな方が・・・まあいい気もしますが、もしそういう奇特な方がいらっしゃったら、メッセーじがあればまた二三個転がしてみようと思っっているしだいであります。

ではまた。

かわりゆくもの。かわらないもの。

1

「面ッ！」

「甘いッ！　そこッ！」

バシィ！

「今のは……有効じゃないわ。試合を続けて」

「はい……どおおおおっ！」

そうしてまた今日も武田の剣道の相手をしてやっている。実は相手をし始めてもう三日にもなる。

まあ間に入った土日にはしていないんだが。

本当は俺もこんな面倒……というか、能力が漏れかねない事はしたくないのだが、まあこんな事があったのだよ。うん。

そうだ、アレはちょうど初めて放課後に良くわからんまんま武田の練習に付き合わされた次の日のことだったんだよな。

そう言えばあの日は一週間の中で唯一授業が五時間で終わる日だったか……？

2

イエイ、今日も授業は終わったぜい。

ちなみに今日は一週間の中で唯一授業が五時間で終わる日なんだよな。なんか一時間違うだけで随分楽な気がする。

でもそれは俺だけじゃないらしい。みんなにもまだ元気があり皆は帰りに何処によっていくとかそういう話を盛り上がっているし。しかし俺はというと……ツルみやすい隆貴の馬鹿は例によってサボりだ。まあ流石に一人で寄り道というのも少し寂しいしな。

でもまあ最近色々あったから久々にのんびり寝れるしいいか。よし今日の今後の予定は昼寝ってことで……。

そういうわけで予定をハートの予定帳に書き込むか。右クリックの対象を上書きして保存を選んで……。

「零児！」

はれ、今の俺を零児と呼ぶのは……武田か？

でもそういえばアイツってうちのクラスじゃないんだよな。

なんか最近片山さんにと話すためかよくウチのクラスに入り浸ってるからなんかも慣れちゃってるけど。

あれ、でも見るようになったのここ最近だよな。俺も最近まで知らなかったわけだし。まあどうでもいいか。

「何だよ武田。片山さんならさっき先生に何か頼まれて連れて行かれてたけどもうすぐ帰ってくると思うぜ？」

「ああ、そうか。いや、でもそれはいい。今回は零児に用があるんだ」

「は、俺に？ 何の用？」

「うむ、今日も私の練習に付き合って……」

「断る」

「む……何故私の言うことは聞いてくれないんだ？ 零児は相手が困っているときには言うことを聞いてくれるって……」

「あーそれね。それは相手が本当に困っているときだけ。それに武田ってスタミナありすぎて相手すると疲れるもん。それに俺の今後の予定は昼寝って心のスケジュール帳に書き込んだからもう変更は効かないのです。はい」

「そ、そんな理由で。酷いではないか零児！」

「んー、酷いって言われてもなー、もう決まっちゃったことは決まっちゃったことだし。という訳であていおすあみーごー」

「ふむ、どうしても私に付き合うつもりは無いと」

「ああ。悪いな」

「ふう、そうか。ところで零児。賭け事は……」

「嫌いだ。嫌いだからさっさとその十円玉をがま口の財布にしまえ」

「うー……前は好きだって……」

「あのなあ、あんな理不尽な賭け事につき合わされたら誰だってギャンブル嫌いになるわアホ」

「う……む……ならば……！」

「あ、ちなみにあみだくじも嫌いだから」

「あみ……むー、昨日はやってくれたのに……」

「昨日は昨日。今日は今日。あ、明日は明日の風がふくうーってわけで帰るから。ちやお」

「ということは……どうしても、絶対に私と付き合うつもりは無いんだな？」

「ああ、悪いね。零児君はおねむなんです。やっぱこういう時って自分に素直にならなきゃね。うん」

「そうか……ならばコチラも考えがある」

「は？」

そういうと武田は突然すうと息を吸い込んで……。

「何故だ零児！昨日はあんなに激しく（練習を）してくれたじゃないか……ッ！」

「ブーッ！！」

何叫んじやってますかコイツはーッ！

「あんなに……あんなに（賭け事を）好きだといってくれたから……。私だってあんな事やこんな事コイントス トランプだけじゃなくてあそこまでの事あみだくじまでして答えたのに……。一度（練習を）ヤツた女には興味はないというのか……そうやって私を捨てるのか……」

あわわわわ……何を言ってやがるっ、そんなこと大声で言ったら……あ、隣にいた伊藤君が鼻血吹いて倒れた。

「って馬鹿ーっ！ その言葉の隠し方に俺は明らかな悪意を感じるぞっ！ つつかそんなこと言ったら……」

そうして聞こえてくる周りからの囁き。

「ヒソヒソ……最上君って」

「ヒソヒソ……大人しい顔して実は」

「ヒソヒソ……鬼畜？」

「ひそひそ……変態……多分S」

「ヒソヒソ……あんな美人に」

「ヒソヒソ……何が不満なんだ」

「ヒソヒソ……羨ましいヤツめ」

「ひそ砒素で……最上殺す」

あああ……俺のイメージが……。それにしても皆バラバラに話してるはずなのに繋がると言葉の意味があるのは何故……。

関係と噂と思惑と鼻血が交差する魔境。そう、まさにココは地獄
絵図っ……！！

「ってそれどころじゃねえ！ オイ武田！ さっさと訂正しろ！」

「私の何がそんなに気に入らないのか。そんなに私はしつこかったか？ しかしそれを言うならあんな位でへばってしまいう零児が情けなくもあるんだぞ？」

そうやって上目使いで見てくる。う……嘘だってわかっているのにその仕草は中々攻撃力が高い。

「ひそひそ……最上君って」

「ひそひそ……変態なのに」

「ひそひそ……早漏」

「ひそひそ……最低」

「ヒソヒソ……最上のイ○ポ」

うわあああ……もうどんどん取り返しのつかない方向へ行っている気が。って言うか最後の一人ってただの悪口だよな。

「クソっ！ 何が望みだ」

「だから言っているだろう？ 今日私の相手をしてくれれば良いだけだ」

クッ……応じるのしかないのか……？
しかし男として脅しに屈するのは……ううう、俺はどうすれば。

「さあどうする？ どうしようが零児の自由だぞ」

「クソッ……汚ねえぞ」

「なんだ。もう私の相手はしてくれないのか？」

「くっ……それは……」

ガシャン！

「あれ、今何か割れる音が？」

「へ……ひ、光ッ！？」

そこのは呆然と立ち尽くしている片山さんがいた。音はどうやら先生に飾られるように頼まれたとかそんな感じの花瓶が落ちた音のようだ。

「ゆ、ユリちゃん……」

「ひ……光。ち、違うんだ。コレには深い訳が……!」

「ユリちゃんの……ユリちゃんの裏切り者ーっ!」

ズビガンッ!!

あ、なんか武田が凄いショックを受けてる。

「ユリちゃんなんか……嫌いッ!」

そう言っって片山さんはわき目も振らず駆け出していってしまった。

「ああ、光い! 私は別に零児の事なんて……」

と、突然武田は俺に向かってギツッと睨みを利かせてきた。うわっ、怖ええなあ。

「クッ……コレもすべて零児のせいだ!」

「えええ? 俺のせい? それは無いって。つつうかさ、片山さんは何に怒ってた訳?」

「ええい、そんなことも解らないその零児のヘタレ鈍感っぷりがいけないって言うんだ解らないのかこの甲斐性なし!」

「うわああん、甲斐性なしって言われたあ」

「泣いている暇があったらさっさと光の誤解を解きに行くぞ? さっさと来い!」

「えええ? 俺は皆の誤解を解かないと」

「皆の誤解なんてどうでもいい。光の……光の誤解を解かないと」

「だって俺の身にもなってよ。放課後に他のクラスの美女が来てい

きなりエロ談義になったと思ったらうちのクラスの子も巻き込んだ痴話喧嘩だなんて……クッ、面白すぎる。いったいコレは何処の昼メロなのか？」

「馬鹿なこと言っている暇があったらさっさと行くぞ！ さあ……！」

そういつて武田は俺の手を取って駆け出した。そうして後ろから聞こえる話し声。

「最上君って……たらし？」

「まさに女の敵ね。最低」

「って言うかコレって……この後3Pになるのか？ 身体を使って慰めるって奴？」

「うわあ、アイツってそんなに……二人相手にするなんて……凄い体力」

「最上君あんな人だなんて思ってなかったわ。今後は目を合わせないようにしなきゃ。妊娠しちゃう」

どうふああーもう俺明日から学校これない。

そうしてしばらく武田に手を引かれて走りながら疑問に思っていたことを聞く。

「あのさ、武田ってなんでそんなに片山さんにこだわる訳？」

「だって、光は友達なんだ。だから、光は友達だから。友達の……誤解は解きたいんだ。私は……」

「ん……なんか解ったような解らないようなんだけど、それなら仕方ないか。手伝うよ」

「ああ、すまない」

「いいって、気にするな。俺ってば打たれ強いんだ」
「うん、知ってる。でもありがとう」

3

そうだったな……そうやって武田と片山さんを探してたら体育館の近くで泣いてた片山さんを見つけて、それで二人で急いで誤解を解いたんだよ。

そうしたら何故かそこに先生も混じってきて気がついたらなし崩し的に俺はいつの間にか武田の練習に付き合うことになって……。で、何故そうなったかは知らないがそれからは何故か練習の相手をず毎日やらされている……っつと！

「面胴っ！」

「あぶねっ！」

バシィッ！

ふう、今のは少し危なかったな……と言うか。

「ちょっと待ったあ！」

「なんだ？」

「いや、少し疲れた。休もうぜ？」

「む……まあ、そうだな。先生。休憩に入ります」

「解ったわ。休憩ね。片山さん？」

「はい。わかりましたー」

そうしてジャッジをしてもらってた先生と実質マネージャー状態の片山さんを入れて休憩に入る。

片山さんに貰ったお茶を飲んで先生に渡されたタオルで汗を拭く。うん、相変わらずVIP待遇だな。

「うむうむ、中々じゃな。余は苦しゅうないぞ」

「ん……何か言ったか？ 零児」

「いや、なんでもない。一度言ってみただけだ」
「そうか」

そうしてマツタリしながらふと疑問になったことを聞く。

「そう言えばさー、元々居た他の部員はどうしたの？」

「ん……やめさせた。部長権限だ」

「は？ そんなことできるのか？ って言うかまたなんで……」

「いや、あんな腑抜けたちは百人いても物の役にも立たない。それでも向上心とかやる気があればいいんだが、それも無い。来てもは遊んでいるだけだ。だから追い出した」

「はあ」

でもコイツの言うことはどうも過激すぎて当てにならない。そうだな……。

「ねえ、先生？」

先生ならちゃんとした事実を知ってるだろう。

「なに、最上君」

「本当にその部員達ってそんなに弱かったんですか？ こいつが強

すぎるだけじゃなくて？」

「あ、ええ。確かにひどい物だったわよ。なんかさ、武田さんって美人さんでしょ？」

「う……まあ可愛いというよりは美人って感じですかね。黙ってれば……ですけど」

「それで来た人はみんな武田さん目当てだったみたいなのよ」

「はあ……そうですか」

そうして目を瞑って行儀よく正座してお茶を飲んでいる武田のほうを見る。

外から入ってくる光に照らされたその姿は、格好は防具を着けたまんまという色気の無い物だけどその彼女の持つ雰囲気と容姿がいあまって凛々しくて、綺麗だ。

「ん……まあ気持ちはわからなくもないかな」

「ん、何か言ったか零児？」

「いや、なんでも無い」

「そうか」

そうして俺もお茶を飲む。

それにしても……。

「なあ、俺っていつまでこんなことしてればいいの？」

まあ実際最近は少し楽しくなってきたんだけど……。

「私が勝つまでだ」

「さいですか。なら俺が負けたら終わっていいんだ」

「は？ 何を言っている。零児が負けたら零児は部員だぞ？」

「ん……ちよっと待てよ。俺は武田に負けたら部員にならなくちゃいけないけど負けるまで相手し続けなきゃいけないのか？」

「ああ」

「それってさ、結局ずっと部員状態ってことじゃね？ 実際部員になってもやることは変わらないんだし」

「そうか、ということは部員になる気になったか。さあならばここにサインを」

「いや、そんなこと言っていないっつーの」

「むう……。つまり違いは、部員の名簿に名前を書けないと言う事だ」

「それだけ？ たったそれだけかよ」

「ああ、そうだ、だからそれならいっその事ここにサインするか？」

「それはヤダ」

「むー……」

ああ、でも実際この居心地は悪くない。

皆はいい人だし大福は美味いしお茶もおいしいしなんだかずっと居たくなるようなそんな微温湯のお風呂のような空間。

はあ、安らぐ。

と……。

「そう言えばさ……」

「ん……なんですか先生？」

「明日は実力テストよ。いくら成績には少ししか影響しないといっても勉強しなきゃダメよ。してる？」

「は……明日？　なにそれ……実力テスト？」

「何を言っている零児。明日は実力テストだぞ。多分ウチの学校でも松山と山城以外の者は皆気にしていることだと思うぞ？」

「ね……ねえ最上君。まさか……」

「ああ、忘れてた。まあ実力テストだし実力で受けるからいいか」

「良い訳ないでしょ！　ダメです。勉強しなさい！」

「えーっだって先生、俺勉強嫌い」

「好きな人は珍しいわよ。いい？　留年なんかしたら承知しないわよ！」

「えー」

「えーじゃありません。私が教えてあげることが出来ないから……片山さんと武田さんに教えてもらいなさい」

「え……でもそんな邪魔したら悪いって」

「へ……私は全然……むしろ……」

「そうだ、私も相手をしてもらっているんだし遠慮なんかしないでいいぞ。零児」

う……でも大体俺自身が勉強したくないんだけど……そうだな。

「う……あ、ちょっとトイレ行って来るわ」

「ん……」

幕間一　山園綾子 side

ふう……それにしても。

「まさか最上君が実力テストの日すらも覚えていないなんて……教師としてはショックだわ」

そうしてガツクリとうなだれる。はあ、留年とかして欲しくないわ。特に最上君には。

と……片山さんが聞いてきた。

「ねえ先生。最上君の成績ってどうなんですか？」

「んー……っとね、なんて言うか良くはないわね。中の下というよりは下の上といった所。赤点こそ無い物の少しでも気を抜いたら危ないわよ。いつも赤点ギリギリで何故か赤点じゃない芸術的なまでの超低空飛行なのよ」

「そんなに……」

「零児はアホだったのだな」

「いやユリちゃんそんなにハッキリ言わないでも」

そうして私もお茶を飲んで最上君が帰ってくるのを待っている。

何故か皆黙ったまんまだ。彼が居ない間は意外と静かだ。

彼がいると何故か皆話が進む。なんと言うかそれも彼の人徳かもしれない。

うーん、案外ホストとかやったら雰囲気はホストって感じじゃないけど違うけど売れっ子になるかもしれないわね。

あれ……もう最上君がトイレに立ってから十五分ほど経つだろうか？　なかなか帰ってくる気配は無い。

「それにしても……最上君。遅いわね」

「そうですね……」

ヒュルルルル……ストツ！

突然何処からとも無く赤いかざぐるまが飛んできて針になっている先の部分が畳に刺さった。針の部分は手紙がついている。

「ねえ……この風車って」

「ああ、水○黄門のかざぐるまの弥七さんの武器兼通信手段……」

「それ以上言わないで武田さん。何処から突っ込んでいいのかわからないわ」

「取りあえず……手紙を読んでみようよ」

括りつけられた手紙を広げて読む。えー………つとなになに………？

「眠いので帰ります。探さないでください。最上零児」

「……」

「……」

「……」

「って何やってるのよ最上君はああああああ………っ！………！」

その大声は職員室に残っていた他の先生にも聞こえたらしい。少しだけ反省。

でも最上君がやっぱり……悪いよね？

幕間二

「もしもしー」

「ああ、私だ。明日最上零児に会いに行くぞ？」

「えーマジでー。うれしー。俺のほうは準備万端だぜ。バナナも買ったし」

「そうか。明日は朝までに私の部屋に来ておけ」

「うひふふうひひいいっ。へいへい了解ー！ うっひよう楽しみだぜえ。じゃあなー」

「ああ」

ガチャリ。

「ふふふふ、楽しみ……か。私も楽しみだ。ふふっ、まさかあの時の子供に会えるとは……な」

かわりゆくもの。かわらないもの。(後書き)

どうも、S i k oです。

今回は推敲に結構時間がかかりました。

この程度で推敲後か笑わせてくれるなガキが、と思われる方いたらごめんなさい。

でも今回は結構真面目にやったので大きなミスは無いと思います。

話も大きく追加されて推敲前と推敲後ではほとんど別の話になった気がします。

でもこの推敲がなければ後二日は早く投稿できた気も・・・。

まあそれは言わぬが花ですかね。

今回も読んでくださった方、ありがとうございます。

さて、そろそろお話も大きく動き始める、そんな所です。

次の回はテストの日のことが中心です。

だから話の筋は当然・・・？

まあここで書いてもしょうがないや。

ではまた。

夢幻

ぼやけていた景色がピントを持ち、徐々に焦点が定まっていく。
風景は色を持ち、そして動き出す。

「良いか零児？ 体裁きの基本は足使いだ。強くになるには何はともあれ移動の重要さを知らねばいけない。解るか？」

「うん」

「ならば武器はなんでも良い。さっき教えた足裁きでかかって来なさい」

「う、うん」

山奥の……にある小さな道場。

その小さな広場のような所で子供と大人が向かい合って立っている。

「まだだな。動きが平面的だ。お前ほどの才能ならばもっと身体を立体的に動かせるはずだ」

あれは……父さん。

「いいかい、零児。いくらお前が私以上の才能があるとはいえ肉体強化型との対一の戦闘はやはり不利だ。しかし私たちほどの能力者になれば軌道を読むのも容易い上に、禁じ手とはいえ一時的に自

分の脳に侵入して肉体を強化することも出来る。さらに私たちの能力の根源は「解る」と言う事だ。すべてはその応用なのだから勿論空間把握能力も並の能力者より高い。だから障害物はあればあるほど有利になるということ覚えておきなさい」

ああ、父さん……会いたかった。

「まだ出来るか？ 零児」

「うん。まだまだ大丈夫だよ」

「よし、それじゃあもう一回だぞ」

ああ……懐かしい。また、こうやって……。

鍛錬のときは厳しくていつもは優しい……父さん。

「二人とも……お茶が入ったわよ。あなた、零児、いらっしやい」

誰……？

「ははは、それじゃあ零児。いったん休憩だ。休憩が終わったら、またやるからな？」

「うん、わかった」

「ねえあなた。なにもそんなに力を入れないでも。零児には私たちの後を継がせる気は無いんでしょ？」

「う……まあそうなんだけどな。でも零児の筋が良いからついつい

力が入っちゃってな。まあ親子のこみゆにけいしょんってやつだ」
「もう、あんまり能力を使いすぎてどこか悪くなっちゃったらどうするのよ？」

「大丈夫だって。そんなへまはしないから。それに零児だってそんなにヤワじゃないさ。何しろ私と……の息子なんだから」

「はいはい。でも程々にしとくによ？ 零児、こっちいらっしやい」
「うん」

「あーっ、ふう、もう零児は本当にお・あ……子だなあ。そんなんだと立派な男にならないぞ？」

「何言ってるのよ。まだこんな小さい零児に体術を教えているあなたのほうがよっぽど変なのよ。ねえ零児」

「ううん、でも僕強くなりたいから、別に辛くないよ。強くなって・さんを守ってあげる」

「うふふ、ありがとうね零児。頼りにしてるわよ」

「ああ……零児に私のポジションが取られた。まさか幼な子に追い抜かれるとは……しくしく」

だから誰なんだ？ あの「僕」が嬉しそうに抱きついているのは。ノイズの中、途切れ途切れの景色に、世界が遠ざかっていく。

風景は変わり、視点は俯瞰となる。これも、ありえない光景。
紅い……。

炎の色か、血の色か、或いはその両方か。
何もかもが紅く染まっている。

目に入る物はひたすら紅く、何が起きているのかもわからない。
眼球は熱く、世界は揺らいでいる。

「零児……来るなっ！」

「そんな……いやだっ、僕は……」

だから誰なんだよ。そこで倒れているのは。思い出せよ俺のこのポンコツな頭め。コレは思い出さないとイケない事だ。

そんな大切な事がわからないほどに出来が悪いクソ頭だと無いほうがマシだ叩き割るぞこの野郎！

だから思い出しただろう？

そう、それは、とても、大切な……。

「ほう、最上の跡取りか……？ ふむ、武烈は薄情なのだな。……

との最後の別れだ、させてやればいいではないか」

「宗全……貴様ッ！」

「来い……武烈ッ！」

ガキインッ！

触れ合う刃と刃。

「……ふむ、流石は最上の宗家といったところか、まさかこうも簡単に右腕を持っていられるとは……」

「殺す」

「覚えておけ最上武烈。その怒りが敗因となりえることを……」

「……………」

「そんな、僕が、僕が……を守るって言ったのに」

「零児……すまな、い」

「僕の、僕のせいだ。僕が弱くて……を守れないから」

「それは……違う。零児のせいじゃ……ゴフツ。ああ、あまり時……間も無いな。すまない……零児」

「そんな、あ、とう……さん？」

「ああ、家が焼け落ちる前に……外に出て……」

「う……？」

「ふう、はあ、行くぞ……」

「僕が……僕がアイツを……」

「やめなさい。零児は……そんな……ことは……」

「あれ、父さん。なんで……そんな身体で能力なんか……使ってる……の？」

「コレは私の、わがままだ。本来、私に、こんなことを、する資格は無い。ああ……でも、こんなことを、私はやりたいと思ってしまふ。もしかしてこれが……君の枷になって……しまうかもしれない。すまない。でも、どうしても、零児は、こんなことに縛られるべきじゃないって思うから……零児。はあ。ダメな父親だったが……私の最後のわがままだ。抵抗を……弱めてくれないか？」

「う……うん」

「能力……開放……出力……最大……。読み取り、および、上書き開始」

「……………」

「……の事は、ああ、忘れなさい。こんなこと無理には・・グツ……」

「……………」

「それから……ハア……持ってくれ私の体……まだ……伝えたい事が」

「……………」

「お前は自由に生きれば……いいさ。ハア。正直……私は、お前に私と同じ道は歩かせたくない。もう、私達み、たいな人間は、必要無い時代になったてことかな……クッ……」

「……………」

「それから……それから……これから君が住む場所は……に、兄さんの家へ……」

暗転。

夢幻（後書き）

さて、大分お話も進んでまいりましたが、まだ先は長いです。

ネタがあるって喜ばいいのやら完成が遅れるって悲しめばいいのやら。

取りあえず今回も読んでくださった皆さん、ありがとうございます。

ちなみに零児の父親の名前は武烈でぶれつと読みます。

皆さんちゃんと読めたでしょうか？

それからつい最近投稿した短編の「天使」一応書いておくと作品分類はその他でコードはN3796Aですけど我ながらアレはちよつと無いなーって感じですね。

ちよびつと反省。ごめんなさい。

でもまあ本来は私は普段はああいうの書いててこの憐神だけが特異なんですよ。

まあああいうのだったらいくらでも書けるんですけどねー面白くしようとするのは難しいですねー。

でもコレもつまらないって人いたらゴメンなさい。

ああ、怒られる前に謝ってしまうう小心なワタクシ。

そんな俺をみんな許してくれえ！

・・・ってなんのこっちゃ。

まあいいや。

ではまた。

面会(1)

1

目が覚めた。朝……か？

あれ……俺、は、何を……何か、とても、大切な事を見ていた気が。

何があっただったっけな。うん……。

思い出せない、な。まあ良いか。思い出せないんなら仕方が無いな。今日は実力テストだし早く起きて準備しなくちゃな。

そうして洗面所に言って顔を洗おうとしてふと自分の顔の異変に気付く。これは……涙の痕？

なんで俺、コレ……は？

そうしてその涙の痕に気付いた途端心がとても寂しくなりまた涙が溢れ出す。

なんで、俺は泣いて……その原因がわからない。

しかしわからないままただ透明な涙は自分の意思に関係なくずっと流れ続けている。おかしいなあ、何も悲しい事なんか無いはずなのに。

しかし、唯一悲しい事があるとすればそれはただただ流れ続けているその涙の原因がわからない。

その事実だけが何故だか無性に悲しかった。

2

そういうわけで今日は実力テストなんだよね。

そうしてついに目の前に置かれたテスト用紙を前に気合を入れなおす。名前の所に最上零児……っと。そういえば名前書かないと0点になるってホントかな。

フッフッフ、でもさ、俺の名前って結構カッコいいよな。などと自画自賛してみる。まあいいや。

さあ、問題はこれからだ。さてこの実力テストというのはある意味すべてのテストの中で俺的には一番つらい物だ。

何しろ普通のテストは数日に別れて行われるので一日あたりの時間は三時間ずつ位で、日数はあるが一日当たりはそれほどつらくはない。

しかし、この実力テストというのは主要五科目を一科目50分ずつで一日でテストしてしまおうという物なのだ。

全く日本の教育界は何を考えているんだろうね。少しは生徒の体力の事も考えて欲しいってもんだよ。

そうして一時間目のテストは……よりによって俺の一番苦手な英語だった。

もう何が書いてあるのか全くわからん。なんだかもう外国語読ん

でるみたいな気分だね。まあ外国語なんだけど。

しかしセンター試験対策なので実は別にマークシートと言う訳ではないが、結構選択問題が多い。

まあ俺は記述問題は答書けないから、せめてコレだけでも埋めておくことにする。

そうして一から六までの数字の書いてある鉛筆を転がす事にする。フッフッフ、まあすべては運任せってことになるがな。

まさに神頼み、ああ、キリエ・エレイソン（主よ憐れみたまえ）……まあ別に俺はキリスト教信者じゃあ無いんだけどね。

でも昔のグレゴリオ聖歌とかはコレとあとキリスト・エレイソンだけで歌詞ができてたりする曲もあるわけだし、神頼みしとくのも良いでしょ。

大体グレゴリオ聖歌と言うのは、六世紀ごろに教皇グレゴリオ一世がローマ中コレで統一せいつて命令出して使われるようになった聖歌だったようなムニャムニャ。

だから実に歴史のある呪文（？）だと思っただよ。うん。だからそれを使えば少しは運もでるかも知れん。

と言うわけで一問目の四択は……鉛筆の3の数字が書いてある面だから3……と。

二問目は……2だな。三問目は……1。四問目も……1だな。

そうして五問目は……何い！七択だと！？俺の鉛筆は六面だから一つ足りんではないか！

ああ、神は俺を見捨てられたのか、ああ、もう神も仏も無いこの魔境。生まれてきた事が最初の悲しみだったのかも知れん。

……………。

まあいいか。俺は神になど頼らんくても大丈夫な男なんだよ。フハハハハハ！

神は死んだ。そんな物はルサンチマンに過ぎん。俺は現実を直視できる「超人」なのだよ。

そうして現実を直視するため問題用紙を見る。

………うわぁ、何にもわからん。なんか外国語読んでるみたいだよ。まあ外国語なんだけど。

あ、コレさっきも言ったな。

幕間一 片山光 side

そうして名前を書いて私の実力テストは始まった………始まったわけなんだけど。

集中できない。いや、確かに長すぎる一日になるであろう今日のこれからのテストを考えて気が滅入っているって言うのもあるんだけど。

一番の原因はさっきから聞こえる………。

コロコロコロ……カラコロコロ……。

って言う音なんだよね。

ああもう………うるさいなあ。この静かなテスト中の教室で音がすると集中できないじゃないもう！

いったい誰よ、多分松山君かな……？

そうやって松山君のほうを見ると……さすがに今日は来ているのはいいんだけど……開始五分にして……寝てる。

金髪の頭を机に突っ伏して……お休み中みたい。まさかもう全問解いたとか……訳無いよね。

良いのかな……まあ良いか。松山君だし。でもそうなるこの音はいったい誰が？

そうして音のほうを辿ると……うわぁ。

よりによって最上君だった。しかも音の発信源は鉛筆。どうやら鉛筆を転がしてその面で選択問題の答を決めているみたい。

ふと先生のほうを見てみる。と……監督に来ている山園先生も最上君の方を見て頭を抱えてる。

それはそうだね。何しろ自分の氣にしている生徒があんな問題の解きかたしてたら。

でも最上君どうするんだろ。問5なんだけど……七択だよ？

そうして最上君のほうを見ると……どうやら彼も問5に到達したらしい。

そうして突然顔面蒼白になって頭を抱えて机に突っ伏す。うん、わかりやすい反応だね。でもどうするんだろ。

そんなことしても問題は解けないけど。

そうして最上君を観察してたら突然彼は顔を上げて晴れ晴れとした表情で問題用紙に向き合った。

ああもう、何がなんだか訳がわかんないよ……って！
もう時間十分も過ぎてるじゃない。自分の問題となくちゃ、時間なくなっちゃうよ。

3

そうして一時間目が終わった。結果は……うわはははは、そんな事はどうでもいいじゃないか。そうなんだ。そうだぜー。

故に俺は後悔しないぜっ！　すべては覚悟の上。過ぎた事は過ぎた事だもんねー。過去に囚われるほど愚かじゃないもんねー。

っつーか実力テストなんて成績ほとんど影響しないからいいんだよ別にさ。

と……金色の頭を揺らしながら隆貴が話しかけてきた。

「よう零児。今のどうだった？」

「くっ……武士の情けだ。聞かないでくれ。まあそれでもお前よりはマシだと思うけど」

「ひどっ！」

「にしても、お前久しぶりに学校来たよな。何、今日実力テストだから流石に出ないとマズイって思った？」

「いんや、久々に暇つぶしガッコでも行くかなと思って来たらテストだった。全く、こんなんら来るんじゃないかったぜ」

うわあ……。

「流石我がクラス馬鹿代表のお前だな」

ちなみに俺も昨日までテストの存在を忘れていたのは黙っておく。
まあわざわざ相手に自分の弱みを見せる事もあるめえ。

「そんな称号いらんて。にしてもさ……」

「何だ？」

「ちよっと聞いてみこのクラスから聞こえる話し声を……」

「ん……」

そうしてクラスから聞こえる姦しい女たちの話し声を聞く。

「どうだったー悠美ちゃん。今のテスト？」

「もーダメ。絶対最低、もう嫌になっちゃう」

「そんなー絶対私のほうが酷いって。絶対もう色々ミスしちゃったもん」

「えーマジでーでも私のほうが悪いって」

「あれの事か？」

「おう、俺ああいう事言う女嫌い」

「ん……まあ気持ちはわからなくも無いけど」

「実際そんなに悪くないくせにさ、私は本当ならもっと出来るんだって見栄が混じって嫌になるよな。結局はあいつらは自分を良く見せたいってそれだけで動いてるんだぜ？　そういう現実を認めないで自分を良く見せたい女って俺は嫌だね」

「ふうん」

「どれくらい嫌かって言うとな頼まれても抱いてやらないくらい嫌」

「ほおう？　それはなんか嘘っぽいな。リビドーの塊のお前が抱ける状態の女を抱かないってのは」

「う……まあそのそれはアレだよ。状況によっちゃ抱くかも知れん」

「やっぱり」

「まあなんにせよ何より気に入らないのは……実際悪いって言うっても俺とか零児に比べれば百倍は良いだろうって所だな」

「結局そこかよ！」

と、そこに今度はツインテールの頭を揺らしながら片山さんが来た。

「ねえ、最上君鉛筆ころがしで問題解いてたみたいだけど……大丈夫なの？」

「ゲッ、見てたの？ 恥ずかしいなあもう」

「う……うん、でもさ、最上君の英語の成績ってどれくらいなの？」

「それがさ聞いてくれよ片山さん。前近所の予備校でセンターの模試やってたから受けにいったんだよ」

「うん」

「そしたらさ、マークだけなのに40点だった」

「それって……まさか？」

「うん、200点満点で」

「う……うわぁ」

そうして片山さんは頭を抱えてしまった。

「あれ、やっぱり40点はまずいかな？」

「まずいよそれは。もうすつごく」

「まあいいんだよ。俺国語は得意だし」

「そ……そうなんだ。でも英語がそんなに悪いと大学いけないよ？」

「うーん、まあ別に進学しないでも良いしな」

「へ？ じゃあ就職するの？」

「うー……ん、少し違うけどまあそんなもんな」

「？」

「まあ仕事はいくらでもあるって事さ」

「そ、そうなんだ」

「おう、ってそういえばさつきから隆貴の馬鹿が妙に静かだけど……

……おい、隆貴？」

と……隆貴は何故かこっちをありえない物を見るような目で見て
いる。

「おいどうしたー隆貴ー。帰ってこーい」

「……っておい、零児！ テメエいつの間に片山さんと仲良くなり
やがったんだよ。俺そんなこと聴いてねえぞ？」

「うい、だって言ってるじゃないも」

「言ってるなかっただとう親友？ 何だ水臭いじゃないか」

「アレおかしいなあ。俺はチミと友達になった記憶は無いぜよ？」

「H A H A H A H A！ そうだよ！ お前は昔からそういう奴だったさ。そうやって抜け駆けするんだろ。この女誑しめ」

「そのセリフをお前に言われるのはこの上なく理不尽だな。つつう
かお前だけは言う資格無いぞ？ 後その笑い方やめろ」

「ほら、酷い奴でしょ片山ちゃん。だから零児なんて放っておいて
ぜひこの僕と結婚を前提としたお付き合いを……」

「あ……ゴメンね。私、松山君とはちよつと……」

「あーあ、フラれちゃったな。隆貴」

「OH！ ガッデム！ なんて俺の好きになる子は皆俺の魅力をわ
かってくれないんだ！」

「いや、そんなものは無いぞ隆貴？」

「なにおう！」

何だこの会話。

「ふふふ……」

あれ？　今のは、片山さんか。

「ん……どうかしたの片山さん」

「ううん、ちょっとね、最上君と松山君って随分仲がいいんだね」

「はあ？　俺が隆貴と？　何処をどう見たらそう見えるの？」

「そうだよ片山ちゃん。俺はね、零児とは生涯敵同士なのだよ」

「ううん、そんな事ないよ。だって二人とも凄く気が合う見たいじゃん」

「いや、そんな事はない」

「ああ、そんな事は無いぞ？」

「ふふふ……やっぱり気が合うんだね」

ううむ……どうも片山さんの思考回路は良くわからん。

隆貴の方を見ると……やはり隆貴も良くわからないみたいだった。

「あ、それよりももうすぐ二時間目始まるよ。次は国語だから頑張っ
つてね最上君」

「あ……ああ」

ふう、なんだか嵐のような休み時間だったな。

まあいいか。

幕間二

「しっつれーしまーっす」

へひひひ、久しぶりだなあ学校の職員室に来るなんて。おう、4人くらいの教師がいやがらあ。

「ん？ 君は……制服じゃない所を見るとウチの生徒じゃないね？」

ん……？ 何だこの教師。ジャージなんか着てやがんの。だっさー。

「ふいひひひ、そうですよーだって学校って色々うるさいんでしょーそれよりアンタ誰」

「私は体育教師の佐伯だが……君は何だね？」

「うるせえよ、俺が誰かなんでどうでもいいだろ。それより名簿何処だ？」

「ちよっと君。質問に答えなさい」

うるせえなあ、なんでコイツに命令されなきゃなんねえんだよ。それより名簿はっと。

「君、何勝手に漁ってるんだ。いい加減にしなさい」

「うるせえよ、それより名簿何処に置いてあるんだよ」

「なんだね？ 誰かに用か？」

「お前に話す義理はねえっつーの。ええっと名簿名簿」

「君、いい加減にしなさい。部外者にそんな物を見せるわけにはいかないんだから」

「ンだとコラ！ さっきからうるせえんだよテメエ。いい加減にしろたボケがぁよう！」

バキッ！

「フグぁッ！」

ふう、全く、警棒で殴ったらようやく静かになりやがった。全く教師っつーのは何処でもうっとおしいもんなんだなイピヒヒ！と、なんか周りがざわめき立ってる。

「おい、不審者だ。警察に連絡して、後生徒の避難だ！」

何だあのハゲ。

「しかし教頭先生、皆テスト中で」

「馬鹿かね君は、テストなどより安全のほうが大事だと言う事小学生でもわかるぞ。急いで放送を入れなさい」

「は、はい」

んー、なんかよくわかんねえけど妙に焦ってるのねー。でも放送入れて避難のときにアイツに逃げられたらかなわねえから、

まあ警察はどうでもいいんだけどー、でもあの放送室に向かった教師でも殺すかなーウプフフ！

ふう、まあ国語はなんとかなるな。だって日本語だもん。しっかり読めば解けない問題なんて無いね。
と……その時。

ピンポンパンポーン

「全校生徒に告ぐ。急いで避難しなさい。凶器を持った不審者が入りこみました。今職員室にいますので各先生の指示に従って職員室には近づかないように速やかに避難しなさい」

何だこの放送？ 変なの。

流石に皆ざわめきたってテスト中にもかかわらず話し声も聞こえる。

「なあ、何だ今の？」

「わからん。誰かの悪戯じゃね？」

「もう一度告ぎます。不審者が入り込みました。急いで避難しなさい。急いで……ふぐわあっ！」

何だ何だ何だ。今のは？

「あーマイクテストスー。はいはい皆さん聞こえるー今のはただのタチの悪い悪戯ですからそのままお勉強続けてねーウヒヤヒヤハハ

ハハッ!!」

おいおいマジかよ。ツツーかなんか今の声聞き覚えあるような…。

「ねー今の何い？」

「わかんね、誰かテキトーなヤンキーの悪戯だろ」

「マジありえないーい。なに、コレでテスト中止になんないかな？」

「ならないんじゃない？　こんな悪戯一々付き合ってたらきり無いだろ」

「そうだよねー」

と……監督に来ていた山園先生は突然立ち上がって言った。

「いい？　みんな、急いで避難するわよ。場所は校庭。解ったわね？」

「えーでも先生？　多分今のただの悪戯だよ？」

「ええ、そうだったら勿論いいけど何かあってからじゃ遅いでしょ？　私が責任取るから取りあえず全員廊下に出なさい」

「はーい」

そういつて皆ラッキーとかなんとか言いながら廊下に並ぶ。

廊下に出てみるとどうやら他のクラスも警戒してか非難に移っているらしい。

「ばーればーれ、コレでテスト休みになったら嬉しいな零児」

「ん……ああ、隆貴か。そうか？ 多分今日休みになってもそのうちまたあるぜ？」

「ふーん、まあそのときは休むからいいや」

「おい！ それでいいのかお前は」

「うん」

はあ、まあコイツはこういう奴だな。まあいいか。

そうして一階まで降りてくる。しかし本当に何事だろうな。

何より気になるのがさっきの声。どっかで聞いた事があるような気がするが……まさかな。

お……そろそろ校庭だな。

パライイイン！

は……何事？

そうして音のほうを見るとどうも二階から人が降って来た。

ドサッ！

「はぐうつ！」

って……アレは名前は忘れたけど……ウチの体育教師か？ 降って来た元の場所は二階の窓……職員室か？
なんて事をしやがる。いったい誰が……？

「おい、救急車！ あと警察も呼べ！ 避難急がせろ！」

教師の怒号が飛び生徒はざわめき出す。

皆もまさかそんな重大事だと思っていなかったからか、そうして辺りは一気に騒然とします。

まさか……これは……。いや、しかしこんな事をする奴が……？

そうだな、念の為だ。調べてみるか。

そうして能力を開放する。その瞬間……！

反応あり。

強烈な能力の反応あり。方向は校舎二階……職員室の方向。

という事はこの騒動の犯人は……能力者か！

拙い！ 奴らは簡単に人を殺したりする。早く行って止めないと。

そうして走り出そうとした所突然学生服の袖が誰かに掴まれた……

……ああもう、誰だよ！

「ちょっと！ 最上君……何処に行くの？」

「あ……片山さんか、いや、ちょっと教室に忘れ物をね」

「へ？ 何言ってるの最上君。忘れ物なんていいじゃない。今の見たでしょ！？ 佐伯先生が……人を二階から放り出すような相手よ？ もし出会っちゃったりしたら大変でしょ？」

「あ、ああ。でも大丈夫だって。すぐ戻ってくるから。急いでるんだ」

「あ……わざわざこんな時にいったい何で……忘れ物なんて嘘でしょ？」

「う……ま、まあ何でもいいじゃないか」

「よくない！ よくないよ！ いったいなんでわざわざ危ない所に行くの？」

「まあ、色々と事情があってね。あと危険だから片山さんは絶対来ちゃダメだよ。それじゃあ急ぐから」

「あ……」

そうやって片山さんの握っていた袖を振り払い駆け出す。

ふう、なんとか振り切れたな。取りあえず現場へ……急ぐぜ！

面会（1）（後書き）

さてどうもS i k oです。更新遅れてすみません。

いやね、なんていうか超絶忙しい上に体調崩して死線を彷徨ってたんです。

いや、マジで今回はやばかったですねー吐き気は止まらなくて嘔吐を繰り返して胃液で喉が荒れて血が混じっていやマジ凄いな。

しかも一人暮らしで看病してくれる人は無し体温計も買ってないから体温も測れない。

うん、凄かった。

さて、それにしても今回も読んでくださってありがとうございます。しました。

よろしかったら今後ともよろしくお願いします。
ではまた。

面会（2）

1

能力を開放し、方向を確認しながら階段を駆け上がり二階の廊下を走る。

まだ誰かが残っているのなら全員を外に出さなくては。そうして職員室の近くに來たその瞬間、職員室の中から見覚えのある紅い頭が出てきた。

赤毛の頭、アイツは……。

「よう、お久しぶりだな、最上クン？」

「貴様、いったい何のつもりでこんな事を……」

「ああん？ そりゃあアンタに会いにきたんだよ。アンタの居そうな場所って言ったら学校くらいしかないだろ？」

「それなら何故教師を二階から落としたりした!？」

「ああ……アイツね、そりゃあ名簿を見てアンタを探す俺の邪魔をしたからだ。だからアイツが悪い」

「それだけ……たったそれだけでか？」

「ああ、俺は俺のやりたいようにする。それを邪魔する奴は誰だっ
て容赦しない。それは例え相手がアンタでもだよ？ ウヘヒヒヒ！」

クッ……ああそうだよ、コイツはそういう奴だったよ。忘れていた俺が悪いんだよ。

「クソッ、取りあえず……まだ職員室の中に人はいるのか？」

「ああ、三人くらいはいたぜ？」

「そうか、なら全員解放しろ。お前が用があるのは俺なんだろう？」

「ふん、開放してやらなくも無いがー、そうだな、そうする事による俺へのメリットはあるのかー？」

「ああ、取りあえずお前の話の用件だけでも聞いてやる。ただしその答えをどうするかまでは今は言えないがな」

「よし、その条件ならいいぜ」

そういうと赤毛野郎は職員室の中へ顔を突っ込み叫ぶ。

「おいアンタら。邪魔だ、さっさと出て行け」

「な、なんなんだね君は、突然入ってきて佐伯先生を窓から放り投げたり出て行けといったり……馬鹿なことはやめなさ……」

「オイ、俺は「出ろ」って言ったんだ。アンタ方もさっきの男と同じ方法で外に出たいんじゃないかなければさっさと出て行け」

「……ッ！ わかった。出よう」

む、話をついたか。しかしここで先生方に俺の姿を見られるのは得策じゃないな。

そういうわけで柱の影に身を隠し去っていく先生たちを見守る。
ん……何か話してる……？

「しかし教頭先生……いいんですか？」

「ああ、仕方がないだろう。後はもうすぐ到着する警官隊の人に任せようではないか……」

「そう……ですね」

なに？ 警官隊が来るだって？ それは拙い。何しろ彼らは銃を持っている。

もしこの赤毛野郎と接触でもしたら全員気に食わないっていう理由で操られて自殺でもさせられるかも知れない。

これは……急いで何とかしないと。

そうして階段を下りていく先生が見えなくなってから話しかける。

「それで、用件は何だ？」

「ああ？ ああ、それなら俺は知らねえ」

「は？ お前、俺を馬鹿にしてるのか？」

「ちげえよ、そうじゃねえって。俺は本当に知らねえんだよ。アンタのお仲間が用があるって言うからついてきただけだし？」

「……仲間？」

「ああ、おんなじ「原典」だぜ？ まあ奴はそれ以上の化け物かもしれないけどな、っと来たぜ。アイツだ」

む……？

2

そうして近づいてきた男はひたすら黒かった。

いや、別に肌が黒いとかそういうわけではない。ただ……。

全身を黒い服で固めその上黒いロングコートを着ている黒髪の長髪の、2メートルはあろうかと言うような長身の男。

堀の深い顔をした、痩せ型、と言うか、筋肉質な中年の男だ。

その背の高い男が全身黒い格好で歩いているのだからまるで影が歩いているみたいな印象がある。

「あんたは？」

「ふむ、久しぶりだな、最上零児よ」

何を言っているこの男は？ 俺はこんな男知らない。知らないはず。

ズキン……。なぜか心臓が一度大きく跳ねた気がした。

紅い……。

いや、違う、知らないはずだ。知らないはずなのに……何故この男を見ている猛烈な怒りが沸いてくる。

「貴様は………いったい？」

「ふむ、そう言えば自己紹介もまだだったな最上零児よ。私は物部もののべ宗全そうぜんだ」

「そう………ぜん？」

「ふむ、やはり思い出さぬか。武烈もなかなか強力に……」

ぶれつ……父さんの名前だ。こいつは父さんを知っている？

「アンタ……父さんのこと知ってんのか？」

「ああ、古い馴染みだ。それだけではないぞ最上零児。お前とも会った事がある」

「は？ 俺あんたなんか知らないぞ？」

「それは忘れて……いや、忘れさせられているだけだ。なに、すぐに思い出させてやる」

はてな。何の事が良くわからんが。

「いや、それよりアンタ、なんの用だ？」

「ふむ、用件は一つだ。私と共に来い」

「は、どういうことだ、それ？」

「深くは言わん。が、答えは二者択一だ。来るのか？ 来ないのか？」

「よく意味が解らない。だから答えられない。ちゃんと説明しろ」

「ふむ……。あの武烈の息子がコレほどまでに俗物だとはな。まあいい。それならばその寝ぼけた頭を覚まさせてやる」

「は？」

そう言ってその宗全と名乗った男は右手をやや前に突き出し、その手をゆっくりと握る。

その瞬間……！

「ズッ！？」

流れ込む意識。濁流する意思。沸騰する肉体。揺れる脳髓。壊れたポンプ。逆流する血液。そして逆行する記憶。

感覚は内面を向き、外の情報は遮断される。神経は役目を果たさなくなりただ自分の殻墮を守るためだけにある。

しかしそれヲも無視し、ハイってくるもノガある。

「ふむ、流石は腐っても武烈の息子か。このレベルの能力をも遮断するとは」

「クッ、き、貴様……精神干涉……型の……」

「ほう、まだ喋れるか。そういえば最上家はそちらの方向の宗家であつたな。だがな、精神干涉型という言葉はあの里がなくなった今もう使われていない。今はそのタイプの能力者をハッカータイプという。これは全国共通だ。覚えておけ最上零児よ」

「は……かー……?」

「ああ、いや、まだ口が動くとはな。ならばこれでどうだ?」

そうして手に力を籠める宗全。

ズズズズツつ……!!

ああ……頭が……割れる……神経が……死ぬ。痛い。

でも……痛いって感じられるってことは、まだ神経が生きているということ。守れ……ダメだ……痛い……痛い。

痛い痛い痛いいたいいたいイタイイタイイタイイタイいたい。止まらない。痛覚が止まらない。

それを止めようと能力を回そうにも今は全力で自分を守ろうと生

命としての自己を守ろうと自我を守ろうと皆総動員してるから回せるだけの能力よりきがない。

ああ……でもこのままこの痛みが続けば自我自己自分自意識が死ぬ前に痛くて、痛みで身体が死んでしまう。

ああ……痛い。でもなんで俺はこんなに自分にアイツが入るのを拒否する？

「ふむ、痛いだろう最上零児よ。その痛みはお前が自分に張った防護膜が上げる悲鳴だ。お前の意思がどうであろうとお前の能力者としての免疫が私の能力を跳ね返そうとする、その摩擦なのだ。ああ……苦しいだろう最上零児。その苦しみから解き放たれたければ、何、簡単な事だ。能力を意識して弱めろ。そうすればすぐに抵抗は無くなり力の流れはスムーズになり痛みは消える。今の君のその痛みは銅線に電流を流したときに抵抗を置くと発熱するだろう？ その熱がその痛みだ。だから恐れる事はない。意識して抵抗を消せ。ならばすぐにでも楽になる」

「そう、ぜん？」

ああ……なんてこった。最悪。もういいじゃないか。こんなの我慢できねえよ俺。

しかも何より我慢できねえのがさっきまでのあのアイツの嫌な声が今はまるで天上の美声に聞こえる。

ああ、なんつーかまさに神の慈愛をも含んだ声みたいだ。あんな奴の声がこう聞こえるなんて。

あれ？　　そういえば俺は奴の何がそんなに気に入らないんだ？
会ったことあるらしいけど覚えてないし。

ただ初対面の時に吐き気を覚えるほどの嫌な気分になったからってそれだけで人間を決める事か……ああもうダメ、物事が考えられん。

もう入れてしまえばいいじゃないか。仲間になればいいじゃないか。着いて行けばいいじゃないか。死ぬよりはいいだろう？

いや、ダメだダメだ。あいつに見せてはいけない。アイツを入れてはいけない。アイツに俺を許してはいけない。

だって解る。俺の中の俺も知らない、何かが自分をあいつに見せるなって叫んでる。

もしもアイツに俺を許してしまったら俺は、死ぬよりもつらい事がおきて、死ぬよりも辛い事になってしまう。

だから……だからまだだ。マダダ。マダだ。まだ抗える。まだ逆らえる。与力など残すな。

いま、例え今ここで死ぬとしても、アイツだけはこの聖地に入れないじゃないッ！！

「ふむ……まだ抗うか。腐っても宗家の跡取り。やはり純粋な力勝負だけではどうとも成らんか。まあいい。そういえば最上零児」

「クッ……ヒ……ひぐう……な……何だ！」

「ふむ、いや、何故お前は里を出たか覚えているか？」

「な……そんな……事ッ……父さんが……死んで……ただ父さんは僕には普通に生きて……欲しいって……」

あれ……いま……俺……僕って……。

「ふむ、武烈のことは覚えているのか」

「勿論……だ……忘れるわけ……ないだろ……う……」

「ふむ、ならばその父親の死因はなんだ？」

「父さんの……死因？ そんなの病気で……」

「ほう、ならば里はまだまだ平穏にあるんだな」

「ああ……当たり前じゃ……」

燃え盛る炎。紅い森。紅い家。木霊する悲鳴。交錯する怒号。血の匂い。

夜なのに明るい村。いるはずのない人間。そして……紅い視界。

「あ……当たり前じゃ……当たり前じゃ……ないか……知らない。今の景色なんて……知らない……」

「ふむ、まだ少し足りんか。そういえば最上零児よ。その里には近しい肉親は居ないとは言え親戚は居るのだろう？ お前は一度でも里帰りをしたか？」

「は……何故そんな事を……するわけ無いだろ……」

「なぜだ？ 小さな村とはいえ友や親戚の居なかったわけではなからう。何故一度も帰らない？」

「う……うううるさい！！ お前には関係無い！ 邪魔だお前！

出て行けお前！ 帰れ！」

「ふむ、まだ直視出来んか……ならば……」

幕間1 山園綾子side

降りてきた教頭先生たちから取りあえず教師は先に集まって話を聞いて中の状態は大体わかった。

不審者はややジャンキー風の赤い髪の若い男。凶器を持っている上にとんでもなく強いらしい。

ただ、なぜか教頭先生ら3人には加藤先生は放送を入れている最中に殴られたけど無事に解放されたりして何が目的かは不明だ。救急車が到着して重症の佐伯先生。後やや重症の加藤先生は運ばれていった。

更に後10分もすれば警官隊も到着するという。普通の警察官二、三人で相手にするには危険すぎると判断した結果らしい。

とにかく、相手はそれくらい危険な男だそうだ。教頭先生の話によると雰囲気もおかしかったらしい。薬物中毒の可能性も高いそうだ。

しかしそう考えると、佐伯先生と加藤先生には悪いけどそんな危険な男が入って生徒に被害が出なかった事は不幸中の幸いかもしれない。

どの教室の先生も不審に思って全校生徒無事に非難させたみたいだし……とりあえずは一安心かな。

よし、それじゃあクラスの皆に説明に行かないと。

「はいみんな聞いてねー」

説明は一応校庭に固まっているクラスごとに行われる。

「不審者の人が入り込みました。もうすぐ警察の人も到着するのでここはもうすぐ立ち入り禁止になります」

ん……流石に皆ざわついてるね。

「はいはい静かに。とにかく今日のテストは中止です。みんな、速やかに下校してください。ちなみに校舎に忘れ物が会っても明日以降にしないさい。今日はもう校舎は立ち入り禁止です。定期、または財布を置いてきてしまつて帰れないって言う人は教頭先生のところまで言ってください。それじゃあ……解散！」

そうして数人の生徒は教頭先生のもとへ行き、大多数の生徒はざわつきながらも帰っていった。
と……。

「山園先生！」

ん……向こうから走ってくるのは……。

「あら……片山さん？　どうしたの？　あなたも早く帰らないと……」

「先生！　最上君は、多分まだ中に居ます」

「へ……？　今、なんて……？」

「だから、最上君は多分まだ中です」

「え、そんなわけ……だって教室出るときには確かに……」

そう言って廊下に生徒を出したときのことを思い出す。確かにあの時何となく見た最上君は松山君と話していた。

「それが……佐伯先生が窓から放り出されるのを見て忘れ物とか訳わかんない嘘を言いながら急いで中に入っていったんです。私も止めたんですけど危ないから来ちゃいけないって言って振り切って走って行っちゃって……」

「危ないから来ちゃいけない……？」

なんでだろう。確かに人を窓から放り出すほどの相手なら危険というのはわかりきっている事だろうに、そんな事の念を押すなんて……。

それに、一番解らないのは最上君自身も危険性を認識していたってことだ。ならなんでわざわざ中に……？

「先生、いったい不審者ってどんな人なんですか？」

「それが、かなり危ない人らしくって、薬物中毒者の恐れもあるらしいわ。凶器も持っていて力も強いみたいだからもう暫くしたら警

「官隊が到着するそうよ」

「そうよ、不審者は凶器を持っているのに……ああもう生徒に被害がなくて良かったって思った矢先に……なんでよりによって最上君が!!」

「警官隊……そんな……! 私、最上君呼んできます!」

「へ……何言ってるのよ、ダメに決まってるでしょ!?! 危険な相手なんだから!」

「危険な相手だから……です。最上君に何かあったあらどうするんですか!?!」

「それは……そうだけど、でもダメよ。片山さんにも何かあったら……」

「もういいです。私、行きます」

「ちょっと……どうしても行く気なの? 片山さんが行っても何か出来るって訳じゃないのよ!」

「でも……最上君を、連れ戻してこないと……だからっ!」

「う……この子がこんなに積極的だなんてね。恋は女を変えるってことかしら。でも……それなら私だって。」

「ふう、片山さんがこんなに頑固だったなんてね……わかったわ。いいわよ。行っても」

「え? いいんですか……行っても?」

「ええ、何となくだけど気持ちわかるわ」

「でも……そういうのって先生が認めたら立場的に……」

「ええ、勿論マズいわよ。だから勿論こっそり行くんだから……」

「行くんだから……って、先生も来るんですか?」

「当たり前じゃない。生徒だけに危ない目は合わせられないわよ。それじゃあ……体育館脇から行くわよ」

3

「それならば最上零児。質問するがお前の中ではお前の父親は天寿を全うして死に、里はまだ平穩の中にあり、そうしてただ家業を継がせたくなかったお前の父親がお前を能力の影響の少ない一般世間へ縦横させるためだけにこの街にやった……そういう事なんだな」

「ああそうだよ。なんか文句あるかこの野郎！」

「ああ、あるな。全く武烈には失望した。まさか息子にこれほどまでにくだらない幻想ゆめを見せようとはな」

「うるせえ黙りやがれテメエには関係ねえだろうがこのスカタンノツポが！」

ああ気に食わない気に食わない。何が気に食わないのか解らないけどこいつを見ているだけでマジで胸がムカムカする。

大体人の心を能力でこじ開けようとしながら尋問するなんて屑のすることだああそうだとも気に食わないねコン畜生！

「ふむ、あくまで直視できんか。ならば最後の質問だ。零児、お前は父親のことはよく覚えているんだろう？」

「ああ、さっきからそういつてるだろうがこの中年ボケがよ！」

「ならばだ、お前の母親は、どうしたんだ？」

幕間2 武田由里香 side

そうして木刀と日本刀を入れた袋を肩に担いで学校内を走る。

一応目立つわけにはいかないから避難する生徒の混じって外に出てから闘技場近くの窓から校内に入った。

不審者が何物かは知らなかったけどさっき強い能力が香った。感じた事のない匂いだったけど、そうすると今回の不審者は能力者ということになる。

目立つわけにはいかないけど、だからといって校内で犠牲者を出すわけにはいかない。

そうして匂いの強いほうには知っていている途中で途端に強い匂いを感じた。それは今までに感じた事がないほどキツく、暗い香り。

何があったのかはわからないけどとにかく急ぐに越した事はない。

そうして辿っていった先は、職員室前の廊下だった。

そこに居たのは見た事の無い長身の黒い男と例の赤毛の男、そして零児だった。

「零児！ こんな所でいったい何をして……」

そしてその私の声をさえぎる長身の男の言葉。

「ならばだ、お前の母親は、どうしたんだ？」

4

俺の……母親？

「母さんは……母さんは、知らない……んだ」

震える唇。なぜか奴の能力の圧力はもう感じない……のにさつき以上に震えるココロ。

「知らない……か。ほう、面白い事を言う。ならば貴様の母親は貴様を生んですぐに死んだとも言うのか？」

「いや、そんな事は……無い……けれど」

あれ、そういえば母さんって……。

「どうした？ 歯切れが悪いが」

母さんは……死んだなんて話は聞いた事が……思い……出せない。

「ふむ。思い出せぬか。という事は武烈は私と怜の記憶は息子にと
って苦しみの素と考えたか。全く、何処までも甘い……」

れい？ 怜……か？ なんだろう、何か、懐かしい、コトバ……。

「ならば思い出させてやる最上零児。いや、お前の話は武烈と怜の
からよく聞いていたぞ」

「な、なにが、怜って……」

「昔はよく言っていたんだろう？ 「僕強くなりたいから、どんな
鍛錬も別に辛くないよ。強くなって母さんを守ってあげるんだから」
と」

守る。俺が、誰かを。

「な、何を、突然、いったい何が……」

そんな事、言った覚えが……言った覚えは……。

でも、母さんのことなんか、怜って、守るって、でも、ああ、あ
れ、だから違うって。

そうだ、僕は、僕は、僕は父さんのことは思い出すけど母さんのことは、なんだか、記憶の、胸の、中から抜け落ちたみたいで……。いや、抜け落ちたと言うよりは何か引っかかっている先に進めない……。そんな感じが……。

「しかし貴様の腕ではそれもかなわぬ夢だ。甘い希望しか持てず実現不可能な夢を持つのは人として正しい。しかしよもや失敗したその事実さえも無かった事にしようとは。最上家も堕ちた物だな。いや、しかしそれ以外の要因も在ったとはいえ支流のひとつの物部に敗北を喫した時点で最上の運命は決まっていたのだから……か」

「何の、話だ。それは？」

ああ、もうダメだ。何か、決定的なものが壊れ、決定的な物を取り返そうとしている。

心に懸けられた誰かの暖かい遺志は、それを知るなどいつている。必死にそれに気づくなど叫んでいる。でも、しかし、

しかし、それを、知る義務が俺にはある。

例え、それによって決定的な何かが失われようとも。例え、それによって以前とは、同じように笑えなくなろうとも。

俺には、それを知る義務がある。

「話せよ。宗全」

「ふむ、ようやく知る気にはなったか」

「ああ、話せ」

「ああ、お前は確かにこういつていたな。「僕が母さんを守るって言ったのに」と」

「母さんを、守る……俺が？」

「ああ、しかし武烈に無理であつた事をお前が行える道理はない。現実を知れ。最上零児よ。ああ、あの時はこう言っていたな。「僕のせいだ。僕が弱くて母さんを守れないから」か。全くその通りだ。当時は認識できていたんだが何処で思い上がったか。思い出すがいい。お前は弱く、だからお前は私から守れなかったのだ。おまえ自身のの母親の最上怜をな……」

「もがみ……れい……」

紅い視界。ごうごうと燃える々。肌をも焼き尽くす灼熱。逃げ惑う人々。戦う人々。その中で。

確か、その中で、僕は泣いていなかったか？

もう動かない大好きだった誰かを見ながら。僕のせいで、僕が弱くて母さんを守れないからと悔やみながら。

開錠、開始、凍結、解除、解凍、開始。

パリンと、頭の中で何かが割れる音がした。
それとともに頭から消え去っていく温もり。

それは、誰か大切な人の遺志だったんだろう。

そうして、俺の記憶は、その時間へと帰っていく。

解凍、完了。

面会（2）（後書き）

申し訳アリアン船ありません。S i k oです。

いや本当にごめんなさい。更新、大変遅れました。

メッセージを下さった方がいらっしゃってとても嬉しかったです。この場を借りて御礼申し上げます。

本当はすぐにアップしたかったんですが、いや、展開が速いって言うのは言われてみれば・・・。

こう言う事は結構自分では解らないので本当にありがたかったです。それで推敲のしなおしなどで結構時間がかかりましたが、また何か言ってもらえると嬉しいです。

さて、遅れた理由ですが・・・。ちょっと私生活のほうが最上君もビックリのテンパリようでもう大変で・・・。

お待ちしていただきった人、大変申し訳ありませんでした。

ただ、言い訳さしていただくと、私生活が本当に大変で、ちょっとヤヴァかったです。

なんだか人が津波のように押し寄せて、いや、だから俺んちは旅館じゃねえって。

一時期はこの七畳半の狭い部屋に私含めて男二人女二人入った事もあります。

いや、別にお泊りとかじゃなくてただ遊びに着ただけですが、まあ泊めるのは一人が限界ですから。

布団の枚数もありますしでっかいピアノもあるから。

ってそんな事はどうでもよくて、さらにその他もろもろの理由でちよつとドドドド鬱になって更に身体も病気になって心身ともに死線を彷徨ったりもう大変でした。

いや、まだ鬱は抜けてないんですがなんとか頑張れそうです。

という訳で、今後とも読んでいただけると嬉しいです。

次回は、能力者がどういいうものかという事へとも話しが行きますん

で、どうかお楽しみに。

Ground zero

「零児、零児……」

ん……。

「起きなさい、いつまで寝ているの、もう朝よ、零児」

ん……朝？ 朝……かあ。

「そうよ。んもう……零児はあの人に似て本当に眠たがりなんだから……」

ごめん。今起きるから。

「早くしなさい。朝ごはんも出来てるしお父さんも待ってるわよ」

うん、解った。起きる。

「それじゃあ布団を畳んで来るのよ」

はあい。

目が覚めた。布団から起きると障子が開いていて外から爽やかな朝の空気が入ってくる。

とは言ってもココは山の中にある家なので普通の土地よりも日の出は遅く日の入りが早い。

なのにもう稜線の上に朝日が顔を覗かせていると言うことは少し寝坊したのかもしれない。

季節は春爛漫。布団を畳み縁側に出ると風に吹かれた桜の花びらが舞いこんできた。うん、今日もいい天気だね。とても気持ち良いや。

そうだ、それよりさつき母さんが呼びに来たんだ。急いで行かないとね。

「おはよう、零児」

「おはよう。父さん」

そうして居間についたら眠そうに欠伸をしている父さんと朝の挨拶をする。

父さんはいつものように少しだらしく着物を着崩して、頭をぼりぼりかいて胡坐をかいていた。

卓袱台にはもうご飯が揃っていた。今日の朝ごはんは卵焼きと山菜の炊き込みごはんと味噌汁、そしてアジの干物だった。

「あ、今日は久しぶりに魚だね、父さん」

「あ？ ああ、そうだな。じいさんが街に行った時に大量に買い込んできたんだ。腐らさんように干物にしたのを村中に配っててな、当然ウチにもおこぼれが来たわけだ」

「ふうん、そうなんだ。あれ？ 母さんは？」

「今お茶入れに行ってるよ。っと、来たぞ」

そうして台所の方を見ると急須と湯のみを持った母さんがきた。

「あ、おはよう。母さん」

「うふふ、おはよう、零児」

そうして、母さんはふわりと笑った。僕はこの笑顔が好きだった。優しく、綺麗な母さん。いつも、長い髪が綺麗で、地味な色の着物を着て、優しく微笑んでいて……その笑顔が大好きだった。

こうして、母さんがいつまでも笑っていてくれるのなら何を代償にしてもいいと思えるほどに、好きだったんだ。

「それじゃあ準備できたな。いただきます」

「「いただきます」」

うん、やっぱり魚はおいしいな。でも、偶にしか食べられないからかな。

僕は生まれてからこの里を出た事がないけど里の外には海って言う場所があつてそこには魚がたくさん取れ取れぴちぴちカニ料理だつて話をじいちゃんがしてた。

でも、勿論この里にも小川は在るけど、そんなに魚は居ないから偶にしか食べられないんだ。

「そう言えば零児、今日も鍛錬するぞ」

「うん、わかった」

「ちよつとあなた、そんなに零児に武術を教えてどうするのよ。まだ零児は子供だし、それにもう使う事も……」

「うっ、まあそれはそうなんだけどね。良いじゃないかさ」

「あなた……楽しんでるでしょ？」

「そそそっそんなわけっ無いじゃないか、怜も少しは私を信用してくれよ。一応鍛錬は危険なんだぞ？」

「ドモったわね……」

「ははは……いやあ、偶然だよぐーぜん。な？ 零児だっていいだろう？」

「うん、僕は教えてもらいたいよ」

「でも零児……つらくないの？ 別に無理に教わらなくても……」

「ううん。大丈夫。確かに少し辛いけど僕、強くなりたいもん」

「ふう、まあ零児がそう言うんならね。でもあなた、零児に怪我とかはさせないようにね。わかった？」

「へーい、大丈夫だって。つて言うかこの私が零児を傷つけるわけ無いじゃないか？」

「う……信用なら無いわね。それに零児も。鍛錬はしてもいいけど今日の午後はちゃんとおじいさまの所に行って勉強教えてもらうのよ？」

「う……」

おじいさまというのは村の中で八百屋と鍛冶屋をやっているじいちゃんの事だ。一応父さんの父親らしいんだけど別に能力は使えない。

ただ父さんの趣味が色々な武器集めなんだけどそれのほとんどはこのじいちゃんが作った物だ。いろんな武器に精通しているみたいでなんでも作ってしまう。

さらに凄く物知りだし、村の雑務を一手に引き受けていて凄く皆に尊敬されているエライ人なんだ。エライ人なんだけど……。

「いやだなあ、勉強嫌いだもん」

「ダメでしょ零児？ いずれこの里を出たら能力の使い方なんかより知識の方が必要になるんだから。ちゃんと行くのよ？ わかった？」

「はい」

「さて、零児、もうメシ食い終わったから父さんは先に道場行ってくぞ？」

「んぐんぐぐ……あ、僕ももう食べ終わるから少し待って父さん」

「おう。あ、そうだ怜、ごちそうさま。今日のご飯も最高に美味かったぞ」

「そ、そうかしら……？」

「ああ、いつもながら怜は料理が美味いよな。な、そう思うだろ？ 零児も」

「うん、おいしかったよ。ごちそうさま。母さん」

「うふふ、よかった」

「じゃあ行くか。零児」

「うん」

そうして離れになっているところにある道場に行く。離れの道場は家からは離れすぎていて周りには何も無く広場のような所にポツンと立っている。

道場といっても別に誰かが習いに来るわけでもない。ただ父さんが生まれる前からあったらしくて、主に鍛錬する時に使うんだ。

「さあて、鍛錬というわけだが……」

そういった瞬間に父さんの目つきが変わる。

でも僕はこのときの厳しい顔も実は好きだったりする。ああ、早くこんな緊張感を持たせる強い人になりたいな。

「今日はやっぱり重要な足裁きの復習だ」

「うん」

「良いか零児？ 体裁きの基本は足使いだ。強くになるには何はともあれ移動の重要さを知らねばいけない。解るか？」

「うん」

「ならば武器はなんでも良い。この前教えた足裁きでかかって来なさい」

「う……うん」

そうして道場の隅に並べてある武器の方に行く。ここには練習用に刃が潰してあるのが置いてあるんだけど……正直色々ありすぎて困る。

シンプルに木刀から、胡蝶刀、三節棍に八卦刀・龍形刀、太極刀などの中国物。危ないから使った事がないけど鎖鎌や槍に薙刀。これぞ西洋の剣って感じの両刃剣みたいな物やダガー、ナイフに斧にハルバート。盾までもあるし。

他にも棍棒みたいな物や杖やら弓やら何かはよくわからないけどとにかく棒状の物。鉄で出来た撥やらもう色々ありすぎて迷う。

でもまあよく判らないので取りあえず木刀にしておく。

「うん、まあ手頃な所だね、それじゃあ……かかって来なさい！」

そうして鍛錬は始まる。

取りあえず軽く能力を開放し教わった通りの足使いで距離を詰めただぶらりと立っていて一見隙だらけの父さんに一撃を当てる……はずが。

「甘い！」

いつの間にか父さんの左手に握られていた脇差サイズの木刀で受け止められた。うッ……隙が出来たか……？

「……………」

しかし父さんは攻撃してこない、という事はどんどん打ち込んできなさいって事だろうか……まあいいや、もう一撃！

「やあぁっ！」

「フッ！」

当然のように弾かれる攻撃。

だが、はじかれた軌道からそのまま降り下ろすように足元を攻撃する……がその位置からのバックステップでかわされる……ならば、もう一撃！

「えいっ！」

「クッ！」

パキィ！

下に降りた木刀を左足を前に出し下段の構えにした形で切り上げる形での追撃……も脇差サイズの木刀で後退しつつ受け止められる。

ただそれで父さんの木刀を大きく弾いた上に父さんの位置も壁際まで追い詰めた。能力による計算によると次の一撃最速で撃てばこの木刀による防御は追いつかない。

完全に先手を取った！

そのままやや引き気味になった木刀の切っ先を翻し胴めがけて最速の突きを見舞う……が。

「フンッ！」

「ええ？」

父さんはその場で垂直に飛び上がり突きをかわし、更にその後道場の壁を蹴って僕の左側に着地した。

そしてそのまま回転するように左手の木刀を横に振って……。

「きめだぁ！」

「うわっ！」

ベキッ！

叩きつけて来た。その一撃は辛うじて木刀で受け止めた物の不安定な形で受けたため木刀は手から離れて転がっていった。

なのに更に父さんは木刀を振った回転力でそのまま一回転して回

し蹴りを放ってくる……ッ！
間に合わない……ッ！？　ならば……。

なんとか辛うじて身体を浮かし手を十字に組んでに防御して衝撃を減らそうとするも……。

「フンッ！」
「うわ！？」

ドカツ！

あ……空、飛んでる？

その弾丸のような一撃で殺しきれなかったエネルギーは身体を後方に飛ばし……。

ドガッ！

「グッ！！」

道場の壁に当たって身体は止まった。

あいたたたた……背中が……痛い。まあマトモに受けなかっただけでもマシかな。

と、僕に影が被って暗くなった。見上げると……父さんが目の前に立っていた。

「うん、悪くない動きだけど……まだまだ甘いね。これが実戦なら死んでいるぞ零児？」

「死んでいるぞ零児……じゃないでしょーが！」

バキィ！

「グエ！」

突然の後からの打撃で崩れ落ちる父さん。

「心配になって見に来てみたら、やっぱり……なに七歳の子供に本気になってるのよ!？」

「……………」

そこにはなぜか木製のバットを振り切った状態で仁王立ちしている母さんが居た。

父さんは……動かない。生きているのかなアレ。

「ふん、自業自得だわ。死して屍を拾う物なし……ね」
「……………」

と、突然ゴソゴソと父さんは起き上がった。もう回復したらしい。流石は父さん……凄いなあ。
そして突然の弁明。

「いや、これは、その、違うんだ、怜」

「ふーん、まだ生きてたのね。まあいいわ。死ぬ前に遺言くらい聞いておいてあげる」

「ちよちよちよお前待て。私は零児のためを思ってだなあ……」

「れーいーじーに……怪我させないって言ったわよね？」

「あはははは、まあ言ったような言わないような言ったような言ったような……」

「言ったわよね!!」

「ハイ。言ったであります!」

立ち上がって敬礼する父さん。

そしてそれを半眼で睨む母さん。

「で今のセリフ。実戦なら死んでいると……つまり普段なら相手が

死ぬレベルの事をあなたは零児に対して行ったわけね」

「いや、まあ、その、ちょっとは、そうなるかも、知れないかも、しれないかな？」

「そうなるのよ。それで怪我はさせないですって？ 今日鍛錬はもう中止！」

ええ……それはヤダよ。

「ねえ母さん。僕は大丈夫だからまだ続けさせてよ」

「へ？ 零児、だって今の怪我したんじゃ……」

「見てわからなかったのか怜？ 零児はインパクトの直前に身体を浮かせてダメージを分散させたんだよ。いやー流石は私たちの息子……」

「あなたは黙っというて！」

「……はい」

そうして、母さんはしゃがんで、僕に目線を合わせて、話してきた。

「でもね零児、あなたは無理に能力を使えるようになる必要はないのよ？」

「うん、でもやりたいんだ。ね？ いいでしょ？」

「うーん、まあ零児が言うんなら……仕方ないわね。それよりもあなた、もうさっきみたいな事はしたらダメだからね？」

「へーい。それじゃあ零児、続けるぞ？」

「うん」

「ふう、しょうがないわね。それじゃあ私は洗濯の続きをしてくるからね」

「うん」

「エイッ！」

「まだだッ！」

バシッ！

「いたたたた……」

それから一時間ほど続けるも結局父さんからはまだ一本も取れていない。

「まだだな。動きが平面的だ。お前ほどの才能ならばもっと身体を立体的に動かせるはずだ」

ううう、そうかなあ？

「いいかい、零児。いくらお前が私以上の才能があるとはいえ肉体強化型との一对一の戦闘はやはり不利だ。しかし私たちほどの能力者になれば軌道を読むのも容易い上に、禁じ手とはいえ一時的に自分の脳に侵入して肉体を強化することも出来る。さらに私たちの能力の根源は「解る」と言う事だ。すべてはそれの応用なのだから勿論空間把握能力も並の能力者より高い。だから障害物はあればあるほど有利になるということ覚えておきなさい」

う……障害物ってココは、壁くらいしかないよう。でも……。

「まだ出来るか？ 零児」

「うん。まだまだ大丈夫だよ」

「よし、それじゃあもう一回だぞ」

絶対に強くなって、母さんを守れるくらいに強くなるんだ。

「二人とも……お茶が入ったわよ。あなた、零児、いらっしやい」

あ、母さん……。

「ははは、それじゃあ零児。いったん休憩だ。休憩が終わったら、またやるからな？」

「うん、わかった！」

「ねえ、あなた。なにもそんなに力を入れないでも。零児には私たちの後を継がせる気は無いんでしょ？」

そう言いつつお茶菓子の皿を真ん中において皆に湯飲みを渡す母さん。あ、今日のお茶菓子は大福だ。僕は太福が好きなんだよね。

「う……まあそうなんだけどな。でも零児の筋が良いからついつい力が入っちゃってな。まあ親子のこみゆにけいしょんってやつだ」

そういう父さんの顔もさっきまでの緊張感は何処へやら、ふにゃふにゃにだらけている。

「もう、あんまり能力を使いすぎてどこか悪くなっちゃったらどうするのよ？」

「大丈夫だって。そんなヘマはしないから。それに零児だってそんなにヤワじゃないさ。何しろ私と怜の息子なんだから」

「はいはい。でも程々にしとくによ？ 零児、こっちらっしやい」
「うん」

そういつて座っている母さんの所へ行つて抱っこしてもらう。
母さんの着物からはお日様の匂いがした。僕はこの匂いが好きだ。

僕の着物は少し汗ばんでいるけどいつも鍛錬が終わったら母さんがこうして抱っこしてくれる。これが楽しみで鍛錬をするって言うのも実は理由の一つだ。

お日様に当たりながら母さんの膝の上で抱かれているとかあさんは優しく僕の髪の毛を梳くしけずる。その気持ちよさに思わず瞼は閉じてしまう。

「あーっ、ふう、もう零児は本当にお母さんっ子だなあ。そんなんだと立派な男にならないぞ？」

「何言ってるのよ。まだこんな小さい零児にこんなに厳しい鍛錬をしているあなたのほうがよっぽど変なのよ。ねえ零児」

「ううん、でも僕強くなりたいから、別に辛くないよ。強くなって母さんを守ってあげる」

そうなんだ、僕の夢は、母さんを守れるくらい強くて立派な男になることなんだ。父さんみたいに……。

「うふふ、ありがとうね零児。頼りにしてるわよ」

「ああ……零児に私のポジションが取られた。まさか幼な子に追いつかれるとは……しくしく」

ううん、それは違うよ。ぼくは、父さんみたいになりたくて、母

さんに、父さんと同じように頼りに出来るようなそんな男になりたいんだ。

「あ、それよりも零児。もうすぐお昼だからご飯食べたら、沙雪ちゃんと一緒においさまの所にいくのよ？」

「うん」

「ああそうだな、そういえば腹も減った。零児、今日の鍛錬はここまでだ。飯にしようか。怜、飯は？」

「うふふ、もう準備できてるわよ」

「ああそうか。いつもありがとうな。じゃあ行くぞ、零児」
「うん」

ああ、そうだ。僕は幸せだ。こんな幸せがいつまでも続いて欲しいと、心の底から思っていた。

「れいじー、おじいさまに勉強教えてもらいにいこー？」
「んー、あ、沙雪か。少し待ってね」

ご飯を食べ終わってノンビリしていたら沙雪が来た。沙雪という

のは里にある数少ない家の一つの立花家の子で僕とは歳が近いから物心ついた時から仲がいい。

「れいじー、早くしないといっちゃうよ？」

「うん、準備できたから。いこ」

「うん」

「ねえ母さんー、行って来るねー」

「ん……ああ、はい。いってらっしゃい」

そうして二人、じいちゃんの家までの山道をぽくぽくと歩く。

「ねえ、そういえばれいじー」

「ん、なに？」

「あのさ、今日って今から勉強なんだよね？」

「うん」

「それじゃあ昨日した一緒に筍取りに行く約束はどうなるの？」

「あ……今から勉強じゃあ無理だね」

「楽しみにしてたのに……んもう」

「ごめんごめん」

「ふんっ、れいじの嘘つきー」

「わかったよ。明日朝から行こ？」

「え……朝から？」

「うん」

「それなら許してあげるっ。約束だからね？」

「うんっ！」

そうして話していると村の外れにあるじいちゃんの家に着いた。じいちゃんの家にはなぜかアジの開きがズラーツと干してあった。あ……あれが今日の朝ごはんだった魚か。まあ良いや。

「じいちゃん、来たよー」

「おじいさまー、勉強教えてー」

中では、武器だらけの間の中、じいちゃんは砥石で、刃物を研いでいる真っ最中だった。

「ん、おう、零児と沙雪か。まあ入れ」

「うん」

そう言ってじいちゃんは研いでいた刃物を壁に放り投げる。放り投げられた刃物は奥の部屋の壁に垂直に刺さっていた。そうしてそれを見もせずじいちゃんは卓袱台のある居間へと移る。

「今日はなんじゃ？」

「ううんとね、今日は国語と算数です。おじいさま」

「ねえじいちゃん。なんで勉強なんかしなくちゃなんないの？」

「それはだな、いつか里を出たときに必要になるからじゃ」

「えー、でも僕里を出る気なんて無いよ。出たいなんて思った事も無いもん。沙雪はある？」

「ううん、私はれいじと一緒に居れたらそれでいいもん。あ、そういえば聞いてくださいよおじいさま。れいじが今日筍取りに行く約束してたのに行けなかったんですよ?」

「む、筍か。居間の季節なら美味しい孟宗竹が取れるんだがな」

「妄想竹? もーそーちくって何?」

「妄想ではない、孟宗竹じゃ。美味しいぞ。それよりも零児、いかな、約束は守るもんじゃ」

「う、そうだよ、でも明日朝から一緒に行く約束したんだ。じいちゃんの分も取ってきたげるよ」

「おお、そうか、ならば頼むぞ」

「あ、それよりもさ、なんで僕らが里を出るなんて話になってるの? 別に僕ら里から出たくないよ?」

「うむ、まあそれには深いわけがあつてな。零児、沙雪。二人は今何歳だ?」

「七歳。沙雪もだよな?」

「うん」

「ふむ、七歳か、ならばそろそろ物事の理もわかる年頃だし能力者のなんたるかを教えてやってもいいかな」

「へ?」

「零児は精神干渉型。沙雪は肉体強化型だったかな?」

「うん」

「そうだよ」

「知っているかも知れんが、里の外に君らのような能力を持った人間は殆ど、いや、全くおらんのじゃ」

「へ？ 一人も？」

「うむ、わしらは……とは言ってもわしは能力は使えんが、人間という者は自分と違うものを嫌う性質があつてな、わしらは昔から迫害されておつた。そして一箇所に集まり村を作つた。これは別にわしらだけではない。人間は長い歴史の中で人に成つて来た訳だが、別に一人の人間が今の人間を作つたわけではない。巷ではアフリカで一人の女性から人は始まつたと言う者もいるが、別にそんな事は無く、あらゆる所で人は人と成り、またどうしようもなく愚かな獣でもあつたんじゃ」

「「？」」

「ふむ、まだわらんかもしれんがいずれ解る。そうして人というのは違うものを嫌うと言う特性ゆえ、似た物が集まる習性があつてな、例えば獣としての小さいという特性を残した物は、一般の社会では迫害される故小さいもの同士で集まり村を作つた。また見た目が人と違うが人であるものもそのような者同士で集まり里を作つた。私たちは例えば精神干渉型の能力などは、まだ人が言葉を使うようになる前の意思疎通の方法であつたのだが、言葉が使えるようになってからもそれを覚えている者たちだったのだよ。そう言った者は俗世から離れて生活する故、一般社会では知られる事がほとんど無いが、そう言った者がやや湾曲して伝わり全国、いや、世界中で小人や妖怪、桃源郷のような隠れ里の伝説へと発展して言ったんじゃ。しかし何故わしらのような物が存在するかというとそれはもう極少数の突然変異もあるが殆どは進化の過程で取り残されたという事じゃ。なぜならわしらや、妖怪と呼ばれる物や小人などに共通しているの

は人の動物としての面を強く残しているという所だからな。零児や沙雪も能力を使うと少し自分の理性が効かなくなるじゃろ？」

「うん。あれ、ちよつとまって、それじゃあ僕らは妖怪ってこと？」

「ふむ、まあ一般人から見たら化け物という事になるのかも知れん。肉体強化型のものは昔は鬼と、精神干渉型はサトリと呼ばれ昔から一般人には妖怪として恐れられていたのだからな」

「へ、そんな……」

「しかし二人とも、だからといって自分を卑下したりする事はない。その力は人が人になる前、まだ言葉も持たぬころには誰もが使えた力だったんじゃない。それが進化のプロセスでその力を無くした、いや、使い方を忘れて行っただけなんじゃ」

「へ？ 忘れたってことはさ、例えばじいちゃんみたいな能力を使えない人もホントは使えるってこと？」

「うむ、君たちは人の使い方の忘れた力の使い方、その使い方を覚えていくものに過ぎん。人は普段の生活で使っているのは脳のホンの一部なんだよ。その普段使われていない部分は過去動物であったときの記録なんじゃ。君たちはその人の獣としての潜在能力を発揮する方法を覚えている物に過ぎない。だから何か小さな歯車がずればわしだって能力を使えたかもしれない。だから別に生き物として普通の人と違ふとかそんな事は考える必要は無い。君たちは人間だよ」

「ふう、よかった。あ、でもさ、最初の話とそれ繋がってないよ？ どうして僕らは里を出なくちゃなんないの？」

「ふむ、いや、別にすぐ里を出る必要は無い。ただな、わしらは大昔からこの里に住んでおった」

「うん」

「そうしてこの狭い世界で、偶に外からの依頼で普通の人にはできない仕事を請け負って報酬を受け取り、狭い人間関係で、少ない人数で悠久の時代を生きてきた」

「うん」

「その結果な、わしらは血が濃くなりすぎたんじゃよ」

「血が、濃い……って、どういう意味？」

「ふむ、解らないか。なに、そういえば零児、この里で知らないものはおるか？」

「ううん、いるわけないよ。だって殆ど皆どっかで血が繋がってるから全員親戚みたいなもんだもん」

「うむ、そうじゃろう、つまりはそういうことじゃ。これだけ少ない人間で生活していると当然結婚していくときにも知り合い、または親戚同士になる。だが新しい人が増えるでもなく、限られた人数で、限られた世界の中で子を生していく。その結果殆どの結婚は近親相姦になってしまった」

「きんしんそーかん……ってなに？」

「ふむ、血筋の近い物同士で子を生す行為をする事の事じゃ。例えばここで零児と沙雪が結婚してもそうなってしまっている可能性は高いという事じゃ」

「え、でもそのきんしんそーかんってのは何か問題あるの？」

「うむ、まあ、一度や二度の近親相姦などなら、倫理的な問題以外ではそれほど問題は無いかもしれん。しかし、何百年にも渡ってそれをしてきたとなれば話は別だ。この代での近親相姦は奇形児などの異常を持った子供が生まれやすくなるなどの遺伝子的な問題が多くあるのじゃ。事実ここ最近この里ではそういった子が生まれる事も多々ある」

と、突然地也で大人しく聞いていた沙雪が口を挟んできた。

「ねえ、それって私とれいじは結婚しちゃダメってこと？」

「いや、そんな事はない。別に君たちが大人になって好きあったいのなら私たちにそれを止める権利は無い。ただこの里のシステムの限界に近いのも事実。その限界が後一世代先か二世代先かは知らないがそう何代も持つまい。だからもしもそうなるにしても君たちは里の外に出て君たちの子供は普通の人と結婚するようにする。それがあの武烈がこの里の宗家として考えた方法なんじゃ。その結果事実上里はなくなるし、遠くない未来に能力者も居なくなるだろうが……それも時の流れ、運命じゃ。仕方ないだろう」

「ふーん、それじゃあ私たちが一緒になるのはいいんだ。ふふふふふ」

沙雪は何を笑っているんだろう。まあいいか。

「ねえ、れいじ？」

「ん……なに？」

「いつか里を出るときは、私と一緒に出ましょ？」

「そうだね。うん、いいよ」

「一緒に……いられたらいいね」

「そうだね」

「はははは、本当にお前たち二人は見ていて飽きないな。ああそうだ、これで勉強しなければいけない理由もわかったじゃろう。さあ、始めるぞ？」

「「うん」」

「うむ、今日はここまで位かな」

「ふえー疲れた。ねえ沙雪、もう外暗いね」

まあ当たり前だけどね、だって間に休憩を挟みながらもじいちゃんはずっと教えてくれたんだし。

「そうだね。帰ろっか」

「うん、それじゃあ今日もありがとう、じいちゃん」

「ああ、ちょっと待ちなさい。零児、お前に渡すものがある」

「ん、なに？」

「ほら、これだ」

そういつてじいちゃんは僕の手小さな物を乗せた。

「なに、これ……ナイフ？」

なんだか良くわからないけど折りたためるなんか果物ナイフみたいなものだった。

「いや、前に零児がやらせてって言ったから一本刃物を作らせてやっただろう？」

「うん」

そういえばそんな事もあったな。鍛冶仕事しているじいちゃんの所に行ってやりたいって言ったら小さな刃物を作らせてくれたんだ。

「その時に零児が作ったのが思いの他出来がよくてな、折りたためるように柄をつけたからあげよう。刃の部分にある突起を親指ではじく事によって片手で刃が出せるぞ」

「ん……こうかな？」

そうして親指で刃をはじいてみると、確かに刃が出てきた。

「そうじゃ。しかし小さいとはいえ正直初めてでそれだけのものを作るとは驚きじゃ。正直に言いなさい。零児。作るときに能力を使いながら作ったじやろう」

「えへへ、バレちゃった？」

そうなのだ、実は作るときに軽く能力を開いて最高の硬度と切れ味になるように読み込みながら作ったんだけどね……やっぱりバレちゃったな。

「うむ、バレバレじゃ。まあいい。使えるモンは使うのも悪くないじやろう。まあお前の腕なら護身用の武器としてはそれくらいあれば十分じやろうて。持っておくといい」

「うん、ありがとう。大事にするよ」

「ははは、そうか。まあいい。手入れは怠るなよ？ 名刀と言えど手入れをしなければすぐに鈍らの仲間入りじゃからな。それよりも早く行きなさい。沙雪が待ちわびているぞ？」

「うん、ありがとう。じいちゃん。またね」

「ああ、またな」

・

家に帰ると、父さんが知らないおじさんと酒盛りをしていた。

父さんは久しぶりに羽目を外しているようでかなり上機嫌だった。その父さんを仕方がないわねえという雰囲気ながらも嬉しそうに見守る母さん。

「おうおう、零児、帰ったか。ちよつとこのおじさんに挨拶をなささい」

「あ、はい」

そういつてそのおじさんの前に行く。そのおじさんは凄く背の高い真っ黒な格好をしたおじさんだった。

「初めまして。最上零児です」

「ああ、君の話は武烈からよく聞いている。私は物部宗全と言う者だ」

「おい、零児、このおっさんが持ってきてくれた苺だ。うまいぞ、お前も食え！」

そう言って出された苳を食べてみた。苳は大粒で甘くておいしかった。

「ふむ、私は武烈と同じ年だから私がおっさんならば武烈もおっさんという事になるぞ？」

「ああそうだね、俺はもうおっさんやもん。零児もこんなに大きくなっただし、なー？」

「う、うん。あ、物部さん。苳、おいしいです」

「ふむ、そうか。まだたくさんある。好きなだけ食べるといい」

「あ、ありがとうございます」

ふう、いい人みたい……なんだけどなんだか少し話にくい。よくわかんないけど緊張しちゃうな。

と、酒盛りの席の方では父さんが物部さんに絡んでいた。

「おうおう宗全、なんで最近来なかったんだよう、つつうかお前何処に行ってたの？　なんかそうだな、零児が生まれた直後くらいにふらっと里から出て行って、いやま出て行くのは全然構わないんだけど。でも連絡くらいくれたっていいじゃねえかよう？　まったくさー、友達がいの無いやつだよな？」

「ふむ、いささか酒臭いぞ武烈。少し離れろ」

「にゃにおう。相変わらず口の悪い奴だぜ。あーあ、全く本当にもうおじさん悲しいですよ！」

と、母さんが間に入って父さんの前に水を置いた。

「ほらちよつと、あなた、あんまりお酒強くないのに……飲みすぎよ？ほんとにすみません。この人、物部さんとお酒呑めるのが久しぶりで嬉しいらしくて……」

「ふむ、いや、別に私は気を悪くしているわけではないから構わない。私も楽しんでるのだからな」

ううん、そうだろうか。この人一度もニコリとも笑わなくて僕からはとても楽しんでいるようには見えないけど……まあもともと感情があまり顔に出ない人でこの人はこの人なりに楽しんでいるのかもしれないね。

「うふふ、相変わらずですね、物部さんは。お酒はまだ沢山あるんで楽しんでいってくださいね？」

「ああ、そうする事にする」

「オイ、飲みがたりねえぞ宗全」

「いやいや、私はかなり呑んでいるが……武烈は相変わらず酒が弱いのだな」

「うっへい、そんな事はねいやい。俺はこれでも最上家屈指の飲める男なんだぞう？」

「ふむ、しかし君以外は一滴も呑めんような者ばかりではないか。あまり自慢になる話ではないぞ、それは？」

「くびびり、ふう、まあ、それもそうだな。それよりそういえばどうして宗全は戻ってきたんだ？」

「ふむ、まあ色々理由はあがあるが今の君に話しても埒が明くまい。あした、また話す事にする」

「あーそうかー、わかったー。じゃあ今日は呑もうや。な？」
「ああ、それも悪くは無いな」

・

そうして次の日、素面の父さんとあの人は何かを話しあっていたらしい。何を話していたのかは僕は知らないけど。
そうしてそれから何日かの平凡な日が過ぎて、その日はきた。

夜中、爆音で目が覚めた。

いつも一緒に寝ている父さんと母さんの布団はすでもぬけの殻だった。

急いで障子を開け放ち外に出ると外は夜中なのに明るかった。

ただ紅かった。うち以外の殆どの家は焼け落ち、この家の屋根にも火の手は上がっていた。

外では見た事の無い服を着た見た事の無いたくさんの人が連射出来る銃を持って走り回っている。

それこそ相手は誰だろうと無関係に、能力者だろうと、能力者で無かろうと。男だろうと、女だろうと、子供だろうと、大人だろうと。

頭が真っ白になった。何が起きたがわからない。

だが、そんな白い頭でも唯一つ実感できることがあった。

それを、コイツ等を、許すわけには、いかない。

ガチャリという音とともに、頭の中で何かが壊れる感触があった。そうして禁行である「ソレ」を行う。

全身に血液が廻り渡り心臓は身体を保つためにフルに血液を作り送ri続ける。筋肉の作用は限界を超えて動き脳はそれを可能にする方法を検索する。

体が、熱を持っている、今この身に置いて、世界で自由にならぬものなど何も無い。

そうしてなぜか手に持っているナイフの刃を開き取りあえず目の前で銃を乱射している数人の男に飛びかかる。

その気配に数人の男がコチラに振り返るがすでに時は遅い。能力による解析によると敵の服は特殊な素材でこの刃渡りの短いナイフでは致命傷を与える事は難しい。

よって敵の目前または背後に着地しそのまま正確に敵の首だけを搔っ切る。

二人を排除したところで近くに居る残り五人がコチラに気づき銃を構えてくる。

が、コチラは能力はすでに全開で近くに居るもの全ての思念が流れ込んでくる。だから……勝てる。

勿論肉体を強化しようと銃弾より早く動けるわけではない。が、敵の動きがわかる以上当たる道理はない。

一人が発砲した、時にはその男の息を止めた。あくまで邪魔をする障害ならいくらでも排除する。

残りの四人が一斉に発砲するがそれを避けつつ回りこみその銃弾で二人が死亡。

そうして残りの二人のうち一人の首を切り殺害したときに左足の拳がぶちりという音を立てた。

見ると左足首から出血している。体が動きに耐え切れなかったか……でもまだ動く。

そうしてこちらを見ている男に向かい飛び上がって銃弾を避けた動きから敵の首に向かいナイフを投げつけた。

男は倒れ、とりあえずの敵は居なくなった。男の首からナイフを引き抜き……さて。何をしようとしていたんだっけ。

そういえば……父さんと母さんは、何処にいたんだろう。あ、足

が痛い。血が、出てる。熱い。熱い。熱い熱い熱い。

周りは紅くってどの家も焼けている。近くの敵は残滅したけど未だアチラコチラから怒号や悲鳴が聞こえる。夜なのに空は紅くて悪い夕焼けを見ているみたい。

熱は肌に焼け付き眼球は熱で用を足しずらくなっている。

そんな紅い揺らいだ世界の中を中を中を、反応の悪い左足を引きずって返り血で真っ赤になりながら真っ赤なナイフをもって彷徨い続ける。

ああ、父さん、母さん……何処に。

そうしてたどり着いたそこはいつも父さんに鍛錬をつけてもらっている道場の近くの広場だった。

血まみれで倒れている母さんと、全身血だらけで鬼神の如く人を殺し続ける父さんがいた。

すでに周りには死体の山が出来ているが尚父さんに群がり続ける敵を父さんは右手に持った日本刀で飛び回りながら敵を切り続ける。

地面には何本もの日本刀が刺さっていて父さんは切れ味が悪くなると惜しげもなくその刀を捨てて新しい刀を抜き取りまた殺戮を繰り返す。

そこで戦い続ける父さんはいつもの父さんとは似ても似つかなく

て、なんだか知らない想像上の戦いの神を見ているような気分になった。

殺す。斬る。斬る。捻じ切る。蹴る。殴る。斬る。捨てる。
殺す。殺す。殺す殺す殺す。

そうして殆どの人が居なくなつて、辺りには死体の山だけが残された。

そうして目が行く母さん。近づいていこうとして。

「零児……来るなっ！」

その父さんの言葉でどういう状況かわかってしまう。

「そんな……。いやだ、僕は……」

そう、いやだ、いやだ。でも、だけど、だから、守るって、違う、こんな、嘘だ、でも、嫌だ、でも。

「ほう、最上の跡取りか……？ ふむ、武烈は薄情なのだな。母親との最後の別れだ、させてやればいいではないか」

その声で顔を上げるとそこには数日前に来た人、物部宗全が立っていた。

「宗全……貴様ッ！」

声を荒らげる父さん。この男が……。

「来い……武烈ッ！」

そうして日本刀を構える宗全。

そしてそこに右手に持った刀で斬りかかる父さん。

ガキンッ！

触れ合う刃と刃。

その瞬間に父さんの刀が宗全の刀を弾き飛ばし、更に宗全の右手首は変な方に曲がっていた。

「……ふむ、流石は最上の宗家といったところか、まさかこうも簡単に右腕を持っていられるとは……」

「殺す」

「ふむ、自分の能力で自らの脳のリミッターを外し肉体を強化した

か。敵が一般人なら能力を発動する事だけでも戦いを優位に進め、敵が精神干渉型でも侵入を許さず肉体強化型でも自らをそれ以上に強化し高める事によって同等以上に渡り合う……まさに対人戦では負けることすら在りえぬ最強の闘神といった所か。流石だな、武烈」

「黙れ」

「覚えておけ最上武烈。その怒りが敗因となりえることを……」

「……………」

無言のまま飛び掛る父さんの動きをバックに避ける事によって紙一重で避ける宗全。そうして次の避けられぬ必殺の一撃が当たる直前……。

バン……！

という破裂音とともに父さんの右肩が吹き飛んでいた。そうしてガシャリという音とともに父さんの手から落ちる刀。

「詰みだな。武烈」

「貴様……スナイパーを……」

「ああ、貴様の能力に敬意を示してとった距離は200mだ。その上戦闘で注意力も落ちているだろう」

「く……宗全……ッ！」

「如何に一对一では最強とはいえそこに戦略が入ってきた以上そこに最強などありえん。覚えておく事だな。まあ、ここで死ぬのだからから関係は無いだろうが……」

そうして左手に抜いた小刀を持ち、それを父さんに振り下ろそうとする宗全。そこで……目が覚めた。

「させるかあああああっ！」

「ムッ！」

そうして宗全にナイフで斬りかかる。

それを奴は刀で弾く。だから斬る。弾く。斬る。弾く。斬る。斬る。斬る。

「死ねええええええっ！」

「クッ！」

勿論全ての攻撃が当たるわけではない。しかしコチラの攻撃は致命傷こそ与えられない物の少しずつ敵の身体を削り取っていく。

コチラもぶちりぶちりという音が身体中から響き長くは持たない事はわかる。だからそれまでに……仕留める！

「ダメだ零児……それ以上は……」

「ああああああああっ！」

うるさい、コイツを、殺す。

「む……早い……撃て」

「見える！」

そう。その時確かに見えた。200m先でこちらを見て引き金を引こうとしている男の姿が。

そうしてとっさに身を引きその瞬間に足元に突き刺さる弾丸。

「む……避けた……だと！」

「死ねええええ……ッ！」

そのまま必殺の一撃をもってしてナイフを振り下ろす。が、その一撃は相手の左腕を持って行っただけで未だ致命傷には届かない。

「む、子供にして吾が身では倒せぬか。ここは引く！」

「逃がすかあああっ！」

と追いかけようとしたとき……左足の筋が切れて地面に無様に転がった。ちくしょう、こんな時に。

「さて、追うな、零児！」

あああ、そうだ、そんな、そんなことをしている場合ではない。
父さんは、母さんは！

そうしてまずは近くに倒れている母さんに駆け寄った。でも、母さんはいくら声をかけても揺すっても抱きついても返事をしてくれない。

ああそうだ。勿論わかっていることではあった。でも認められなかった。無理だったんだよ。

「そんな、僕が、僕がかあさんを守るって言ったのに」

「零児……すまな、い」

「なんで、父さんが謝るんだよ。僕の、僕のせいだ。僕が弱くて母さんを守れないから」

「それは……違う。零児のせいじゃ……ぐッ。ああ、あまり時……間も無いな。すまない……零児」

そう言って母さんを抱き上げて焼け落ち逝く自分の家へと入っていく父さん。

「そんな、あ、とう……さん？」

当然ついていく僕。

「ああ、だめだ。家が焼け落ちる前に……外に出て……」

「う……？」

「ふう、はあ、行くぞ……」

そうして焼け落ちていく家を見ながらさっきの男のことを思い出す。

「そうだ、さっきの男が……ならば、僕が……僕がアイツを……」

「やめなさい。零児は……そんな……ことは……」

そういつて急に能力を使う父さん。

「あれ、父さん。なんで……そんな身体で能力なんか……使ってる……の？」

ダメだよ、そんな身体で能力なんかあったら本当に死んじゃうよ。

「コレは私の、わがままだ。本来、私に、こんなことを、する資格は無い。ああ……でも、こんなことを、私はやりたいと思ってしまふ。もしかしてこれが……君の枷になって……しまうかもしれない。すまない。でも、どうしても、零児は、こんなことに縛られるべきじゃないって思うから……零児。はあ。ダメな父親だったが……私

の最後のわがままだ。抵抗を……弱めてくれないか？」
「う……うん」

何かなんだかわからない。処理する情報が多すぎてわからない。現実を受け止められない。このままでは壊れてしまう。紅い。熱い。痛い。悲しい。

そんな状態故か父さんの目を見つめているという事に逆らえなくなってしまう。そうして意識して能力の抵抗を弱めた。

そして、その裸の心に、何か暖かい物が触れた気がした。

「能力……開放……出力……最大……。読み取り、および、上書き開始」

抵抗、オフ。記憶、記録情報、および感情上書き開始。

「

今回の事、それに怜の事は、忘れなさい。こんなこと無理には覚えてられないだろう。君は未だ幼い。現実を無理に直視することは無いんだ。きっと怜だって怒らないさ。

それからお前は自由に生きればいいさ。正直、私は、お前に私と同じ道は歩かせたくない。

もう、私達みたいな人間は、必要無い時代になったてことかな。

いや、本来人類が人として今の形態に落ち着いたときから私たちの力には必要ないものだったんだ。

兄さんの家へ、ある程度大人になるまでは兄さんの家に置いてもらうと良い。

このまま狭い世界の生きていける時代では無いんだ。普通に生きるにはそれだけの知識と経験が要るだろう？

そうやって普通に生きていくのが君にとっても一番幸せだろう。普通っていうことほど良い物は無いんだよ……。

それでもあえて君に能力の扱い方を教えたのはそれを知らないで暴発を防ぐため。その力のセーブの仕方を覚えるため。そしてもしもの難局ではそれを使ってでも生きて欲しかったからだ。

そして、私たちは本来戦う者ではない。解りあえる者だ。だから解らない事は何も無い。そう思っていたんだけど。そんなことは無かった。

全ての宗教思想倫理哲学。その根底にあるものは魂の不死だ。そして私たちは物質でも生き物でも解る事が出来る。

でも死者はどうだ。母さんのことでも解ると思うが使者の魂と繋がる事はできない。もしかしたら魂の不死などありえないのかもしれないが、ああ、それなら私たちは何のために生きていて、なんでこんな力を持ってしまったんだろうね。

もしかするとこの力なんていうものはなんでもないものかもしれないね。

でもだ、しかしだ、そうだとしても私達はやはり人とは違い、人には無い力を持っている。

そしてその力は私の代までは使うべき時だけ使うべきものだった。君には言っていないかったが私だって今までも何人もの人間をこの手で殺めてきた。

しかしこの稼業も私でお終いにしようと思う。しかし、もちろんそれを伝えてしまった君はそれをいつ使おうが君の自由だ。

好きなときに好きなように行動すれば良い。どう生きようが君にとってこの世は自由だ。

しかし覚えているべき事は人はあくまで肉と言う事だ。それが皮をかぶって歩いているにすぎん。たった今すでに何人もの人間を殺した君にはわかるだろう。

だからちよつとした事で人なんて壊れてしまうんだよ。だから強制はしないが君は相手の自分を傷つけようとする心構えより1段階だけ深く相手を傷つけるくらいにしておいた方が好ましい。

あまり殺してしまうと言うのは気分の良い物では無いからな。なに、君の才能は正直私以上だ。それくらいの調節くらいは出来るだろう……？

だから、もう、絶対に人を殺してしまっってはいけない。どうしようとして自由だけれど、それは君を壊しえる要因にもなりえる。

私は磨り減ってしまっただけで気分がよくないですんでしまっただけで、君にはそうなって欲しくはない。

やはり人が人を殺すという事は決定的にやってはならないことなんだよ。だから、私は、これが君の枷になろうとも今ここで敢えてそれを行おうと思う。

「君は、人を殺してはいけない」

これを、君の誓約とする。すまない。勝手にこんな事をして。

あと、これは私からの希望だ。聞き入れてもらえないのならそれは仕方ないし私は君に強制できる立場でも無い。

ただ、あくまで私の気持ちとしては君にはその力を、君自身が正しいと思うことに使って欲しい。私にはそれが出来なかった。だからこそ懂れた。しかしすでに私達にその使い方を強制するものは居ない。

だから、だから……心の底からそれを君自身の正義を通して使用して欲しいと願う……。それだけだよ。そう、本当はそれだけなんだ。能力に流されず、君の正義を貫けば、きっと大丈夫だ。だから、生きて。

生きて。

生きて、欲しい。

「

……、

分離

」

Ground zero (後書き)

なーげなーいふっ、なーげなーいふっ、投げナイフっ!!
どうも、s i k oです。錯乱しております。死にそうです。瀕死です。

さて、恒例の更新遅れた謝り言い訳タイムですが、(うわ、最悪) いやね、今回ばかりはどうしようも無かったんですって。

身内で不幸が続いたりね、まあはつきり言うとなんか死にが相次いだり私生活も多忙の極地でなんだか死に掛けましたよ。

だから今回は謝りません。

え？ よむほうには関係ない？ ハイご尤もです。

勿論読者様は神様ですしいつも読んでくれている人やまして感想くれる人にはいつも感謝の気持ちで一杯です。

でもまあなんていうか今回だけは見逃してもらえると嬉しいかなーみたいな甘いこと言って見たりして。

さて、異様に長い今回ですが殆どが説明で今までは匂わせる位だった世界観を説明するのに使いました。

本来永久欠番予定で頭の中だけで終わる所ですが敢えて書いてみました。

それで詰まらないという人はごめんなさい。しかし私はここも書きたかったのでやはり書く事にしました。
面白いと思っていただけたら幸いです。

それにしてもこの後書きでいつも雰囲気ぶち壊しな気がしますやめる気はありません。

ムシャクシャしてやった。今は反省している。でも今後もあります。ではまた。

面会(3)

1

ここは……どこ、だ？ 視界が戻ってきててもいまいちピントがボケている。

視界が安定しないけど……学校の、廊下？

ああ、そうか。そう言えばそうだったな。そんなこともあったし今はそうだったんだ。視界が安定しないのは単純な事。この目が涙に濡れているということだけなんだから。

そうして目の前の男を見る。その仇は微動だにせずコチラの反応をうかがっている。全ては俺しだいと言うことか。ならば始めてやる。

「ああ宗全、貴様があの時の。まさかまた会うとは思わなかったけどな」

「む、やっとか。随分と物覚えの悪い頭だったようだがようやく思い出したのだな」

「ハッ、抜かせ。それに忘れていたというのは少し違う。そこにかかっていた蓋を取り外しただけで脳の中にはその映像はずっと残っていたんだしな。ただ表に出なかったただけだ」

そう、あんな光景、そう簡単に忘れられるはずが無い。

「勿論、そうとも取れるが……しかし一つ教えておいてやろう最上零児。世の中では一般的にその状態を忘れていると言うのだぞ？」

「ああ、一々最もだぜお前の言う事はさ。頭に来るくらい当然の答えだな。わかってやがるくせに」

「ふむ、まあ封印が解けたということか。しかしそれで全てが解けているわけではないということだ」

「は？」

「ああ、まあいづれわかることだ」

「……まあいい。そんなことは本当にどうでもいい。それより思い出したんだ。思い出したんだが……未だにお前の目的がわからない」

「目的か」

「ああ、俺を仲間にしようとする目的も、わざわざ俺に会いに来た目的も。いや、大体何よりもわからないことはお前は何故あの時里の者を皆殺しにした？ あの殺戮の意味はなんなんだ。どうして父さんと……母さんを……ッ！」

激昂する心。

だが、奴はそんなものに興味も無いように話を続ける。

「ふむ、別に皆殺しではないのだがな。サンプルの事も……まあいい。それより目的がわからんか。いや、しかしこれは武烈の血を引く者である事を考えれば当然といえば当然かも知れんな」

「父さんの息子だから……？」

「よし、ならば物分りの悪いお前のために解り易く説明してやろう。

最上零児よ。今の世の中をどう思う？」

「は？ 今の……世の中？」

「ああ、今のこの世だ」

「あ……別に、なんとも。でも、敢えて言うなら……」

そう、敢えて言うならば……電車の窓から見える家々の灯り。高台から見える人の温もりの星の海。屋上から見ると夕日に暮れなずむ遠い空とその下に広がる今住んでいる街並。

そして、なぜか行った記憶は無いけど目に浮かぶ誰かと語り明かす美しい月夜の砂浜。それは、なんて……。

「ああ、敢えて言うなら……美しいと……思う」

「ほう、美しいか。ふむ、確かに自然は美しかろう。そこに人間の手が入らぬ限りはな」

「いや、そうじゃない。俺はそこに人が居るからこそ美しいと、思うんだ」

と、宗全は微かに眉をひそめた。

「む……では貴様は今のこの世の中、今のこの世界を美しいと思っているのか」

「ああ」

「ふむ、そうか」

ああそうだ全てはそこに感じ取れる者がいるからこそ美しい物

事は主観でしか捉えられずそしてそれを美しいと感じていられる事
美しいと感じられる者がいて美しい者は美しいと認識される観測者
無き所に美しさなんて……。

「偽善者が」

「何だと……ッ！」

「貴様の目に入っているところは確かに美しく、平和な世界かもしれん。しかし貴様の見えていない所では姦計と思惑が交差し、全ての人間は自己中心的にしか動かない。世の人々は表では人を褒め人のためといいながら全ては自分に帰ってくるために動く。弱い者は虐げられ、その富を強い者が享受する。世界には理不尽な死が溢れ理不尽な悲しみと怒りに満ちている。戦争は止まらず目の前の利権に力あるものは引きずられる。さらにこの百年で人口は数倍にもなりこの星を食いつぶす所まできている。世に正義は無く、全ての独裁者は一瞬で世界を終わらせられるボタンを手になっている。貴様も「解る」者だ。今までの人生でその世の中の暗部が解らなかった訳はあるまい。人の心を覗けばすぐにでもその暗さを思い知れるのだから」

「俺は、俺はそんなことに能力を使ったことは……」

力は正しい事に。人の心の暗さを力を使って覗こうだなんて、
そんなこと……。

「そうだ、貴様は今までそれをしてこなかった。だからだ。出来るのにそれをしない。汚い所は見ようとしない。正そうとすればできる力を持ちながら見てみぬフリをする。これを偽善者と呼ばずして
なんと呼ぶ！ ああ、冷静になれば私も貴様ほどの偽善者はこれま

で見た事がないな」

「そんな、だって、俺は……」

「ああ、お前の在り方は人として正しい。人とはそのように身勝手な者なのだからな。それこそが人間。愚かであってこそ人間だ。しかし、その「人」という物がこの星の主として居るにはすでに限界が来ている。それに入れ替わるこの世を統率する者が必要なのだよ。人よりも強く、人よりも賢く、そして人よりも解りあう事ができる力を持った者。どうだ最上零児、まさに私たちの事だと思わんか？」

「そんな、そんな事は……それに、例えそうだとしてもあの殺戮の理由にはならない！」

「ふむ、その理由を話すと少し長くなるのだがな、昔、私は今のこの思いを持って世界を変えるためにまず国の中に入り政治家の力でそれを実行しようとした。そうして政府は動き極秘のプロジェクトとして能力者を育成する所から始める事とした。まあそれはそうだ。いかに私とて能力者が自分一人では世界は変えられん。そうして国の力をも動かし始め、うまく行くかとも思われたがそこに障害が立ちふさがった。それが武烈だ」

「父さんが……？」

「ああ、まず能力者を育成するにも完全な本物の能力者というサンプルがいる。それを基に人体実験をしていけば人を能力者にする事はそれほど難しくは無いのだ。しかし武烈はサンプルとしての村の能力者の人間の提出を拒んだ。何度話しても縦に首を振らなかつ

ただ。ああそうだ、奴はこうも言っていたな。「自分たちのこの能力は過去の遺物だ。この力を人の世に放つても人という種が前に進む事は無い。それに能力者の血は濃くなりすぎて限界に来ている。だからこの血は力ともどもこの里を終わらせる事によって薄めていって終わらせる。この力は今の世の中にはそぐわないし必要ないものだ。それに、いつか来る人の終わり。それは運命だしその瞬間に人が終わる。それを含めて人間なんじゃないか」とな。許せなかった。その考え方は許せなかった。だからだ、私は国家の工作員をも使ってそれを強行した。武烈は許せなかった。奴は断罪しなければならなかった」

「なんだと……？」

「ああそうだ、その考え方は許される物ではない。そう遠くない未来、人の世が終わり、何十億もの人が死ぬだろう。しかしそれはなんととしても回避しなくてはならん。そして、もしもこのまま何もしなかった時にそうなたらその何十億もの人を殺したのは武烈なのだ。その罪は贖い切れる物ではないだろう。だからサンプルを得るために数人の能力者を生け捕りにし、生け捕りが不可能な者は秘密保持のため皆殺しにした。まあ結果として一人殺し損ねたわけだがな」

「なんてこった……」

信じられない。信じられないが、間違いない。この頭がオカシクナッタとしか思えないコイツの話。でも、コイツは純粋にそう思っている。行動している。

純粋に人の世を思い、純粋に世を救うためと思いながらも人を平気に殺し続けているんだ。純粋に、美しい世界を求めて、美しい物を求めて。

「そして、失敗作を重ねながらも能力者を作れる所まで行ったのだが、しかし所詮はそこまでだった」

「は？」

「所詮国の者も、政治家も愚かな人間であったというわけだ。彼らは能力者の力を所詮は兵器としてしか捉えてなかったという事だ。彼らはただ兵器としての力がほしかっただけなのだ。そうして政府は兵器工場で能力者を次々と生み出していった。いや、今でも生み出し続けているのだから。所詮奴らはその程度のことしかできない者達だ。そこで作られた指示を聞かないせいで兵器としては役に立たん欠陥品の出来損ないがこの男で……」

と赤毛の男が久しぶりに声を上げる。

「おいおい。出来損ないとはヒデエなあ」

「ふむ、まあ貴様は確かに能力者としては正しいがな。そして能力者としては欠陥品だが正しく兵器として作用する成功例がその女だ」

そこの女……？

「つてうおう！ 武田、いつからそこにっ！？」

「む……注意力散漫だな零児よ、私は結構前からいたが、具体的に言うとお前がトリップする前からいたが、まあこの状況では仕方がないが……」

「ああ……そうか」

「ふむ、まあその事はどうでもいいが、つまりは人間などその程度の事しか考えていないという事だ。国の根幹に携わる人間でもその程度だからな。もはや反論する気も起きずに私はそこを抜けた。な

あ最上零児。やはり人間の力ではこの世は変わらん。しかしこのままではそう遠くない未来にこの世は終わる。そのいつか見るであろう地獄を回避するには今すぐ動かなくてはならん。そのためには原典たる能力を持つ者の力が必要になる。だからだ、私と共に来い。最上零児」

地獄を回避するには……だと……？

「ふざけるなッ！！ 地獄を回避するだと、貴様はそんな理由であんな事をしたのか！」

そうして瞼の裏に浮かぶ紅い風景。

「あそこは、あそこは間違いなく地獄だった。貴様は地獄を回避するためというが、貴様はその理想のためにこれからいくつの地獄を作っていくつもりだ！」

「それは解らん。だが、滅びは近いだろう。その前には多少の犠牲などは仕方がないだろう」

「多少の犠牲だと……！」

ひたすら紅く、悲鳴と怒号が響き、皮膚をも溶かしそうな灼熱の中で横たわる母さん。肩を撃ち抜かれる父さん。

気がついたら赤い腫らした目で山の中を町に向かって走り続ける自分。そして、大好きだったのに、きっともう二度と会えない「誰か」

「その犠牲が地獄なんだ。そこに押しやられる人の気持ちを考えないで……。貴様はいつも奪うだけで何も生していない。そんな人間が世の中を変えるなんてよく言う！」

「ふむ、最上零児よ。最大多数の最大幸福という言葉を知っているか？」

「知るか！ そんな言葉クソくらえだ！ 貴様のそんなフザケタ世界に住みたいと思う奴なんていない。そんな世の中が、世界として成立するわけないんだ！」

「そうか、ならばあくまで私と共に来る気はないのだな」

「ああ、絶対にそんな事はしない。何があってもお前とだけは一緒に行く気はない！」

「そうか」

「ケヒヒヒヒ、交渉は決裂だな。どうするよ、宗全よう？」

「ふむ、そうだな」

そうして顎に手を置き考える事暫し。

「あくまで私と来るのは嫌なのだな」

「ああ、死んでも嫌だね」

「そうか、ならば死ね」

「は？」

そうして気がついたときには顔の直前に迫っている拳！

「チイツ！」

なんとかとかバックステップでよけたが……奴は背が高いだけあって腕も長い。ツたく、なんちゅうリーチだ。

「貴様……！」

「ふむ、私について来ないのならばここで排除するまでだ。いつ大きな障害にならんとも限らんからな」

「させるかよ！」

そう言ってポケットからナイフを取り出し刃を開く。と……。

「助太刀するぞ、零児！」

武田が木刀を持って着てくれた……が。

「そうはいかねえぜ。お前は俺が貰う」

敵のほうにも赤毛の野郎がつきやがった。そうして左右にぶら下げてある伸び縮みする特殊警棒を両手に一本ずつ持つ。

「ケヘヘヘヘ、今日はやらせねえぜ！」

「ふむ、二刀流か」

と、冷静に状況判断する武田。 って……あれ？

「あれ……武田？ あれって警棒だから二棒流じゃねえの？」

「チィ、こんなときにくだらないツツコミをするな零児！」

怒られちった。

「クヒヒヒ、これでイーブンだな。オイ女、お前は俺が相手してやるよ。 かかってきなポニーテール！」

「だから私をポニーテールと呼ぶな！」

そうして隣で始まる戦闘。

「ふむ、これで一対一だな、ならば行くぞ最上零児！」
「望む所だぜ。 来い！」

そうして敵の拳を避け続ける。かなり早い。奴は精神干渉型。最近ではハッカータイプっていうのか？

兎に角それで更にどうも自分の脳には侵入していないようで、かなり強いが未だ人間のレベルだ。

しかしお互いに相手の動きは計算は出来るが読めないし、勿論相手を操る事も侵入することもできない。そんな隙を作ったら一瞬で殺される。

そして更にその拳は何故か異様に重い。これまで避けきれずに左手でガードした攻撃は三発。だがすでに左腕はかなり痺れている。

あんな物を急所に受けたら一撃で意識が飛ぶ事は間違いないだろう。それにしても隙がない。ほぼ動きの前にモーションがないからいつ撃ってくるかわからない。

まあ対応できないのはそれだけではなくて、見た事がない動きだけに対応できないといった所か。

そういうわけで一度距離をとり、方法を模索する。

「クッ、宗全、見た事ない動きだが……」

「ふむ、まあこれは物部に代々伝わる拳法だ。お前が知らんのも当然だろう」

「しかしまさか素手の相手にここまでやられるとはな」

「ふむ、まあこれとて門外不出の秘伝の攻撃だ。そもそも物部は徒手空拳で闘う事を基本とした家だな。素手とはいえ最上零児の一人くらいは殺しきる自信はある」

むっかー。

「チィ、舐めるなあ……ッ！」

そうしてナイフを逆手に持ち直し大きく振りかぶり必殺の一撃を見舞う……が。

「隙だらけだ」

そう言って軽々と避けた奴は重心を乗せた右拳の攻撃をしてくる。かかった！

わざと大きいモーションで左側に大きく隙を作った攻撃をしたらそこに本気の一撃を入れてきた。

何処に攻撃が来るのが解ればよけるのは訳無い。ギリギリで避けきり、その右手に逆手に持ったナイフの斬り上げ攻撃を行う……が。

バシィッ！

「何ィ、弾いた！？」

そう、弾いたのだ。確かに敵の右腕の真ん中辺りを斬り付けたその攻撃は、刃が敵のコートさえ通る事無くその服に弾かれたのだ。そうして気がついたら目の前には敵の左拳。すぐにガードしながら下がるが。

「クソッ！」

バキッ！

づううう、痛てえ。今の一撃はかなり骨に來たぜ。……っ言うか。

おかしい、コートすら切れてないなんて。自慢じゃないけどこのナイフは俺の宝物で今でも手入れを欠かしてないそんな所そこの鈍らとは違う切れ味のはず。

それがコートすら切れないとなると考えられるのは……。

「貴様……鎖帷子か……？」

「ああ、古い防具というのも存外使える物だな。コートに仕込んでおいたのだがまさか役に立つとはな」

「クソッ……なんてこった」

敵が帷子を身につけているという事は斬る攻撃は全て駄目という事だ。となると敵にダメージを与えるために後残されている攻撃方法は突き攻撃のみ。

しかし奴のあのリーチは脅威だ。正直突きを決めるチャンスはなさそうだ。ああ、せめて武田が加わってくれれば。

そういうわけで隣でチャンバラしている武田と赤毛男のほうをみる。と、ちょうど武田が赤毛男の警棒を弾き飛ばした所だった。

「ふう、二本持っているときは正直言ってかなり手ごわかったが、一本になったときの貴様の強さがタカが知れているのは承知済みだ。これまでだな」

「ケヘヘヘヘー、実は今日はまだ沢山持っているのでちゅよーだ。ウッキー！」

そう言って腰からまた一本警棒を抜き取り伸ばして構える赤毛男。

「ク……なんて奴だ。畜生、行くぞ！」

うん、なんか良くわからないけど俺一人で何とかするかなさそうだな。

そういうわけで相手を睨み観察して隙を探す。リーチでは圧倒的に不利だが奴はその長さ故に懐に入ったらなんとかなるかも知れない。

それによって導き出される最高の方法の結果は……よし、賭けてみるか。

そう言う訳でナイフを構え、大きく後に下がり敵の間合いの外に立つ。そして一度大きく息を吸い……そして吐く。よし！

右手に持ったナイフを普通に持ち直し……敵に向かって走る。

「何……!?!」

そうして後3歩で敵の間合い。敵はまだ動かない。

そうして後2歩で敵の間合い。まだ動きはない。

そうして後1歩で敵の間合い。奴の最大の武器であるノーモーシヨンから繰り出される拳は後1歩で確実に来るはずだ。

そうしてその間合いに入るための一歩で前を見ず大きく右に跳ぶ!

「何だと!?!」

宗全の右の拳は左肩を掠るに留まる。それでもかなりのダメージだがそれで敵の間合いに入れるのなら喜んで左肩程度差し出そう。

そうしてそのままの動きで敵の心臓を刺し貫こうとしたその瞬間……。

「ユリちゃんと……?」

「最上君ッ!?!」

へ?!

「隙あり……だ」

そうして、その瞬間に目の前は真っ暗になった。

面会(3) (後書き)

ニャンニャかニャンニャンニャかニャンニャあーん。ワン。
どうも、SIkoです。

いやね、今回は感想貰ったら速攻でって頑張りましたよ。褒めて褒めてー。

嘘です。厳しい批評でもピーコの中辛ファッションチェックでも何でも随時受け付けてます。

でもコイツは感想送っても必ず早くなるわけではない所がポイント。
YAKUTATAZU

餌ばかり食って卵産まない鶏みたいなの？ 意味わからん。

でも次の章はもう半分くらい完成しているのでまあ割とすぐに上げれると思います。

さて、この話が今終盤なのか、或いはまだ中盤なのか、いやいやまだまだプロログだぜ(ありえねー)とか或いは全3部の第一部の途中なのか・・・ですが。

それは秘密です。企業ヒミチュは良いヒミチュって言葉もあるし。
無いよね？

まあそんなことより重大発表があります。

それは・・・。

これはぜってーラブコメじゃねえーって、前にも言ったか。

でも更に加速していますな。

でも重大発表はそれじゃなくてこれです。

実はこの後書きはSIkoが書いているわけではありません。

SIkoのともだちのSIkoで奴が書いているんです。

いつも任されていて奴は私の後書きを見ないんですよ。

まさかこんなお遊びスペースになってるとは夢にもおもわねーだらーな。

アイツこの間私のポテチ黙って食いやがったからいい気味だぜ。

で、アイツに雇われていつもこの後書き書いてるんです。

全く、物を書こうという人間が文章を人に任せてるって最低だと重
いませーん？

サイテー。

まあ、嘘なんですけどね。

面会（4）

幕間 1

体育館脇の目立たない入り口から入って人が居ないかどうか確認してから目立たないように、見つからないように気をつけて慎重に前に進む。

隣にいる片山さんもかなり緊張した面持ちでゆっくりと前に進んでいる。でも、不思議とあまり脅えている様子はなさそうな感じ。凄いやね、相手は暴力不審者なのに、いざって時には強いよね。この子。

あーあ、それにしても私も何やってるんだろうなー、曲りなりにも教師なのにこんな悪い事一緒にやってて。

最初に最上君に会えればいいけどそうじゃなくて不審者や、或いはそろそろ突入しそうな警官隊とかに先に会っちゃうと話しややしくなるよね。

って言うか先に不審者に会っちゃたらややこしいじゃすまないか。でもそういえば何処に行けばいいんだろう。

そうだな……うーん。どこだろ。うーん。うーんうーん。

「どうしたんですか先生？ お腹でも痛いんですか？」

こ、この子は……。

「そんな訳無いでしょ！ ちょっと考え事してただけよ。何処へ行けばいいのかなーって」

「そうですね……」

「それで思ったんだけどね、やっぱり職員室が一番確率高いんじゃないって思ったんだけど」

「不審者がいたからですか？」

「うん、もし不審者がすでにそこに居なかったとしても居たとしても最上君が中に入る理由っていうのはきつと不審者がらみなんだろうからまず最初にその場所に行くと思うのよ」

「そうですね……それじゃあとりあえず職員室のほうに行くんですね？」

「ええ、そうしましょ。職員室は二階だから……こっちの階段から……」

そうして階段を上っていくとなんかだんだん変な音が聞こえてきた。なんかボケンベケンとか言う金属と木がぶつかるような変な音。

「ねえ片山さん……こっちっぽいわよね？」

「はい。でもあの音は……？」

「う……ま、まあ、行って確かめて見ましょ？」

「そうですね」

そうして階段を上りきって曲がり角から顔を覗かせてみた職員室前の廊下の光景は……理解の範囲外。まあ解りやすくいうと意味不明だった。

まず赤い髪にサングラスにタンクトップで言う意味不明の格好で両手に警棒を持った若い男が一人。多分あれが話の不審者ね。

そしてそれと対峙して……というかそれと木刀で打ち合っている片山さん。どうもあの変な音はその打ち合っている音らしい。

「ユリちゃんと……？」

隣で片山さんが呆然としながらも呟いた。

そう、ユリちゃん「と」なのだ。

さらにその隣のやや奥のほうでは黒い印象のやけに背の高い男。そしてその男の拳を交わしながら突っ込んでいく……

「最上君ッ!？」

思わず大声を上げてしまう。

「へ?」

そしてその瞬間最上君の動きが一瞬鈍った。そして口を開く黒い男。

「隙あり……だ。」

ベキィ!

「ぐわあああ!」

そう言っって黒い男はその長い足で最上君の腹ををカウンターになる形で思いつきり……蹴り上げた。

蹴られた最上君は後に吹き飛んでその後で戦闘してる武田さんたちをも超えて私達のすぐ近くの地面に倒れその後二回転ほど転がって動かなくなった。

「え……?」

何が起きたのか良くわからない。

隣を見てみると片山さんもなにがおきたのかよくわからないみたいで口を開けたままポカンとしている。

何が起きたか全く解らない。全く信じられない。

信じられない、信じられない、これが現実なんてとても信じられない。

何が信じられないって、もうそれは沢山ありすぎて困るけどこの異常な状況や、なんで戦ってるのとか、人間の力で人の体がそんなに飛ぶ訳が無いとかそれはもう色々あるけど何より信じられないのはその蹴られて飛んできたのが最上君だと言う事だ。

だって、あんな攻撃を人体に受けたら普通は死んでしまう

そう、あんな攻撃を受けて生きていられる訳が無い。

と言う事はここに転がっている最上君は死んでいるという事になってしまう。

嘘だ、そんなこと、信じられるわけが無い。最上君が死んでしまふなんて。

私はそのまま呆然と立ち尽くしていた。

と……。

「クッ……零児！」

いち早く状況判断が出来たらしい武田さんが相手の警棒を二本とも吹き飛ばして最上君のところへ駆け寄った。

あ……そうだ、最上君！

「ちよっ、……と、最上君ッ!？」

「ユリちゃん……最上君は？ 大丈夫なの!？」

同時に叫ぶ片山さん。

「最上君ッ！ 大丈夫なのッ!？」

「起きて、起きてよ最上君、お願いだから……」
急いで駆け寄る。

しかし三人掛かりで声を掛けても揺さぶっても彼は反応しない。

「イヒ、イヒヒヒヒ、アハハうひゃ、うへへ、うひゃひゃひゃひゃ」
「ふむ、すでにチェックメイトか。詰まらん」

後ろから聞える耳障りな声。

一つ気配が立ちあがって……恐らく武田さんだと思っうけどそちらへ向かったのはわかったけど私達はそれも気にせずひたすら声を掛けつづけてた。

起きて、眼を開けてと。

だって、私達にはそれくらいしか出来る事が無かったのだから。

1

それは賭けだった。

しかも分の悪い賭けだ。

正直今の自分に人が、特に奴程の手錬を殺せる気はしていなかった。

頭では出来るとは思っているとしてもそれは失敗の可能性が高いのは何処かでわかっていた。

そして今回は第三者の介入によって賭けに負けた。

しかしそれは彼女達のせいなのだろうか？

いや、恐らく違うのだろう。今回は偶然そうだったがアレが起きなくとも俺は負けていたと思う。

奴の足は俺の身体を破壊した。

その正拳には能力が乗せられていたのだろうか。体は浮き薄れつつある意識の中、自分が空を飛んでいる事は解ったが背中が地面に当たる衝撃でその最後の意識も吹き飛んだ。

そうして、俺の人格は落ちる。

肉体の損傷度合い。内臓破裂に肋骨の骨折。衝撃は背骨にまで渡り脊椎の大きな損傷。

そのままでは死、在るのみ。例え奇跡的に回復しようと脊椎が損傷している以上腰から下は不随となる。

しかし例え最上零児の意識が落ちようと、この身体は永き最上の血脈に守られた一級の肉体。

自分が死ぬ気になっても、肉体はそれを許さない。

肋骨の骨折は短期での修復は不可能。しかし生命の維持に支障を与える内臓の傷はすぐにでも塞ぐ必要がある。

能力装填、そしてトリガーを弾け。

能力を使う事による脳の出血はあるが無視しろ。今求めるはコノ瞬間の生命維持だ。

しかし今生命活動を再開しようが目の前には「敵」がいる。
奴はこちらが生きていることを確認し次第頭を潰すだろう。ならば闘える身体が必要だ。

まずは脊椎。損傷をチェックし今この瞬間を生きるために必要な補強をする。

最低限の肉体稼動領域は得た。ここまでが私の仕事。
あとは、貴方の……………。

2

どこから声が聞える。

これはアレだよ。まさにキリスト教のコラールの題名の「目覚めよと呼ぶ声あり」みたいな？

頭は霞が架かったようでは考えは纏らない。でもその声が酷く必死な事は伝わって。心が生きるんだという気持ち站了起来。

そして少しずつ聞えてくる声。

「起きてよ……………お願いだから……………ねえっ！」

「そうよ……………本当は聞えてるんでしょ、もう、もう駄目なの……………！？」

ああ、聞えてるとも。すぐに、起きるからさ。

でも、身体は動かずに、彼女達の鳴き声だけが聞えてくる。

それが酷く悲しげで、俺がそんな声を出させてるんだと思うと死にたくもなった。

そしてそこに響き渡る凜とした声。

「ええい、光、先生、とにかくここから逃げるんだっ！ こいつら、何するかわかったもんじゃあない、こんなの、マトモじゃあ……っ！」

この声は……武田か。

「そんな、だってユリちゃんはっ!？」

「私は、ここで足止めをする。マトモに逃がしてくれる相手でも無いだろうから私は^{しんがり}殿だ！」

「そんな……貴方達を置いてなんて……」

「煩いです先生、なんで、なんで来たんですかッ、光だって……危ないのはわかってただろうに！」

「だって……それは……」

「とにかく異論は認めない。早く二人だけでも逃げて……」

ふん、なんかわからんが切羽詰った状況らしいな。あれ、でも、そう言えば俺は、何を……？

「おいおい、俺達二人を相手に何とかするつもりか？」

「勿論、お前はともかくあの男に勝てると思っっているほど甘いわけでも無い。でも、時間稼ぎくらいはして見せるッ！」

「ハッ、抜かしやがって。お前なんか脳に穴開けて俺の玩具にしてやるぜ」

「クッ、貴様の物になる位ならいっそ……とにかく早く逃げるんだ」

オイオイ、なんか穏やかじゃあねえなあ。

「そんな、出来ないよ、ユリちゃんッ！」

「そうよ、そんな酷い事……」

ってこの声は先生と、片山さん……ってそうだ、思い出した、早

く起きろ俺っ！

って言うか体が動かん、クソっ！ 動け、動けよっ！

「五月蠅いっ！ 議論してる時間は無いんだ、行けっ！ クソッ、
せめて零児さえ健在ならば……」

「オイオイ、女の子がクソなんて言うもんじゃあねえぜ……ってやつと動いたーっ！」

やったぜ、やっと体が動いたけどよりによって第一声がこれかヨ！

「零児……ッ！」

「最上君！」

「最上君……無事なの！？」

「おう……ってイタタタタタ」

そう言いつつ何とか体を起こす。身体の損傷具合は……うん、アバラが数本逝ってる以外は特に問題ねえな。

「ほう」

とそこで耳に入る宗全の感心したようなムカツク声。

「んだよ？」

「あそこから持ち返したか。確かに私の足には貴様の肉体を内蔵も含めて悉く破壊しつく甘美な感触が在った筈なのだがな」

「へえ、残念だったな。あいにくアバラ以外は無事だが？」

「ふむ、貴様程ならばその肉体と血が恐らく死を認めてくれなかったのだろう。相変わらず生き汚さだけは一人前だな」

「ハッ、抜かせ」

「まだ吠えるか。だが……」

そう言って赤毛野郎を押しつけて一歩前に出る宗全。

「それでどうするつもりだ」

「アンタにはここで退場してもらう」

そう言って心を集中して自らに侵入する。

左手は拳を握って頭の前に、右手は身体の後ろでナイフを開きなおし感触を確かめる。

「ほう、面白い冗談だなそれは。どうやってだ？」

「ああ、貴様が精神干渉型ならば、俺は貴様より早く動けるように自らを高める」

ああそうだ、今この現在生き残らなければ死んでしまう。俺だけで無く、皆が死んでしまう。

ならば俺の寿命や身体が痛もうとも、今現在奴を倒す事だけを考えろ。

「ほう、私より早く動く、どうするつもりか知らんがそんな事が可能だと思っているのか最上零児？」

「ああ、出来る……筈だ」

能力を装填しそれを発射する、全てのプロテクトを外すために。ターゲットは、自分自身の脳。

「ふむ、或いは貴様ならそれが可能かもしれんが、貴様はそれで私に勝てると思っているのか？」

「なに？」

乱されるな乱されるな。プロテクト、解除。

今この瞬間裸になった無防備な俺の脳に誰よりも先に俺の能力を侵入させ行動原理を書きかえる。

「貴様が私より早く動けても私に勝てるわけでは無い。あの村でもそうだ。貴様は叶わぬ夢を見て吠えるだけの負け犬だ。生き汚さだけが取り柄のな。」

「なんだとっ！」

行動原理は何よりも早く、何よりも強く、身体の強度など関係無く、限界を超えてただただ強く、全ての性能を敵を倒す事のためだけに。

限界を 超える。

「貴様の様な出来損ない、赤子一人をも殺せない欠陥品と言う事、教えてやる！」

「宗全……貴様はここで死ね」

そうして、禁行である行為を行う。

頭に入る能力を感じながら。口にする。

「肉体可動制限解除」

面会（４）（後書き）

ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい。

一つ、言い訳して良いですか？ この遅れに対して。

見苦しいですか。そうですか。

でも一つだけ言い訳してもらおうと、

パソコンがクラッシュしました。

OSも何もかも飛んで全て居れなおす所から始めました。

当然デスクトップにおいておいた小説は全てぶっ飛びました。

もうね、泣いたね。

結構沢山書いてたのに、まあそれでやる気もそがれて。

いやね、気にはなっていたんですよ。

でも日々忙しく歳月は流れて行きました。

たまに気になって読み返して見ると誤字脱字の嵐に改行も滅茶苦茶、文章は説明不足でもう恥を晒してるみたいで消そうか、或いはもう永遠に放置しようかとも思っただけです。

いや、むしろそうしようと決めてたんですけどね。

そして在る日すっごく久しぶりにログインしたら、仕組みがすっごく変わってて、でも少しずつでも読みに来てくれる人も居て、コメントも投稿されてて、もう自分の不甲斐無さに申し訳無さすぎですよ。

本当にすみませんでした。

今日載せた文もクラッシュ前に書いた文より少ないし暫く書いてなかったから忘れてて前と同じペースと言うわけにもいかないけど今後も見てもらえると嬉しいですよ。

最後に本当に待ってた人居たらすみません。

決着

1

言葉と言うのは重要だ。口に出す事で、自身に暗示を掛ける。

特に、能力で自分の身体のリミットを越えた動きをするというのは、能力による実利的な部分と、自身への錯覚と言う意味での暗示的な部分が両立して可能となる。

だから、そう、もっと早く、もっと強く、限界など無く動けと。

そうして俺は戦っている。ただの戦闘のための機械として。

状況は刻一刻と脳に行き処理され戦闘のために最適な次の動きを導き出す。

敵の拳を受け止めるこちらの腕、痛みは無いが損傷が激しい。

もう30秒以上は続いているであろう戦い。敵の早さは何故かは解らないがこちらと同等の速さを以ってして応戦してくる。

短期決戦のつもりが、これでは予定と違う。しかし考えても見れば奴も強力な産まれながらの能力者だ。

例え自らの身体が痛もうともこちらと同じ手段で自らを強化することもありえなくは無い。

しかしそうなると問題はどちらの身体が先に持たなくなるかと言う事になる。

つまりこの人体の限界を超えた動きに先に肉体が持たなくなったものが負けると言うわけだ。

余計な事を考えるな。五月蠅い。

五月蠅い、今は敵を倒す事だけを考えろ。
でも解っているのか？ このままでは「負ける」ぞ。五月蠅い。
まだまだ開始30秒だ。

そうして放ったこちらの攻撃を避ける敵。やはり未だ速さが落ちる事は無い。

次の敵の攻撃を避けるため後ろに下がる。左足首に負荷が掛かり損傷。移動速度低下。

次のこちらの攻撃はかわされたが今の一撃を放った事により肉体の許容運動量を超えたため右手首損傷。
出力低下。

敵の攻撃は……かわしきれず左手で受け止めるも衝撃を殺しきれず左肩及び腰激しく損傷。

こちらは攻撃する暇も無く敵のローキック、これも避けれず右足で受け止めるも右足大きく損傷。

大幅に移動速度低下。

しかし敵も連携して動きを行ったため一瞬の隙が出来る。

今の際に大きく後ろに下がり敵を観察。

おかしい。こちらと同じ速さで動き、なおかつ敵の動きには衰えが無い。

明らかに異常だ。先ほどまでの奴の動きとは速さが全然違うのだから。

それはまるで肉体強化型の動き。

しかしそんなわけは無い。アレだけ俺に強力に侵入しようとした男だ。奴はハッカータイプだ。

しかしならば奴は何故こちらと同じ早さで動き続けることができる

る？

例えば奴が俺と同じように自らの脳に侵入して自らを強化しているとすれば、敵の動きが衰えない事への説明が出来ない。

こちらでも徐々にはあるが肉体が損傷してしまい、すでにかなり速度は落ちているのに。

となると考えられるのは能力の制御の仕方の違いか或いはさらに単純に肉体の強度の差か……。

「どうした、足が止まってるぞ？」

「ハッ……！？」

そうして気が付いたら目の前にある拳。

そうして必死にそれを後ろに飛びのき避けようとしたその瞬間……。

左足首の筋が「ぶちり」という音を立てて言う事を効かなくなつた。

必死で目の前に腕をクロスして頭部への直撃だけは避けるものの衝撃と共に後ろへ吹き飛ばされてしまう。

が、能力のおかげか空中でなんとか体勢を立て直し地面の接地も受身を使い転がりながらもなんとか大きな隙を作らずそのままの流れで立ち上がる。

そして状況確認。左足首から先の動きがかなり重く上手くコントロールできず、両手は今の衝撃ですっかり痺れていてナイフを手放していないのが不思議なくらいだ。

このままでは……なんとか活路を見出さなくては。取り合えず、時間稼ぎと状況判断だ。

「宗全、貴様、何故そんなに速く……」

「ふむ、貴様はなにか勘違いをしているようだな。私がお前如きと戦うために自らの肉体を危険に晒すとも思ったのか？」

「なっ……。と、言う事は、貴様は俺とは違う方法で……？」

「ああ、貴様のやっている事は解る。自らの脳に自らの能力を侵入させたのだろうか？ 勿論かなり高等な技とは言え私もそれをしようとするば不可能では無い。しかし、全く持って無茶な方法だな。そんな事をして肉体が無事なわけがあるまい。よって私にはそんな方法をとる必要は無い」

な、そんな馬鹿な、だって先ほどまでの動きは明らかに人体の限界を超えている。説明がつかない。

「な、ならいっただいどうやって。」

「ふむ、手札を晒す事になるが……まあ構わんか。私はな、肉体強化型の能力者でもある。無論、素はハッカータイプだがな」

そ、

「そんな馬鹿な。里の能力者は一人残らず能力者は精神干渉型か肉体強化型、そのどちらかの血筋で、一人が複数の能力を持つなんて」
「ふん、流星はあの石頭の武烈の息子だな。そんなことだから前に進めんのだ」

「なに？」

「こうして能力者は外に出て広義な知識を詰め込む事で先に進めるかもしれない。私はその例だ。私は研究所でこの力を授かったのだから」

「研究所……研究所では、そ、そんな事が……可能なのか？」

「ふむ、可能……か。可能とはいいがたいな。不可能では無いと言っておこうか」

「……どう言う意味だ？」

「能力者が能力者たるために使用している脳の領域はほんの僅かにすぎん。しかしかしその領域を最大限に活用する事によってどちらかの能力者となれる。しかし普通の人間はそのどちらか一つの能力を使うだけでもその領域をオーバーロードする程に使役するのだ。二つも能力を詰め込んだら只では済まんだろう」

「な、ならどうしてお前は……？」

「運が良かったのだよ。私はな。研究所の中では人権など存在しない。無論、私は志願してもう一つの能力をつけたのだが、副作用無しで能力が付けれると解ったとたん研究所では理論上は両方の能力を付加することが可能と言った仮説から、さらに強力な能力者を作ろうと次々と人体実験が行われた。一種類目の能力を付加するところまでは上手く行っても二種類目の能力を付加しようとして成功したのは私だけだったよ。もともとの能力者としての素体が在ったからか、或いは単に運が良かったからかはわからんがな。なに、なかなかの見物だったぞ？ 自分の周りで自分と同じ実験をさせられた人間が次々と死んだり廃人になっていくのはな」

「お、お前……そんなことを良く平気で」

と、憤ったフリを見せても油断する相手でもなし、問題は解決しないから冷静に考える。

しかし難しいな。状況が解った所で解決策は思いつかん。この時間を取った事によるプラスの材料と言えば僅かに肉体が回復した事くらいだがそれすらこの最悪の状況では大して好転させる材料になりはしない。

「ああ、少しお喋りが過ぎたか。そろそろ殺さしてもらおう」

「ま、まだ、やらせはしない！」

「ふむ、まだ解らんか。貴様では私に勝てる事は無いという事が」

「そんな事、やってみなければ……」

「いや、そう言う意味では無い。とにかく今の貴様では根源的に私には勝てん」

「なんで、そんな事が……」

「言えるのだ。そうだな、解りやすく言おうか。今の状態でも貴様のほうが能力者としての力も戦士としての力も恐らく上だ」

「ば、馬鹿な、ならば今なんで……」

今なんでこんな状態になってるんだよ……！

「そう。現実是这样言う状態だ。ふん、意識してか、或いは無意識では判らんが「急所を僅かにズラして狙う」貴様にやられるほど私も弱くは無い。一般人ならどうかかわらんが、元の最上の武術、更に幼いころの貴様を知っている私から言えば、今の貴様の攻撃には威圧感が無い。」

「お、俺は、そんな事はしていないっ！」

だってこんな極限状態でそんな相手に有利に働くような事をするわけが……。

「いや、確かに貴様は急所を外して攻撃している。しかし……やはり無意識にか。ふむ、そう言う所も武烈に似て……。やはり気に食わんな」

そう言い捨てると宗全はこちらに向かって歩いてくる。

「ク、クソツ！」

身体がもう、動かん。クソツ、せめて敵のあのよくわからない体術の規則性でも読めれば……。

「しかし最上の血筋というのも救いようが無い物なのだ。貴様も酷い偽善者だが、やはりそれは武烈譲りのもの。全く、武烈も罪な事をした物だ」

「何故父さんの名前が出てくる。父さんが、なにか関係あるって言うのかよッ！」

「ふむ、貴様の枷^{かせ}は、全てが外れたわけでは無いと以前言っただろうが。その枷が敗因になっているとまだ気付かんか。全く、御しがたいな」

そう言うのと宗全はこちらへ向かう歩を早めた。

「貴様をその枷から解き放って完全なる能力者にする事も或いは面白いかもしれないと思ったが……しかし、ここまでの男か。やはり貴様はここで死ね。最上零児」

「ク、ク……ッ！」

チクショウ、せめて、せめてあと少し俺が強ければ、ここを切り抜けられるだけの力があれば、俺も死なずに、そして皆も無事に外に出せて、それなのに、このままじゃ、このままじゃあ……ッ！

「さあ、今度こそ終わりだ。まずはその苛立たしい頭から潰してくれる」

「そこまでだ。全員両手を上げて壁に身体をつけろ。反抗する者は発砲する」

全く持って手を出せない戦いだったんだ。その戦いは。

自分も何年も剣道をやってきて、そして手には木刀を持っていて、肩には真剣もぶら下っている。

長年の鍛錬、そして一年前から能力者となった今の自分の身体能力。更に得物もそろっている。まさに自分にとってはベストの状態。今の自分ならきつと、そう。銃弾の行き交う戦場の前線ですら生き残れるとそう思えるほどだったのに……。

なのに目の前の戦いはまるで別世界だった。それは人間の動きを超えた戦闘。まさに伝説に聞く英雄達の戦いの再現のような、人知を超えた動きだった。

今の零児は今まで見た彼の動きの中で一番速い。私が彼と初めて手合わせしたときですら今ほどの動きはしていなかった。

しかし最初こそ相手をも圧倒する速さだったのだけどそれはやはり人としての規格外の動き。

隣で見ているだけで彼の肉体が急速に損傷していくのが解った。そしてその度に鈍くなる動き。

彼とは、短い付き合いだけれども、私のことを素直に受け止めてくれて我侭も聞いてくれて、そして強く生きる彼に私は好感を持っていた。

それは、もしかして今まではそう呼べる存在が一人しかいなかった、二人目の「友達」って呼べる存在だったのかもしれない。

だからだろうか、心が、痛い。何も出来ない自分が酷く歯痒くて、悔しい。

でも、ダメなんだ。彼を手助けしようにも脚が疎んで動かない。これが格の違いと言う奴だろうか、以前酒場で感じたのと同じ感覚。今動けば、死ぬ。あの戦いに入って言ったらすぐにでも死んでし

まう。そんな動物としての感が生きようとする肉体を動かす事を拒んでしまう。

そして相手の黒ずくめの男が何かを話してそれに零児が激昂して返す。そんなやり取りが何度かあったときだろうか、その声が聞こえた。

「そこまでだ。全員両手を上げて壁に身体をつけろ。反抗する者は発砲する」

ああ、何てことだ。そこまで自分が無防備だったとは。コレだけの気配に気がつかないなんてどうかしているとは思えない。

前も後ろも、廊下には芋の子を洗うように盾を構えた警官隊が主に戦い続ける二人とついでに私たちに銃を向けて狙いを定めていた。後ろから光と先生の脅えた空気が伝わってくるし、零児も動きを止めて観察している。

しかし宗全とか言う男は特に気にした風も無く口を開く。

「ふむ、あと少しで終めと出来たのだから。誰であろうと、私の邪魔をするならば……」

そこまで言い右手を高く上に上げる。

「動くなっ！」

警官隊全員の銃の照準が不審な動きをする宗全に向けて定められる。だが……

「排除するまでだ」

そんな一言を呟き、世界を一変させた。

何てことだ、このタイミングで警官隊が来るなんて。

奴のことだ、このまま彼らが無事に帰すとも思えない。そしてその予想通り……。

「排除するまでだ」

そんな残酷な言葉を奴は言った。

そしてその瞬間に廊下中に充満する能力。こ、コレはッ！

「う、うわわああわああっ！」

「な、なななな、手が、手が勝手にっ！」

「銃口があ、と、止まれよおおおっ、いやだああああっ！」

警官隊全員の手が銃を持ったまま強い力によってその銃口を彼ら自身の口の中へと入れていくと言う異常な状況になっている。

そういうことか。奴は彼ら全員の問題に進入して自殺に追い込む気なのか！

そんなコト、許せる筈が、無い。

「させるかああっ！」

気づけば知らずの内に右手を前に突き出してそう叫んでいた。

もう、これ以上の能力の行使には俺自身が耐えられない筈なのに、能力を開放してしまう。

だって、こんな、コレだけの人が命を失うのを、そして何よりそ

んな酷い光景を自分の後ろにいる三人に見せるわけにはいかない。

そうして警官隊一人ひとりの情報を調査する。^{ロード}

彼らは自分の脳からの行動情報の命令すべてが宗全によって誤認させられて袋小路のように何をやっても自殺へと向くように書き換えられている。

コレを破るには、宗全を倒すか、或いは、さらに強力な能力で彼らの行動情報を書き換えるかのどちらかしか、無い。

そして今可能な方法は、後者のみだ。勿論そんなことは自殺行為だ。何しろ奴の能力は超強力だ。

だからそれ以上の強力な能力行使などすれば、俺自身がが無事である保障は無い。

今ですら能力の行使のしすぎで脳はオーバーロード直前。

それにコレだけの人間に同時に能力を使うとなると出来るかどうかすら怪しいし脳も肉体も持たないだろう。

でも、そんな迷いを許す時間は無い。

気づけば……。

「全員、眠れええっ！」

そう叫んで、全員の精神に進入し行動情報をシャットダウンした。同時に頭の中で何かぶちりと言う音がした。

目の前で警官隊全員の動きが止まり銃を持ったまま全員が倒れた。そしてその周りに人が倒れている世界で俺は一人立ち竦む。何も出来ない、何かをする力もう無い。何かを考える力も無い。

そのままだだ立ち竦む。その瞬間……。

「グヴァツハツ」

猛烈な嘔吐感と痛みと共に、自分自身から鳴ったとは信じられない

いほど奇妙な音がして口から血が溢れ出した。
まさに吐血、立っている事も叶わず、思わずそのまま倒れそうになった時。

「「最上君っ！」」

両脇から誰かに抱えられて地面につく前に受け止められる。

霞んだ視界には二人の女性が写っている。うん、なんつうかコレはそろそろ流石の俺も終わりかもしれない。

でもまあ、最後に見るのが嫌なモノじゃなくて自分の好きな人間の顔を見ながらなら逝くのも悪くないかもしれない。

「最上君っ、何で、何でこんな事になってるの、何が、何で……！」
「血が、血が止まらないよう、血が、あ、ダメ、血が、ダメだろう、死んじゃあダメだろう………」

そんな泣きそうな声で言わないでくれよ、なんか俺が悪い事してる気分になるじゃないか。別に気にする事は無いのに。

あーそんな、俺なんて地面に置いておいてくれればいいのに、血で服汚れますよー？

それにしても無理を言う、死ぬなどは……ほとんど感覚はなくなってきたし、碌に働かない頭でもわかるよそれは無理だって。

だってさ、もうなんか血い止まらないし今もギャポゴポとか変な音がずつとするから多分ずっと血い吐いてるんだろうし。

こんだけ血が出りゃあ人間は死にますよ、そりゃあもう。だってコレじゃあまるでポンプだもんゴポゴポ。

は、あはははは人間ポンプだぞうおれははははは、あは、あははは、あははははは、なんか愉快だよ。

目の前がだんだん白くゴポゴポいいながらもナツチャウンダモン

アハハずぶずぶ。ハハッはハッははっハッハッははっ……

そして、最後に自身の頭の中で「何か」が切れた感触がしたあと、五感は消滅し、「俺」は深く沈んでいった。

幕間 2

私は、何を見ているんだろうか、それは本当に夢か幻かと思えないような風景だった。

教師になるって言う事は色々な事を経験しなくちゃいけないだろうから、何を見てもすぐには動揺しない事、それを目標にずっと頑張ってきた。

でもさすがにコレは反則だ、こんな中で冷静に行動が出来るはずがない。

まずは最上君と謎の黒い男の戦い。それは今まで見たどんな人間の動きとも違っていた。

もはや目で追うことすら難しい、何が起きているかも解らない、そんな世界だった。

しかし何より解らないのは警官隊が到着してからの一連の出来事。異常なまでに背の高い黒い男が排除すると言いながら手を上げた瞬間、えも言われぬ圧迫感と共に警官隊全員が銃口を口に突っ込みだしたんだから。

何が起きているのか理解できない、理解できない、本当に、解らない。

しかしそれは彼ら自身も同じようだ。みな「何故」だとか、「嫌だ」とか、「死にたくない」とかそんな言葉を脅えた顔で叫んでいる。

でも事態は進んでいく。私はそれを口をあけたまま呆然と見守る事しかできなかった。

そんな中、彼が、最上君が右手を前に突き出し叫ぶ。眠れと。

そして、その言葉に呼応するように自殺しようとしていた警官隊は糸の切れた人形のように倒れ、眠りについた。

沢山の人が倒れている中で右腕を突き出したままの形で立っている彼は、まるで知らない人ようだった。

理解、できない。解らない、解らない。

でも、そんな異様な光景すら、その後起こった事に比べれば、些細な問題だった。

彼が猛烈な勢いで吐血し始めた事に比べれば。

だって、それはもう、人間とは思えない、ポンプだと思えない勢いで吐血しているのだから。

理解できない、理解できない。いや、違う。理解……したくない。そんな時、彼が血を吐いたままぐらりと倒れそうになった。

「最上君っ！」

解らないけど、理解できないけど知らずの内に身体は彼の身体を支えるために走る。それは隣の片山さんも同じらしい。

そうして倒れる前に彼の身体を支える。不思議と近くにいる黒い男への恐怖心は感じなかった。そんなものを感じている余裕は無かった。

でも、彼の吐く血は止まらない。理解できない、したくない。解りたくない。

でも、コレは現実。

「最上君っ、何で、何でこんな事になってるの、何が、何で……！」
自分でも何を言っているのか解らない。わからない現実の前に私はあまりにも無力だ、だって、ああ、血が、血が、ダメよ、ダメなのに。

わからな過ぎて、まるで無力な自分を遠くから見下ろしているような、そんな錯覚に陥った。

「血が、血が止まらないよう、血が、あ、ダメ、血が、ダメだよ、死んじゃあダメだよ………」

隣から片山さんの錯乱している声が聞こえる。でも錯乱しているのは私も一緒だ。

こんな形で、何もわからずに、生徒を、最上君を失うのは嫌だ。

そうしていても血は止まらない。そうすると彼が、何かを話している。

何も出来ない私は、せめて最後になるかもしれない彼の言葉を聞こうと聞き耳を立てる。

「ゴッポゴエプ。ゆかに……おい……て、ゴゲボツホッペゴプ……ふく、よご、れ」

こんな時まで、いつかの様に彼は彼だった。本当にどうでもいい、人の服なんかを気にしたりする、最上君のまんまだった。

でも血は止まらない。現実が、怖い。

本当に理解したくない、だって、もう地面は一面血の海だ。

本当に、本当に止まって、止まってよ！

「……………」

その願いが届いたのか彼は血を吐くのをやめた。

でも、それは、吐く血が無くなっただけ。いや、むしろ血を吐くという動作さえ出来なくなったただけだという事が解りたくないのに解ってしまった。

だって、彼の目は、もう何も映していないのだから。

「ふむ、我が身を捨ててまでも無関係なものを守ったか。最後まで気に食わない、流石は最上の血族といった所か」

黒い男が口を開き近付いてくる。

「その女たち。さっさと「ソレ」を置け。お前たちが抱いているのはもう最上零児ではない。死体だ」

「嘘よ」

知らずに口が動く

「嘘ではない、全く、現実を直視できんか。ソレはもはやただの肉の塊だ」

「嘘よ」

そうよ、そんなことはありえない。だって、そんなことは理解できない。

「まだ言うか。早く理解しろ」

「嘘よ嘘よ嘘よ嘘よ」

理解できない解らない。だから、嘘よ。

「最上零児は死んだ」

その言葉と共に、まるで頭を銃で撃たれたような衝撃が私に響き渡った。

Fly like a bird

幕間 1

思考を切り替えろ。零児は死んだ。それはどうしようもない真実。本当に許せない。そんな状況に追い込んだあの宗全とか言う男も許せなければ、他人の為に自らの命を投げ出した零時も許せないし、何よりあの状況で何もできなかった自分が許せない。

だから、私は今度こそは、せめて後ろの二人だけは助けないと、それこそ零児に合わせる顔が無くなってしまう。

そう、だから最後に血の海に倒れている零児のほうを見て、そして覚悟を決めて、自らの命を賭するつもりで真剣を抜き放ち、敵に相対した。

「ほう、真剣を持った肉体強化型の能力者か、コレはなかなか厄介かも知れんな、くくく」

「そう言う割には対した余裕っぷりじゃないか。宗全とか言ったか、あの二人には手は出させない」

「ふむ、私としては、後はお前さえ殺しておけばあの二人には用は無いのだが、しかし赤毛の奴がそうも言うまい。取り合えず、だ。国の狗のお前は生かしておくわけには行かない。死んでもらおう」

「くっ、来るかっ！ 二人とも、早く逃げて！」

「え、でも……」

「異論を聞いている暇は無いんだ。どれだけ持つかは解らないけど、できるだけ時間は作るから」

「ほう、いい心掛けだな、ならば……来いっ！」

「応ッ！ オオオオオオオッ！」

そう気合を入れ渾身の力で斬りかかる。

しかしそれを敵は紙一重でかわす。

かまわず次の動きへと繋げて行く。敵はそれをも構わずにみな紙一重で避けていく。

が、こちらが一綴りの動きで攻撃している所為か敵も反撃できずにいた。

「む、流石だ、思ったよりも早いな。素晴らしい。お前はおそらく上級の能力者なのだろう。それにその日本刀の間合い、思ったより厄介かも知れんな」

そう言う割りに奴は余裕の表情を崩さない。

そう、何より奴が余裕なのは私自身が一番わかっている。純粹に速さで言えば奴はおそらく私と互角くらいだろうか。しかし、その見たことも無い動きに私が対応できないのと、その無駄の無い動き。間違い無い。おそらく私と奴では戦士としての強さの桁が違う。

しかし、そんな泣き言さえ今は言っている余裕は無い。

「く、オオオオオッ！」

渾身の一撃で袈裟懸けに敵をなぎ払う。

しかし、その瞬間視界からストンと影が消えた。

何が起きたのかと見れば奴は地面に手が着くほど低く体制を取りこちらの攻撃をかわし、そのまま地面に着いた手を軸にしてその異常に長い足でこちらの脛に強烈な蹴りを放ってきた。

「なっ！」

そうして、気がつけば脛に衝撃が走り、足から力が抜けて前のめに膝をついていた。

「くっ、脛打ちとは卑怯な！」

そう言いながらも敵を近づけないように闇雲に刀を振り回す。だが……。

「無駄だ」

そう声が聞こえたと思ったらいつの間にか間合いの中に入られていたらしい敵に刀を握った右手の手首を握られていた。

そして力を込められる手首。あまりの握力に骨のきしむ音が聞こえ、痛みから思わず刀を手放してしまう。

何とか握られた右手首を離させようと左手でその手を取りに行った瞬間……。

「ガフッ！」

思わず空気の抜けるような間抜けな声が出た。見れば、敵は空いた右手で私の首を握っていた。

そして、私が両手でその手をつかんで振りほどこうとするも、奴は氣にした風も無く片手で私の首を握ったまま、立ち上がり私を持ち上げた。

「ぎ、ぎさま、ばっぱなぜ」

喉が潰されてまともに声も出ない。

「ふむ、やや滑舌かっせつが悪いのではないか？ それではよく聞こえんな」

「グ、グゾッ！」

「そう言えばだな……」

「グッ……」

「貴様が脛を狙うのを卑怯といったが……」

「な……」

こんな時にこいつは何を言っているんだ。せめてなにを言うにしても私を降ろしてからにしてくれ。と言いたかったが潰された気道はすでに声が出せる状態ではなかった。

そんな私の真意を知ってか知らずか奴は私の首を握り、ぶら下げたまま話し続ける。

「確かにそれは言いえて妙かも知れんな。脛打ちと言うのは初見ではほぼ避けるのは不可能であるし、解かっているも避けるのは難しいそうだ」

「が、ががぐっ……」

「古来、柳剛流と言う剣術があったそうだ。それはひたすらに脛を狙うことだけに特化した剣術でその意外性から初見ではほぼ必殺と言われ、名のある剣道家もかなりの数が敗れ去ったそうだ。一時期は興隆したのだが、しかし後にその見た目の不恰好さや、ひたすらに汚く脛を狙うその汚さを気にしてか流行らなくなったそうだ」

だからこいつは何を言っているんだ。

「確かに、すべての道と言うものはそう言うものだ。剣道、柔道、茶道、華道。実用性よりも其処にあって自らを高めようとする、その過程、その美しさを重要視する。その結果、剣術や柔術、そういったものにあった如何に相手を殺すかと言う実用性は低くなってしまったところもあるだろう。しかし、私はそんなものには、興味は無い。私にあるのは如何に相手を殺すか、如何にして勝ちを手に入れるか。それだけだ。正しくとかそんなことは下らんと思わんか？

古来より勝ったものが正義、負ければ悪だ。だから私は正しく、私に刃向かい負けたお前は悪だ」

「ぎ、ぎざつま……」

だめだ、もう話せない、言葉を話そうとするだけで口から泡が飛ぶのが解かる。だんだん意識を保つのさえ難しくなってきた。

「お前は剣道家としては正しく、そして強力であったが、それこそが貴様の敗因であったのかも知れんな」

「グ、グ……」

「さあ、無駄話は終わりだ。どう殺してほしい。このまま氣道を閉じての窒息死か、首の骨を折るか、首の中の脊椎を損傷させて首から下が不随で生きていると言うのでも良いがな」

「ど……」

どれも嫌だ！

「む、ほう……。そんなお前に朗報だ、面白いものを見せてやる」

そう言うとな奴は私の首を持ったまま大きく振りかぶり、そして……。

「ふんっ！」

野球選手がボールを投げるように軽々と私を投げ飛ばした。

まさか自分がこんなに飛んでいることを実感できるとは、と言う謎の実感を持つ暇も無く。

「がふぐっ！」

床に叩き付けられた。

「ガグフツ、ガフツ、ゲホツ、ゲホツ、ゲ、オゲツ、グ……」

久々に開いた気道が必死で空気を求め、それと同時に登ってくる吐き気を必死で飲み込む。今は嘔吐なんかしている暇なんて無い。少しでも長く逃げている二人のために長く時間を稼がないと。

と……。

「武田さんっ！」

「ユリちゃんっ、大丈夫ッ！」

「な……」

な、な、な、な、な、な、な、

「何で二人がまだ居るんだーっ！」

「だ、だって、あんな状態の武田さん見ていくら何でも……」

「そう、そうだよ。ユリちゃんを置いてなんて……」

「で、でも二人が居ても何の役にも立たないことぐらい、足手まといだって解からなかった訳じゃないだろう！」

「ご、ごめんね、ごめんね……解かってたんだけど、でも、でもお……」

そう言って泣き出してしまう光。

「あ、そ、そ、その、泣かないで光、お願いだから」

「ご、ごめんねえ、ユリちゃんごめんねえ」

「あ、ワカタ、解かったからもう泣かないでくれお願いだから」

そうして泣き出した光を抱きしめてなだめる。まったく、こんな状況で何をしているんだ私たちは。

でも、こんな風に人を思いやれる優しい光だから私は好きだったんだ。ああ、今思えばもう戻らない人生最高の時間。

もっとも輝かしい時間。

ああ、酸素不足で胡乱うろんになった頭でもわかる。如何に私がここ最近の生活を大切に思っていたかという事が。

大好きな光と、物分りのいい先生、よき練習相手に何だかんだ言
って優しかった零児。

こんな風に平凡で楽しくて、充実していた、最高の時間。

だからこそ、守りたいと思った、この身を犠牲にしても。

でも、みんなが一緒なら、ここで殺されてしまっても、それも良
いかも知れない。二人には悪いけど、私の力じゃもう守りきれない
し、流石に逃げなかった二人の自己責任だろう。

プラス思考の女なんだ、私は。

まったく、零児にも困ったものだ、赤の他人なんか助けずに協力
していれば或いは全員無事で逃げ出すことぐらいはできたかもしれないの
に。

零児にとって私たちの存在というのはそこらへんの他人十数人の
命程の価値も無い物だったのか。

私だったら、友達だと思った人間のためになら他人は何人死んで
でも助けたいと思うものなだけだな。

そんな嫉妬みたいなものを持って諦めとともに最後に、近くで血
の海に倒れている零児を見た。

倒れている零児は自分の血で赤黒く染まった学生服を着て、目に
は何も写していなくて……。

気がついたら知らない荒野に一人で立っていた。

荒野、そう、まさに荒野としか表現のしようの無い場所。

見渡す限り岩肌しか見えなく空は毒々しいまでの紅い夕暮れ。夕暮れの逆の空にはすでに濃い群青色が広がり夜が近いことを教えてくれている。

地面の岩肌は、岩と砂しかない世界。例えるのならば、一番近いのは、火星の表面のような、そんな世界。

ああ、そうして周りを見渡すも、何もない。目につくものは荒涼とした地面に転がる岩ばかり。

何処まで見ても稜線すらなく、地平線が見える。つまり、山も何もない土地。

「歩くか」

知らずそんな言葉が出る。歩くのは嫌いじゃない。この異様な光景の中、出来る事と言ったら歩くことぐらいだ。

どの程度、歩いただろうか。数十分も歩いたような気がするし、数分しか経っていないような気がするし、いやむしろ、今歩き出しただけのような気がする。

よく解からない。解からないんだけど一つ解かった事は……。

「俺は、一人だ」

また言葉が出た。そう、独りだということだけはひどく実感できる。体験したことが無い程の強烈な孤独感。

大勢の中にいて一人孤独を感じることはあっても、世界の中で自分だけが一人取り残された、自分以外の存在しない、真の孤独を味

わったの初めてだった。

そんな孤独の中で、ここは何処だか知らないけどできることと言ったら。

「歩くか」

やっぱり歩くことぐらいだった。

どれだけ歩いたのだろうか、もうずっと歩いている。数時間以上歩いた気もする、しかし数分しか経っていない気もするし、やはり今歩き出しただけのような気もする。

周りには何も無く、空を見上げれば、相変わらずの毒々しいまでの血のように紅い夕暮れ空、逆の空には濃い群青色。

そして、その赤と青の境目、比率はさっきとまったく変わっていなかった。

コレではまるで止まった時の中を歩いているような、そんな……。

いや、違う。俺が止まった時の中を歩いているのではなく、俺に時間の感覚が無いのだ。

いや、俺にではない、この世界、此処に措いては「時間」と言う概念は存在しない。つまり。

「あ……」

そうか、俺は。

「死んだのか」

思い出した、いや、元から知っている。この世界では起こるべき事はすべて決まっただけで、そして俺はそれをすべて知っている。

死因は能力による負荷のかかりすぎにより発生した脳卒中。しかし脳卒中でさえ能力さえ使えれば俺にとっては死因とは成りえないが、直接の死因はに脳卒中により能力の行使が途絶え、それによって今まで能力で持たしていた体内の傷から溢れ出た血液を吐血することによって齎される出血多量、か。

長い死因だな。全く。まあ、何はともあれ。

「俺は死んだんだ」

「ああ、そうだな」

ふと、誰もいないはずの後ろから声が聞こえた。

振り返ると、そこには学生服を着た、黒髪の身長170そこそこ位だろうか、どこにでもいそうなありふれた男が立っていた。

俺は、この男の事を、よく知っている。気がする。だって、見覚えがあるのだ、この顔には。どこで会ったか、それが思い出せない。

「アンタは死んだ。それは紛れもない事実だ」

「そうか」

「それもただの死じゃない。肉体から来る死は、外部からの手段や能力によっては、あるいは生き返ることが出来るかもしれない。それは例え脳から来る死であってもだ。でもアンタのは違う。アンタ自身が死を認めた。魂の死だ。だから、すぐに消滅するだろう」

「そうなのか」

あまり、実感は沸かないがやはり俺は完全に死んだらしい。でも、ならば。

「ならさ、俺は何なんだ、俺が俺と認識するこの俺自身は、何なんだ？　ここはあの世みたいなモンで、ここで俺はずっと暮らすのか？」

「いや、違う。死とは、即ち無だ。完全に消滅し、自我なんてものは無くなる。もちろんあの世なんて、そんなものは存在しないんじゃないのか？　詳しくは俺も知らんがな」

「そうか、ならさ、やっぱり俺は何なんだよ？」

「それは、まあアンタは、魂の残り滓みたいなモンさ。死を認めて魂のほとんどは流されていったようだが、しぶとく残った部分がアンタだ。種類としては、未練とか、そんなモンなんじゃねーの？　容量としては、元の魂の半分も残ってはいないが、まあ、存在できない量じゃなかったんだろうさ」

「そうか。それで、ここは何処だ。死後の世界への途中下車駅とか停留所とか停車駅とかそんなもん？」

「いや、違う。ここに存在できるのは今のところ俺とアンタだけだ」「なんでだ？」

「それは、アンタが能力者だからだ」

「能力者だから？　何で能力者だとこんな世界に」

「なに、ジキに解かるさ」

「そ、そうか」

つかみどころの無い男だ。

「それよりアンタ、今死んだみたいだけどさ、生きたいとは思わないのか？　思うよなあ、何しろお前はお前の魂の中の生きたいと願う「未練」の部分なんだからな」

「まあ、それは、思わなくも無いかな」

「かーっ、ハッキリしねえなあ。で、だ。アンタがそれを願う理由は何だ？」

「それは……危険の中に残してきてしまった三人を守りたい」

「はい駄目ブーっ！ 失格、嘘は駄目だな」

「なんだとっ！」

「あー、怒った？ すまん、嘘は言い過ぎたわ。それも未練の一つではあるだろうさ。でももっと、本当に生きたい理由が、もっと根源的な理由があるだろう？」

「あ、そ、それは……」

「正直に言いな。俺に嘘をつくな」

「それは」

「おう」

「こんな停まった世界じゃなくて」

「ああ」

「あの移り行く美しい世界の」

「うん」

「その世界の変節をこの目で見守りたかった」

「ああ」

「だって世界は、あんなにも美しくて、輝いているんだから」

「はい、よく出来ました。それが正解。なにしろこの俺もそう思っているんだから。でもな、俺、アンタが最初に言っただけにすぎずに他人を気にする偽善者っぽいところも嫌いじゃないぜ」

「ムッ、偽善って何だよ。ってかさ、大体お前誰なの？」

「は？ アンタ俺の事解かって無くて今まで話してたの？ 頭大丈夫かよ最上零児」

「頭大丈夫かと言われても……俺は死んでるからな」

「ハハハ、それもそうだな。でもアンタ本当に俺の事わからないのか？」

「あ、ああ。見覚えはあるんだが、と言うかしょっちゅう会っている気がするんだが」

「ああ、その感覚は間違いじゃない。ずっと一緒にいたからな。意識が無いときや満月が近づくと俺も良く出てこれるようになって、

あんたの体を借りたもんだぜ」

「ま、まさか、お前は……」

「そう、俺は「最上零児」だ。アンタ意識の落ちているときに強い感情や能力に反応すると出てくる俺。まったく、自分の顔忘れるかフツ―。顔覚えるの苦手ってレベルじゃねーぞ？」

「なんで、お前がココに？」

「まあ細かいことはどうだって良いじゃねーか。答えとしてはここがそう言う「場所」だからってこった。そんなことよりっ！」

そう言いながら最上零児は俺のほうにズズイツとよって来た。

「な、何だ？」

「アンタ、まだ生きたいんだろ？　そう言っただろ、言っただよなあ、なあ、なあ？」

「あ、ああ」

「ならさ、俺と一つになればいい。幸いお前の流れた魂の部分は肉体や能力の行使、生命維持に必要な部分なんかだ。そして俺はそういったものを持っている。だから、アンタの未練や記憶と、俺の肉体の使用の記憶。足せば一人前の魂の出来あがりって訳だ。まあ、人格がダブるけど、元は一人の人間だ。多分大丈夫だろうし、悪い話じゃないだろ？」

「あ、いや、それは願ったり叶ったりなんだが、何でお前がそんなに生に執着する？」

「バツカおめー、そりゃあ俺も生きたいからに決まってるんだろ？」

アンタが世界を美しいと思ってその変節を感じたいと思うのと同様に、いや、きつとそれ以上に俺は同じことを願ってるんだぜ？　まだ死んで堪るかよ」

「そ、そうなのか？　でもそんなこと可能なのか、いまさら生き返るなんて」

「あつたりめーよ。お互い利害も一致して、願いも一緒に、そして

オレタチャ能力者。大丈夫、俺に任せろ」

「あ、ああ。でも……」

「まーだグダグダ悩んでるのかよ。急ごうぜ。俺も武田由里香とは面識があるし、なんとなくあいつには死んでほしくないと思うしな。さあ、願え」

「願う……」

「そう、願うだけで良いんだ。お前の望みは何だ？」

「俺の望みは……」

「俺の望みは？」

「生きている、移り行く美しい世界の」

「そう、正解。その世界の変節を？」

「この目で見守りたい」

「そう、それが」

「例えばどんな結末になろうとも、人の世が終わろうともずっと」

「この世の行く末を」

「流れ行く無窮の時の流れの中で」

「感じていたい」

幕間 2

覚悟を入れるために零児を見る。

倒れている零児は自分の血で赤黒く染まった学生服を着て、目には何も写していなくて……。

って、あれ？

今の零児の目の色、あれは死人の色か？ なんか普通に生きてい

る人間の目のように色を写していたような、いや、そんな訳は無い
か。宗全に首絞められて放り投げられて頭でも打ってついに視覚に
きたのか。

まあいい。いつまでも光を抱きしめて慰めてもいられない。せい
ぜい目一杯、無駄な足掻きでもするとしようか。

そうしてふらつきながらも光をほどいて立ち上がる。と……。

「もう、もう良いよ、もう良いから、お願いだからこれ以上無茶し
ないでえ！」

光が抱きついてきた。

「もう、最上君もいなくなって、ユリちゃんにまでいかれたら、私
……」

「光、気持ちは嬉しいけどコレは意地みたいな物なんだ。どうか放
つておいてくれないか？」

「でも、そんなぁ……」

「すまない、光。それから、守ってあげなくてごめん」

そうして改めて敵を見据える。

と、宗全ではなく、赤毛の男のほうが出てきた。

「おうおう、フラフラじゃねーか、武田さんよう！」

「む、いたのか、チンピラ」

「は、相変わらず強気なのな、良いねえ、実に良いねえ、ほれっ！」

そう言うと赤毛野郎は警棒で殴りかかってきた。

思わず止めようと手を出すも、手に当たった警棒の衝撃で押し倒
されて腰をついてしまった。

「はっ、ざまあねえなあ、うひゃひゃひゃひゃひゃ！」
「ぐ、クソッ！」

と……。

「もうやめてっ、お願いします！」

そう言って光が私を庇う様に抱きついてきた。

「私はどうなっても良いから、お願いですから、ユリちゃんだけは助けてくださいっ！」

「なっ、光っ、何を言っって……」

「もう嫌なのっ、ただ守られているのは！」

「ほ、ほうほう、面白いこと言う娘さんじゃうひゃひゃひゃうひゃ、それじゃあ何される覚悟も出来てるって言うんだな？」

「はい」

「じゃあ、ナニもか？」

「う……は、はい」

「ほう、何とナニの発音の違いで意味の違いがわかるのか、この、エッチめ、うひゃひゃひゃひゃ！」

「う、ぐう……」

「あーら、真っ赤になっちゃって、かーわいいんだー、うひひひひっ！」

ぶちっ！

「き、貴様アツ！ 光を侮辱した、ゆ、許せんツ！」

「オー怖い怖い、全く、コレぐらいでヒートアップしちゃってよう、美しい友情だよなあ！」

「ク、クソッ！」

今の私にはこいつらに対抗できるだけの力はない、ただ悔しがることしか出来ない。

我ながら、なんて、無力。

と……。

「ああ、本当に……な」

後ろから、聞こえるはずの無い声が聞こえた。
場が静まる。そして、集まる視線。

そう、さっきまで零児の死体があった場所。そこに、相変わらず零児は倒れていた。

でも、さっきまでと決定的に違う所は、その目が確かに色を、世界を写していると言う事。

そして、零児は倒れたまま右手を上げて目の前に持っていて開いたり閉じたりニギニギしだした。

「ああ、俺も、本当にそう思うぜ」

まだにぎにぎしてる。

「本当に片山さんと武田の間には、美しい友情があるって」
にぎにぎ。

「だから……」

そこまで言うと言児はにぎにぎをやめてその手をグッと握った。

「守りたいと思ったんだ」

2

「守りたいと思ったんだ」

そう、それは心の芯から出た純粹なる願い。

「だから」

願いは、叶える為にある。

「俺が」

だから俺がその願いを叶える。

「守る」

そこまで言って、血が足りない体に鞭打って根性で立ち上がった。立ち上がった瞬間にクラッて来た。正直血が足りなすぎて、普通の人間なら戦闘どころか生命維持ですら儘ならないであろう程に少ない血液量。

だが、泣き言を言っている暇は無い。

そして立っているだけで襲ってくる猛烈な吐き気。

それを抑えるために、そして自分に虚勢を張るために床に唾を吐く。

唾は赤かった。血が混じってやがる、口の中で血の味がする。不味い。

そして口の周りの血を学ランの袖で拭いながら改めて辺りを観察した。

あたりは静けさが支配している。みんな在りえない者を見るような顔で、幽霊を見るみたいな顔で俺のことを見やがる。

まあ、当然か。あれだけの血を吐いて生きているなんて普通はありえないからな。何より俺が信じられない。

だが、生きている、体はヨレヨレだが何とか動く。それだけで上等だ。

近くで何だかんだでよれてる大切に思っている三人の女を見る。

三人とも呆然として俺を見ている。何が起きたかまだ理解できていないのだろう。

マズい、それにしても三人の白い首筋を見てたら何だか無性にむしゃぶりつきたくなった。アイツと一つになった所為かどうも強い欲望が俺に襲い掛かってくる。

そう、その無防備な白い首筋にむしゃぶりついて犬歯を立てて首の肌、血管を破って中の血をごくごくと飲み干すんだよ。

そしたら欲望も劣情も解消できてついでに血液不足も解消、って俺天才じゃね？

違う違う、そんな吸血鬼みたいなことをするために生き返ったんじゃない。

守るべきものを自分で壊してちゃ駄目だろうがアホ。
それよりも敵を観察だ。

敵の赤毛のほうは相変わらず状況がつかめていないらしくその表情からは呆然と、わずかな怯えが伺える。

そして、宗全を見る。

宗全は、今日のはじめて見せるであろう驚愕の表情を浮かべていた。そして、良くは解からないのだが、その表情の中に僅かな歡喜の様な物が伺えた。

なぜ、この状況で喜ぶところがあるのかは解からないが……。

と、なぜか宗全は突然手を叩きながら言った。

「す、素晴らしい。まさかこれ程とは。最上の血族というのが生き汚いのは知っていたが、あれだけの出血から蘇るとは、たいした物なのだな、最上家の能力とは」

「へへへー、そうだぜ、参ったか」

本当は違うけど、本当の情報を教える必要も無いだろう。存分に悔しがらしてやるぜ！

「ああ、恐れ入った」

「ああ、そうだろうそうだろ……クッ！」

突然の猛烈な頭痛、ちくしょう、やっぱり人格が一つになったときに容量が増えてやがる、やや負荷がかかったか。

「お、どうした？ 先ほどまでの威勢は？」

「うるせえよノッポオヤジ。あとお前の声は鬱陶しいからこれから発声禁止な」

「は、威勢が良いのだけは相変わらずか」

と、後ろから話し声が聞こえてきた。

「ねえ、片山さん？」

「何ですか先生？」

「なんか今の最上君今までと雰囲気違わない？ 床にツバ吐いちゃったりなんかしましたし」

「そうですね、妙にワイルドって言うか……」

「はーっ、二人とも、こんな状況でよくそんな事を……突っ込み所は色々あるが、零児はもととあんなモンですよ？」

「あら、武田さん。最上君についてずいぶん詳しいのね？」

「先生、今はそんなこと言ってる場合じゃないですよ」

全くだ。

さて、今の状況を整理すると、武田はおそらく戦闘不能。二人はもともと戦力外。俺は血液不足で生きているのが精一杯。敵は二人とも無傷

最悪の状況だ。だからこんな時は。

「オイ、聞いて驚け物部宗全。この最上零児にはいまだ使っていない必殺技がある」

ハッタリだ。

「ほう。それはどんな物なのだ？」

「おう、聞いて驚くなよ？ コレはジョースター家に伝わる……ゲフンゲフン。もとい最上家に代々伝わる必殺技で……あーっ、もう。家名を汚すのはいやだ。止めだ。この最上零児の最終兵器と恐れられる究極の攻撃方法でな？」

「ほう」

「俺はそれを使うから、俺にはお前は倒せんっ！」

「零児、違う。逆だってば逆！」

「あ、そうか。お前には俺は倒せんっ！」

まったく、間違えて本音を言っただうするよ俺。

「ほう、面白いな、それで、どんな攻撃方法なのだそれは？」

「ああ、見せてやるからちよい待ち。タイムな」

「タイム？」

ふふふふ、小学生みたいな意見だが、こういうときは守ったら負けだぜ。堂々と言うのがポイントだぜ。

しかしタイムとかいったのマジ小学生以来かも。

そしてそれを律儀に守っている宗全を尻目に武田に近づく。

「なあ武田。ゴニョゴニョゴニョゴニョな」

「何だと零児、よく聞こえないぞ？」

「バッカお前。宗全何だか滅茶苦茶耳よさそうだろ？ だから聞こえないように小声で言っただよ」

耳が本当に良いかは知らないけど。

「もう一度言うぞ、俺が先生でお前片山さんな？」

「あ、ああ。何のことは全く解からないが了解だ。それより零児、体のほうは大丈夫なのか？」

「正直ぜんぜん大丈夫じゃない」

「ならっ！」

「心配すんなって。これからやる必殺技は別に身体に祟るような物

じゃないから」

「そうか、そうなのか。本当だな？」

「ああ、大丈夫だ」

そう言うわけで宗全に向き直り言い放つ。

「待たせたな、準備完了だぜ」

「ああ、待ったぞ。それでは見せてみる」

「ああ」

そう言って堂々と先生のところに歩いて行って……。

「え、ちよつと、も、最上君っ？」

なんか言ってる先生を無視して抱き上げる。いわゆるお姫様抱っこって言う奴だ。

「おい、お前もやれよ？」

「あ、私もか。あ、ああ」

そう言って武田も片山さんを抱き上げる。

これで準備完了。

「さあ、見せてやるぜ俺たちのジェットストリームアタックを」

「ふむ、だからさっさとしろと言っている」

「俺の必殺技って言うのは……」

そうして大きく息を吸って、そして吐いて。

「逃げるんだよおおおっ！
チイイツクシヨオオオオオオオオオオオ

ッ！！！」

真横にあった扉にタックルして職員室に逃げ込んだ。

「なっ！」

後ろから武田の狼狽した声が聞こえる、頼む、着いてきてくれよ、大丈夫だ、武田なら、武田ならやってくれる。

そうして後ろを振り向くことなく両手が塞がっているので足で近くにあった椅子を蹴り上げて窓ガラスに当てて割り、そこに自ら飛び込む飛び込む。

もちろん窓ガラスで先生の顔や肌が切れないように窓に突っ込むときはやや抱きしめるような形になってしまいが、役得だと思って喜んでおくことにする。

だが、此処は二階な訳で窓から飛び降りれば当然……。

「きゃ、きゃああああああっ！」

落下するわけで、腕の中の先生がなんか悲鳴を上げているが当然無視。

そうして着地。

足首にズシッと重い衝撃が来るが躊躇っては駄目だ。おそらく数瞬後には同じ場所に武田が着地する。

だからすぐに前へ飛び出す。と、その瞬間。

「ひゃ、ひゃああああああっ！」

ちょうど俺が着地した場所と同じ場所に、武田が片山さんの可愛い悲鳴を伴って落下してきた。

そして華麗に着地。

それを確認する事もせず、学校の裏庭をフェンスに向かってダッシュ。

振り向く暇があったら走れ。少しでも早く。

そして裏庭を駆け抜け抜け約二メートルのフェンスを先生を抱えたまま飛び越える。

武田もコレくらいの高さはおそらく片山さんを抱えたままでも余裕で飛び越えられるだろう。

と、後ろから声が聞こえた。

「なあ、零児、何処まで逃げるんだ？」

「耳ヶ崎の方に知っている空き倉庫があるんだ。そこまで飛ばすぞいいな。着いてくれるか？」

「ああ、勿論だ」

そこで初めて振り返って見た片山さんを抱きながら走っている武田の顔は、なぜかとても嬉しそうだった。

幕間 3

そうしてこの惨状を見てるわけだが。ブチ破られた職員室のドアに、その向こうに見えるのは俺が割った窓と最上によって破られた窓。

床には気絶した警官隊たち十数人。そして最上が倒れていた辺りにある血の海

立っているのは宗全、そして赤い頭の俺。ちなみにいつになったら俺に名前がつくんだろうかね？

と、宗全がつぶやいた。

「ふむ、予想外だったなコレは」

「まあ、気にスンナよ。こんなダッセエ手、ふつう食らわれないから、今回は逃げられたのかもしれないがねえって」

「む、何を言っているのかよく解からんが、まあこんな手であることは解かってはいたぞ？」

「またまたー、意地張っちゃってー」

「考えても見ろ。奴らには所詮逃げるくらいしか手は無かったんだ。正しい手段がそれしかないのならそれを選んだ最上零児は正しいし」

「ほー、さいですか」

ほんとうかね、コイツ基本的にええカッコしいだから、何でも解かっていたとかそう言うセコイこと言うかもしれないからな。

と、心の中で言うておく。口には出さない。怖いから。

「予想外といったのはその事ではない。最上零児の能力の高さだ」

「うん、まー確かにあそこで生き返ったのは予想GUYだったZE」

「そうだな」

「あんだけ血ィ吐いて生きてるって、本当にありや人間か？」

「全くだな、それも疑わしいところだ」

「それよりどうするよ？ 今回は撤収だろ」

「ああ、そうだな」

「で、その後は？」

「安心しろ。逃げられた場合の手はすでに打ってある。今夜には決着がつく」

「ほー」

流石にコレだけ自信満々にいうからには何か手があるんだろう。となると、さっき言ってた最上が逃げるのはわかっていたって言うのもあながち嘘じゃないかもな。まったく、恐ろしい男だぜ。

「ふむ、お前には、今晚は役に立ってもらうからな」

そういつて、奴は俺を見て薄く笑った気がした。始めてみるかもしれない奴の笑顔は何だかとても不気味で……。

嫌な予感で背筋が凍るのを感じた。

全く、最上が美人三人とつるんでるのになんで俺はよりによってこんな恐ろしい中年の男と組んでるんだろうかね？
世の中不公平だと思うよ。全く。

あー、やだやだ。

Fly like a bird (後書き)

今回は長いよ頑張ったよ。

コレ一日で書いたんだよ？ 久々に休日が取れたから。

ふーがんばったぜ。我ながらすげえ頑張ったよ。

一日仕事。ほんとコレかいてるだけで一日つぶれたYO

なんか変なテンションで書いたZE

後書きくらい適当で飯田RO

ところでさー知ってる？ 滑舌^{かっぜっ}って変換できないパソコンの方が

多いんだぜ？

詳しくは平仮名でかつぜつつて書いてググッて見るんだ。

勉強になるよ。

しかし書けば書くほど恋愛から離れていく謎のカテゴリ恋愛小説。

それには理由があったのだ。

ところでさ、重大発表なんだけどさ、その理由っていうのがね、もうプロットは最後まで完全に出てくるんだけど、その恋愛に絡ませるメインのヒロインがまだ出てきてないって言ったら怒る？

怒るかなー、怒るよねー、やっぱり。

あははははー冗談に決まってるじゃないか。そう、冗談だよコレは？

多分。

うん、寝る。お休み。

What can I say

1

潮風が頬をなでる。そろそろ海が見えてきた。まだ距離がかなりあるのだが視界が高いせいで港のほうが良く見える。

そう、視界がすごく高いのである。何しろ俺は今先生を抱いて建物の屋根の上を走っているのだから。

なぜそんなことが可能かというと、海に近いこのあたりには大体二階建てくらいの建物や倉庫くらいしかなくて屋根から屋根への高度差がそんなに無いので、屋根から屋根への移動もそれほど難しくないので。

じゃなくて、それ以前になんでそんなねずみ小僧のようなことをやる必要があるかというと、実際地上ではあまりに目立つからだ。事実学校出てすぐのところで包囲していた警官隊の一部に囲まれたし。確かに血まみれで女を抱いて走っている学生服の男って言うのは不審極まりない物だろうけどさ。でもまあそのときには能力で軽く眠らせて逃げただけだね。

誰かに能力で操られてしまった人間をさらに操るのは、元的能力者以上の強力な能力が必要になるから難しいんだけど、ただの人を操るなんてことは造作も無いことなんだよな。

そう言うわけでそれから武田に一言言って屋根の上に飛び乗って屋根から屋根へと飛び移って目的地まで移動しているわけなんだよ。と……。

「ひゃあっ！」

あ、また先生が腕の中で悲鳴をあげた。無理も無いな。今の隣の

屋根までは少し距離があったから結構スピード出して跳んだしな。

「しかし、何でわざわざそんな、耳ヶ崎なんかの倉庫へ行くんだ？
私たち誰かの家で良いんじゃないのか？」

ん……武田か。ちゃんと着いてきているな。関心関心。武田のこ
とだから片山さんも絶対に無事だろう。

「それはさ、アレだよ。奴は俺を追っていたらしい。そして俺が通
っている学校や、お前のことまで調べたくらいだ。俺やお前の家の
所在が割れている可能性も見ておくべきだろう。それに片山さんや
先生の家って訳にもいかないだろう？　もう手遅れかも知れんが、
だからと言ってコレ以上巻き込むわけにもいかんし……」

「む、それもそうだな。しかし、その倉庫とやらまだなのか？」

「ああ、あと少しだ。安心しろ。次の次の建物の所を右の細い路地
のほうへ飛び降りるぞ。裏道があるからな」

「ああ、了解だ」

そうして二回屋根から屋根への八艘跳びをして、それから路地の
ほうへ着地。腕の中で先生がまた悲鳴を上げたが勿論黙殺。

後は路地裏の人目の無い細い道を選んで地上を走る。そうして……。

「ここだ」

着いた。潮風を受けて錆びまくった空き倉庫の前に。

別に港沿いでは無いのだが、やはり耳ヶ崎一帯は鉄の腐食が早い
気がする。ホントどうでもいいが。

「先生、立てますか？」

「ん、あ、うん。多分」

そう言ったので先生を降ろす。

先生は降りたその瞬間こそ僅かにふらついたけど、すぐに持ち直した。何とか無事みたいだな。
と……。

「この倉庫か。零児」

片山さんを降ろした武田が片山さんを付き添わせてやってきた。

「ああ、そうだ。少し待ってろ。確かこのドアが……」

そう言って倉庫右側にある扉を開く。扉は錆びてはいるが、金属音を鳴らしながらもスムーズに開いた。

そうして中に入ると埃っぽいながらも広いスペースが出迎えてくれた。

「ほう、なかなか立派な物じゃないか」

「ああ、電気や水道も通っているし、少しの間でも隠れるのにはうってつけの場所だぜ」

「ああ、そうだな。先生、光、大丈夫だ。入ってきてくれ」

なんだ、まだ入ってなかったのか。

「へー、なかなか広いじゃない」

「本当、しかも二階建てだね」

「ああ、そうだぜ……って、あれ？」

なんか急にフラフラして来た。しかも体の感覚が殆ど無い、あれ、

床が、近い気がする、って、うわ！

そうして気がついたらバタリと大きな音を立てて碌に受身も取れないまま床にうつ伏せで倒れていた。

そうだ、忘れてたよ、と言うか気が張っていたせいで生命活動をなんとなく続けていたけど、魂の欠損は埋めたとは言え、肉体はまだ死に体だったんだ。何より血が足りなすぎる。

「って、零児！」

「大丈夫、最上君！」

「ちよっと、どうしたのいきなり！」

「あーどうしたもこうしたも、体に水分とか鉄とか、とにかく血が足りなすぎる。武田、悪いんだけどちよっとコレで」

そう言うってうつ伏せに倒れたままポケットを探り財布をおそらく武田が居るであろう方向へ向かって適当に放り投げる。

「どこか自販機とかあるだろう。探して適当に買い漁って来てくれないか？」

「あ、ああ。飲み物だな。でもそんなことでいいのか？　すぐにでも病院に行って輸血を受けたほうが……」

「バカ、そんな必要はねえよ。説明すると長くなるけど必要な素材さえ体内に入れば後は俺の肉体が俺を死なさないようにと勝手にやってくれるから余計な気を使うな。それよりも一刻も早く頼む。本当にあと少しの間で体に水分が入らないとおそらく俺は……」

そう、今度こそ死ぬ。

「あ、ああ、解かった。すぐに買ってくる。すぐに戻るから何とか

持ちこたえておいでくれ」

「うい、頼んだ」

そこまで言うのと武田が猛烈な勢いで倉庫を出て行った。あの様子ならすぐにでも買ってきてくれそうだな。

いい奴だな、武田。

でも、そこまで考えた時点でだんだんと視界が黒く塗りつぶされてきた。

あ、コレは本格的にヤヴァイかも。そろそろ限界かも。

そう感じたのを最後に、だんだんと重くなる瞼の前に、俺はその欲求に抵抗するのをやめた。

幕間 1

今日は本当に解からない事だらけだった。一時は本当に最悪の事態も覚悟したけど、何があったのか何にもわからなかったけど、と言うか今でも解からないけど、取り合えず最上君が復活してからは何とか全員無事に逃げ出すことが出来て、こうして全員無事に倉庫に着いたわけだ。

こんな状態で言うのもなんだけど正直最上君にお姫様抱っこされていた先生が少し羨ましくもあったけど、でも私を抱いて走ってくれるユリちゃんがすごく優しく私に衝撃がこないように抱いてくれていて、そんな所にも、ユリちゃんの優しさを感じて何だか嬉しかった。

そうして今また、ユリちゃんは、その優しさを示すように最上君

に投げられた財布も取らずに、すごい勢いで倉庫から出て行った。
なんて言うか、ユリちゃんって本当にいつも一生懸命で、なんか、
良いよね。

私はいつだって、ユリちゃんと一緒に居ると、ユリちゃんの友達
であることに誇りを感じられる。だから、そんなユリちゃんだから
私は大好きなんだよね。

と、そう言えばさっきのやり取りを最後に沈黙した最上君のほう
を見てみる。

何だかうつ伏せに倒れてピクリとも動かない。大丈夫かな……。
ちよつと声かけてみよう。

「ねえ、最上君、最上君、大丈夫……？」
「……」

返事なし。って大丈夫かな！

「ちよつと、最上君、大丈夫？」

そう言って軽く揺すってみるも反応なし。

あれ、コレちよつと本当に拙いんじゃない？

と、今の様子を見てた先生も拙いと思ったらしく、最上君を抱き
上げて頬をペシペシし始めた。

「ちよつと、大丈夫なの最上君！」

「あ、ああ、先生……？」

あ、意識が戻った。

「しっかりしなさい。寝たら死ぬわよ！」

「あ、あああ、そう……です、ね」

「ちよっと、ホントしつかりしなさいって。何か必要な物ある？」

「血が、う、……み、水……」

「ちが、う、み、みず……違うミミズ!？」

「いや、先生、今はそんなベタなこと言ってる場合じゃありませんって! アレだけの血液を失ったんですから、最上君は水が必要なんです」

「わ、わかってるわよ。こんな状況で冗談なんか言うわけ……ハッ! そうじゃなくて、えー……っと、場を和まそうと少し渾身のギヤグを言っただけよ、うん。そうよ」

今の天然だったんだ、この現代国語の教師……恐ろしい人!

「とにかくっ、今必要なのは水。どこかに水は、えーっと……」

そう言ってあたりを見渡すと、壁沿いに小さくて汚い水道があった。コレが生きてればいいんだけど……。

そう思って水が出るように捻って見ると、シャアアアという音と共に蛇口から中々の勢いで真っ赤な水が出てきた。

ああ、そうか。こんな古そうな倉庫だからすっかり水道管が錆びちゃってたんだ。

そうして、しばらく様子を見てみるも赤水がやむ様子は無く、錆びの根は深いようだった。

「ふう、だめそうだね、管が錆びちゃってるみたいで……」

「て、鉄、み、み、水う……ッ!」

「って、ひゃっ!」

ビックリした。振り向いたら其処に音も無く突然最上君が立っていたのだから。

そしてさらに、最上君は赤水が出ている水道を虚ろな目で見つめた後、おもむろに其処から出ている錆びた水にむしゃぶりついた。

「ちょ、ちよつと、最上君!？」

「ど、どうしたのよいきなり！」

そうして異変に気づいた先生と二人で止めようとするも。

「み、水う、さ、錆び、ああ、ああ、う、うみゃい！」

すっかり水道にしがみついて離れようとしなない。

「ちょ、ちよつと、やめなさいよ、そんな水が美味しい訳無いでしょ！」

「そうだよ、身体に悪いよ」

「ばか、これがある、良いんだよ、さび、それに死にかかってるんだ、これ以上なんか、が、がぶがぶがぶ！」

うわあ、なんと言うか鬼気迫りすぎて止められない。

と、凄い勢いで扉が開いて両手にペットボトルを大量に持ったユリちゃんが飛び込んできた。

「待たせたな、買って来たぞ零児！」

「あ、まったあああっ！」

すごい勢いでユリちゃんの方へ行く最上君。

「ああ、待たせて悪い。吸収率の高い「ポ○リ」と「アクエ○アス」と「アミノバ○タル」を買ってきたぞ。ちなみに私は「エネ○ゲン」が好きな。最近見ないなあ、エ○ルゲン」

「ええい、そんなことはどうでもいい、くれえ」

「ほれ」

そう言って買ってきた2リットルのペットボトルを投げて渡すユリちゃん。そしてそれを受け取った最上君は跪く様な体制で蓋を取って浴びるように飲み始めた。

って、うわっ、凄い。もう2リットル飲みきった。すぐに次のに手を伸ばす。

そしてその新しく開けたアミノバ○タルもすぐに飲み干してしまふ。凄いペースだよ。

「零児、いくら水分が足りないとはいえあまりにも急な水分摂取は身体に毒だ。最悪死に至るんだぞ？」

「うるひゃい、う、うみゃ、が、がぶがぶごぶがぶ！」

まさに聞く耳持たず！

「が、がぶがぶごぶごぶがぶ……ふ、ふう、ふう、ふう」

あ、飲みきったみたい。

「だ、大丈夫、最上君？」

「あ、ああ、だい、じょう、ぶううううう……！」

そこまで言い切ると最上君はそのままうつ伏せに倒れてしまった。

「ちょ、ちょっと、本当に大丈夫なの！」

「あ、ああ、大丈夫だよ、本当に、後は肉体の方で勝手に治癒してくれるから」

「そ、そうなの？ よく解からないけど」

「ああ、へーきへーき」

そう言いながら最上君はうつ伏せのまま後頭部のあたりで手を振っている

と、それを見たユリちゃんが最上君の方へ歩いていき最上君を仰向けにひっくり返し聞いた。

「零児、本当に、こんなことで大丈夫なのか？ すぐにでも病院に行った方が……」

「平気だって、俺は少し寝るから、じゃ」

それだけ言って本当に寝てしまう最上君。

「おい、零児、起きろ、起きろってば」

「ね、ねえ、本当に寝かしちゃって大丈夫なの、武田さん」

「ちよっと待ってください」

そう言って最上君の胸に耳をくっつけたり顔の近くでいろいろと指を当てたりしているユリちゃん。

何してるんだろ。

「ふう、どう言う訳か本当に呼吸も深くて安定してるし、脈もしっかりしてるんで大丈夫そうですね」

「そ、そうなんだ。なんか……凄いね」

「全くだ。能力者だからといって、説明できる状態じゃないぞコレは……」

「う、うん。どう言う事かよく解からないけど、アレだけの血を吐

いたら普通は助からないよ」

「ああ……」

本当に、今日は何から何まで解からない事だらけだよ。

混乱しすぎて何がわかってないのかすら解からないくらいに、何にも解からないや。

と、今まで静かにしてた先生がズブイツと出てきた。

「さて、最上君の方も一段落したみたいだし、どう言う事か、説明してくれるんでしょうねえ、武田さん？」

幕間 2

う、よりにもよって零児の寝ているこのタイミングで聞きますか先生。

「な、なにを……私に？」

「だってそうでしょ？ 最上君がどういう状態なのか武田さんはよく解かっているみたいだし。あと今日のあなた達の異常な運動神経とか、あの男たちは誰だったのかとか、後今日廊下で起こった数々の謎の現象の正体とか、何故貴女が日本刀なんかを持っていたのかとか、そもそもなんで最上君と貴女がああ現場へ居た、いや、行く必要があったのかとか、そう言ったモロモロの事をマルっと丸ごと説明してもらいましょうかっ！」

そこまで言う先生は大見得を切るようにズビシツとこちらに指差してきた。

ううう、ここは私の必死の説明フェイズに入るしかなさそうな空

気。流石に誤魔化せないか。

「ふう、どうやら本当のことを話さなくちゃならないみたいですね」

「ええ、そうよ。話して頂戴」

「解かりました」

ふう、いつかは光には話そうとは思っていたけれどまさかこんな機会に話す事になるとは……。

ええい、ままよ。これも運命か。

「光、先生。聞きたいんですか、超能力って信じますか？ よくテレビでやってたりしてるあの如何わしい、まあつまりは、人の限界を超えた在りえない力を持った人たちの事です」

そう、超能力。言葉にすればこんなにも陳腐で簡単なこと。それが今こんなにも私たちを振り回している元凶。

「え、まあ、そりゃあ、ね」

「えーっと、うん。前はどちらかというと懐疑的な立場だったんだけどね」

「そうですか。それなら話は早い。私と零児は一言で言えばその、いわゆる所謂超能力者って言う奴なんです」

よし、遂に言った。ええい、どんな反応でも受け止めよう。
と……。

「ふう、まあ、そんなところよね」

「そうだよね。やっぱりそうなんだ」

あれ……？

「二人とも、もっとこう、なんていうか、驚くかと思ったんだけど」

なんて言うのか、こう、なんだってー！　って言って固まるとか
そう言ったりアクションをとると思っていたんだが。

「だって、ねえ、先生？」

「ええ、今日アレだけのことを目の前で見せ付けられたらねえ？
私は鬼だとか吸血鬼だとか実は人間じゃないって言われても信じる
ような状況だったわよアレは。正直今日の動きは超能力者とかそう
いった答えでもないかと納得できる物じゃないし、妥当な答えね」

「う……そうでしたか。まあ、でも本題はここからなんです」

そう、大事なものはコレから。二人は超能力者。ハイ終わり。バン
ザーイバンザーイって話ならばどんなに良かったか。

「それで、まず光、私の父が政治家である事は知っているだろう？」

「あ、うん、確か良くテレビで見る武田義正さんただよみさまってユリちゃんのお父さんなんですよ？」

「ああ。その父も係わっている話なんだが……」

そこまで言って深呼吸をする。ここからは話してはいけない事なんだが……。

「まず言っておく事があって、ここからは政治的な問題も絡んでくる極秘の国家機密だから、私も話した事がバレれば只では済まないだろうし、二人にも迷惑をかけるかも知れない。それでも二人は聞

きたいですか？」

「え、ええ。ここまできて聞かないなんて流石に目覚めが悪くて……」

「うん、そうだよ。話して、ユリちゃん」

ふう……。

「それじゃ話すが、あ、ここから話す事は二人を信用して、この二人だから話すんであって当たり前だけど絶対に他言無用だからな」

「あ、当たり前じゃない。他では話さないわ」

「うん、判ってる。だから話して」

「ああ。まず、私たちみたいな力を持った人間の事なんだが、国の方でも勿論その力については把握していて呼称も決まっている。呼び方は単純に「能力者」と。そして、そのタイプには大きく分けて二つある。純粹に力が強くなって、能力の行使してる間は身体能力が劇的に上がる肉体強化型と、もう一つは他人の精神に侵入して他人の心を読んだり書き換えたりする、精神干渉型。通称ハッカータイプと呼ぶ。ちなみに私は肉体強化型。私以外は零児も含め皆ハッカータイプのようなだ」

と、ここまで言い、もっとも大事な事を言ってなかった事を思い出した。

「そうだ、光に伝えるべき大切な事があった」

「え、私に？」

「そう」

そうだ、コレはとても大切で、そして私にとってはとても怖い、でも避けては通れない事。

「光、私は君に謝らなければならない」

「へ？ 謝るって、何を？」

「ああ、この事なんだが、いくら父からの命令の国家機密とは言え、光に隠し事をしているというのは、その、なんと言うか気まずかったんだ。いや、勿論いつかは打ち明けるつもりだった。でも、それがなかなか出来なくてこんな事になるまで黙っていた私を許してくれ」

そう言い切って思いの丈を全て籠めて頭を下げる。

と、突然光はあたふたと慌てながら詰め寄ってきて言った。

「あ、いや、そんな事で謝られても、ほら、全然気にしてないし、頭を上げてよ。そんな国家機密クラスの事なんか話せなくても当然だよ。私はユリちゃんのその気持ちだけで凄く嬉しいから」

「いや、私はダメな奴なんだ。勿論極秘事項なのは嘘ではないが、そんな物は建前だったんだ。光が秘密をすぐに外に漏らしたりする性格じゃないのは良く解かっていたし、だから光にならどんな機密だろうと話しても大丈夫だって事も解かっていた。でも、それ以前に私は人とは違うから、ほら、今までだって私には光と出会うまで友達と呼べる人は居なかった。やっと出来た初めての友達の光に、私が人とは違った「能力者」とか言う良く解からない者だって言う事で、光が離れていってしまう事が怖かったんだ。だから、今まで光にこの事を話していなかったのは、私の使命とかそんな事じゃなくて、殆どは私のエゴなんだ。本当にすまない。光。許してくれとは言わないが、この通りだ」

そう言い切って、正直な気持ちを乗せてまた思いつきり頭を下げ

る。

正直、頭を上げるのが怖い。光はどんな顔をしているだろうか。

ああ、やはり、この時間は、凄く、怖い。

許してくれとは言わない。そう言葉にはした物の、やはり絶交するとか言われる事を考えると覚悟を決めた心が折れそうになる。

でも、今の気持ちは、怖い気持ちと共に、今まで言えなかった事が遂に言えたせいとか心の中の淀みを取り去ったような達成感も僅かながらあった。

と……。

「はーっ、ユリちゃんは、全くどうして、もう、こうハッキリと……」

という、少し呆れた様な光の声が聞こえてきた。

「ユリちゃん。良いから、頭を上げて」

「う、うん」

そうして恐る恐る頭を上げて光の顔を見る、と、光は何故か頬を紅くして少し照れたようにこっちを見ていた。

「あのね、ユリちゃん。ユリちゃんは確かに人とは違うかもしれないし、今まで私にその事を隠してきたかもしれない」

「う……」

その通りだ。

「でもね、今こうやってハッキリ言ってくれた。それにそんなふう
に真剣に私たちの友情について考えてくれていた。それだけで嬉し
いから、その、なんていうか、ね」

「あ、ああ」

と、光はもじもじしながらツインテールの髪の毛の先っぽをこねくり
回しながら私の方を見て言った。

「その、ユリちゃんはその事以外はいつも思った事を正直に言って
くれてたでしょ？」

「ああ、勿論だ。だって、光は友達だから」

「う、うん。そう、そういうユリちゃんの真っすぐな所がね、その、
なんて言うか、私は凄く好ましく思っているというか、その、そう
そう！ 今日だってそう言うふう我真っ直ぐに言ってくれて、正直
で、そして優しく、とにかくそう言うユリちゃんだから友達なん
だから、だから唯の人だろうと、能力者とか言う物だろうと、ユリ
ちゃんはユリちゃんだから私は大好きなんだよ！」

そう言いきると光は「あーもう、恥ずかしいなあ」と言いながら
紅い顔のまま目線をそらしてしまった。

なんとと言うか、嬉しかった。言葉が見つからないほど。でも、そ
れをも越えて最初に思った事があった。

それは、光が、その、か、可愛い。とんでもなく。

正直胸のあたりが苦しくなるくらい、光が可愛くて愛おしい。

も、もしかすると私は自覚が無いだけでそのケがあるのだろうか？
ええい、そんな事はどうでもいい。

「え、ええええっ！」

光が驚いた声を上げる。

そう、何故なら気がつけば、思いつきり私が光に抱きついていていたから。

「ありがとう光っ！　そう言ってもらえて、私は、今、とても嬉しい」

「あ、ああ。そ、そそそそう？　それは、よかったによっっ！」

あ、慌てすぎて囁んでる。可愛いなあもうっ！

「ふふふふふ、やはり私は光に謝らなくてはいけないな。光ならこう言うふうに言ってくれるって少し考えれば解かる答えだったのに、ついつい臆病になってしまっていたんだ。すまない」

「え、ええええっ、いいよそんな事。私もユリちゃんが友達で凄く嬉しいよ、だからこの体勢はそのちよつとね、恥ずかしいかなーなんて」

「いいじゃないかいいいじゃないか。ああもうっ、やわらかくて気持ちいいなあ、光は！」

「ええええっ、ええええええええっ！？」

ふふふふふ、驚いてる驚いてる。そんなところも可愛いなあもう！

「はいはい。二人が仲が良いのは解かったけど、私も聞きたい事があるし、話を進めてもらえないかしら。私を置いて二人の世界を作られてると正直着いていけないんだけど」

む、先生か。今は良い所なのに。

まあ良いか、光の感触も堪能したし、話を続けないとな。

「解かりました先生。光も十分堪能したし、話を進めます」

「ええ、そうしてくれると助かるわ」

ふう、それでは続きを話すか。そう言うわけで説明のターン。

光もしっかりと聴くモードに入っている。と、言うわけで、説明再開。

「で、先生。質問はなんですか？」

「能力者には二つのタイプがあるって事までは解かったわ。でも、国がそれを把握しているといったけど、国としては能力者をどのように見ているの？」

「どの様にと言うのは、その、難しい問題ですね。そもそも能力者というのは国が作っている物ですから」

「えっ、そうなの？ そこら辺にいる超能力者みたいなものとは関係ないの？」

「先生、テレビに出ているああ言った者は基本的にインチキやトリックです。私たちの呼ぶ能力者というのは国が研究に研究を重ねて作り上げた者です。人間が使っている脳の領域がホンの一部分という話は知っていますよね？」

「え、ええ。良く聞く話よね」

「その脳の普段殆ど使っていない「ある部分」を使うようにする事で、そのちょっとした「ある部分」の脳の使用している容量の違いで人間は人並みはずれた力を手にしてしまうものなんです。その脳のある部分の回線を開いている者の事を能力者と呼ぶんです」

「でも、人工的に作るって、そんな事が……あ、それなら貴女も？」

「はい。私も一年前に父の命令で研究所に連れて行かれて能力者になったんですが、数週間に渡って入院状態になりながらの、ある薬物の投与と、あとはすでに居るハッカータイプの能力者による催眠術が主な方法でした」

「そんな事で、そんな簡単に能力者になれるの？ それだけの能力なんだから、副作用とかは……」

「私の場合は副作用はありませんでした。それに勿論適正があって、能力の強さはまちまちで、全く発現しない者もいます。それに、今でこそほぼ100パーセント副作用無しで能力者を作る行程を行えますが、初期は酷かったそうです。能力を得る確率も低く、また副作用としては精神の錯乱や廃人になるなどの副作用。最悪は発狂して自殺に走る者。あるいは脳が破壊され死亡する者などがおり、また初期に精製された全ての能力者は皆「理性が消えて欲望に正直になり、歯止めが効かない」と言う副作用があったそうです」

「ちょ、ちよっと、それってつまり完全な人体実験じゃない！」

「ええ。そうですね。だから、初期の殆どの能力者は国内外の死刑囚や重度の犯罪者などが使われていて、今でも嚴重に隔離されています」

「そ、そんな事って！」

「だからこそ、こう言った人権を無視した事実だからこそ、極秘の国家機密なんです。私は二人を信用して話しました。二人は、この事実を黙っていてくれますか……」

「う、そ、それは……」

と、黙っていた光が口を開いた。

「ユリちゃん。私は黙ってるよ」

「えええっ！ ちょ、ちよっと、片山さん！」

「だって、これ程の裏があるのに、私たちを信用して話してくれたんです。それに答えないわけにはいけないと思います」

「でも、片山さん、こんな倫理を無視した話を……」

「じゃあっ！ 先生は、ここでこの話を外に漏らしたとして、何か良い事が起きるんですか！ なにより、ユリちゃんは、ユリちゃんは何も悪くないんです。国のトップの人たち、仮にユリちゃんのお

父さんを含めた政治家たちが係わっていたとしても、ユリちゃんは命令とかに従って能力者になって、そして極秘の命令を破ってまでも私たちに話してくれたんです。その信頼を裏切るわけにはいきません」

「わ、解かったわよ。話さないわ、話さないわよ！ 約束だから仕方ないわよね。秘密は守るわ」

「二人とも、ありがとう。それでは話を続けます。私に課せられた使命は稀に起こる能力者による研究所の脱走。その脱走した能力者の捕獲または処理です」

「え、処理って、それってまさか……」

「はい。手に負えない場合は、殺せとの命令が」

と、少し震えて話しかけてくる光。

「ねえ、ユリちゃん、ユリちゃんは今までに処理を……その、能力者に人たちを殺した事が」

「う……。ああ、光に嘘はつけない。そうだ、私は今まで何人もの脱走した能力者を、その……ああ。そうだ。手にかけた」

と、今日初めて光がうろたえた表情で私を見て震える声で言った。

「だ、ダメだよ。間違ってるよそんなの。国の都合で人体実験してそれで都合が悪くなったら殺すなんて！」

「でも、命令だったんだ」

「命令だなんて、命令だからってユリちゃんは人を殺すの？ そんな、そんな、ユリちゃんがそんな……」

そこまで言うとうちは私を見て脅えたような、そんな表情をした。その表情を見た瞬間に胸が軋んだ。痛い。胸が、痛い。

光の視線に呼応するように起こる妙な感覚、初めての感覚、胸の中で痛みと共に何かのた打ち回るのを感じる。

「ユリちゃんが、人を、殺して……」

ああ、ショックを受けるのはわかる。

でも、お願いだから私をそんな目で見ないで。他の誰にどう見られてもいい。例え零児だろうとほかの誰だろうと、世界中の人が私を軽蔑してもいい。

でも、お願いだから、光だけは、そんな目で私を見ないで。私を恐れないで。私を軽蔑しないで。

「そんな、殺人だ、なんて、ユリちゃん……」

そこまで言って一步後ずさる光。

お願いだ、お願いだ頼む後生だから、そんな、私を、私を私を汚い物のように見ないで！

お願いだから私から離れないで、私を捨てないでっ！

何か感じた事の無いほどの感情の激流が胸を痛めて、そして胸に収まりきらなくなった感情が溢れて喉からせり上がって来るのを感じて、気づけば……。

「仕方なかったんだッ!!」

言葉となって形を持ち、そう叫んでいた。

「私だって……ッ、私だって、人なんか殺したくなかったッ!」
「ゆ、ユリちゃん……?」

そう、殺したかった事なんか無い。でも、誰かがやらなきゃいけなかった。

そうしてリアルに手に蘇る、初めての殺人の感覚。

今でも偶に夢に見て眠れなくなるその感触。

溢れ出す感情は止まる事が無く、人前では絶対見せないように、気づかれないように隠して、隠して隠して隠して、ずっと押し込めておいて表に出さないつもりだった言葉を紡いでいく。

「でも、仕方なかったんだッ！ ああ、今でも良く覚えている、初めて人を斬った感触を。命を奪うと言う事の、同族を、私たちと同じような重さの心を持った「人」を殺すと言う事の重さを。手に感触が残って何日も寝られなかった！ 感触が戻る度に、その風景を思い出す度に自分の汚さに泣いて、喉が擦り切れて血が出るまで吐いた！ 返り血の付いた身体が、血の臭いがいつまでも取れない気がして、風呂場で裸になる度に返り血の付いた場所の肌が擦り切れて肉が見えて血が出るまでこすり続けても匂いが取れない気がして、気が違いそうだった！」

そうして言うつもりの無かった、逃げの言葉を話す。

「でも、どうする事もできなかった。父さまは私の言葉になんか耳を貸すわけも無くて、そして目に入る現場は全て地獄だった。光は、光は知らないだろうっ！ 人智を超えた力を持った者が、欲望の、暗い欲望のままに動いた時にどんな惨状が起こるかをっ！」

気づけば視界がぐにやりと歪んでいる。

まともに物が見えない。

「無関係の、ただの人たちが、力のままに犯し、殺されるのを見てきたっ！ 何人も、何人もを楽しみのためだけに殺す奴を見てきた

っ！」

視界が歪んだ正体を探り、そして、なんとも単純な自分の状態に
ようやく気づく。ああ、そうか。

「奴らによって頭を乗っ取られて、心に乗っ取られて壊されて狂わ
されて、思いのままに痴態を演じ、そして殺されたり、殺し合いを
させられたりする無関係の人をいつも見てきたっ！」

私は、泣いているのか。

「いくら、その状態になったのが彼らのせいでは無いとは言え、欲
望のままに振る舞い、そして人を弄ぶ彼らは、悪だっ！」

ああ、激情しすぎて何故か頭の何処かが冷静に今の自分を感じて
いる。なんてアンバランス。

それにしても激昂して人前で叫びながら泣くなんて、我が事なが
ら、なんて情けない。

「だからっ、だからッ、私が、殺したっ！ 原因が誰に在るかを必
死に考えないようにしながらっ！」

それにしても、人前で泣くなんて、いつ以来だろうか。いつも夜
のベッドで一人で泣いていたけれど、人前ではポーカーフェイスを
貫いてきたつもりだ。

「そう、私が、殺したッ！ 躊躇いのせいで余計な被害者が増えな
いように、最初は手足を折って、それでも抵抗する者には速やかに
死を与えたッ！ 私がっ、この手でッ！」

そうして殆ど視界のない目で、両手を見る。その手は酷く汚く感じた。当たり前だ。人殺しの手なんだから。

それにしても、我ながら良くこれ程泣ける物だと驚く。涙は尽きる事が無い。

「そうして、その度に、一つの命を私が奪い、数人の命を救った！でも彼らにとっては、私は化け物だった。当然だ。彼らにとっての恐怖の象徴である能力者バケモノにそれを超える力を持って死をもたらし者が私だ。いつも、いつもいつもいつも私が現場を救おうとする度に彼らは私を死神のような物として見たっ！」

思い出す彼らの視線。何処においても、私は畏怖と恐怖の象徴で、理解された事は無い。

「何度も繰り返し返すたびにいつも心が折れそうだった！でも、事件は起こる。その度に現場を見つけ、惨劇が起きて、何とか止めたくて、そして殺したっ！そうだ、殺した、殺した、だから、だからだからだから私は人殺し！」

そう、所詮は私は人殺し。それは揺るがない事実。

「そう、私は殺人者、殺、殺、殺し、殺人、殺人。ああ、そうだ。やっぱり私は人殺しで、ああああああああっ！！」

「もう良いっ、もう良いよッ！」

そうして身体に走る衝撃。

何か暖かい物が身体を包んでくれるのを感じる、溢れた涙でぐにゃぐにゃに歪んで殆ど用を足さない視界の中。ぼやけて映るのは必死で私に抱きつく光の姿だった。

What can I say (後書き)

はー、頑張った。風邪でダウンしながらも我ながら頑張った。

今回はコメントもいただいちゃったりして、頑張ったんですけどどうしても書くのに時間がかかって、待っててくれた人、このペースでも精一杯でした。お待たせして本当にすみませんでした。

本当はまだ予定の半分しか書いてないんだけど、すでに一万三千文字いってるし、自分で言うのもなんだけど俺って、一話当たり結構長いよね？

短くすればもっとポンポン更新できるんだけどそれはなんか嫌なんだ。と言うわけで今回は何日もかけて気合い入れて書いたよ。

本編の解説。

今回は武田さんの話です。自分では武田さんと赤毛の男が気に入っているキャラなのでこの二人のときは非常に書いて楽しいです。ちなみに武田の父親の呼び方は基本的に人前では「父」だけど、一人のときは父様ですね。

あと、能力についての認識が特殊なのは仕様です。

ふあー、寝るわ。おやすみ。

あとさ、ふと思ったんだけど、もしかして毎回のこの後書きウザイ？

まあそう言われても辞めるつもりは無いけど。良いじゃんかさ。

読者の人へなんか言えるのコメントの返信以外ここだけなんかもん。俺のささやかな楽しみなんだ。

コレでも長くなりすぎないように気をつけてるんだぜ。長いけど。

5月14日追記

執筆状況のブログ作りました。細かくはそちらに書きます。

URLは

http://19320925.blog104.fc2.co
m/

です。携帯から見れるかはチェックしてませんが、よろしく願います。

What can I do

彼女と、初めて彼女と出会ったときのことは今でも良く覚えてい
る。

桜舞い散る入学式。そして初めて入った高校の教室。私の隣の、
窓際の席に、クラスメートとなる少女が座る。

その少女を見て最初に思った事は、ああ、なんて綺麗な娘なんだ
ろうと。

外からはざざあと言う風が吹いて、桜吹雪が舞う。そして、ひ
らりひらりと舞い散る桜の花びら。開いた窓から入ってきた花びら
が、几帳面にも纏められた彼女のポニーテールにふわりと付く。

外から差し込む春の光に照らされた窓際の彼女は、幻想的なまで
に美しかった。

何日も経って、それなりに友達も出来たけど意外なほど退屈で平
凡な日常。期待していた「中学時代との違い」なんて言う物はどこ
にも無くて、退屈な授業中、気づけば、私はいつも隣の綺麗な彼女
の顔を見ていた。

綺麗な顔。能面のように表情を変えることは無く、また、整い
ぎていと言う意味でもまるでお面をかぶっているような彼女。

数日経って、彼女を見て、観察していて気づいた事があった。彼
女は誰に話し掛けられても、相槌を打つ意外は口一つ開かず、表情
一つ変えなかった。

そんな彼女の横顔を見ていた私は、ふと思ったのだ。

彼女は、一体どんな顔で、どんな声で笑うのだろうか。

ああ、思えば、そう。

キツカケは、こんなにも単純な事。

幕間 1

「もう良いっ、もう良いよッ！」

そう言ってユリちゃんを宥める為に抱きつく。力の強いユリちゃんを抑えるのは大変だけど必死で抑える。

だってコレだけ私の事を思ってくれたユリちゃんに対して私ができることっていったらコレぐらいなんだから。

「もう良いからっ！」

そう言って抱きしめる。

そう。もう良いんだよ。私が悪かったから！

ショックを受けなかったと言ったら嘘になる。

ユリちゃんが非人道的な事に関わっていたって事もだけど、何よりも人を殺した事があるって言う事がショックだった。

やはりどんな理由があつたにせよ人が人を殺すと言うのは絶対にやってはいけない事だ。

殺人と言う行為だけは許せない、そう思ってきた。

でも……。

「いや、私は、私は人殺しなんだ。光に近づいて良いような人間じゃないんだっ！」

こんなユリちゃんを放っておけるわけが無い。今ユリちゃんの手を離したら、きっとその手を掴む事はもう二度と出来なくなってしまう。

そんな不安に突き動かされて、ただただ、ひたすら抱きしめる。今必要なのは、きつと言葉じゃ無い。彼女を繋ぎ止めておける力だ。そうして、ひたすらに思いが伝わる事を願って強く強く抱きしめる。

「ひ、光……わ、私は……」

「わかってる、良いから。大丈夫だから」

「光……許して、くれるのか……？」

「私には、ユリちゃんを裁いたり許したりする権利は無いよ」

「でも、私は光にささ……」

「解かってるよ。でもね、聞いて、ユリちゃん」

そうして泣き濡れたユリちゃんの顔をつかんで目と目を合わせる。ユリちゃんは私のことをこれだけ思ってくれるんだから、私もそれに答えるために、精一杯、私の気持ちを伝えなくちゃ。

そして、彼女の目を見つめて話す。

涙に濡れた彼女の顔は、恐らく普通の女生徒と違ってそれほど化粧もしていないのだろう。涙に濡れて、歪んだ表情をしてもなお綺麗だった。

「私には、一般的な倫理観しか無いし、ユリちゃんがどういう状況だったの正確にはわからないし、勿論ユリちゃんを許す権利も力も

無い」

「ひ、光……」

「でもね、私は思うんだ。勿論、何が遭ったのかは、私はきつと欠片しか理解できて無い。でも、思ったから」

「う……な、なにを」

「きつとね、それは、ユリちゃんは悪くない。そのときユリちゃんが誰かを守るために「ソレ」をしたんだとしたら、きつとそれは仕方なかった事なんだよ」

「光……」

「大丈夫、ユリちゃんは悪くない。私は、信じてる」

「ひっ、光、う、う、う、うっうわあああああぁんっ！」

泣き出したユリちゃんを胸に抱きしめる。熱い涙が制服の胸を濡らすけど、今離す訳には行かない。

「ひっ、ひっ、ひかつ、りっ、うっ、ぐっ、うぐっ、あ、ありっ、ありがとうっ、光っ！」

「大丈夫だから、信じてるから、ね？」

泣きやむ事の無いユリちゃんをただただ抱きしめる。

まるで、その涙は生まれてからの閉まっていた栓が取れたような、そんなまるで憑き物が落ちたかのような泣きっぷりだった。

そもそももっと早く気づいておくべきだったんだ。私と話しているときにユリちゃんがいつも笑顔だから、つい失念して、安心して、不用意に生活してしまっていた。

そう、彼女はいつも笑顔だった。私と話している時は。

じゃあ、私がユリちゃんを見つけて話しかける時、その話しかけ

るまでにユリちゃんはどんな顔をしていたか？

いや、大体ユリちゃんが私や先生以外と親しく話している事があっただろうか？

いや、それ以前に、そもそも始めて出会ったころのユリちゃんはどんな人間だったか。

それらのことを総合して考えればユリちゃんにとって自分がどんな存在だったかはおのずから解かった筈だ。

つまりは今回の件については、解かるはずだった事を分かれなかった私の責任も多分にある。

それに対する罪滅ぼしだと考えれば、自分の考え方を納得させるなんて宗旨替えですむならは安い物だと思う。

まあそれになにより、これだけの純粋で大きな好意を向けられて嬉しく無い人間は居ない。

ならば、それに答えるのも、当然の事だろうし、好意には出来るだけ応えるのが筋って物だ。

でも実はそんなご大層な事はことは建前で、本音はというと私もユリちゃんの事を好きだから、許したいと思ってしまった。

だって、ほら。

私とユリちゃんは、その、友達、なんだし。

幕間 2

「美しい友情……ね」

そうして泣き続ける武田さんとそれを抱きしめる片山さんが居る。その絵は何処から見てもこの上ない友情なのだろう。

まさに友情。今このまま二人を銅像にして美術館に飾ったとしたら題名は間違いなく「美しい友情」だろうし、百科事典に美しい友情という欄があれば間違いなく説明する絵の第一候補は目の前のこの図だろう。

それぐらいに二人の友情は普通の人が経験できないような「美しい友情」だと思う。

ちょうどあの赤毛の男が言っていたように

まさか自分があんな頭のいかれたような男の言葉に同意する日が来るとは。

「ん……でも」

そう、確か、最上君も同じことを言っていた気がする。

と言うことは、私の意見は最上君の意見と一致してるわけで、そこにあのジャンキーのような赤毛の男の事は一ミリたりとも関係しないわけだ。

うん。それならば悪く無い気もする。

まあ、関係ないことを考え居られるのもここら辺だろう。時間も有限なのだから。

というか、そろそろこの仲間はずれの空気がしんどくなったんだけど。

「二人とも、そろそろ良いかしら？」

「あ……せん、せい……？」

「そ、そう言えば先生が居たんですね」

「く、二人とも、教師を無視とはいいい度胸ね。で、二人はそれでオツケーかも知れないんだけど、私の方としては……」

「先生、その、ユリちゃんのこととは、これ以上責めないで……」

「あ、ええ。別にその気は無いわよ。誰かを守るためだったらそう言うこともあるわよ。武田さん、アナタの行為は別に恥ずべき事では無いと思うわよ。心配しなくても大丈夫よ」

「え、あ、はい。ありがとうございます」

うん、教師としてもそれは言い切れる。

「でもね、私が心配しているのはその事じゃないのよ。私が心配してるのはあなた自身のことよ。武田さん」

「私自身の……？」

幕間3

武田由里香 side

「ええ、そうやってたとえ秘密を守りながらも、誰かのために戦うのは立派な事よ。でも、アナタは一体何いつまでそんなことを続けるつもりなの？」

「いつまでってそれは……」

「だって、あなたは、望んで今の立場に居るわけじゃないんでしょ？」

「それは……そうですね」

「なんで、望んでいないのにそれをあなたがやるの？」

「それは……父様に言われたから、それにコレは、誰かがやらなきゃいけないことで」

「ふうん、そう。でも、アナタはそれでいいの？ そんなに苦しもうで、それでもそんなことを続けるつもりなの？」

「だって、だって……誰かがやらなくちゃ、だから私が、だから、なんで、なんで……」

なんで、そんなことを言うんですか先生。

正直、今ここでそんなことを問われたら挫けてしまいそうに……。

と、先生が今まで厳しそうに私を見ていた視線を和らげて言った。

「まあ、いいか。私がここで言っただうなる事でも無いし、詮無き事ね。でも、コレはあなたが決める事なんだからね。武田さん」

「は、はい」

「はあ、まあいいわ。それで、なんか空気ぶった切るみたいで申し訳ないんだけど、そっちの事情も一段落したし。最上君の事に話を戻していいかしら？」

「あ、はい。もう、大丈夫です。取り乱してすみませんでした」

「いいのよ。それで、一つ疑問なんだけど、さっきの話から推察すると、最上君も研究所で人体実験によって生まれた能力者で、脱走者かなんかなの？」

「いいえ、違います。そもそも脱走者には戸籍がありませんから学校になんかは通えませんよ」

「それじゃあ、あなたみたいに脱走者に対するハンターみたいな役割なの？」

「いえ、違います」

「へ？　じゃあ、何なの？」

「それが、その、私にもよく解からないんです。ただ、一つ解かっているのは零児は極めてイレギュラー的な存在なんです」

「？　　どういうこと？」

「研究所の方では、赤毛の男が逃げた事は把握していますし、奴がこの辺りに潜伏している事は報告が来ていました。でも零児のことは研究所の方も把握してませんし、最上零児なんて名前の能力者は作っていないという事だそうです」

「でも、それじゃあおかしいじゃない。能力者は研究所でなくては作れないんですよ？」

「ええ。でも、今の零児は覚えていないと思うんですが、前に零児と能力について話した事があるんですけど、その時に零児は自分の事を生まれつきの能力者だと言ってたんです」

「へ？　　でも、そんな訳無いんじゃない？」

「ええ。でも零児にしてもあの宗全とか言う男にしても、研究所で作られたとは思えないところがあるんです。具体的に言うと、この二人はあまりにも能力が強力すぎるんです」

「どう言う事？」

「今の技術で作れる能力者としての限界点は恐らく私や、あと、あの赤毛の男辺りです。それ以上に強力な力は脳だけでなく身体さえ破壊してしまいますから。でも、零児にしても、宗全とか言う男にしても、私たちを遥かに上回る能力を持っています。つまり、あんな能力者は普通では存在できるわけが無いんです」

それにもし、仮になんかの間違いで出来てしまったとしてもそんな強力な能力者が自我を保てる訳が無い。

「だから、やはりあの二人は研究所で作られた訳じゃないとしか言えないんです」

そう、だから零児はきっと、自身の言っていた通り生まれながら

の能力者。

そしてその謎を解くヒントは原典と言う言葉と、よく聞き取れなかったあの廊下での対話、きっとそこにあるんだろう。

「でも武田さん。それなら、例えばさ、最上君はその研究所の能力とは何の関係も無い本当に世界中でよくテレビに出たりなんかしてる、そう言った一般的な意味での「超能力者」なんじゃない？」

あ、先生はまだ納得いって無いんだ。うん、確かにそれは考えられる可能性。でもそれは……。

「はい。その筋も考えました。確かに能力者は力を使うと欲望に引きずられやすくなるという特性があるんですが、零児にはそれが外から見て取れません。だから悩んだ時期もあったんですが、でも今は確信しています。零児は研究所で作られる能力者と間違いなく同種の「能力者」です」

「何でそう言い切れるの？」

「それは、零児には能力者が能力を使ったときに現れる特徴が完全に現れているからです」

「そんな物があるの？」

「はい。少し零児の元に行って見ましょう」

そうして皆で零児のもとへ移動する。

血塗れの学生服を着たまま倒れている零児は汗ばんだ肌でしんどそうに、でも規則正しく呼吸している。

大きく動く胸にやや苦しげな表情。

正直、悩ましい姿だ。

「さて、今零児は、本当に能力者としてもこんな事をするのは規格

外でありえないぐらいの事です、自分の能力で体の損傷を直しています。まあそれも驚きなんですけど……」

そうして零児を指差して言う。

「つまり、今現在進行形で、零児は能力を使っているんです」
「ふーん」

あ、反応が薄い。すでに零児に魅入られたか。ここまで来るとまるで呪いだ。

「今の零児見て……どう思います？」

「その、何て言うか、凄く、色っぽいわ」

「そうでしょう。何て言うか、悩ましすぎてこう精神の根本に潜む雌の部分を刺激されるというか、そう言う感じしませんか？」

「ええ、そうね……って何言わせるのよ！」

あ、ちよつと先生面白い。

「まあ、つまりはそう言うことです。それこそが能力者の特性です」
「へ、どう言う事？」

「実は、能力者が能力を使っているときにはその能力の強さに応じた量のフェロモンに似た物質が分泌される事が確認されているんです。そして零児は今確認されてる中でも最強クラスの能力者です。コレだけの能力を使った結果として今、零児はこの空間を侵食するほどのむせ返るような色気を放っているわけです」

「そ、そうなんだ」

「ええ、この一帯はもう零児の空気になっているので、正直酔いそうになります」

「そうね」

「はい」

そう、思えば初めて零児と竹刀を合わせた時から異常だった。
あの時零児はやはり能力を使っていた。

だからその後、零児と顔が近づいた時、整ってはいるが特別な美
形とまでは言えないその顔に妙にときめいてしまったんだ。

初めてのことから慌ててしまったけど、早い話があの時私は零
児の能力に当てられていたわけだ。

変だと思った、逢ったばかりの男にトキメクなんて事がありえる
はずは無いと思ったんだ。

理由がわかって少し安心。

う、でも、なんだか、今も吸っているこの空気は危ない。あまり
長く吸うと、何だか離れられなくなりそうで……。

「あ、そう言えば……」

「どうしたんですか、先生？」

「あの時はだから……」

「なにがですか？」

「あ、いや、ちょっとね。以前怪我した最上君を家に運び込んだこ
とがあったんだけどね。その時に怪我してたのが次の日には怪我が
何故か消えてたのよ。その時も能力を使っていたのね。道理で最上
君を見てると妙にムラムラしてきて焦ったの覚えてるもん。ホント
手を出さないようにするのに必死だったわ」

「よく一晚耐え切れましたね。先生」

「ええ、コレでも教師ですから」

「流石ですね」

「ええ」

「ところで、いつまでこうやって零児を見ているつもりなんですか

？」

「武田さんこそ」

「う、そう言えば」

拙い、私ともあろうものが、魅入られてしまったのだろうか。

能力者同士には、能力に対する抵抗があるはずなんだけど、空気に対しては抵抗できないんだろうか。

そんなどこでもいい事を考えながらつつい零児を見てしまう。

その、血に染まった学生服。整った顔、血に濡れた肌に浮かぶ玉のような汗。苦しげな表情。安定して動く胸。

そして何よりむせ返るほどの色気。

その全てが視線を釘づけにする要素を持っている。目を離すことができない。

「ま、まあいいじゃないですか先生、まだ零児も気絶してるんだし」

「ええ、そうよね。見ているだけだもんね。手を出してるわけじゃないんだから教師としても全然オツケーよね」

「ええ、問題無しです」

「そうね」

「……」

「……」

そうして気絶している男をひたすら見つめると言う異常な時間が静かに過ぎる。

誰も微動だにしない世界。仕方が無い。私たちはもう魅入られてしまったんだから。

じゅるり

「って、冷静にしてる場合じゃないぞ私、何トリップしてるんだ！
あと誰、今ヨダレすすったの！？」

「ごめん、ユリちゃん。私」

「ひ、光っ！？」

「だって、最上君見てたら確かに凄い色気で、あまりに美味しそう
でついヨダレ出ちゃった」

「ちよっとその女子高生！ 美味しそうって、なんてことを言う。
そんなの光のキャラじゃない！」

「だってえ……」

「ええ、片山さん、気持ちは解かるわ。この最上君の姿見ると正
直……濡れるわね」

「だ、ダメです先生、そんなこと言っちゃ！ エッチなのはいいけな
いと思います！」

「あら、武田さん、そんなこと言うの？ ねえ、素直にならない？」

「な、何を……」

「ちよっとだけなら、手を出しても良いと思わない？」

「だ、ダメですよ先生！」

「えーっ、私は賛成だなー」

「ひ、光っ、ダメダメダメ！」

大体光はそんなキャラじゃない！

「ええーいいじゃない。こんなふうは無防備に誘ってる最上君が悪
いんだし、少し摘まんじゃいましょうよ」

「うわっ、先生が親父になった。ダメです先生！」

しかし二人はすでに、まるで酔っ払いのように赤い頬とポーツとした表情と、焦点の合って無い目でこちらを見ている。

ええい、零児の空気に当てられたか。

ダメだこいつら。早く何とかしないと……。

「冷静になってください。倫理的に考えてそんなことダメに……」

「そんな事言っていないで……ほら、武田さんももう一度、最上君を見みなさいよ」

「零児を……」

そうして無理やり顔を掴まれて零児のほうを向かされる。

整った顔。特別な美形ではないが非常に好ましい。

血と汗に濡れた肌。とても綺麗だ。

血が付きベト付いた髪はいつものサラサラした感じとは違い固まっ
っていて、コレはこれでいい。

規則的に動く胸、バランスよく引き締まった魅力的な身体、苦し
げな表情を浮かべる好ましい顔。

むせ返る程のフェロモンの香気に包まれたこの空気の中に居る
零児。

この身体を好きなように出来るのならばどんなにか……。

そうして気がつけば私は零児の服に手を伸ばしていた……。

って、何やってるんだ私は！

そして、その私の所業をニヤニヤと見つめる女子高生と女教師。
拙い……。

「おや、おやおや、武田さん、その手は何かな？」

「こ、コレはですね、コレはですよ。アレですよ。零児も苦しそうだから学生服とカッターシャツのボタンを緩めてあげようですね」
「ふうん、じゃあ早くすれば？ 第二ボタンぐらいまでで止められるのなら」

「う、うん、やります、や、やりますよ？」

落ち着け私。ただボタンを外すだけだ。第二ボタンまでだけ外すだけだ。何も難しくない。

違うか？ 違う。よし。

そうして零児の制服に手をかける。気づけば息がハアハアと荒くなっている。

なんてこと、一つずつボタンを外していくと言う行為がこんなに淫靡で、こんなに興奮するだなんて。

って、違う。コレは違う。普通男女逆だ。何で私がハアハアしくちやなんないんだ！

そうして学生服の第二ボタンまで、危なく第三ボタンまで手が伸びそうになった瞬間に……。

「ん、ううん……。あ、ただ……。か」

零児と目が合った。

1

目覚めろという声が聞こえたんだ。

目覚めよと呼ぶ声あり、というコールがある。

ああ、そうだ、もう目覚めろ。能力と睡眠による短期の肉体修復は終わった。

完治には時間がかかるがとりあえずこれで活動には支障は無い。

だから早く目覚めろ。もう睡眠は十分なはずだ。だから目覚めろ。いや、マジで。そろそろ目覚めないと拙いんだよ。主に俺の貞操

が。

汚泥の底からサルベージされるような感覚。徐々に闇は薄くなり意識が覚醒する。

目がなかなか開かない。目やにか何かで固まっているのだろうか。いや、血か。

そうしてベト付いた目蓋を開く。徐々にクリアになって行こうとするぼやけた視界。

そしてそのピントが合ったときに目の前に居た者とは……。

「ん、ううん……。あ、ただ……か」

そう、何故かまっかな顔をして俺の制服に手をかけている武田の姿だった。

「あ、あああ……零児、起きて……？」

「ああ、おはよう。武田」

と、何故か武田は俺から手を放し脅えたような顔で慌てて後ろに

下がった。

うん、それはもうズゾゾゾゾーとでも音がしそうなくらいの凄
い勢いで。

「いや、コレは、コレは違うんだあつ！ 零児、コレは違うんだぞ
！？」

「はてな、なにがさ？」

「いや、そのだな、コレは、そう、零児がしんどそうにしてたから
少し学生服の首元を緩めてやっていただけなんだぞ？ そうだ、う
ん、他意はない！」

「ん、何のこと……って、ああ、これか」

そうして胸元を見ると学生服の第二ボタンまで開けてある。

まあ、いいか、ついでに面倒だから学生服のボタンを全て空けて
前をはだけてから離す。

「ああ、ボタン空けといてくれたんだな。ありがとな。お前、良い
奴だな」

「あ、ああ、いや、なんでもないぞこんな事。ちよつとした親切心
だからな。……ううう、罪悪感が」

「ん、なんか言ったか？」

「あつ、いやっ、なんでも無いぞなんでも無い。気にするな零児」
「ふーん」

「チッ、惜しい」

む、今なんか舌打ちと共に先生の声が聞こえたような気が。
そして音の方を見ると涼しい顔で先生と片山さんが立っていた。

「先生、今舌打ちしませんでしたか？」

「ん、何のこと？ 私は何もして無いけど」

「え？ でも確かに……」

「幻聴でも聞いたんじゃないかしら？」

「そ、そうですかね」

まあいいか、先生がそう言うならば多分気のせいだったんだろう。
と、さっきまで黙っていた片山さんが口を開いた。

「ところでさ、身体の方はもういいの？」

「ああ、もう多分……」

そう言って軽く身体を動かしてストレッチを試してみる。

異常は……ほぼ無しだな。

「おう、まだ痛みが引いたわけじゃないが大体の活動には支障ない
ぜ」

「そ、そうなんだ。凄いんだね。それってさ、さっきユリちゃんか
ら聞いたんだけど、それって最上君が持ってる「能力」とか言うの
で治したんでしょう？」

「あ、武田、言っちゃったのか……」

「あ、零児……すまない。零児の事なのに勝手に話してしまっ
てもっ」

「ああ、解かってるって。この状況じゃ俺たちには当然のごとく説
明責任があるしな。本当の事を話さないと説明にもならんだろう。
まあ、本音を言えば知られたくはなかったが。仕方ないさ」

ホント、俺が能力者だということを知っているのは今までは今の
両親と姉さんだけだったからな。

一応カテゴリーでいう「他人」と言うことになっている人に知られたのは初めてだから、正直ショックじゃないといえば嘘になるが。

ちなみに隆貴には話しているが、奴が馬鹿だったことと、後一つ、奴のトンでもない体質のせいで正確に伝わらなかったせいで奴はまだ俺が能力者だということを理解していない。

まあその話はどうでもいいか。

「その、零児。ゆ、許してくれるのか？」

「ん、ああ、武田か。許すも何も、仕方ねえじゃん。お前は最善の行動をしたと思うよ」

「そうか、そう言ってくれると助かる」

「いいって。気にするな。それよりも……」

そこまで言って先生と片山さんのほうへ振り返る。

そう、俺が異能であるということを知られるという事は、つまりは、一つの覚悟を決めるという事だ。

それはと言うと……。

「二人とも、俺がどういう能力者であるかは武田から聞いたんだよな」

「うん」

「ええ」

「それじゃあ正直に答えて欲しいんだけど、二人とも、俺のことが怖いかな？」

「へ？」

「ど、どうして？」

「どうしても何も、解かっていると思うが、俺は今日学校に来た狂った二人組みたいなのと同種の人間なんだよ。その気になれば一瞬で何十人と言う人間を殺す事も可能だし、その気になれば今ここに居る三人を皆殺しにする事だって可能だ」

少しキツく、しかし真実である事を話す。そう、元来能力者とはそう言った存在だ。

「でも、そ、そんなこと考えてるわけじゃないんでしょ？」

「ああ、そんなことは思うはずが無いさ。少なくとも今現在ではな。でも、俺にはそれが可能な力がある。つまり俺って言う存在ははいつでも人を殺せる猛獣か、あるいは、いつでも人を殺せるように銃を構えているような、そんな状態な人間なんだよ。人って言う生き物は結構繊細だ。正直近くにいっても自分を殺せる存在が居るって言う状態は落ち着かないだろ？」

と、二人は冷たい目でこちらを睨んできた。

そして先生が口を開く。

「ふーん、そう言うこと言うんだ最上君は。じゃあ、もしも私たちが最上君が近くに居るようじゃいつ殺されるか解からなくて落ち着かないから怖くて嫌だって言ったらどうするつもりなの？」

「ああ、その時は大人しく消えるさ。二人の前には二度と姿を現さない。巻き込んだのはこっちだし、責任は取るさ。約束は守る」

「へー、ずいぶんつまらない事言う人なのね、最上君って」

「どういう意味だよ。はぐらかさないで正直に言ってくれ。言葉に従うから」

そう、正直に言ってもらえないと困る。

二人とはこの所一緒に過ごす時間も長くて、そしてその時間はとても楽しくて、俺にとっては先生をそう言うのは少し変な気がするけれど、でも二人とも掛け替えの無い友達だと思ってしまったんだ。

そう思った人間に遭う度に脅えられてしまったとしたら、きっと俺はそれに耐えられない。

ならば、そうなる前に別れてしまった方が、ずっと楽だ。だから、言った。

そして返事を待つ。

二人は相変わらず無言のまま冷たい目でこちらを睨んでくる。そして、誰も口を開かずに、無音のまま緊迫した時間だけが過ぎる。

と、突然先生は組んでいた手をといて頭に当ててふーと大きくため息を吐いた。

「ど、どうするんです先生、って言うかなんですかそのため息は！」
「ちょっとね、最上君の馬鹿さ加減に呆れて頭痛がしてきただけだから」

「な、なんでさ！」

「いやね、最上君はテストの点を見るたびに馬鹿だ馬鹿だとは思っていたけどまさかここまでだったとはね……」

何それ良く解かんないけどすっげえムカつく！

「話を逸らさないでくださいよ先生！ 大体テストの点関係無いじゃないですか！」

「あるわよ。最上君が馬鹿だって話なんだから」

「だからなんですそれ！ 大体なんで俺が馬鹿だってことになるんですかつ！」

「だってねえ、まず自分が馬鹿だってことに気づいて無いし、はあー」

うわ何そのため息！

「そんな事言っていないでちゃんと説明してくださいよっ！」

「はあ、それじゃあ仕方ないわね。お馬鹿な最上君のために先生が説明してあげるわ」

「ぐっ……わかりました、早く説明してくださいよ」

「ふふ、いいわよ。まずね、あなたが言ってる自分にはいつでも人を殺せる力があるって言ってる事、それは確かに事実よ。貴方は普通の人間は絶対使えない稀有な力を持っているわ。でもね、力の有無なんて重要じゃないのよ。人間なんて脆い物。実際はそんなご大層な能力なんて使わなくても滑って転んで頭打っただけで死んだりするし、或いは鈍器やバールのような物で頭を殴ったりすれば、力が無い人間でも人を殺すのは可能よ。ね、片山さん？」

「そうですね。私が良く見る二時間物のサスペンスドラマでも大抵犯人は非力な女性であることが多いですもん。そして最後は何故か崖だし」

う、片山さん普段何見てるんだよ。

「ま、まあ、崖は関係ないけどそう言うこと。つまり、どんな力の弱い人間でも明確な殺意と目的を持ってすれば誰かを殺すなんてことは容易い事なのよ。まあ、多くの場合はその後捕まるかどうかは重要になってしまっただけけど、でもね、捕まるかどうかは被害者本人には関係の無いことだし、重要なのは自分が死ぬかどうかですよ？

そして実際問題として本人が目的と殺意を持って捨て身にな

りさえすれば大抵の人間を殺す事なんて難しく無いわ」

「それはそうですけど、でもっ！」

「デモもストも無いわ。つまりはそう言うこと。だからね、どんな力を弱い人間でも私たちに対して殺意を持っている人間が居たとしたらそれは回避することが困難なほどに危険な事だし、その逆にいくら貴方が強力な能力者でも、そこに私たちに対する悪意が無い限り何の危険も無い訳。わかる？」

「そ、それは、言ってる事はわかりますよ。でも、二人はそれで良いんですか？」

「馬鹿ねえ。いいに決まってるじゃない、ねえ、片山さん？」

「はい、それはもう全然平気ですよ。最初は最上君の言った事の馬鹿さ加減についついイラツと来ちゃいましたけどね」

くっ、二人で俺を馬鹿馬鹿言いやがって……。

「それにね……」

と、突然そう言いながら先生が手を伸ばして俺の頬を撫でてきた。

「な、なな何です……」

「ふふ、最上君は私の可愛い生徒じゃない。確かに教師暦は短いけど、でも私も列記とした教師よ。そして教師は生徒を信用する物……」

そのまま頬をなで続けられるも何故か動けない。

「大丈夫よ……信じてるから。ね」

「そうだよ。私を助けてくれた最上君を、私は信じる」

おお、片山さんか。すこしびっくり。でも……。

「本当に、本当に良いの？」

ああ、これは……

「ふふ。勿論よ、そう言ってるでしょ？」

「うん、大丈夫だから」

本当に……

「あ、ああ、ありがとう。二人とも、ありがとう」

嬉しい事だ。

だから心からお礼を言った。今きつと俺の頬は少し赤い。でも、それくらい嬉しい。

信じてもらえるという事は、それだけでとっても素晴らしい事なんだ。

だから、俺もその信頼に応えないと……。

「う、ううう、今度は私が仲間外れか。何だこの疎外感は……」

あ、今何か聞こえたような。

「ええい、話は纏まったか。取りあえず大事な話があるんだ聞いてくれ」

うおっ、武田か。びっくり。

「ちっ、武田さん、このタイミングで牽制とは……やるわね！」

「邪推はやめてください先生。私は光だけ一筋、浮気はしません」

なんのこっちゃ。

「ってそんなことはどうでも良いんだ！ 零児、話がある」

「うい、なんだい？」

「取りあえず今後の行動を決めたいんだが、どうすればいいと思う？」

「うーん、そうだな。取りあえず先生と片山さんは部外者だし一般人だ。きっとあの二人も気にしていないし、家に帰って今後も普通に生活をしていいと思うんだが……由里香、君の意見を聞こうツツ……！」

「ううむ、まあ……そうだな。やや楽観的過ぎる気もするが奴らもそれほど暇でも無いだろうし大丈夫じゃないかと思う。問題は……」
「ああ、問題は俺たちだな。まず俺とお前の素性は完全に割れてる
と考えていいだろう。今逢ったら勝ち目は無い」

「ううむ、そうだな」

まあ、宗全には今どこるか未来永劫勝てる気がしないんだが……。

「そうなると逢わないように生活しなければならない。家も割れてるだろうからダメ。学校に通うのも今日みたいな可能性があるからNGか。学校は休学だ。と、なると残された方法は……」

「方法は……？」

「潜伏か、逃避行だな。由里香、君の意見を聞こうツツ……！」

「さっきから気になってるんだが何だその言い回しは。変だぞ。取りあえず……零児は能力を隠すことが出来るんだよな」

「ああ、その間はこちらからも敵の位置を探れないがな。でもこれでもハッカータイプだ。能力を開けば敵の位置はかなり遠くからで

も正確にわかるぞ。でも俺は基本的に能力を隠して生活してるけどな。まあ、結果としては潜伏でも逃避でもどちらでもOKだ。まあ安全策を取れば逃避行だな」

「私は……能力の感知が嗅覚と言う頼りない物頼りだから、あまり感知はうまく無いんだ」

「へえ、そうなんだ。嗅覚とは珍しいなそれ」

「まあな、私以外では例が無いらしいし。それは良いんだが、その上私は基本的に能力を隠すことは出来ない。だからきつと強力なハッカータイプの宗全との位置の探りあいになったら私が感知する前に場所を特定されてしまうだろう。以上のことから、私は……潜伏は無理だ。リスクが大きすぎる」

「そうだな。じゃ結局二人とも逃避行か」

「そうなるな」

「ふーん。それじゃあさ、一緒に来るか？」

「へ、私が？」

「おう、二人で逃避行って、一人より楽しそうだろう？」

「わ、私が、零児と、二人で……」

「おう、だって一人で居るより二人の方が戦力も多いし安全だろう？」

「そう、だな。それなら……」

「「ちょっと待ったーッ！」」

「うおっ！」

「びっくり！」

「先生高校生の異性二人で逃避行なんていうのはちょっと許せないかなーむしろ教育的指導をしなくちゃなーとか少し考えちゃうよ！」

「そうだよUriちゃん。学校休学は仕方ないにしても、二人で逃避行は少し早いんじゃないかなーそれは普通不倫サラリーマンの辿る道だよー」

なんちゅう例えだいそれ。

「それにね、最上君。高校生二人で逃避行なんて簡単に言うけど、お金もかかるのよ。どうするつもりなのよ？」

「あ、金ですか？ 金なら一億くらいあるんで大丈夫だと……」

「へ……嘘でしょ？」

「はい、嘘です。本当は三億です」

「へ……………」

「冗談です、マジに取らないください。でもまあ、金に対しては心配ないんですけど」

「そ、そうなんだ。なんか、よく、わからないけど、あは、あはは……」

まあ、本当はいくら在るんだろうな。

最上の宗家が代々の仕事で稼いだ報酬の金塊をほんの一部だが現金化しただけで一生遊んで暮らせる金が入ったからな。

全部でいくらあるかは想像が付かん

しかしそれだけの金がありながら普通の暮らしをしてるのは学生は慎ましくあるべきだからだー。

「でも、お金の心配が無いにしても、そのなんか、他に、ねえ、片山さん」

「そ、そうだよ。無理に逃避しないで、例えば二人で協力して敵をやっつけて警察に突き出すとかじゃダメなの？」

「それは無理」

「光、それは無理だ」

「あ、やっぱり……あの黒い人そんなに強いんだ」

「ああ、無茶苦茶だ」

そう言いながら武田は首の辺りをさすった。首にははつきりと手形が付いていた。

あれは……俺が意識を失ってる間に宗全にやられたのか。

「でも、隙を狙ったりすればさ……」

「そいつは無理だなあ。奴に隙なんて無い。精神干渉でこちらの動きを重くしながら自分は肉体を強化しながら戦う事だってできるんだぞ？ バケモンだよアレは」

「そうだな、私が戦ったときに感じた事は、とにかく動きに無駄が無いって事だ。あんな動きに私は対応できない」

「確かにそうだ。実は奴は精神干渉能力は超強力だが、肉体強化は後付だけあって純粋なスピードは武田ほどでも無いし、俺の一番速く動けるときほどでもない。しかし奴の使う物部の体術が厄介だ。動きが読めない。気がつけば吹き飛ばされている。勝つ方法があるとするば一人が注意を引いている間にもう一人が能力の届かない遠距離からの狙撃する。それくらいしかないな」

そう、奴が父さんに使った方法。

しかし奴に狙撃が成功するところがイメージできない。戦っている最中の様な激しい動きの人間に当てられる腕のスナイパーなんてそうそう居るものでもないだろうし。

「まあ、今の俺たちじゃ無理って事だ」

「それじゃあ、やっぱり二人で逃げるの？」

「ああ、武田がOKくれればそうなるな。二人は危険だし、もう帰った方がいい」

「でも、でもっ、ねえ、先生」

「う、そうだ、ご両親にはなんて説明をするのよっ！」

「私の方は親の命令で能力者になったので大抵のことは大丈夫だと思えます」

「俺の今の親は、まあ理解ある（能力について知ってる）両親だし大丈夫かな」

「う、うう……」

「そ、そんな、二人に会えなくなるなんて……」

「死に別れじゃない。いつか会えるさ。で、どうする武田。出来るだけ出発は速い方が……」

と、その時。

この空間に場違いな電子音が響き渡った。

2

ピ。ピ。ピ。ピッ、ピ。ピ。ピ。ピッ！

うう、この何の特徴も無い着メロは俺のだな。

急の事に静かになる皆を尻目に携帯を見る。着信しているのは知らない番号だった。

取りあえず出る事にすると……。

「おお最上零児。まだ生きているのか」

最も聞きたくない低い声が聞こえてきた。

「この声っ、宗全！」

俺の宗全という言葉に反応し皆が驚いた顔でこちらを見る。
が、それどころではない。

「おお、良く解かったな。耳はいいのか最上零児」

「うるせえ、俺をフルネームで呼ぶのはお前ぐらいたんだよ！」

こいつの声は癪に障る。こいつの声を聞いているとイライラする。
ダメだ、冷静になれ。どんな状況で、なぜ俺に電話をかけたかを
考えろ。

「ふむ、そうか。なかなかの洞察力だ」

「うるせえ、おめえに褒められても塵ほども嬉しくねえよ」

「おお、随分威勢が良いな。失血死しなかった所かもう回復してい
るとは、相変わらず生き汚い。化け物だなお前は」

「お前がいうな」

「しかしまあ無事で何よりだ」

「チッ、何処までも頭に来る奴だぜ。で、何の用だよ」

「ふむ、話があるのでな。今夜八時。耳ヶ崎第三埠頭に来い。貨物
船とかは無い埠頭だ。警備も無いしお前ならばすぐに侵入できるだ
ろう」

「は、頭おかしいんじゃないの？ 行くわけねーだろ、ヴォケが。
死にたくねーんだよ。俺はな」

だめだ、感情が抑えられない。冷静に、なれない。

「そうか。だがこれは頼んで居るわけではない。命令しているのだ。大人しく来い。時間は守れ」

「は、ハハハハ。お前面白いジョーク言うのな。俺がお前の命令なんか聞くわけねーじゃん。いっぺん脳を洗濯して貰って考え直せよ。このクソドブ野郎が！」

「ふ、随分と口が悪いのだな貴様は」

「うるせえよ。この余裕ぶっこき野郎が。うぜえんだよ。俺は忙し
いから切るぜ。もうかけてくるな」

「ほう、私は切ってもいいのだから……」

「じゃあ切るぜ。死ね」

「ふむ……最上鏡子、二十歳、か」

「……………っ！」

瞬間、血液が逆流した。

「誕生日、七月十三日。血液型、B型。星之山大学3年経済学部所属か」

「き、貴様……鏡子姉さんに……」

そんなはずは、そんなはずは無い……。

「今日の服装はかなりローライズのジーンズに上はシャツの上に薄い青のカーディガンを羽織っているな」

「おい、鏡子姉さんに何したんだよ……答えろよ！」

でも、この状況は、そうとしか思えないで……。

「ふむ、下着は黒のレースだったそうだ」

その瞬間、頭の中で何かが切れる音がした。

「答えてるって言ってるんだろがこのクソ変態中年親父がッ!!」

「怒るな。少し強引に同行願っただけだ。あと下着を見たのは赤毛の奴だ。私は聞いただけで、見ては居ない」

「うるせえふざけやがってっ！ 殺してやるっ、絶対殺してやるッ!!」

許せない。許せない許せない許せない許せない許せないッ!!
身内に手を出した奴は何人たりとも生かしておけないっ！

「ほう、私を殺すというか。相変わらずできない事を言うのだな最上零児」

「黙れっ、楽に死ぬると思うな貴様っ！」

「安心しろ。眠っているだけだ。まだ手は出してない。だから言っただろう。さっきのは命令だと」

「グッ、キサマッ！」

「ふむ、時間通りに来なければ、最上鏡子がどうなるかは……解かっているな？」

「グッ、ぐぐぐぐぎぎぎぎいっ！ 解かった。解かったぜ。八時か、八時に耳ヶ崎第三埠頭に行けばいいのかっ！」

「ああ」

「クソッ。行ってやるよ、行けばいいんだろっ！」

「そうだ」

「テメエ、首を洗って待ってやがれっ！」

「随分と古い言い回しを使うのだな。最上零児」

「黙れ。地獄に落ちろ、物部宗全！」

そこまで言って叩き付けるように通話停止のボタンを切る。

「ハア、ハア、ハア、ハア」

気がつけば息が荒い。許せない。

身内に手を出した。俺の身内に手を出したっ！

「ハア、ハア、ハア、ハア」

許せない、万死を持って償わせてやる。

「ハア、ハア、はあ、はあ」

乱れた息を、何とか戻す。と……。

「零児……」

武田が心配そうな、そしてどこか悲しそうな顔をして俺を覗き込んできた。

「ハッ、はあ、はあ。ふう……。武田、すまない。逃避行は無しだ」
「そうか」

少し落ち着けた身体で、何とか話す。

口の中で血の味がする。歯をかみ締めすぎて口の中で出血したのか。

「すまないな。話だけになってしまっ」

「ああ、それは良いんだが、やはり行くのか。零児」

「ああ、行く。行って……」

ポケットに手をつ突っ込む。

ポケットの中では折りたたみのナイフが固い感触を持って、俺にその存在感を示している。

「行って、今夜、決着を着ける！」

そう言って、倉庫の窓の外を見た。

窓の外は、血のように紅い夕暮れが広がっていた。

もう、夜が、近い。

What can I do (後書き)

時間かかったね今回は。

デモなんか納得いかない部分もあるけど推敲何回もしてるけど納得
いなくてキリ無いのでそろそろ投稿します。

あと、この小説のために作ったブログが本気で役に立ってなくて泣
ける。

いちおうもういっかいURL 張っとくね！。

携帯からは見れないっばいけど。

http://19320925.blog104.fc2.com/

Harbor Lights

1

冷静になれ。冷静になるんだ。今ここで俺が激昂しても何の解決にもならない。

冷静にならないと勝てる戦いも勝てなくなる。ましてやこれから俺が行うのは切れそうな細い糸の上で行う綱渡りのような物。

冷静に、成功するイメージだけを持続けろ。一瞬の気の緩みでもあれば、負ける。

「なあ、零児、行くと行ったが、当たり前だけど奴らは唯では返してくれないだろう。勝算はあるのか？」

「ん、あ、ああ、武田か。勝算か、勝算は……」

無くは無いいったところか。口に出すのは憚られる事だが、俺は、奴を再起不能にするつもりも行動不能にするつもりも無い。

これから俺が行うことは唯一つ。奴を殺すことだ。だから、口に出して武田達に伝えるのは憚られるんだよな。

「勝算は、無くは無いが、今は教えるわけにはいかない」

「何故だ？」

「それは、言えない」

そう、言う訳にはいかない。俺は彼女たちに軽蔑されたくは無いい。それが一番の理由だ。

それに、何より成功する確率はあまりにも低いし、成功したとしても俺の命の保障は出来ない。

だから、彼女たちにそんなところを見せるわけにはいかないし、これ以上心配かける訳にもいかないだろう。

俺が、ここで能力者への禍根を絶つつもりだから、できれば、彼女たちには今回の事は忘れて、普通に生きて欲しい。そんなことだけを考えている。

そのために必要な行為は何か。ここで宗全を倒してしまう事。しかし奴は俺より強い。

ならば必要な方法は何か。それは結構単純な事。

自分より格上の能力者を倒すには一つの力が敵を押さえている間にもう一つの力が敵に攻撃する必要がある。

そして、そのもう一つの力が敵を攻撃する為に敵に隙を作らなくちゃならない。

方法は……無くはない。

まず、能力を使って右腕の感覚を全身から隔離し、俺が右腕に命令を送ったときに全身の状態と関係なく自動的にある行動を起こすという状態にセットしておく。

そして、奴との戦いの時には右手にナイフを持ちながら、左手と足だけを使って戦い、何とか時間を稼ぐ。

奴が痺れを切らして、俺に対して渾身の一撃を放とうとするその瞬間を待つ。

そして、奴が俺に対して必殺の一撃を放つとき、俺は敢えてその一撃を受ける。

俺の体が完全に破壊されて、奴の注意が俺の破壊され行く身体へ

と向いて油断をするその一瞬を待つ。

その時に痛覚感覚神経全てを全身から切り離しておいたナイフを持った右手に命令を送って、「その行動」を、起こさせる。

その行動とは、ナイフを投げると言う、それだけのシンプルな行動だ。身体がどんな状態になっていようと、奴の眉間にナイフを投げるように右手には前もって指示を入れておく。

上手くいけば、ナイフは油断している奴の頭に直撃し、頭蓋骨を突き破って脳を破壊することが出来るはずだ。

能力の根源は脳にある。つまり、どんな能力者でも脳さえ破壊してしまえば確実に死に至ると言うわけだ。

もういつそのこと右手にミギーでも住んでいてくれたら手っ取り早いんだがな。まあ能力で擬似的その状態を作る事にする。

一つの体に二つの意思。そうすれば同時に二つの攻撃手段を生む事ができる。

まあ、つまり、早い話が作戦が上手くいっても相打ち。失敗すれば犬死に。そう言う訳だ。

でもそれは仕方が無いこと。奴が父さんと戦ったときもそうだったんだ。奴は自分より格上である父さんを倒すために、自分は四つなり二つの攻撃手段を同時に進行させた。

だけど今回の戦いは俺一人で行わなければならない。ならば、注意を逸らすためには自分の命ぐらいの物を賭け金として用意しなくては敵は食いつかないだろう。

だって、用意する物が大きければ大きいだけ、敵は乗りやすくなる。

だから賭けようじゃないか、この命を。

いつの日か言っていたよな宗全。

一対一では最強とはいっても、戦略が入ってきた以上、そこに最強なんて物は存在しないって。

その言葉、この身を持って証明させてもらうことにするぜ。

それに、これで彼女たち三人をしがらみから放つ事ができて、姉さんの命を救う事ができるなら、俺の命なんていう賭け金、安すぎるくらいだ。

そう、覚悟を決めてポケットの中のナイフを握りなোস。

「零児……」

「あ、武田。なんだ？」

「ん、いや、その、なんだ。勝てる……んだよな？」

「ああ、多分な」

俺の生死に関わらず奴を倒す事を勝利と呼ぶならば、作戦さえ巧く運べば俺は勝てるだろう。

「ああ、きっと、勝てるさ」

「そうか。それならいい」

だがそう言いながらも何故か武田の表情は暗く沈んでいる。

「ん、武田、どうかした？」

「ああ、別に、なんでもないんだ。なんでも……それよりも、良いのか、そろそろ時間だぞ？」

「ああ、もうこんな時間か。じゃあ、行ってくるぜ」

「ああ、行こうか」

ん？　なんか今会話の流れが変だったような気が……いや、まあいいか。

「それじゃあな。俺は行くから」

「そうだな、私も準備出来てる」

「あ、私も出来てるよ」

「そうね、行きましょう」

……………。

「ち　よ　つ　と　ま　て」

「どうかしたのか」

「うん、どうかしたの？」

「用事なら早くしなさいよ？」

「その、なんだ。文脈からすると、まるでチミ達着いて来るみたいな言い分だけど、そんな訳無いよな？」

「何を言ってるんだ、当然着いて行くに決まってるじゃないか。二人もそうなんだろ？」

「勿論だよ」

「当たり前じゃないの」

「ちよちよちよちよと待てよ！　着いてきて良い訳無いだろ、すげえ危険なんだぞ？」

「だから私がついていくんだ零児。私だって……」

そう言って床に転がっていた鉄パイプを拾って軽く振る武田。

「戦力にはなるし、大体私が居なかったら誰が赤毛の奴を押しとどめておくんだ？」

「う、まあ、それはそうだけど……まあ百万歩譲って武田は良いにしても後の二人は絶対ダメ。さっきので解かっていると思うし、こんなことは言いたく無いけれど、正直足手まといなんだ、二人は」

ああ、本当にこんなことは言いたくない。だが、あえて諦めさせるためにキツイ言葉を選ぶ。

「う、そ、それは解かっているけど、でもダメ。今回だけは私絶対ついていく」

「ええ、私もよ。絶対に邪魔になら無いように気をつけるわ。何なら見捨ててもらっても構わない。だから今回は譲れないわ」

「何でだよ、もう。武田からも言ってくれ。二人は着いてきちゃダメだって」

と、武田を見ると、片手に鉄パイプを持ったままもう片方の手を口元に当てて考え込んでる。

「武田……？」

「ん、ああ。すまない。聞いていなかった。なんだ零児？」

「いや、だから武田からも言ってくれ。二人は着いてきちゃダメだって」

「ん？ 何でだ？ 私は二人もついて行っても良い、むしろついて行った方が良いと思うぞ？」

「なっ！」

思わず絶句する。武田は賛成してくれると思ったのに。

「武田まで何でそんなことを言うんだ、おかしいだろ。だってコレ

から行く所はスッゴイ危険で命の保障も出来なくて……」

「だからこそついて行くんだ。零児にはそれが解からないのか？」

「解かるわけねえだろうが、何でなんだよ！」

「それはな、零児。お前が死ぬ気だからだ」

「なっ、何を……」

何を突然……。

「ああ、すまない、言い間違えたな。正確には零児、お前が死んでも構わないと思ってる。むしろ自分の命ぐらいを引き換えに君の姉を救い出せるのなら御の字だと思っている。さらには零児の計画と言うのは、零児自身の命と引き換えに宗全を倒す物だという事。そして、そんな、自分が死ぬような所を私たちに見せる訳には行かない、そう思っているとか。こんな所か」

「な、なんで……」

「ふふっ、何で解かったか、か？ 零児は単純だからな。零児の考えている事くらいすぐに解かるさ。顔に書いてあるぞ？」

「なっ！」

思わず顔を触る。

「ああ、やはり凶星だったか。つまりだ、二人もその事を察しているからこそなんとしてもついて行くつもりなんだろうし、だからこそ私も二人がついてくる事に反対しないんだ。いいか零児、勇気と無謀は違う。命懸けで事に望むのと、初めから命を捨てる計算で事に望むのは全然違うことなんだぞ？」

「で、でもっ、お前も解かってるだろ、宗全の強さを！ 命ぐらいをペットとしても出さない限り奴に勝つなんて無理だ」

「ああ、そうだろうな。でも何でそこまでして勝つ必要があるんだ？」

「当たり前だろうっ、だ、だって、姉さんが……」

「ああ、そうだ。今回の目的は零児のお姉さんを救い出す事だ。ならばいくらでも手はある。例えば零児が宗全を、私が赤毛を抑えている間に二人が救出するとかいくらでも方法はあるんじゃないか？」

「そ、それはそうだけど……でも、武田たちをそんな危険な目に合
わすなんて事は」

「なあ……零児」

と、突然武田が近づいてきて俺の両肩に手を掛ける。

急に近づかれたからか、少しドキリとする。

「こんなことを面と向かって言うのはおこがましいとも思うのだが、私は、その、なんだ。勿論零児と出会ってから少しの時しか経っていないのだが、だけど、零児に、その、友情のような物を感じている。それはきっと光も先生もだ。勿論2人の気持ちに友情なのか、それとも、別の形の気持ちなのかは解からないけれど、とにかく三人とも零児に何かしらの好意を抱いているのは確かなんだ。だから零児のためなら多少の危険は犯す覚悟はあるし、零児の力になりたいと思っている。こんなことを、私が君に対して友情を感じてしまうのは、私の、思い上がりなんだろうか……？」

「そ、それは……」

正直、驚いた。

ここまでストレートに、気持ちに素直な言葉を聞いたのは初めてだった。

だからだろうか。俺も、照れるとか、恥ずかしいとか、そんな感情が湧くより早く、自分の気持ちを口にした。

「それは、思い上がりなんかじゃない。俺も、勿論出会ってから時間は凄く短いけれど、先生にも片山さんにも、そして武田にも、

隆貴^{たかき}以来かもしれない、友情と言うような、ハッキリとした好意を抱いてると思う。だから、武田が俺に対して友情を抱いてくれているのは、凄く嬉しいし、その気持ちは片道の、思い上がった気持ちなんかじゃない」

そう、目を見つめて話す。

と、武田はそのまま少し頬を紅く染めて、そして少し笑顔になって、ほうと息を吐いて胸に手を当てる。

「そう、か。あ、あはは。この、何て言うか、気持ちが伝わりあうというのは、その、なんだ。すごく、嬉しいのだな」

「そうか、俺も武田が嬉しかったのなら、嬉しい」

「ああ、そうだ、私たちは友達だからな。だからこそだ。きっと零児も、私に何らかの危機が迫った時は助けたいと思ってくれるのだろうか？」

「勿論だ、きっと、強くそう思う筈だ」

「ああ、そして、今の零児の危機に私は強くそう思っている。助きたいと、力になりたいと、強くそう思うんだ。先生と光、二人の事は、私がこの命に代えてでも守る。だからどうか、私のこの願いを聞いてくれないか？」

「そ、それは……」

「頼む、お願いだ」

そう、目を見つめられて説得される。

こんなに真っ直ぐに、気持ちぶつけられては。

「ああ、解かった。力になってくれると、嬉しい」

こんな言葉しか、返すことができない。

「耳ヶ崎第三埠頭へはここからどのくらい掛かるの？」

コレは片山さんの質問。

と、言うわけで今は作戦練り練りタイムな訳だ。

「んー、まあ十五分もあればつくだろ。今七時半だから、後十五分したら出るぜ。他に質問はー？」

「はーい！」

「ん、先生、なんですか？」

「結局私たちがお姉さんを助けに行くタイミングは、二人が完全に戦闘に入った時なんでしょ？ でもそれってあんまり時間は取れないわよね」

「ええ。でも、まず俺が宗全と取引して姉さんの姿を確認するつもりなんで、場所が解からないとか言う事は無いと思いますよ。あと、武田は赤毛より強いからいくらでも時間を稼げるだろうし、俺は、命懸けで時間を作って見せるから二人には安心して欲しい」

「でも、もしもお姉さんが何らかの拘束を受けていたら、例えば縛られて居たりしたらどうする？」

「ああ、その時は……」

そう言って倉庫内の物置を探すと……あった。

「この包丁で紐をぶっちぎって下さい」

「解かったわ。でも、いきなり包丁が出てくるって凄い倉庫ね」

「まあ、たいていの物は転がってるんで」

うん、今はどっかの会社が権利を持ってるらしいが、昔は車の改造屋で、その後ホームレスが住んで居たりした倉庫なので大抵の物は揃うのだ。

ご都合主義と言うなかれ。

「解かったわ。この包丁で切ればいいのね」

「はい。お願いします。他に質問は？」

「はい」

「なんだ、武田？」

「言いだしっぺの私が言うのもなんだが、どうやって逃走するんだ？」

「ああ、それは簡単。もしも無事に救出できたら適当な所で俺が適当になんか叫ぶから、俺が先生と姉さんを担ぐから、武田は片山さんを抱いて、俺に着いて来てくれ。俺は昔ここでよく隆貴と遊んだから裏道も知ってるし恐らく逃げられると思う。或いは、武田が赤毛を完全に倒せれば、俺が時間を稼ぐから武田は姉さんを抱いて、二人と一緒に先に逃げてくれ。俺一人なら逃げるだけならきつといつでも可能だ。その時はまたこの倉庫で落ち合おうぜ？」

「了解だ。うまくやろう」

「ああ。あ、そろそろ時間だ。それじゃあみんな、力を貸してくれらることに感謝している。そろそろ行くぞ」

「ああ、大丈夫さ」

「ええ」

「うん、頑張るよ」

ザアアアア……と波の音だけが聞こえる。

日はとつくに沈み、港の白い外灯だけが、黒い水面を映している。黒い海に、反射して煌く白の灯り。その灯りだけがこの場における、道標。

そうして、その場所に着いた。

耳ヶ崎第三埠頭。決闘の場所。

存在するのは倉庫と、コンクリートと黒く澱んだ海。

そこを映すは、白い外灯と、空に独りきりで居る少し欠けた月。そこが、今回の決闘の舞台。

波が引いているのか、満ちているのかは俺には解からない。

だが、その波の音だけが、この影絵のように白と黒しか存在しない世界に現実^{リアル}を主張する。

「逃げなかったのか。よく来たな」

ふと、低く、よく通る声が響いた。

「宗全か。約束どおり来た。お前も出て来い」

「ふん」

その声が聞こえたほうを見ている。と、いつから居たのだろうか。倉庫の近くの暗い影に溶け込むように、影のように真っ黒な男が立っていた。

「時間通り、だな。褒めてやろう」

「うるせえよ。お前に褒められてもうれしくねえって何度言えばわかる」

「ふむ、そうだった……む？」

「なんだ？」

「お前、後ろの女たちは？」

「ああ、彼女たちが見物に來たいって言うからな。許可してやったぜ。俺って良い奴なんだ」

無駄だとは思うが、作戦を悟られぬようあえて嘘の軽口を叩く。

「ふむ、てっきりお前は1人で来ると思ったのだから。能力者の色気で籠絡した奴隷共をつれてきたか」

「貴様、なんて言った……」

「事実を言ったまでだ。その女たちはお前が能力を使って虜にした雌奴隷だろう？ ああ、もしかすると能力無しでは生きられない身体にまでしたのか。ふん、所詮は人間。快楽の前には無力か」

「貴様、彼女たちを侮辱したな、ただで済むと思っただか」

ああ、許せない。俺を友達と認めてくれて、俺も友情を感じた彼女たちを侮辱するなんて許せるはずが……。

「最上君っ、なに解かり易い挑発に乗ってるのよ！」

「そうだ零児、怒りで我を忘れると勝てる戦いも勝てなくなるぞ」

「私たちの事で怒ってくれるのは嬉しいけど、今は、ね？」

「あ、ああ。そうだな。すまない、みんな」

そうだ、俺がこんなじゃダメじゃないか。どうも宗全を前にするとすぐに切れそうになる。

「ふん、女に助けられたか」

「ああ、彼女たちには助けられている。文句あるか？」

「いいや、別に」

「そうか、それよりも宗全。約束通り来てやったんだ。まずは姉さんの姿を見せろよ」

「ふん、良いだろう。つれて来るんだ」

「ういーっす」

そう言う返事が聞こえると同時に、倉庫の方から赤毛の男が姉さんを担いでやってきた。

姉さんは縛られていたり居ないようだが、意識は無いようでぐったりしている。

「おい、宗全ッ、貴様、姉さんに手は出していないんだろうな！」

「ああ、私は手を出していない。赤毛の方にもお前が来るまでは手を出さないように言っている」

「アーん？ 俺えも、まだなんもして無いってバーさ」

「そうか、なら良い」

「ウヒョヒョー！」

と、突然赤毛の奴は地面に姉さんを横たえるとその足の太もものあたりを持って足だけを高く上げると足に頬ずりし始めた。

「き、貴様、一体何を……」

「うひひひひ、いい感触だなアッてさー、ウインウインウインウインッ！」

そのまま足に頬ずりし続ける赤毛。

「き、キサマッ！」

思わずナイフを抜いて構える。

「零児っ、冷静になれ！」

「た、武田。あ、ああ、そうだな」

そうだ、ただ太ももに頬擦り……された、だけじゃないか。焦るな俺。

「ふむ、またもや女に助けられたか」

「うるさい、宗全、それで今回は随分と手の込んだ事をしてくれたじゃないか。お前の望みはなんなんだ？」

「ああ、少し試したい実験があつてな、姉を借りるぞ」

そう言うのと、宗全は寝ている姉さんを抱き上げた。

「さて、貴様の姉は今私の手の中な訳だが……」

片手で姉さんを持ったまま、もう片手でコートの中から小刀を出す。

そして、その小刀の鞘を抜くと、刃の切先を姉さんの首に宛がう。

「貴様、一体何をっ！」

「ふむ、お前の姉の命は今私の手の中にあるということだ。少しでも私に逆らえば、お前の姉の命は無いと思え」

そう言って少し手を動かす宗全。

小刀の刃が薄く姉さんの首の皮膚を切ったのだろう。その白い首にツツーっと一筋の血が流れる。

「ぐ、ぐぎぎイツ、キサマツ、その刃を動かすんじゃないぞっ！
さっさと用件を言いやがれっ！」

「ふむ、相変わらず言葉遣いになっていないのだな」

「クツ、よ、用件を、言ってくれ、た、頼む！」

「ふむ、まあギリギリと言った所か。そうだな、まずは……お前の
後ろに居る女達なのだが、お前の手で殺せるか？」

「こ、殺すっ！？」

そう言われて思わず後ろ振り返る。

後ろには不安そうで、そしてどこか悲しそうに泣きそうな顔を
した三人が居る。

俺を信じてついてきてくれた、この三人を俺の手で殺す？

そんなこと……。

「それだけは、出来ない」

出来るわけが無い。答は決まっている。

「ふん、そうか。ならば」

そう言って少しだけ刃を動かす宗全。

さっきより少し深く首を傷つけたのだろう。血の筋が少しだけ太
くなる。

「や、やめてくれっ、頼む、な、何でも言う事を聞くん、仲間にな
ってなるっ、だから、それだけは、姉さんだけはっ、頼むっ！」

首から血を流しながら、意識は無いはずなのに少し苦しそうに身
じろぎする姉さんを見ていると心がバラバラに引き裂かれそうな気
分になって、思わずそんなことを叫んでいた。

「ふむ、仲間か。いつ後ろから刺されるか解からない仲間は要らないからな。ふん、まあ良い。ならば次の命令で最後だ」

「ああ、なんだ、早く言ってくれ！」

そう言うのと、宗全は赤毛を指差して言った。

「こいつと戦え。本気でだ」

「なっ、こいつと戦う、それで良いのか？」

「ああ、本気で、殺す気でやるんだ」

「あ、ああ。解かった」

そうして、ナイフを構える。

「ふん、お前の出番だぞ？」

「ウィーッス。でもよう、宗全。本当に大丈夫なのかよ俺がやっちゃって。だってコイツお前とやり合ってたじゃん。本当に俺やっても大丈夫なの？」

「ああ、安心しろ。最上零児にお前は殺せない、無論純粋な技量や戦闘技術で言えばお前に勝ち目などあるはずは無いのだが、事殺し合いと言うことになれば、お前が最上零児に殺されることは在り得ない」

「ぬーん。まあ、それなら良いんだけどサー。ホント頼むぜ。よっし、オッケーだ。かかって来な最上キュン！」

そうして二刀流で警棒を構えて立ち上がる赤毛の男。

敵の目的は見えないが、今はやるしかない。

そうして、ここに初めてとなる顔合わせの本気の「殺し合い」が始まったのである。

何合打ち合った事だろう。戦い始めて何分になるだろうか。

なぜか、圧倒的に格下を相手にして、俺は未だに致命的な打撃を与えられずに居た。

ナイフでは主に攻撃を受け流し、打撃によるダメージを狙うものな
ぜか当たっても巧く相手にダメージを与えられずに居た。

「オイオイ、最上君、偉そうにしててその程度でちゅかー！」

「チイツ、煩い奴がっ。食らえ！」

そうして敵の攻撃を受け流し鳩尾みぞおちに打撃を与えてバランスを崩そうとするも少しずれた手は巧く急所に入らない。

「クッ、ちょっと痛いだけだもんねーこんなの！」

「なんで、何でなんだよ！」

と、宗全が退屈そうな声を上げる。

「何をしている最上零児、この程度の相手に手こずっているようでは「殺し合い」には見えんぞ。ペナルティにお前の姉を傷つけていくか」

「や、やめろっ！」

思わず少し注意がそれる。

「どーこ見てんだ……ヨッ！」

「グッ！」

その隙に鳩尾に奴の警棒が刺さる。

思わず肺の中の空気を出し切って悶える隙にふと頭上に気配を感じる。

何も考えずに本能のみで後ろに転がると、今まで自分が居た場所に渾身の一撃で警棒が振り下ろされていた。

危なかったぜ、流石にアレを食らったら唯ではすまなかっただろうからな。

そうして、体勢を整えた隙に考える。

おかしい。絶対的におかしい。

戦いが始まってから今までに奴に与えた打撃は数知れず。だが、その殆どが碌なダメージを与えられていない。

それもコレも、この「殺し合い」を意識し始めてからだ。

俺が奴を「殺そう」と、強く思えば思うほどに、俺の攻撃は力を失っていく気がする。

何故だ？

「ヒュー！ あの体勢からでも逃げるって流石は最上君。ほれちゃうZE！」

「煩い」

そうだ、コレは殺し合いだ。余計な事を考えるな。

俺の目的はなんだ。奴を殺す事だ。ならばそれ以外の感情は不要。思考を最適化しろ。

そうして向かってくる赤毛を見る。

警棒を振りかざして、そして振り下ろす奴の動き。
最高の動きはそれを受け流して、必殺の蹴りを放つ。

そして計算通りに動き敵の攻撃を受け流す。そして急所に入れば
内臓を破壊して間違いなく死へ至るだろう蹴りを放つ。

勝った。

そう思った瞬間！

「…を…しては……ない」

頭に響いた微かな声と共に蹴りは思考を離れ、僅かに起動を逸らした。

「グッポア！」

妙な叫び声をあげて蹴りが入った赤毛の男は吹っ飛んでいく。
ゴロゴロと転がりしばらくすると動きを止めた。だが。

「あー……、いってえよう、痛ってえけど……」

そのまま何事もなかったように立ち上がり。

「全然生きてるノラッキー！」

また警棒を構えた。

「な、何でだ。何で、俺の攻撃は急所に入らない！」

あまりの理不尽さに思わず声を上げる。

「ふむ、やはり自覚してなかったのか。お前の攻撃は全て僅かに急所を外しているという事に。さっきの勝負のときに言っただろう？ お前の攻撃には威圧感が無いと。お前はどんな時にも相手を殺さないように攻撃しているのだ」

「宗全ッ！ 俺は、そんなことはしていない！」

「いや、間違いないでいる。妙だとは思わんのか？ 8歳の時のお前は私を軽々と追い詰めたというのに、肉体は成長して明らかに基礎的な身体能力が上がっているはずのお前が私に歯が立たないというのは」

「それは、そうだが。でもあれは物部の武術のせいだ！」

「ふん、まだそんなことを思っていたのか。さっき言ったではないか？ 貴様は本当は私よりも能力者としての力も戦士としての力も上だ。物部の武術とて万能ではない。その強さは最上の武術と互角程度の物だ。そして能力者としても戦士としても上のはずの貴様が私に歯が立たない。それが何故だかまだ解からんのか」

「わかるわけねえよ。なんなんだよ。それは、お前は知ってんのかよ！」

「当然だ。それは、今の貴様は赤子1人殺せない出来損ないの欠陥品だからだ」

「何だっ！」

「言っただろう？ 貴様の枷^{かせ}は、全てが外れたわけでは無いと。全ては武烈が貴様に掛けた枷が原因だ。恐らくは、不殺の呪いのような物だろう。8歳のお前にそれは無かった。ならば、きっとあの時貴様と逢いまみえてから武烈が絶命するまでの間に掛けた枷か」

「そ、それは……」

……………にやってはならないことなんだよ。だから、私は、これ

が君の枷になろうとも今ここで敗えてそれを行おうと思う。

「いつか、聞いた」

「そう、貴様は聞いたのだ。その言葉を」

……………の誓約とする。すまない。勝手にこんな事をして。

「言葉を……聴いて」

「そして、それを律儀に守っている訳だ貴様は。ふむ、しかし武烈の力で私の事や怜の事を忘れさせられていたことを考えると、それはきつと貴様の人格の核になっているのか。ふむ、詰まらん偽善者だな武烈は。そんなくだらないことを核にするとは」

「くだらない事……？」

君は、人を殺してはいけない

「ああ、そうだ。その言葉を核にお前は育ってきた、殺戮を好む能力者としては極度の矛盾を抱えてな」

「能力者が、殺戮を……」

「だが、貴様にはその矛盾を正すほどの価値は無いと思っていたのだが……考えが変わってな。貴様の能力の強さ、最上の血族による生命力の強さ、元来の戦士としての格も一級だ。お前は私の仲間に応しい」

「おれが、おまえの、なかまに、ふさわしい、そんな事は、無い。それに、それは、俺も望んでいる事」

思考が一定しない。奴の言葉のせいか、いつの間にか奴が俺に向けて発していた能力のせいか、全てに靄が掛かったようで、巧く一

定した思考を保てない。

「ふん、それを望んだ、か。下らん宗教でもあるまいし、世の中で望むから作られるのは人に神と呼ばれる幻影だけだ。自ら望んだわけではなく人に作られた望みしか持てぬ貴様が偉そうに語る資格は無い。ああ、だが、能力としてはお前こそが私の仲間に相応しい。今、その枷を外して能力者としての矛盾から、苦しみから開放してやろう、最上零児」

「枷を外す……どうやって」
「こっやってだ」

「え？」

その言葉は誰の物だったのだろうか。
何が起きたのかが理解できない。何が起きたのか解からない。

何故、俺の手のナイフは血に塗れて、赤毛の男の胸を貫いているのだろうか。

記憶を、視界に入った映像を逆周りに再生してみる。

ああ、そうか、ようやく解かった。

俺と赤毛の男は戦っている最中だったんだ。そう言えば。
お互いがナイフと警棒を構えつつも宗全の話を聞いているそんな中。

おもむろに宗全は赤毛の男の背中を蹴った。

不意に蹴られた男はナイフを構えた俺のほうへよろめいて。

そしてそのままお互い何が起きたか解からないままに、俺のナイフは奴の胸へと深々と刺さっていたのだった。

「い、イテエ、イテエ、イタイイタイいてえええいてええよう！」

そんな、悲鳴で止まっていた時が動き出す。

「な、何で、俺が、痛い、イテエ、イテエイテエイタイイタイいたうわああアアウイテツじゃッ!!」

「お、俺は、俺は何を……」

赤毛の男が動いた拍子に奴の体からナイフが抜ける。

その瞬間溢れる赤、赤、赤、紅い血液。

ドバドバと抜いたことによつて血が止まることなく溢れていく。

「あひゃひゃははふはは、おかしゅいいヨウなんで俺の胸に刺さってんだコレおかしいありえねえイタイイタイ良いたうっひッッッ!!」

「あ、ああ、あああ……」

止まらない。血が、止まらない、紅い、紅い、紅い紅い。

あの夜の村の惨劇のように紅いモノがあふれ出していく。

何も出来ない。血を止めることも、身体を動かす事も出来ない。

誰もが動けない止まった時間の中。赤毛の男だけがフラフラと歩いている。

「おかしい、オカシイなあ、あははやひゃ。何で一杯紅いのオカシイ! うっ、ハァッ、ハッ! ハッ」

そのまま奴はフラフラと歩いていき、埠頭の端まで行くと、そのままザボンと、間拔けな音を立てて海へと落ちていった。

「ふむ、アレでは助かるまい。奴は死ぬだろう」

「し、死ぬ。死ぬ……？」

「ああ。しかし、命令は聞いたな。約束通りお前の姉は解放しよう」

そうして、姉さんを放り投げる宗全。だが、そんなことさえ気に留められない。

「奴が、死ぬ？」

「ああ、そして、殺したのはお前だ」

「殺した、殺した。殺した？ 俺が？」

「ああ、お前が奴を殺した。お前は人殺しだ」

幕間 1

最上零児 SIDE

もしもの話をしよう。

ある所に、1つの理念が生まれた。

その理念は、そうあるべき存在として生まれたからこそ、そんな存在でいられた。

それだけのこと。

例えばの話をしてしよう。

ある所に、「美」と呼ばれる概念が生まれた。

それは、別にヴィーナスでも何でも良い。美、美しいといわれる概念だ。

その概念は、生まれながらにして、美しく、美しくあるべきものであった。

そして、それは美しい状態であるからこそ美なのだ。
当たり前のこと。

例えばソレは、固定的な観念である必要は無く、そう願われて、
そうして生まれた存在。

生まれながらにして、そうなることを宿命付けられ、そうとして
しか存在できなかった。

いや、むしろ、そうとして存在するから、その存在でいられた。
美と言う観念にしても、美しいからこそ美と呼ばれる。ただ、そ
れだけのこと。

でも、もしも、その「美」が、何らかの力によって美しく無い状
態になったときに、「ソレ」はどうなるのであろうか？

ソレは、どうなる。

実際にあった話をしよう。

最上零児は、8歳のある夜。ある悲劇を迎えた。

幼い身に降りかかった悲劇を不憫に思った最上零児の父親は、彼の一部の記憶を封印し、彼の人格に契約と矯正をした。

この時、最上零児は一度死に、そして生まれ変わったのだ。

この、生まれ変わった最上零児は、生まれながらにして「人を殺さない物」として生まれさせられた。

つまり、ソレこそが、彼が生きるうえでの原則であり、彼が「彼」で居られる所以であった。

何しろ、彼のその人格は、人を殺さないと言う制約から生まれた存在だったのだから。

つまり、それこそが最上零児の核となったもの。

その制約を柱に、彼は様々な経験を感情として肉付けし、生きてきた。

しかし、もしも、もしもそんな彼が、何らかの力によって人を殺してしまったら、どうなるのだろうか。

「人を殺さない存在」が「人を殺した」時に、それは「人を殺さない存在」ではなくなる。

コレを名前に置き換えると、解かりやすい。

「最上零児」が「最上零児でなくなった」時に、それは「最上零児」ではなくなる。

なんとも解かりやすい、シンプルな解。

でも、そんな事がきつと、今回の答。

随分長い時間が経った気がするし。たった今のことだった気もする。

脳の中では恐ろしい勢いで情報、行動原理が書き換えられていく。もはや、その中で残っている物は恐らく「記憶」と呼ばれるものだけなのだろう。

ただ、何故だろうか、胸の中が恐ろしいほどカラッポな感じで、風が吹いているように寒い。

それは、きっと自分が今まで八年間生きていた原理がなくなってしまったからだろう。

ふと、口から小さな笑いが漏れる。

古代から、心は心臓に宿ると信じられてきた。

でも、科学の進歩と共にその説は否定され、心は脳に宿るものとされている。

でもさ、アレって絶対嘘だよ。

だって、今も脳は事務的に情報を書き換えているだけだけど、心臓かどうかは知らないけれど胸はこんなにも空っぽで、そして寂しい。

心は胸に宿るんだなあ。

「どうだ最上零児。枷を取り払って生まれ変わった気分は？」

「物部、宗全」

コイツか。今回の原因は。

「寒い、寂しいな。今まで最上零児だったものはもう何処にも居なくなってしまったんだから」

「良いではないか。その人格すらも作られた、偽りの人格。今のお前のほうが格段に能力者としても、人としても正しい」

「そうか。ならば、貴様。俺が能力者として正しい最上零児ならば、今何を望むかわかっているのだろうか？」

「ああ、殺人か？ ふん、確かに八年間も封印していたんだ。自発的に誰かを殺したくなる事は非常に自然な流れだと思うがな」

「ああ、そうだ。そして、今、俺は誰でも良いから殺したい。例えば、今、一番近くに居るお前でもだ」

「ふん、成程な、だが、私も簡単に殺される気は無い。そこに突っ立っている女共の方が易いと思うがな」

「何を勘違いしてるか知らないがな、俺があいつらを殺すのも、お前を殺すのも、大して労力は変らないんだぜ？」

と、ソレまで澄ました顔で居た宗全が、肩眉をピクリと上げた。

「ふむ、随分と大きく出た物だな。私を殺すのが易いと来たか。私とて八年間遊んでいたわけではない。確かに正面からぶつかれば勝ち目は無いだろうが、逃げ出すことぐらいは出来る」

「ソレはどうか？」

「ふん、気に入らないな」

「そうか、俺もアンタが気に入らない」

「そうか。なら答は簡単だな。私は逃げる。正直、貴様を仲間にしそこなったことは痛い、一人でも完全な能力者が増えるのは喜ば

しいことだから今回は引かして貰う」

「出来ると思ってるのか？」

「ああ。ソレぐらいならばな」

「やってみろよ」

そうして、ふわりと身をかがめ、跳躍の為のエネルギーを溜めるために宗全が体勢を低くした、その瞬間。

「なっ！」

奴の驚く声を聞きながら能力を全開にしていた。

奴も手練だ。動揺しても、行動を緩めることは無い。

きつと一瞬後には倉庫の上へと飛び上がりそのまま逃げていくのだろう。

ならば奴を殺すために俺に必要な行為はなんだ？

答は簡単。ナイフを持って奴の胸を貫く。これだけだ。

一瞬後。

「いぼっ」

身体を奴の前まで移動させ、既に空中に浮いていた宗全の胸にナイフを突き立てていた。

腕は奴の胸を貫通して、背中からナイフを握った手が出ている。

奴の口からは、水っぽい音が聞こえた。

「な、コレだけの事だ。シンプル簡単だろ？」

「キ、貴様、こ、これ程と、は……ゴブツ！」

奴の口から逆流したように血が溢れ出す。

当然だ。能力者とは言え身体を腕で貫通させられては唯ではすまないだろう。

そうして、しばらくそのまままで固まった後、奴の身体の背中から出ていた腕を、ずるりと引き抜いた。

そのとたん、噴水のようにあふれだす血。

奴の、黒い服、黒いコート、影のような男の全てが朱に染まっていく。

なんて、虚しい。

今までなんでこんなに簡単なことが出来なかったのか。

「宗全、アンタは俺を目覚めさせるべきじゃなかったんだよ」

「ぐ、ぐぼ、ぐぼぼ。い、や、これこそが……目ざすべき、ぢがだ、ずばだじい、ぞ」

宗全は、そう、俺を見上げて聞き取れない言葉を残すと、薄く笑って、倒れた。

血が彼を中心に円を描くように広がっていく。

また、一人殺したわけか。

だが。まだ近くに人間が居る。

そうして、俺は後ろに居る、三人の女へと向かって歩き出したのだ。

幕間 2

武田由里香 S I D E

全てが、計画通りには進まなかった。

零児のお姉さんがいたぶられて、ソレを見守る零児を見るのは、苦痛以外の何者でなかった。

何も出来ない自分が、それどころかやはり枷になってしまった自分が呪わしかった。

そして、今度は赤毛と零児の一对一。

だが、明らかに格下であるはずの赤毛に苦戦する零児。

だが、突然後ろから宗全が赤毛を蹴っ飛ばして、そのまま奴が零児の持っていたナイフに刺さる事によって決着はあっさりと着いた。そして、宗全の零児を人殺しと呼ぶ声。

そんな物は、どう考えても詭弁だ。だが、その一瞬に何があったのだろうか。

その一瞬後、時間にしても数秒後に、彼は、私たちの大好きな最上零児は何処にもいなくなってしまった。

別に、視界から消えたわけでも、なんでもない。

でも、感じるのだ。目の前に居る彼はもう、「最上零児」であって「最上零児」では無い何かになってしまったのだと。

そして、その「何か」は宗全と二言三言交わした後、一瞬のうちに、ソレこそ私の目には捉えられず瞬間移動したように映って、そのまま宗全の身体を貫いていた。

何が、起きたのかは全く解からなかったけれど、その景色からは零児が居なくなってしまうた実感だけがリアルに感じられて、気づけば、私はただ涙を流していた。

「何を泣いている、武田」

気づけば、目の前には何かが居た。

「ああ、私の親しい、友情を感じた、大切な友人が居なくなってしまうんだ」

「そうか。ソレは寂しいな」

「ああ」

そう、何事も無いように語るソレ。

だが、コレは、やはりもう零児ではないのだ。

「彼は、何処に行ったんだ？」

「しらねえよ。死んだんじゃないの？」

「グッ！」

本人に突きつけられる死刑宣告に思わず感情があふれそうになる。でも、溢れそうな涙を耐えて必死で語る。

「私、お前が嫌いだ」

「そうか」

「いつか、零児の別人格に会ったときは、楽しかった。だって、彼もまた零児だったんだから。なのにお前は違う。その上私の大好きな零児をどこかに連れ去ってしまった。お前なんて大嫌いだ！」

「そうか、別に構わんがな。どうせお前もすぐに死ぬんだ」

「そうか」

ああ、今ならわかる。零児は生きることには必死だった。彼の生涯の目的は生きることだったんだ。だから、彼はあんなにも輝いていた。

だからこそ、私たちはあんなにも彼に引かれたんだろう。

でも、コレは違う。

ソレを反転させた、殺す物。

退廃を司る物。

「返して、欲しい。零児を」

「無理を言うな。奴は死人だ」

「そう、か」

やはり無理か。ならば。

「お前に頼みがある。私は良い。私が殺されるのは良い。でも後ろの二人は、先生と光は見逃してくれないか？」

「なぜ、そんなことを頼む？」

「だって、零児と約束したんだ。二人は命に代えても守るって」

「そう言えばそうだったな。だが、そんなこと俺には関係ない」

「そう言うか。なら、言葉通り命にも変えて守ってみせる」

そう言って、鉄パイプを軽く振って構える。

「ふふ、光、先生、今度こそ異論は認めません。逃げてください」

「あ、ああ、でも」

「う、ううう？」

要領を得ない返事しか返ってこない。

彼女たちもきつと零児が零児で無いものになってしまったことは感じているのだろう。

だが、能力を強くは感じられない彼女たちには細かいことが解かっていないのだ。

「ほう、お前が足止めをするから、か。できない事を……」

「出来るさ。私がお前を殺すのに、完全に息の根を止めるのにそのナイフで何秒掛かる？」

「うーん、どうだろうな。正直解からんが、今のお前の気迫だけは認めるよ、ただ技量が違いすぎる。そう長くはもたんだろ、例えばさ」

そう言ってナイフを一閃する零児。

その後するりと持って居た鉄パイプが音も無く切れて、半分の長さになった。

「ば、馬鹿な……」

「解かっただろ。今の俺ならお前も秒殺って訳」

ふと、その言葉を聴いたときに、悲しみとも怒りともつか無い感情が襲ってきた。

「零児の声で、零児の顔でそんな事を言うな！」

「なに怒ってるんだよ」

「だって、だって」

気づけば激昂して半分の長さの鉄パイプで彼に殴りかかっていた。だが、そんな攻撃当たる筈も無く、避けられついでに腹に膝を入られる。

「グッ、ごほっ、ゴボッ」

逆流しそうな胃液を必死で飲み込んで奴を見上げる。

「下らん感情。だな」

「そんな事ッ!」

と、その時、私は気づいた。いや、気づけたのだ。
なぜ、彼は私を蹴ったのかと。

「ごっ、ゴホッ、なあ、零児?」

そしてあえて彼の名を呼ぶ。

「チッ、なんだよ」

「何を躊躇っている?」

「何がだよ」

「何故私を殺すのを躊躇っているかと聞きたいんだ?」

その時、確かに彼の身体が僅かに震えるのを、私は見逃さなかった。
た。

6

「何故私を殺すのを躊躇っているかと聞きたいんだ?」

その一言で、自分の異常に気づく。

確かに、俺はこいつを殺すのを、躊躇っている。

だが、

「躊躇ってなんかいないね」

口から出たのはそんな言葉だった。

思えば、こんな裏腹な言葉こそが生まれたばかりの自分の、初めての人間らしい言動だったのだ。

「いや、躊躇っているな」

「躊躇っていないさ」

「なら早く殺したらどうだ？ 二人はダメだが私ならいつでもウエルカムだぞ？」

「お前……舐めやがって」

そうしてそのまま動かない奴の首にナイフを突き出す。

「ツッ！」

そう、確かにナイフは奴の首に触れた。そして少し切り進む。

だが、少し血が伝うほど皮膚を切ったところで、手は止まった。

だって、心は忘れても、記憶が覚えているんだ。

その言葉の、その喜びを。その暖かさを。

「この、何て言うか、気持ち伝わりあうというのは、その、なんだ。すごく、嬉しいのだな」

その言葉が、嬉しかった。隆貴以来となった心の通じ合った友達ができた事が、涙が出るほど嬉しかったんだ。

魂が一つや二つ入れ替わったってそうそう忘れられる物じゃない。

「どうした、殺すんだろ「零児」は」

首にナイフを突きつけられながらも、平然とした顔でそう言い放つ彼女。

「う、うるさあいつ、煩いッ、黙れ！」

そう叫んで、彼女の腹にナイフを持っていないほうの手で裏拳を叩き込む。

「ぐ、ウググッ！」

かなり本気だったがどういうわけか生きている。だがそんな事は構わない。

「こ、コイツ等からっ、殺してやる！」

そう叫ぶと、片山光と山園綾子の方へと向かう。

「や、やめっ」

そう言って庇うように二人に覆いかぶさる武田を蹴り飛ばす。

そうして、色の無い瞳で俺を見上げる二人に向けて、俺はナイフを振り下ろす……

「ふふ、最上君は私の可愛い生徒じゃない。確かに教師暦は短いけど、でも私も列記とした教師よ。そして教師は生徒を信用する物……」

「そうだよ。私を助けてくれた最上君を、私は信じる」

ことが出来なかった。

嬉しかったんだ。能力者と言うことも関係なく信じて貰えて。能力のことも知っても、態度を変えずに接してくれて。

その言葉が涙が出るほど嬉しかった。

その気持ちは、心が死んでも、記憶が覚えているんだ。だから。この喜びの記憶が、殺す事を拒否させる。

「どうしたの、最上君」

「私たちを、殺すんじゃないの？」

「う、五月蠅い。黙れっ！」

そうして、いったん引いて、ナイフを構えなおす。

「はあっ、はあーっ、お、俺はっ、能力者だ！ はっ、はあーっ！」

「ああ、そうだ。お前は生まれながらの能力者だ」

そう言いながら、武田が二人を庇うように間に立ちふさがる。

「そうだっ、俺は、能力者だっ、殺す、殺す事のできる能力者だ！」
「ああ、そうだな。だが、私たちのような非力な女も殺せないがな」

「非力な女？ ハッ、武田は違うだろうが！」

その言葉を聴くと、突然武田の目から涙が溢れる。
あまりの事に、一瞬頭が真っ白になった。

「お、オイ？」

「あ、ああ、零児、やっぱりお前は、零児」

「ち、違ああああうっ！ 俺は、純粋な能力者だ！」

「ああ、だけど、零児だ」

「違う！」

「違う。ならば私を殺してみろ！」

「やってやるさっ！」

そうしてそのままナイフを構えて武田へ突進する。

最上の技術も、能力者としての身体能力も無いただの無様な突進。

だが、武田は避けなかった。

「ズッ！」

そうして、ナイフは武田に刺さる。

幕間3

武田由里香SIDE

腹部に鋭い痛みが走る。

熱を持ったような猛烈な痛み。鋭く、熱く、そして痛い。

それは、確かに零児のナイフが刺さった痛みだった。

ジワリと血が滲んでいくのが解かる。

だが、それと同じように、コレが致命傷で無いことも解かった。

何しろ彼のナイフは刃の三分の一ほどが刺さっただけ。

それも全く内臓とかの無い場所に。

やはり、彼には私たちを殺す事ができなかった。

「私の勝ちだな」

「ち、違う。俺は、殺せる……」

「ああ、でも、零児だから、友達は殺せないんだ」

「と、友達？」

「ああ、最上零児は優しい男でな。友達を殺す事もできないような男なんだ」

「で、でも、俺、は……」

そうして自分の手元を見る零児。

ずるりと、刃を引き抜く。

僅かに出血があるが、問題は無い。

「だから、大丈夫なんだ。零児」

「でも、お、俺は、俺は……」

ガシャリと言う音が、聞こえた。

彼の手から、ナイフが落ちた音だ。

「う、うあ、俺は……」

「零児、大丈夫だから」

そう言つて彼の手を取ろうとした瞬間。

「う、うわあああああああつ!!」

そう叫び声をあげると目にも留まらぬ速さで飛び上がり、倉庫の屋根へと飛び移ると、そのままどこかへと走り去っていった。

「ふ、世話の焼ける男だな。零児は」

そう軽口を叩いた瞬間。

現実感が戻ってきて腹に猛烈な痛みが走った。
思わずその痛み膝に膝を附いてしまう。

「たっ、武田さん!」

「ユリちゃん、大丈夫っ!」

「あ、ああ。大丈夫だ。零児は深く刺せなかったんだ」

「そ、そうなんだ。良かったなあ。う……」

「う?」

突然俯いてしまった光を見る。

「う、うううわあああああああん、怖かったようっ! 最上君は変になっちゃうしユリちゃん刺されちゃうかと思つたし、無事で良かったよおおおおおおおおおつ!!!!」

「あ、ああ、そうだな」

突然の号泣に凄くビックリする。

「ええ、どう言って良いのかわからないけれど、取りあえず武田さんが無事で、何よりだわ」

「はあ、そうなんですけど……」

よく見ると、先生も涙ぐんでいる。

「問題は山積みですけど、取りあえず生きてて良かったです」

「うわあああああん、そうだよ生きてて良かったよう!!」

「ええ、本当に。ただ、彼……」

「はい、零児ですね。彼は……」

彼は、どうなるのだろう。

そして、私はどうすることが出来るのだろうか。

ふと、足元に落ちている私と宗全の血で紅く染まった零児のナイフを手取る。

確かな重みを手に伝えてくるそれは、血塗れでありながら見たことも無いほどの業物であることが解かった。

刃についた血を服で拭くと、恐ろしいほどの輝きを持った刃が顔を出した。

でも、そのナイフからは、恐怖を感じるほどの出来でありながら、確かに零児の暖かさが残っていた。

刃には、号泣する光と、それを苦笑いしながら宥める私の顔が映っていた。

光の泣き声と波の音だけが聞こえる夜の海。

波にさらされる埠頭の上。

夜空にたった独りで居る月と、港の白い外灯に照らされた私たちは、とりあえず生きていた。

そんな中私は、空の月と、白い外灯に、行きかう波の音に、いつしか零児と二人で見た、あの美しい夜の海を思い出していたのだった。

まあ、なんと言おうか、取りあえず、こうして私たちの長すぎる一日はようやく終わったのだ。

Harbor Lights (後書き)

な、長かった。

今まで間が空いてすみません。

ただ、理由は解かって貰えると思います。

とにかく長い。なんと衝撃の二万文字越え。

原稿用紙が四百文字だから、えーっと、なんと50枚。

分割すれば良かった。

あ、話はまだまだ続きますよ。

今は雰囲気暗いけど、トンネルを抜ければ青い空が見えてくるお話
な筈。

作者が言うんだから間違いない。多分。

相似形、二人の男

報告書

これは今回の学校で発生した騒動に対する報告書である。

今回の事件は、報告にあった、4月8日深夜に耳ヶ崎の飲食店「エオリア」で、私、武田由里香と接触していた赤毛の男（被験者N024、以下赤毛と省略）が、4月28日の午前中、授業中であつた菊城高校に対して、襲撃を仕掛けたものである。

ちなみに今回の事件を起こした動機については不明。

ただ、警察の体育教師の佐伯敏舛への取調べで得た証言によると、名簿を探していた事から、何者かとの接触を図ろうとしていたと思われる。

被害者は、体育教師の佐伯敏舛が警棒で殴られた末、二階の窓から放り出されて右腕と右足の骨を折る重傷。

数学教師の飯田善樹が警棒で背中を強打され打撲した事による軽症。私と赤毛が対峙している際に接触した警官隊14人が能力で眠らさせられた事による一時的昏倒。

及びその時間の記憶の混乱である。

伝わってくる報告として、彼らは口を揃えて大学生ほどの若い女性と1人の女子生徒が存在し、また、それとは別に身長の高い中年の男と男子生徒が戦っていたと聞いたが、そんな事実はない。

現場に居たのは私と赤毛のみである。

恐らく、赤毛の男の能力を受けての副作用かなにかで、してもいい体験をしたと錯覚していると思われる。

集団催眠か、或いはそれに順ずる能力が行使されたと思われる。

「ふう」

中途半端にリクライニングした病室のベッドで寝たまま、作成中の報告者が映ったノートパソコンのモニターを見て思わずため息を一つ吐く。

また報告書に嘘を書いてしまった。これで嘘は四つ目だ。

以前の私なら、物部宗全と言う能力者や零児のことだけではなく、光や先生のことにも隠さずに書いていただろう。だが、今は違う。

隠しても何の影響も無い光や先生の事だけではなく、報告するに当たっての絶対に必要な事項である零児や宗全のことにも隠して虚偽の報告書を書いている。

何故か、理由は簡単なことだ。

それは、研究所に対する、圧倒的な不信。

零児がそうだと言われた「原典」の存在とは？

恐らくあの物部宗全と言う男や零児達のような規格外の強力な能力を持った能力者の事だと思われる。

ならば、何故そんなものが存在するのか。確実に彼らの能力の強さはオーバーテクノロジーだ。

そして、その全ての事は、私が能力者になる時に受けた「能力」と言う物のレクチャー時の説明にも、どんな資料にも書かれていない。

勿論、唯の1エージェントに過ぎない私に全ての情報が降りてくるわけでは無いのは解かっている。

でも、知る必要があると思うのだ、自分自身が何をしているかを知るためにも。

この、能力者のプロジェクトの全てを管理している最高責任者は、政治家でもある私の父だ。

だから、父様は確実にすべての事を知っているのだろう。なのに、

私は何も、殆ど何も知らずに働いてきた。

一体、父様は、何をしているのだろうか。そして、何を、何故私に隠し続けているのだろうか。

それら全てが、末端である研究所への不信へと繋がっている。

ピピピピピ！

気づけば携帯がなっている。ふう、個室って、気兼ねしなくて良いからこういう時楽だな。

パソコンをいったん閉じて携帯を見てみる、と、着信、「山口」とある。私付きの所員、つまり研究所からだ。

さて、嘘を付き通せるか、僅かに緊張しながら通話ボタンを押す。

「武田だ」

「ああ、お嬢様。怪我の具合は如何ですか？」

「別に、そもそもたいした怪我じゃないんだし、入院なんて大袈裟なんだ。それからもうお嬢様って言うな」

「そうは言われなくても、お嬢様ですから」

「ふう、まあもうどうでも良い。それより、報告書も明日には上がりそうだ。完成したらメールに添付して送る」

「了解いたしました」

「ああ。それから……この三日間、本当に菊城、塩山、耳ヶ崎一帯では能力者のものと思わしき事件は起きてないんだな？」

「ええ。だって、赤毛の能力者はお嬢様が始末なさったんでしょ？」

「あ、ああ。勿論だ。だが死体が上がっていないと聞か？」

「まあ、あまり大々的に搜索する訳にも行きませんね。海に落ちたのならその内上がるでしょう」

「そうか……。あ、あとだな、こう、ここ三日間で、本当に長身の中年男性の死体は見つかっていないのだな？」

「ええ。というか、何の事なんですか、その長身の中年男性って。ここ三日間はうちの市内では死体なんて上がってませんよ？」

「そ、そうか。いや、何でもないんだ」

「はあ、まあ、お大事にしてください」

「ああ。わかった。ではな」

ポチツとな。

ふう。嘘を突き通すのも結構手間だな。に、しても……。

赤毛の奴は良いとして、何故、宗全が。

そう、何よりの問題は、宗全の死体が血溜りから消えていたのだ。考えられるのは、実は致命傷ではなく死んでいなかったか、或いは何者によって持ち去られるなど、回収されたか。

そのどちらかだろう。

そうしてあの時の光景を思い出す。

確かに零児の手は、ナイフを持って奴の体を貫通していた。場所も、ほぼ心臓だろう。

心臓を破壊されて生きている人間が……居るわけが無い。ああ。

と、なると、やはり何物かによって回収されたと見るべきだろう。だが誰が？

そして、もう一つ気がかりな事は、零児だ。

あの時、何処かへと走り去っていた零児は、その後行方不明だ。だが、どう言う訳かこの三日間で能力者のものと思われる事件は全く起きていないらしい。

単に、事件が表へ出ていないだけと言う可能性もあるが、研究所の調査の精度は高い。恐らく本当に何もおきていないのだろう。

ならば、今、彼は何処で何をしているのだろうか？

本当に、解からない事だらけで頭が如何にかなりそうだ。

ふと、ベットのすぐ隣の窓枠に置いておいたナイフが眼に入った。
零児の折りたたみナイフだ。

あの時、彼が落として行ったのを拾って、そして病室に持ってきてしまった。

取っ手の部分が適当につけられた、やや刃渡りの長い手作りっぽい何処にでもありそうな折り畳みナイフ。

でも、何故か、手放す事ができない。不思議なナイフだ。

そつと手にとって、そしてパチリと刃を出してみる。

ナイフとしてはやや長く、そして肉厚な刃。焼きが入れているのだろう、美しい刃紋。光を反射して怖いほどに輝く白銀の刃。

そして、そこには私の顔が映っている。

やはり、凄い。これだけの業物は日本刀でも中々お目にかかれな
い物だ。

そして、何よりの特徴は、そのナイフを手に握っているだけで、
不思議な暖かみが手に流れ込んでくる事だ。

これが、零児の、温もり……？

いや、それだけではない、何か、不思議な力を感じる。なんなん
だろうな、これは。

気になって、刃の方へと直接指を触れてみる。
と……。

———刹那、そう、ほんの一瞬だけ、頭の中で、懐かしい声

が聞こえた気がした。

勿論、実際に音がしたわけでもないし、何か物理的なことではないはずだ。恐らく、錯覚なのだろう。

だが、そんな錯覚を引き起こすほどの何かがこのナイフには籠められている気がする。

なんなのだろうな、それは。今の私には知る術も無いが……。

「すみませーん武田さん。検温の時間ですけどドアを開けてよろしいでしょうか？」

ん？ あ、そうか。少しぼおっとしていたな。ナイフを仕舞わなくては。

機密に係わる報告書の作成中だけに入室時には声を掛けるような仕組みになっていて良かった。

「はい。大丈夫です。どうぞー？」

「はいっ、お邪魔しますねー」

そう言うときピンク色のナース服に身を包んだ看護婦さん、今は看護師と言うのか？ が入ってきた。

「はい、武田さん？ 体温計です。これを挟んで、ピピって音が鳴ったら教えてくださいね？」

「ああ、はい」

そう言って近づいて体温計を渡してくれた。
と、その豊満なバスとがぶるると揺れた。

凄い。うん。たゆたっている。同性の私から見ても凄い。これが、おっぱい……。

わきに体温計を挟むときに、ついでに自分の胸を少し覗いて見る。

なんだか、「すーん」と言う音が聞こえた気がした。ブラしているのに。

そして目の前の看護婦さんを見る。

「ん、なんですか？」

小首を傾けながら、微笑んでくる。微笑んだ目の下の泣きボクロがせくしーだ。

そして、その下の胸からはばいーんと言う音が聞こえた気がした。無論、気のせいなのだけど。

「いや、なんでも無いです」

我ながら何を考えているのやら。いくらずっと事後報告に報告書詰めで疲れているとは言え女なのに女性の乳房についての考察を始めてしまうとは。

しかしアレだな。私はまな板と言われても仕方ないかもしれないが、光はどうなのだろう。

まあ、BかCはありそうだな。うん。程よい大きさだ。

先生は、Dくらいありそうだな。かなり大きいし、羨ましい。

それにしても、光のおっぱい……なにか、非常に良い響きだ。

って、いかんいかん。そんな事を考えては。光は親友だ。間違いない。うん。そんな事を考える相手ではない。大丈夫だ。多分。

—————ピピピピピ！

「はっ、そう言えば体温計……」

忘れていた。体温を測っていたのだった。

「はい、計れましたね。えーっと体温計……」
「はい」

そう言って手に持った体温計を渡す。

「んーっ。平熱ですね。特に問題ありません」
「はあ」

「あ、あとお見舞いに来ているお客さんが居ますけど、入室して頂いて大丈夫ですか？」

「ええっと、名前は？」

「ええっと。いつもの片山さんと山園さんですよ」

「すぐに入れてください！」

「はい。解かりました。それにしても。二人とも毎日来てくださって、仲が宜しいんですね？」

「ええ。凄くあり難いです。あの二人が、毎日来てくれて、凄く嬉しいです。だって、あの二人は……」

——なんだかいんな経験を共にして戦友のように感じてしまうほどの仲なのだから。

「うふふふ、羨ましいですね。女同士それだけ心通わす友達が出るなんて」

「そうなんですか？　だって、心が通じて無い人は友達とは言わないですよ？」

「そうですね。本当はきつと。でも、世の中はそう言うことばかりではないし、私の場合も……。きつと、あなたがそう言う人だから良い友達にめぐり合えたんですよ？」

「はあ」

「あ、長話してお友達を待たせてしまいましたね。それじゃあ呼んできますね」

「あ、よろしくお願いします」

そう言うのと、看護婦さんは微笑んで部屋から出て行った。

ふう、機密を保持していると言う建前を研究所の息のかかったこの病院側に示すためとは言え、二人にまで勝手な入室を許可できないのは心苦しいな。

—————そうして、1人になった病室で、窓の外を見る。

東北山病院。耳ヶ崎から少し離れた内陸側に聳え立つ東北山のほぼ頂点に立てられたこの病院の四階の部屋。

山の上の病院だけあって眺めは良くて、菊城の辺りの高校や町並み、それから駅前のデパートや塩山の商店街や、そして耳ヶ崎が見渡せる。

そして、その向こうには海が。沈み行く夕日を反射してキラキラと輝く海が見えた。

海だけじゃない。道を行く人たち。夕日を浴びて陰影が濃くなっている街並み、徐々に長くなって行く影を纏ったビル。

なんて、綺麗なんだろう。

ふと、零児のことを思い出す。

事件は起きていない。今の平和な、美しいこの街。彼は、今、何処で、何をしているのだろうか。

一刻も早く、身体を治して彼を探し出さなくては。そう思う反面、彼に会うのが怖いという気持ちも当然ある。

だって、あの時、私を刺すのを躊躇ったとは言えその後、彼の精神が、あの時生まれた「何か」に吞まれてしまった可能性だってある。

それに何よりも、もう一度彼に会ったとき、彼が、完全に私たちの良く知っている「最上零児」で無くなってしまっただけ……。その事を想像するだけで、凄く心が、何か原因の解からない恐怖に包まれるのを感じる。

そして、だからこそ気づけた。

私は、こんなにも彼のことを好きだったのだと。彼がいなくなる事を想像するだけで、こんなに気持ち揺れる程に。

零児と同じ時間を過ごすのが凄く楽しかったのも。

零児と同じ物を見て感情を共有できるという事が凄く嬉しかったのも。

そして、できるだけ彼と沢山同じ時間を過ごしたいと思ってしまったのも。

全ては、私が彼のことが大好きだったからなのだろう。

これが、愛と言う感情なのか、それとも恋と言う気持ちなのかは、知らない。

でも、きつと、そのどちらでも構わなくて、そして、どちらでなくても構わない。

友達でも良い。ううん、違う。「友達でも」じゃない。「友達で居たい。」

そう、一番でなくても良い。女としてでなくても構わない。友人として、ずっと長い時間を、近い距離で彼と共有したい。きつと、私は彼の事が人間として大好きなんだと思う。それが、偽りざる私の本当の気持ち。

だから、会いたいんだ、零児に。

「ユリちゃん？」

「ん？」

気づくと、私の顔を心配そうに覗き込む光が居た。

「あ、光……」

「大丈夫？ 何かボーっとしてたけど」

「あ、いや、何でもない。少し考え事があって……光、来てくれてありがとう」

「ううん、私が好きで来ているんだから、お礼なんて言わないで？」

「うん。でも、ありがとう」

「ふう、でも、ユリちゃんらしいね。あ、今日は林檎持ってきたんだけど、食べれる？」

「あ、ああ。勿論」

「じゃあ、看護婦さんに果物ナイフ貰ってくるからちょっと待ってね」

「ああ。ありがとう」

「もう、お礼ばかり……。じゃ、少し待っててね」

「うん」

そう言って部屋を出て行く光。と、光の後ろに居た先生と目が合

った。

「あ、先生も、居たんですね。わざわざ毎日ありがとうございます」
「居たんですねって……はあ。武田さんは相変わらず正直と言うか素直と言うか……まあ、でも貴方のそれは美点だと思うし良いわよ。でも、貴方の大好きな片山さんを学校が終わってからここまで毎日ここまで車で送ってあげている私にも何かあっていいんじゃない？」
「ええ、本当に感謝しています。それに、勿論光が来てくれるのはとても嬉しいんですけど、先生もわざわざ同行してきてくれて、その事も凄く嬉しいです。本当にありがとうございます」
「うううう、この子は、相変わらず……まあ、良いわ。で、怪我の具合はどう？」

「ええ、首の方は掠り傷ですし、腹の方も浅い傷なので、もう抜糸も済んで殆ど痕も残らないしすぐにでも退院できる、と個人的には思っているんですが……」

「でも、無理はしちゃだめよ」

「ええ、まあ、程々にしておきます」

「そうしなさい」

と、光がナイフ片手に入ってきた。

「ユリちゃん。今林檎剥くから少し待ってね」

「あ、ごめん。ありがとう」

「うん、えっとお……よいしょっと」

そう言って、シャリシャリと林檎の皮を剥く光。手馴れた物らしく、クルクルと一本の長い林檎の皮が出来上がっていく。

「はい、ユリちゃん。どれ位食べる？」

「ああ、さっき薬飲むために昼ごはん食べたし、このひと欠けで良

い」

「そう？　じゃ、乾いちゃうし、この剥いた林檎の残りは私たちで食べるね。他のりんごはここにおいて置くから」

「うん、ありがとう」

「じゃあ、先生の分も剥きますから」

「あ、うん。よろしく」

そうやって光は林檎を剥き続ける。

私は、貰った林檎を口につけた。口の中に爽やかな酸味と甘みが広がっていく。うん、美味しい。

そして、林檎を食べながら窓の外を見る。

山の上の病院の静かな病室。シャリシャリと林檎を剥く音だけが聞こえる。

窓の外は、さっきより更に傾いた太陽が、まさに今、海へと沈み行く所だった。

目に痛いほどの直接的な西日が乱反射して、海は、波間をキラキラと黄金色に埋め尽くしている。

街のビルからは、さっきよりも更に長く伸びた影が道を覆いつくし、世界は、金と黒の二色の世界へとなっている。

そんな夕暮れを見ながら、気づけばいつの日か零児と一緒に見た、屋上の夕暮れを思い出していた。

ああ、零児……。

そうだ、手がかり、零児の手がかりを探さなくては。

「光、先生。街の方で、零児の噂や、能力者が起こした様な不審な事件の噂などは、聞いていないんですよね」

「ええ、聞いていないわ」

「うん、聞いて無いよ。少し聞き込みとかもしたんだけどね、誰も見ていないって」

「そうか……でも光。聞き込みも、程々にしておかないと。特に耳ヶ崎のほうでは絶対に行ってはいけないかな。あの辺りは危ないから」

「うん。解かってる。大丈夫だよ、ユリちゃんに心配を掛ける様な事はしないから」

「それなら良いんだ。それに……零児自身、私たちの知っている零児でなくなってしまうている可能性も否定は出来ないんだ。だから、何か解かっても……」

「でもっ、でも、ユリちゃんは身体が治ったら最上君の事、探すつもりなんでしょ？」

「勿論、そのつもりだ。でも、正直会うのが怖いって言う気持ちもあるし、だからこそ行動を起こす事に躊躇いを感じてしまっている気はする」

「そんな……」

と、沈みがちになった光の表情を見てハッとする。全く。何やってるんだ私は。ここは嘘でも力づけておく場面だろうに。

「大丈夫だよ、光。私が治ったら直ぐにでも零児の居場所を能力で探知して二人の前に引きずって来て謝らせてやるから」

「う、うん。ありがとう、ユリちゃん。でも、無理しないでね？」

「ああ、解かってる。大丈夫だから」

そう、大丈夫だから、そう自分自身に言い聞かせるように呟く。だが、本当に大丈夫なのだろうか。

本当は、どう思っているのか？
恐いのではないか？

本当に大丈夫なのなら、恐怖を感じていないのなら、ここまで傷が治ったのならトウにこんな病院抜け出して、零児を探し回っているのだろう。

少なくとも、自分にはそれだけの行動力があると信じていた。

だが、それが今はどうだ。辺鄙な山奥の病室でこの程度の怪我を言い訳にして籠っているのだ。

何故か。それはやはり恐いからなのだろう。彼に会う事が。

あの時に感じた、圧倒的な力の差。刃向かって死以外の未来が全く想像のつくことの無い絶望。

そして、何よりも大好きな彼が、彼で無いものになってしまっているかも知れない。その可能性を直視する事が。

ベットの横で、甲斐甲斐しく林檎を綺麗に積んだり花の水を替えたりしてくれている光を見ながら、心の中で謝る。

ごめん、光。少しでも時間が欲しいと。零児を探すのには、心の準備が必要なんだ。

————と、不意に世界が揺らいだ。

気づけば、ベットの上で上半身を起こしていた状態から、ボスンと音を立ててリクライニング中のベットで上半身が倒れていた。

「ユリちゃん？　ちょっと、大丈夫？」

ああ、これは。

「大丈夫だ。昼食の時に飲んだ鎮痛剤に睡眠薬のような効果の薬が混じっていたようだ。大丈夫だから……」

ああ、ダメだ。急に薬が効いてきた。二人が来てくれているのに意識を保てそうに無い。

「光、先生。折角来て貰ってすまないんだが、このまま眠ってしまっ
っていいか？ 意識を保てる自信が……」

「あ、勿論だよ。ごめんね。何か毎日のように押し掛けて来ちゃっ
て……」

「そんな事を言わないで光。私は、二人が来てくれて、本当に幸せ
に感じているんだから……」

「ユリちゃん……」

空ろになった頭で、顔を窓の方へ向ける。

上半身を起こしていた時に見えた窓の外の街並みは、ベットに倒
れてしまうと見えなくて、窓からは藍色の空だけが見える。

日は沈んだのか。そろそろ一番星が見え始める時間かな……。
だが、それを確認する術も無く、重くなったまぶた瞼が下りていく。

徐々に閉じていく視界。そんな中。胡乱な頭で寢言のように、思
ったことをただ口にする。

「光、ありがとう……。来てくれて、本当に嬉しい」

……。うん。

「私は、光と友達で、本当に良かったと思う。怪我をしても来てく

れるから、寂しくなくて済む」

……うん。

「光……好きだ。君と友達で良かった」

「……うん。私も、ユリちゃんのこと、大好きだよ？　ユリちゃん
と、友達でよかった」

そんな、幸せな言葉を聴いた気がした。

————そして、私の意識は泥沼のような奥底へと沈んでいっ
た。

幕間 s i d e 二人の男

気がつくのと、見たことの無い場所で1人、立っていた。

そこは、感じた事が無いほどの孤独感と荒涼感だけを感じる、ま
るで火星の上のような世界。

何故だろう。寂しさのあまりふと泣きたくなった。

さっきまで、光と一緒に幸せな時間を過ごしていたから？

さつきまで、友達の温もりと共に在ったから？

いや、それもある。でもそれだけじゃない。

こんな場所、こんな寂しい場所が在って良い筈が無い。

何となく、感じる。ここは私の居るべき場所じゃない。私のために用意された場所ではないのだから。

今回、私は偶然に、色んな要素が混じってこの場所に紛れ込んでしまっただけなのだから、ここでは、私はイレギュラーな存在なのだ。

だから、重要なのは私についてではない。

重要なのは、この場所の主。その者の為に、ここは用意された。だけど、ここには何も無い。あらゆる生物も、自然も、意志も、意味も、そして時の流れさえも。

だとしたら、その主は、なんて孤独と存在しなくてはならないのだろうか。

———そんな事を考えていたら、ふと違和感に気づいた。身体が、動かないのだ。

身体だけではない、視界も動かす事はできず、声も上げられない。成る程、ここは本来私の場所では無いのだ。私は紛れ込んだだけ。

ならば、この身に許された自由は、映画館に入った観客のように、ここで起こる事をただただ観賞するのみ、と言うことか。

確かに、観客は話に干渉することはできない。その流れ行く話を追って行くことしかできないのだから。

と、御誂え向けに、視界の中に人影が入った。

その人影は、二人の男。中肉中背の、良く知っている男が二人。二人？ 彼が二人……？

だが、干渉する事が叶わない私には、声をあげて疑問を確認する事もできない。

そして、そんな私に構う事も無く、その二人は適当に出っ張った岩を見つけて座り、そして話し始めた。

「なあ、人格は記憶の積み重ねって意見について。どう思う？」
「オウ、どうなんだろうね。俺はあまり感心できない意見だと思うな」

「何でまた？」
「その意見には穴があるんだよ。記憶の元になった一番大事な「――」が抜けてるだろう？」
「成程な。確かにそれは一理ある意見だ。でもさ、俺は人格は記憶の積み重ねって意見も十分説得力があると思うんだよな」

そう言い切り男は目の前の男の方へと向き直る。
その男は真っ直ぐともう1人の男の目を見つめ返しながら言った。

「ふうん。どう言う事だ？」
「つまりはさ、結構単純に考えると、まず感情とは電気信号だろ？」
「ああ、一般的にはそう捕らえられているな」
「そう、シナプスに流れる電気信号がとか……まあ俺は学者じゃないから理論体系的に解かっているわけじゃないが……」

そう言って空を見上げる。空にはただひたすら遠い、そして決し

て夜の訪れる事の無い、血のように紅い夕焼けが広がっている。

「この場所へ来て解かった事がある。魂の形成の問題なんだけど、つまり人格って言うのはさ、記憶って言うその人毎に違う形で出来上がっていくグラスに注がれた水のような物なんだよ」

「へーっ、そしてその意は？」

「うん、つまり記憶によって如何様にも形を変える、むしろ記憶と言うグラス、まあ花瓶でも何でも良いんだが、その器によって強制的にその形に添うように変えられていく物なんだ。水を入れることによって、その水圧で割れるコップは無いだろ？　つまりさ、人格と記憶って言うのは必ず相似形になるんだよ」

「成程な。確かにその通りではあるさ。だがな、考えても見ろ、グラスに入れた水は時間の経過と共に変質していくだろ？　それは、その水に元から入っていた菌の影響でもあるだろうし、その入っている容器の材質によっては、その容器の物質が溶け出していく事もあるだろうさ。鉛で出来たコップに長い間入っていた水は飲めない物になるような感じでさ。でも、何の菌もはいっていない水が、冷蔵庫に入れられていけば良く冷えた美味しい水にもなる。その、変質していく物が時間の経過、魂における「――」だと思うんだ」

「ふん。それもまた真実だろうな。まあ、だが、まさかこんな経験をする事になるとはな。夢にも思わなかったぜ」

「そうだな。で、お前は最上零児は今後どうなっていくと思う？」

「ん？　別にどうもならないだろう。さっきも言ったとおり記憶と言う容器がある限り、その中の水が入れ替わったって、また容器の形と同じカタチに順応していくしかないのだからな」

「そうか。成程」

「まあ、少し時間がかかるとは思うが、あいつも間違はなく最上零児だ。どう頑張ったて他の物にはならないさ」

「そうだろうな。しかし、まさかこんな経験をすることになるとは思わなかったな。実際この場所はあまり好きじゃないが……」

そう言って男は空を見上げた。その視線の先には、決して朝を迎えることの無い暗い藍色の空が広がっている。

そろそろ明るい星が光り始めている。しかしその星は、決して増えも、減りもせず、永遠に同じ場所に存在している。

「ただまあ、少し意識を集中するだけでいつでもここを抜け出して、そしてあの美しい世界を感じられるとは思わなかったな」

「そうだな。それも以前より自由に感じる事が出来る。これもやつぱり俺らが「……」だからか？」

「ああ、そうだろうな。だってここには俺たちと、盗み見してる子猫ちゃん以外誰もいない。ただ、気になるのは時間軸で考えて「……」や「……」も居ないって言う事から考えると……」

「そうだな。まあ、不安要素はあるが、深く考えてもしようがないな。後は、「最上零児」に任せるとしようぜ」

「ああ。じゃあ、世界に興味がある場所は尽きない。しばらくは色々見て回る事にするさ」

「ふうん。俺は親しい人に会いに行く。全く、薄情な奴だよ。お前はさ」

「そう言うなよ。いつでも会えるんだ。良いじゃないか」

「そうだな。それじゃあ、またな」

「ああ」

そう言う二人の男は地平線へと向かって歩き出した。

私はと言うと……まあ、何をする事も出来ない。声を上げて彼らを呼び止める事も、走って彼らを追いかける事もできない。

ただただ、地平線へと向けて歩いていく、小さくなる後姿を見ることがしか出来ない。

だが、悲観する必要は無い。だって、何故かと言うとそれは……。

幕間 SIDE 武田由里香

天井が見えた。目が覚めたのだ。
思わず、ガバリと上半身を起こす。明るい病室の中、カチカチと時計の時を刻む音が聞こえる。

「あ、ユリちゃん。起きたんだ」

「光……居たのか」

時計を見る。眠りについてから2時間ほどたっているだろうか。

「すまない。帰ってくれていても良かったのに……」

「気にしないでユリちゃん。私は居たかったから居ただけだし、面会時間もまだ少し余裕あるしね」

「そうか、ありがとう」

「うふふ。それよりもどうかしたの？ 突然飛び起きて」

「いや、少しな……」

そう言って考える。

そう、さっき見た夢について。

夢……？

いや、あの存在感、現実感。そしてあの時に鑑賞した事象。

何となく解かる。あれは只の夢ではない。夢の中で感じたとおり、様々な偶然が重なり合ってあの場所へと行けたのだろう。

ならば、あそこで語られた事は、唯の夢想ではなく、信憑性のある意見として取り上げるべきだと思われる。

そう、あそこで「彼ら」が話していた内容が事実なのだとすれば、彼は、今でも……。

そうと決まれば話は早い。すぐにでも彼を探しに行かなくては。

「すまないんだが、光」

「ん、何？ ユリちゃん」

「そのバッグを取ってくれないか？」

「うん、解かった」

そう言って光に部屋の隅に置いてあるボストンバッグをベットの所まで持ってきてもらう。

「よいしょっと。これだね？ ベッドの上に置いて良い？」

「ああ、ありがとう」

で、私はおもむろにバッグから着替えを取り出し、そして着ていたパジャマを全て脱ぐ。

「って、ちょっとおおっと、何やってるのユリちゃん！ 突然服を脱いだりして！」

「いや何。下着まで脱ぐつもりは無い。すぐに着替えなくては」

「な、何で！」

「すぐに零児を探しに行かなくては！ え、ええい、こんな邪魔な包帯……」

そう言っ腹の包帯はそのままにして邪魔になる首の部分の包帯だけを解いて放り投げる。

僅かに痛みが走って、表情に出そうになるが気にせずに全て解く。

「ちょ、ちよっとお！ まだ無理しちゃダメだつてっばあっ！」

「無理なんかじゃない。そもそもこの程度の怪我で引籠もるほど私は軟^{やわ}じゃない！」

「そんなこと言っ無理しちゃあ……そもそも何で突然最上君を？」

「解かるんだ。彼は今も私たちの知っている零児なんだ」

「何で突然そんな事がわかるのよ！」

「それは、説明すると長くなるけど、兎に角大丈夫なんだ。だからすぐにでも彼を探さないと……っと、そう言えば先生は？」

「あ、先生は今飲み物を買いに言ってくれていて……」

「そうか。あ、じゃあ着替えも終わつたし私は行く。先生によろしく言っておいてくれ。今日は来てくれて本当に嬉しかった！」

「あ、うん……って、何処へ行くつもりなの？」

「それは、耳ヶ崎のほうかな、近づけば匂いで探れるさ。大丈夫。

近い内にも零児を連れて二人の前に来るから！」

「そ、そうなの？」

「ああ、零児に会いたいだろう？ 私も会いたい。だから、連れて来るさ！」

「う、うん」

突然のハイテンションに驚いたからだろうか。やや怯む感じの光を傍目にベットの下に置いておいた袋に入った刀を掴んで、そして病室を後にする。

と……。

「ねえ、ユリちゃん」

後ろからの声で引きとめられた。

「ん、なに？」

「あの、さ。気をつけてね、ユリちゃんも」

「ああ、任せておけ！」

そう言って、光に向かって笑顔で答える。

そうして、部屋を出た。

携帯電話でタクシー会社の番号を探しながら、不意に、今の笑顔は、珍しく自分らしく笑えたかもしれない。何て事を思った。

1

ふと、喧騒の中、目が覚めた。

何か、夢うつつの様な感覚。ざわざわと人の声が聞こえる。

ああ、そうか。俺は眠っていたのか。

家に帰ることも無く、この数日間は街を彷徨っている。

今は……ホームレスに混じって公園のベンチで寝ていた。

もともと体毛の薄い方なので、髭とかは伸びていないが、もう数日風呂に入っていないのだ。そろそろ体臭が気になりだした。

だが、家に帰る気は無い。帰る必要も無いし、帰る目的が無い。

それに、今は少し解からない事だらけで、混乱しているんだ。だから考える時間が欲しい。

そして、何より……。

「今更どんなツラ下げて帰ればいいって言うんだよ」

ふと、無意識のうちに漏れた言葉に苦笑する。

俺は、こんなことを俺に考えさせる、この記憶が憎い。

完全な能力者の俺は、完全に全ての物に囚われない自由な存在の
はずだ。

だが、現実はどうか？ 今までの人生。記憶。柵しがらみに囚われて誰を
殺す事も、家へ帰る事もできずにいる。

でも、これは、換え様の無い記憶。俺自身の人生の跡。

生まれたばかりの人格が、徐々に記憶に馴染んで、変化していく
のが解かる。

それが、例えようも無く、怖い。自分が自分で無いものになって
いくように。

いや、どうなんだろうか。自分じゃない物なのか？

実は、それはこの上なく自分自身でもあるのではないのか？ 本
当に、さ。もう、何がなんだか。

俺は一体、誰なんだろうか。

否。答はわかっている筈なんだ。俺は……。

揺れる街を見る。光るネオンに、蠢く人混。

さっきからどれだけの時間が過ぎたのだろう。

気がついたら耳ヶ崎の中でも一番の繁華街、耳ヶ崎二丁目の辺りに来ていた。

全体的に治安の悪い耳ヶ崎でももつとも繁華街として機能しており、そして特にガラの悪い人間が集まる治安の悪い場所。

何故、俺はこんな場所に居るのだろうか。

だが、そんな自分の行動原理さえも解かる事ができない俺は、まるで人の欲望の渦に流されるように、フラフラと、目的も無く歩いていた。

相似形、二人の男（後書き）

相変わらず時間がかかりました。

でも外でもこれ書くためにノートパソコン買ったんですよ。

で、少しは更新早めれるかとも思ったんですが。

ただ、毎日書いてるんですが一日に2行くらいしか進まない。

もう認めます。遅筆でごめんなさい。

次話、「法悦の夜」（タイトルはあくまで予定）出来るだけ早めで頑張ります。

よろしく願いします。

あと、「空を航る船」

キャラクターと設定は気に入ってるんですが、何処まで行っても平凡な日常にしかならなそうなので、少したったら削除します。

申し訳ありません。

ただ、個人的には気に入ってるので設定はそのままです。少し手直ししてタイトルを変えて再UP予定なので少々お待ちください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3383a/>

憐神

2010年10月8日16時46分発行